ALBERT CAMUS

カミュ

ペスト

宮崎嶺雄訳

新潮文庫

新潮文庫

ペスト

カミュ
宮崎嶺雄訳

新潮社版

1907

カバー　麹谷宏

ペスト

ペスト

1

この記録の主題をなす奇異な事件は、一九四＊年、オラン（訳注　アルジェリアの要港）に起った。通常というには少々けたはずれの事件なのに、起った場所がそれにふさわしくないというのが一般の意見である。最初見た眼には、オランはなるほど通常の町であり、アルジェリア海岸におけるフランスの一県庁所在地以上の何ものでもない。

町それ自身、なんとしても、みすぼらしい町といわねばならぬ。見たところただ平穏な町であり、地球上どこにでもある他の多くの商業都市と違っている点に気づくためには、多少の時日を要する。どういえば想像がつくか、たとえば、鳩もおらず、樹木も庭園もない、鳥の羽ばたきにも木の葉のそよぎにも接することのない町、いってしまえば一個の中性の場所というような町である。季節の変化もここでは空のなかにしか認められない。春はただ空気の質によって、あるいは小さな売子たちが近在からまた持ってきはじめる花籠によって、それと知られるばかり。つまり市場で売っている春である。夏の間は、太陽が乾燥しすぎた家々を燃え上がらんばかりに熱し、鼠色の灰で壁をおおう。そうなると、もう鎧扉を閉めきった薄暗がりのなかでしか暮せない。秋には、逆に、どろの洪水である。美しく晴れた日は冬にだけ訪れる。

ある種の監禁状態を他のある種のそれによって表現することは、何であれ実際に存在するあるものを、存在しないあるものによって表現することと同じくらいに、理にかなったことである。

ダニエル・デフォー

たがって、この町で人々が愛し合うその愛し方を明確に描くことは、かならずしも必要でない。男たちと女たちとは、愛欲の営みと称せられるもののなかで急速に食い尽し合うか、さもなければ、二人同士のながい習慣のなかにはまりこむかである。この両極の間に、中間というものはそう見かけない。これもまた特異なことではない。オランでも他のところでも、時間と反省がないままに、人々はそれと知らずに愛し合うことをいかにも余儀なくされているのである。

この町でそれ以上に特異なことは、死んでいくのに難渋を味わうということである。もっとも、難渋というのは適当な言葉でないし、非快適というような言いかたのほうがさらに適切かもしれない。病気をしているのはいかなる場合にも愉快なものではないが、しかし、病気のなかで身をささえてくれ、ある意味でのんびり羽を伸ばしていられるような、そういう町や国もある。病人というものは優しさを欲し、好んで何かによりかかりたがるというのは、きわめて自然なことである。ところが、オランは、気候の激しさ、人々の営む事業の重要さ、装飾的なもののの乏しさ、夕暮れの過ぎ去る速さ、それから楽しみというものの質など、すべてが健康を要求している。病人はこの町ではまったくひとりぼっちである。暑さに弾けそうな幾百の壁の陰で窒息に捕えられ、死んでいこうとしているものと、一方、その同じ瞬間に、電話口やカフェで、手形や船荷証券や割引について話し合っている全住民とをここで考えてみるがいい。死というものが、近代的な死さえも、こんな具合に無味乾燥な場所で襲った場合には、そこに快適ならざるもののありうることが理解されるであろう。

以上幾つかの指摘だけで、われわれの町の姿を想像させるにはおそらく十分であろう。かつま

ある町を知るのに手頃な一つの方法は、人々がそこでいかに働き、いかに愛し、いかに死ぬかを調べることである。われわれのこの小さな町では、風土の作用か、それがすべていっしょくたに、みんな同一の狂熱的でしかもうつろな調子で行われる。という意味は、人々は、たいくつしており、そして習慣を身につけることにこれ努めているのである。わが市民諸君は大いに仕事をするが、しかし、それはつねに金持になるためである。彼らは特に取引きに関心が深く、そしてまず第一に、彼らの表現に従えば、事業を行うことに専心する。もちろん、かの単純な喜びにも興味をもち、女や映画や海水浴を愛する。しかしきわめて分別よく、楽しみは土曜の晩と日曜のためにとっておき、他の週日には大いに金をもうけようと試みる。夕方、事務所がひけるころには、きまった時刻にカフェに集まり、同じ大通りを散歩し、もしくはわが家のバルコニーに身を置く。若手の連中の欲望は荒っぽく、かつぶっきらぼうであり、一方、年輩の連中の悪徳も、ボーリングの同好会や、懇親会の会食や、カルタの運に大金をかけ合うクラブなどの域を出ない。

おそらく、こういうことはわれわれの町に特有のことではなく、結局、現代の人々はすべてそんなふうなのだというかもしれない。たしかに、人々が朝から晩まで働き、さてそれから、生きるために残された時間を、みずから選んでカルタに、カフェに、またおしゃべりに空費する光景ほど、こんにち、自然なものはない。しかし、人々がときおりはまた別なものの存在をそれとなく感じてもいるような、町や国もある。一般には、それが彼らの生活を変えはしない。ただ、それにしても、感じることは感じたのであり、つねにそれだけの収穫にはなっている。オランはこれに反して、明らかにそんな感知など存在しない町、換言すればまったく近代的な町である。し

「こういうことが起った」と――こういうことが事実起り、それが一住民全体の生活に関係し、したがって彼のいうことの真実性を自身の胸で評価しうる証人が数千もあるということをみずから知っている場合に――ただ、そういうことである。

かつまた、この筆者は、結局遅からざる時期にその何者であるかがわかるであろうが、もし偶然の事情である数の供述を採録できる情況に置かれなかったならば、そして事件の圧力により、以下述べようとするすべてのことにみずからかかり合う羽目に陥らなかったならば、この種の企てにおいてひけらかしうる肩書などほとんどもたなかったはずの者である。このことが、すなわち歴史家のごとくふるまう権利を彼に与える。いうまでもなく、歴史家というものは、たとい素人にせよ、必ず資料というものをもっている。この物語の筆者もしたがって自分のそれをもっている。まず彼自身の実見したこと、次に他の人々のそれ――というのは、彼自身の役割からして、彼はこの記録中のすべての人物の打明け話を聞くことになるのであるが――そして最後に、結局彼の手に渡ることとなった各種の文書。彼は、適当と思う場合にはそのなかから引用し、そして意のままにそれを利用するつもりである。さらにまた彼のつもりでは……。しかし、おそらくもう注釈や、言葉による前置きなどは捨てて、物語そのものにはいるべきときであろう。最初の数日の叙述は多少微細にわたる必要がある。

四月十六日の朝、医師ベルナール・リウーは、診療室から出かけようとして、階段口のまんな

た、何ものも誇張すべきではない。強調する必要のあったのは、町と生活との月並に見える点である。しかし、人は習慣を身につけると、たちまち困難なくその日を送るようになるものである。われわれの町がまさにその習慣というものにあつらえ向きな町であるからには、万事上乗の成行きということもできる。こういう角度からすれば、たしかに、生活というものはそう情熱をかきたてるようなものではない。少なくとも、われわれの町では、混乱というようなものは見かけたことがない。そして、率直で、感じがよく、活動的なわが住民諸君は、つねに旅行者の胸にそれ相応の敬意を呼び起したものである。美観もなく、植物もなく、精神もないこの町は、結局、心の休まるものに見え、ついに人々はここで眠ってしまう。しかし、この町が、非のうちどころのない描線を描いている湾の前面、明るい丘に囲まれた裸の台地の中央に位し、絶佳の風景に接続していることは、付け加えておくのが公平である。ただ、惜しむらくは、その湾に背を向けて町が建てられ、したがって、海の姿を見ることができず、いつもわざわざ見に行かねばならぬことである。

ここまで来れば、容易に納得されるであろうが、わが市民諸君にとって、その年の春起った種種の出来事など、これを期待させうるようなものは何ひとつなかったのであって、しかもそれらの出来事こそ、やがてわかったことであるが、ここにその記録をつづろうと思いたった一連の重大事件の最初の兆候ともいうべきものであったのである。これらの事実は、ある人々にはいかにも自然なことに、またある人々には、反対にとてもありそうもないことに見えるであろう。しかし、結局、記録作者というものはそういう矛盾を顧慮してはいられないのである。彼の仕事は、

ているのであった。彼女はほほえんだ。

「とても気分がいいの」と、彼女はいった。

医師は、枕もとの電燈のあかりのなかで、自分のほうへ向けられた顔をながめた。リウーにとっては、三十になり、病の窶れさえありながら、この顔はいつでも若いころのそれであった。おそらく他のすべてを消してしまう、その微笑のためであろう。

「できたら眠るといいな」と、彼はいった。「看護婦は十一時に来るから、そうしたら十二時の汽車に連れてってあげるよ」

彼は軽く汗ばんだ額に接吻した。微笑が戸口まで追ってきた。

翌四月十七日、八時に、門番は通りかかった医師を引きとめて、悪ふざけをするやつらが廊下のまんなかに死んだ鼠を三匹置いていったと訴えた。きっと大きな罠でとったものに違いない、なにしろ血だらけだ。門番は鼠の足をぶらさげてしばらく入口の閾の上につっ立ったまま、犯人どもが進んで正体を現わす気になって何か嘲弄の言葉でもあびせかけてきたらと待ち構えていたのだった。だが、一向なんの気配もなかった。

「まったく、やつら」と、ミッシェル氏はいっていた。「最後にゃ、とっつかまえてやるぞ」

何かいわくありそうな気がして、リウーは、患者のうちでいちばん貧しい人たちの住んでいる外郭の地区から往診を始めることにした。塵芥集めがその地区ではずっと遅くなってから行われ、そこのまっすぐなほこりっぽい道を走っていく自動車は、歩道の縁に放置された芥箱をすれすれにかすめるのであった。そんなふうにして通っていった一つの通りで、医師は、野菜くずや

かで一匹の死んだ鼠につまずいた。咄嗟に、気にもとめず押しのけて、階段を降りた。しかし、通りまで出て、その鼠がふだんいそうもない場所にいたという考えがふと浮び、引返して門番に注意した。ミッシェル老人の反撥にぶつかって、自分の発見に異様なもののあることが一層はっきり感じられた。この死んだ鼠の存在は、彼にはただ奇妙に思われただけであるが、それが門番にとっては、まさに醜聞となるものであった。もっとも、門番の論旨ははっきりしたものであった——この建物には鼠はいないのである。医師が、二階の階段口に一匹、しかもたぶん死んだやつらしいのがいたといくら断言しても、ミッシェル氏の確信はびくともしなかった。この建物には鼠はいない。だからそいつは外からもってきたものに違いない。要するに、いたずらなのだ。

同じ日の夕方、ベルナール・リウーは、アパートの玄関に立って、自分のところへ上がっていく前に部屋の鍵を捜していたが、そのとき、廊下の暗い奥から、足もとのよろよろして、毛のぬれた、大きな鼠が現われるのを見た。鼠は立ち止り、ちょっと体の平均をとろうとする様子だったが、急に医師のほうへ駆けだし、また立ち止り、小さなきき声をたてながらきりきり舞いをし、最後に半ば開いた唇から血を吐いて倒れた。医師はいっときその姿をながめて自分の部屋へ上がった。

彼が考えていたのは鼠のことではなかった。鼠の吐いた血で、自身の心配ごとに引きもどされたのである。一年以来病んでいた彼の妻は、山の療養所へ明日たつことになっていた。帰ってみると、妻は、彼にそういわれたとおり、居間のほうに寝ていた。そうやって、転地の疲労に備え

起きて、テイラード・スーツのいでたちに、化粧のあとまで見せていた。彼はそれにほほえみかけて——

「ああ、いいな」といった。「とてもいいよ」

それから間もなく、停車場で、彼女を寝台車に乗りこませた。彼女は車室を見まわした。

「たいした料金なんでしょう、あたしたちの身分じゃ。そうじゃない？」

「必要なことだもの」と、リウーはいった。

「いったいどういうんですの、今度の鼠さわぎは」

「わからない。まったく奇妙だ。だが、そのうち済んじまうだろう」

それから、彼はひどく口早に、彼女に向って、どうか許してくれるように、ちゃんと気をつけてやるべきだったのに、ずいぶんほったらかしにしていてと、いった。彼女は、なんにもいわないでというように、首を振っていた。しかし、彼は付け加えた——

「何もかもよくなるよ、今度帰ってきたら。お互いにまたもう一度やり直すさ」

「ほんとよ」と、目を輝かせながら彼女はいった。「やり直しましょうね」

それから間もなく、彼女は彼に背を向け、窓ガラスの外をながめていた。ホームの上では、人人が急ぎ合い、ぶつかり合っていた。機関車のシュッシュッという音が彼らのところまで聞えてきた。彼は妻の呼び名を呼んだが、振向いたのを見ると、その顔は涙におおわれていた。

「だめだなあ」と、やさしく彼はいった。

涙の陰から、やや引きつったように、またほほえみが浮んできた。彼女は大きく息をついた。

よごれた襤褸の上に投げ出された鼠を十二匹ぐらい数えた。

訪ねた最初の病人は、道路に面した寝室と食堂を兼ねた部屋で、床についていた。これは、落ちくぼんでいかつい顔をした、年寄りのイスパニア人であった。彼は自分の前のふとんの上に、豌豆のいっぱいはいった鍋を二つ置いていた。医師がはいっていったとき、ちょうど病人は半ば身を起して、うしろへそり返りながら、喘息病みの老人のごろごろする息づかいを回復しようと試みているところであった。細君が洗面器を持ってきた。

「どうですね、先生」と、注射の間に彼はいった。「やつらの出てくるこたあ。見ましたかい」

「そうなんですよ」と、細君はいった。「お隣じゃ二、四も見つけたんですとさ」

爺さんはもみ手をしながら——

「出てくるのなんのって、芥箱って芥箱にはみんないまさあ。こいつは飢饉ですぜ」

リウーが、それに引続いて、その界隈じゅうが鼠のうわさをしていることを確かめるのには、たいして手間はかからなかった。往診が終って、家へ帰ってきた。

「あんたに電報が来てますぜ、階上に」と、ミッシェル氏がいった。

医師は、ふたたび鼠を見つけたかと尋ねた。

「見つけるもんかね」と、門番はいった。「こっちは見張ってまさ、ちゃんとね。で、あんちくしょうども、やれないんでさ」

電報はリウーに母が明日着くことを知らせたものであった。病人のるす中、息子の家のめんどうを見に来るのであった。医師が家へはいると、看護婦はもう来ていた。見ると、妻はちゃんと

胴が短く、肩は厚く、はっきりした顔つきに、明るく聡明な眼をしたランベールは、スポーツ仕立ての服を着、生活には不自由のない人間らしく見えた。彼は単刀直入に切りだした。パリのある大新聞のために、アラビア人の生活条件について調査をしているところで、彼らの衛生状態についてききたいというのである。リウーはそれに対して、そのほうの状態はよくはない、といった。しかし、それ以上話を進める前に、いったい新聞記者というものはほんとうのことをいえるのか、それを知りたいといった。

「もちろんです」と相手はいった。

「僕のいう意味は、全面的にやっつけるというところまで行けるかということです」

「全面的とはいきません。それはどうしてもそうなんです。しかし、そのやっつけるというのは別に根拠はないことなんでしょうね」

穏やかな調子でリウーはそれに答えて、いかにもそんなやっつけるなどということは根拠のないことであろうが、しかしその質問をしたのは、ただランベールの証言が留保のないものでありうるか否かを知ろうとしたのだ、といった。

「僕は留保のない証言しか認めないんです。ですから、あなたの場合にも、僕の報告を提供することはしません」

「まさにサン・ジュスト（訳注　フランス革命当時の熱狂的な正義論者）の言葉ですね」と、ほほえみながら新聞記者はいった。

リウーは、それに対して別に声の調子を高めることもなく、その点はどうだか知らないが、こ

「行っておいで。万事うまくいくよ」

彼は彼女を抱きしめ、そして今はもうホームに立って、窓ガラスの向う側に、ただ彼女のほほえみを見るばかりであった。

「くれぐれも体に気をつけてね」と、彼はいった。

しかし、彼女には、それは聞えなかった。

出口に近く、駅のホームで、リウーは予審判事のオトン氏が小さい男の子の手を引いているのにぶつかった。医師は、彼に旅行に出かけるのかと尋ねた。長身黒髪のオトン氏は、半ばはかつて社交界の人士と呼ばれたものに似、半ばは葬儀人夫に似た風采であったが、愛想のいい、しかしぶっきらぼうな声で、こう答えた。

「家内を待ってるんです。私の実家にご機嫌うかがいに行ってましたので」

機関車の汽笛が鳴った。

「鼠が……」と、判事がいった。

リウーは汽車の方角へちょっと身を動かしたが、また出口のほうへ向き直った。

「ええ」と、彼はいった。「なに、なんでもありませんよ」

この瞬間について記憶に残ったことといえば、死んだ鼠のいっぱいはいった箱を小脇にかかえた一人の駅員が通ったということだけであった。

同じ日の午後、診察時間の初めに、リウーは一人の若い男の訪問を受けたが、それは新聞記者で、すでに朝のうちにも訪ねてきたということであった。名はレイモン・ランベールといった。

「ええ」と、リウーはいった。「しかし、こうなると、もう小うるさくなってきますよ」

「ある意味ではね。ある意味でだけですよ。つまり、こんなことは見たことがないっていうだけのことです。しかし、僕はこれを興味あること、まったく、実際に興味あることだと思ってるんです」

タルーは髪の毛をうしろにかきあげ、今はもう動かなくなった鼠をふたたびながめ、それからリウーにほほえみかけた——

「しかし、要するにですな、こいつは何よりも門番の問題というわけです」

ちょうどその門番を医師はアパートの前で見かけたが、入口のそばの壁にもたれて、いつもは血色のいいあから顔に、ちょっとぐったりしたような表情を浮べていた。

「ああ、知ってまさ」と、ミッシェル老人は、新たな発見を知らせたリウーにいった。「なにしろ二匹だの三匹だのって見つかるんだからね、今じゃ。だが、こいつはほかのアパートでもおんなじなんでさ」

彼の様子はいかにも打ちのめされたように、気づかわしげであった。機械的な動作でしきりに首をこすっていた。リウーは、体具合はどうかと尋ねた。門番は、体具合が悪いとは、もちろんいえなかった。ただ、どうも調子が十分でない。彼の意見では、つまり精神的なものが作用しているのだ。あの鼠どものために衝撃を受けたわけで、やつらが姿を消してしまえば万事ずっと順調になるだろう。

しかし翌四月十八日の朝、駅から母を迎えてきた医師は、ミッシェル氏がまた一層しなびた顔

れは自分の暮している世界にうんざりしながら、しかもなお人間同士に愛着をもち、そして自分に関する限り不正と譲歩をこばむ決意をした人間の言葉である、といった。ランベールはじっと首をすえて、医師の顔を見つめていた。

「あなたのお気持はわかるような気がします」と、立ち上がりながら、最後に彼はいった。

医師は戸口へ送っていった。

「あなたがそんなふうに受けとってくださって、僕もうれしいんです」

ランベールは、じれったそうにした。

「ええ、わかってます」と、彼はいった。「おじゃましてすみませんでした」

医師は彼の手を握り、そして、目下市内で発見されている大量の死んだ鼠について興味ある報道記事をものすることができるだろう、といった。

「ほう！」と、ランベールは声をあげた。「そいつはおもしろいですね」

十七時に、医師がまた往診に出かけようとすると、階段の途中で、がっしりと彫りの深い顔に濃い眉毛を一文字に引いた、姿全体に重々しさのある、まだ若い男とすれ違った。その男には、ときおり、このアパートの最上階に住んでいるイスパニア人の舞踊師たちのところで出会ったことがあった。ジャン・タルーは、しきりにたばこをふかしながら、足もとの階段の上で死にかけている一匹の鼠の最後の痙攣をながめていた。彼は医師のほうへ、その灰色の眼の、落着いた、やや見すえるような視線をあげ、挨拶の言葉をいい、そしてこの鼠どもの出現は興味あることがらだと付け加えた。

いずれにしても、ほぼこの時期において、わが市民は不安になりはじめたのであった。というのが、この十八日の日から、工場や倉庫は事実幾百という鼠の死骸を吐き出したのである。ある場合など、断末魔の長すぎるやつは手をくだして殺すことを余儀なくされた。しかも、外郭地区から市の中心に至るまで、およそ医師リウーの通りかかるところ、市民の集まるところには、いたるところ山をなして芥箱の中に、もしくは長い列をなして溝の中に、鼠が待ち受けていた。夕刊紙はさっそくこの日から事件をとりあげて、市庁ははたして動きだすつもりかどうか、また、この不快な襲来から治下の市民を守るためにはたしていかなる緊急措置を検討したかを問題にした。市庁はまだ何をするつもりもなく、なんら検討もしていなかったが、そのかわり、まず会議に集まって評定することから始めた。毎朝、明けがたに、死んだ鼠を拾集するよう鼠害対策課に命令が発せられた。拾集が終ると、課の車二台がその鼠を塵埃焼却場へ運んで焼き捨てることになっていた。

しかし、続く数日において事態はさらに悪化した。拾い集められる齧歯獣の数は増加する一方で、収穫は朝ごとにますますおびただしかった。四日目からは、鼠は外へ出て群れをなして死にはじめた。隠れがから、地下室から、穴倉から、下水から、よろめく長い列をなして上がってきて、明るい光線のなかでひょろつき、きりきり舞いをし、そして人間どものそばで死んでいくのであった。夜は、廊下や路地に、その断末魔の小さなきき声が、はっきり聞えた。朝になると、町はずれのほうでは、溝いっぱいに並んで、とがった鼻面に小さな血の泡をくっつけ、あるものはふくれ上がって腐りかけ、あるものは、まだひげをぴんとさせたまま硬直しているのが見出され

つきをしているのを見た。地下室から屋根裏まで、十匹もの鼠が階段に散乱していたのである。近所の家々の茶箱は鼠でいっぱいだった。医師の母親はその話を聞いても別に驚かなかった。

「いろんなことがあるものですよ」

黒いやさしい目をした、銀髪の、小柄な婦人であった。

「あたしはうれしいの、ベルナール、またお前の顔が見られて」と彼女はいった。「鼠だってなんだって、それをどうすることもできやしないさ」

彼もその言葉にうなずいた。そういえば、まったく、彼女の手にかかると、すべてがいつでも造作のないことに見えるのであった。

リウーは、それでも、そこの課長を知っている市の鼠害対策課へ電話をかけた。課長は、大量に巣外へ出てきて死ぬ鼠どものうわさを聞いているだろうか？　課長のメルシエは、そのうわさを聞いていたし、河岸から遠くないところにある彼の役所でも、それが五十匹ぐらい発見されていた。彼は、しかしながら、それがはたしてまともに考慮すべき事件かどうか迷っていた。リウーもその点はなんともいえなかったが、しかし鼠害対策課が乗りだすべきだと考えていた。

「うん、命令さえあればね」と、メルシエはいった。「君がもしそうするだけのことがあると思うんなら、ひとつ、命令を出してもらうようにやってみてもいいんだが」

「そりゃ、やればやるだけのことはあるさ、いつだって」と、リウーはいった。

家政婦が今しがた伝えたところによると、彼女の夫の働いている大工場では、死んだ鼠が何百匹となく拾い集められたという。

とかくするうち、四月二十八日には報知通信社は約八千匹の鼠が拾集されたことを報じ、市中の不安は頂点に達した。人々は根本的な対策を要求し、当局を非難し、海岸に家をもっている人々のうちには早くもそっちへ引きあげる話まで言いだすものもあった。ところが、翌日、通信社は、この現象がぱったりとやみ、鼠害対策課は問題とするに足りぬ数匹の鼠の死骸を拾集したにすぎなかったと報じた。市中はほっとした。

しかもその同じ日の正午、医師リウーは、アパートの前に車をとめると、街路のはずれに、門番が、首をうなだれ、両手両足を広げ、あやつり人形のような格好で、難儀そうに歩いてくるのを見たのである。老人は、人の司祭の腕につかまっていたが、その司祭は医師も知っている顔であった。パヌルー神父という博学かつ戦闘的なイエズス会士で、彼もときどき会ったことがあり、市では宗教上のことに無関心な人々の間にさえなかなか尊敬されていた。医師は一人を待った。ミッシェル老人は眼をぎらぎらさせ、せいせい息をきらしていた。どうも体の調子がよくなかったので、外の空気に当ってみようと思った。ところが、首と腋の下と鼠蹊部に激しい疼痛が起って、引返さねばならなくなり、そしてパヌルー神父の助けを乞わなければならなかった。

「どうも腫物だね」と、彼はいった。「えらく骨が折れたよ」

車の戸口から腕を出して、医師はミッシェルの差出す首の付け根のあたりを指でさぐった。一種の木の節くれのようなものが、そこにできていた。

「寝て、熱をはかっといてください。今日、午後から来てみます」

門番が行ってしまうと、リウーはパヌルー神父に、例の鼠の騒ぎについてどう考えているか尋

た。市中でさえも、階段口や中庭に、小さな山をなしているのに出くわした。また、官公庁の広間や、学校の雨天体操場や、カフェのテラスに、ときどきはぽつんと死んでいることもあった。市民の度胆を抜くように、それは町の最も雑踏する場所にも発見された。閲兵広場や、並木通りや、臨海遊歩場も、おりおり汚された。明けがた、死んだ鼠を一掃した町は、その日のうちに、次第にまたますます多数の鼠を見出すようになるのであった。歩道の上で、夜の散歩者がまだ新しい死骸の弾力あるかたまりを足下に感じたりすることも、一再ならず起った。さながら、われわれの家の建っている大地そのものが、うちにたまっていた膿汁を出しきって、それまで内部をむしばんでいた癰瘡や血膿を地面に流れ出させたとでもいうようであった。これまでじつに平穏であり、それが数日にして一変させられたこの小都市の、あたかも壮健な男の濃厚な血が突如として変調を起したような、その仰天ぶりを考えてもみていただきたい。

事態はついに報知（情報資料提供）ありとあらゆる問題に関するいっさいの情報）通信社が、その無料提供情報のラジオ放送において、二十五日の一日だけで六千一百三十一匹の鼠が拾集され焼き捨てられたと報ずるに至った。この数字は、市が眼前に見ている毎日の光景に一個の明瞭な意味を与えるものであり、これがさらに混乱を増大させた。それまでのところ、人々は少少気持の悪い出来事としてこぼしていただけであった。今や、人々は、まだその全容を明確にすることも、原因をつきとめることもできぬこの現象が、何かしら由々しいものをはらんでいることに気づいたのである。ひとり、例のイスパニア人の喘息もちの爺さんだけが、相変らずもみ手をしながら、「出てくるわ、出てくるわ」と、年寄りらしい喜びをもって繰返していた。

かけ渡してあった。しかし、その綱はただぶらんと宙にたれていた。

「私が、まだ間に合ううちに下ろしてやったもんで」と、グランはいったが、最も簡単な言葉で話すくせに、いつも言葉を捜しながらしゃべっているように見えた。「私は出かけようとしたんですよ、ちょうどそのとき。するともの音が聞えました。あの文句を見たとき、まあどう説明したらいいか、私はいたずらだと思ったんです。ところが、そこへ妙なうめき声をたてたじゃありませんか、妙な、それこそたしかに不吉といってもいいくらいな……」

彼は頭をかいた。

「私の考えるところじゃ、こいつをやるときはきっと苦しむんでしょうね。もちろん、私はいっていきました」

一つのドアを押すと、明るい、しかし家具の乏しい部屋の入口であった。丸ぶとりの小柄な男が、銅の寝台に寝ていた。男は荒い息づかいをしながら、血走った眼で二人をながめた。医師は立ち止った。その呼吸の合間に、かすかに鼠のなき声が聞えるように思ったからである。しかし、隅っこのあたりにも、なんにも動いている気配はなかった。リウーは寝台のほうへ行った。男は、そう高いところから、あんまり急激に落ちたわけではなく、椎骨は無事だった。もちろん、多少窒息症状がある。レントゲン写真をとってみる必要があろう。医師はカンフル注射をし、二、三日ですっかり落着くだろうといった。

「ありがとうございました、先生」と、圧し殺したような声で、男はいった。

リウーはグランに、警察には知らせてあるかと尋ねたが、すると、グランはちょっと狼狽の色

ねた。

「なに」と神父はいった。「きっと流行病でしょう」、そういって、彼の目は丸い眼鏡の陰で微笑した。

昼食がすんで、リウーが妻の到着を知らせる療養所からの電報をまた読み返していると、電話のベルが鳴った。昔の患者の一人で、市役所に勤めている男からかかってきたのであった。ながらく大動脈狭窄に悩んでいて、しかも貧乏な男だったので、リウーは無料で診てやったものであった。

「ええ、私なんですが、おわかりですね」と、相手はいった。「ところで、じつはほかの人のことなんですがね。至急おいで願います。隣のうちにちょっと事件が起りまして」

その声は息を切らしていた。リウーは門番のことを考えたが、そっちはあとでまわることにきめた。数分ののち、彼は外郭区域のフェテルブ街にある低い建物の入口をくぐった。ひんやりとして悪臭の漂う階段の途中で、迎えに降りてきた吏員ジョゼフ・グランに会った。長くたれ下がった黄色い口髭をはやし、肩幅が狭く、手足のやせた、五十がらみの男である。

「どうやらいいようです」と、リウーのほうへやって来ながら、彼はいった。「しかし、もうだめかと思いましたよ」

彼はしきりに洟をかんでいた。三階、つまり一番上の階に上がると、左手の戸口に、赤い白墨でこう書いてあるのをリウーは読んだ――「おはいりなさい。私は首をくくっています」

二人ははいった。テーブルは片隅に押しやられ、ひっくり返った椅子の上方に、綱がたるめて

二日後でなければ行わぬようにいうつもりであることをいった。

「今晩は付いててやらなきゃなりませんね。家族はあるんですか」

「私も知らないんですよ、家族の人ってものは。しかし、私が自分で付いててやれますから」

彼は頭を振った。

「あの人だって、それがね、私は知ってるとはいえないんです。しかし、まあ、助け合わなきゃなりませんから」

アパートの廊下を通っていきながら、リウーは機械的に隅っこのほうをながめ、この界隈から鼠が完全に姿を消したかどうか、グランに尋ねた。グランはそれについてなんにも知らなかった。なるほど、そんなふうな話は聞かされていたが、しかし彼は町内のうわさ話にはたいして注意を払わないほうだった。

「私にはほかに気をひかれることがあるもんですから」と、彼はいった。

リウーはもう彼の手を握っていた。妻に手紙を書く前に門番の様子を診にいこうと急いでいたのである。

夕刊の呼び売りは鼠の襲来が停止したと報じていた。しかし、リウーが行ってみると、病人は半ば寝台の外に乗り出して、片手を腹に、もう一方の手を首のまわりに当て、ひどくしゃくりあげながら、薔薇色がかった液汁を汚物溜めのなかに吐いていた。しばらく苦しみつづけたあげく、あえぎあえぎ、門番はまた床についた。熱は三十九度五分で、頸部のリンパ腺と四肢が腫脹し、脇腹に黒っぽい斑点が二つ広がりかけていた。彼は今では内部の痛みを訴えていた。

を見せて――

「いや、そいつは、そりゃまだ……。私はそう思ったんです、いちばん急を要することは……」

「そりゃもちろんですがね」と、リウーはさえぎった。「それじゃ、そいつは僕がやりましょう」

ところが、そこまでいうと、病人がしきりに気をもみだして床の上に身を起し、もうよくなったからそれには及ばないと反対した。

「まあ落着いて」と、リウーはいった。「別にどうこういうほどのことじゃないんですよ、大丈夫。とにかく、私は届け出をしなきゃならんのです」

「ああ！」と、相手はうなった。

そうして、仰向けに身を投げ出すと、しゃくりあげて泣いた。グランは、しばらく前からしきりに口髭をひねっていたが、そのそばへ寄った。

「まあ、まあ、コタールさん」と、彼はいった。「こいつはわかってくださいよ、なにしろ、先生には責任があるともいえるんですからね。かりに、万一、あなたがまた変な気を起したりしたら……」

しかしコタールは、涙の中から、自分は二度と始めはしない、あれは単に一時の錯乱であり、自分はただそっとしておいてもらいたいだけだと、いった。リウーは処方を書いた。

「よくわかりました」と、彼はいった。「その話はそれだけにして、二、三日したらまた来ます。しかし、ばかなまねをしちゃいけませんよ」

階段口で、彼はグランに、届け出はどうしてもしなければならぬが、しかし警官には取調べを

リンパ腺はさらに大きくなり、さわってみると堅く木のようになっていた。門番の女房はおろおろしていた。

「ずっと付いててあげなさい」と、医師は女房にいった。「それで、呼んでください、もし何かあったら」

翌四月三十日は、もうなま温かい微風が、青くしっとりした空に吹いていた。風は花の香を運んで、郊外のずっと遠くのほうからもそれが漂ってきた。街々の朝の物音はふだんより一層生き生きと楽しげに聞えた。一週間を費してきた暗黙の懸念から解放されて、この小都市の町じゅう、この日はおよそ一陽来復の一日であった。リウー自身も、妻から手紙があったのでまず安心して、軽快な気持で門番のところへ降りていった。そして、事実、朝になって熱は三十八度に下がっていた。衰弱して、病人は床のなかでほほえんでいた……。

「だいぶいいようだけど、どうでしょう、先生」と、女房はいった。

「まあ、もう少し様子をみないと」

ところが、正午になると、熱は一挙に四十度に上がり、病人は間断なく譫言をいい、吐き気がまた始まった。頸部のリンパ腺は触れると痛そうで、門番は頭をできるだけ体から遠くに離していようとでもしているようだった。女房は寝台の足もとに腰掛けて、両手でふとんの上から、そっと病人の足を押えていた。女房はリウーの顔を見守っていた。

「どうもこいつは」と、リウーはいった。「こいつは隔離して、まったく特別な手当をやってみる必要があるな。病院に電話をかけるから、救急車で連れていこう」

「焼けつくようだ」と、彼はいっていた。「こんちくしょう、ひどく痛みやがって」

黒ずんだ口のなかで言葉はくぐもりがちに、目玉の飛び出た目を医師のほうに向けていたが、その目には頭痛のために涙が浮んでいた。女房は、じっと黙りこんでいるリウーを不安に堪えぬ様子でながめていた。

「先生」と、女房はいった。「いったい、なんでしょう、これは」

「さあ、いろんなふうに考えられるんでね。しかし、まだなんにも確かな兆候はない。晩まで、絶食と浄血剤だ。うんと飲みものをとるようにしなさい」

ちょうど、門番はのどがかわいてたまらないところだった。

家に帰ると、リウーは同業のリシャールという、市内で最も有力な医者の一人に電話をかけた。

「いや」と、リシャールはいった。「べつに、特別変ったことは目につかなかったが」

「局部的な炎症を伴った熱っていうようなものは、なかったですか」

「そうだ、あったよ、そういえば。二件ばかり、リンパ腺につよい炎症が来ててね」

「異常にですか」

「さあね」と、リシャールはいった。「普通っていうと、なにしろ……」

いずれにしても、その晩、門番は譫言をいいはじめ、四十度の熱を出しながら、鼠のことを口走った。リウーは膿瘍固定を試みた。テレビン油のしみる痛みに、門番はうなった——「ああ、ちくしょう！」

た道をそのままたどることになった。つまりこの瞬間から、恐怖と、それとともに反省とが始まったのである。

しかしながら、これら新たな出来事の詳細にはいる前に、筆者は、前節に述べ終ったその一時期について、もう一人別の目撃者の意見を記しておくのが有益であると信じる。ジャン・タルーというのは、すでにこの物語の冒頭で出会った人物であるが、数週間前にオランに居を定め、そのときから中央のある大ホテルに住んでいた。見受けるところ、いろんな収入で相当楽に暮しているらしかった。しかし、町の人々も次第にその姿になじんできたにもかかわらず、誰一人として、彼がどこからやって来たのか、またなんのためにそうしているのか、いいうるものはなかった。およそ公衆の集まるあらゆる場所で彼の姿に出くわした。もう春の初めのころから、よく海浜で、しばしば、それも明らかに楽しげな様子を見せて泳いでいるのを見かけた。人づきがよく、いつもにこにこしていて、正常な娯楽ならなんでも愛好者であり、しかもそれにおぼれることはないらしかった。実際において、彼に見られた唯一の習慣といえば、この町にかなり多い、イスパニア人の舞踊師と楽士たちのところへ熱心に通うことだけであった。

彼の手帳は、いずれにせよ、これまた、この困難な期間の一種の記録となるものである。しかし、この記録たるや、かまえて些末事ばかりをとりあげる方針に従ったと思われる、きわめて特殊な記録である。ちょっとみると、タルーはわざわざ工夫を凝らして、事物と存在とをことさら微視的にながめようとしたかとも思われよう。一般の混乱のなかで、彼は結局、物語のないものについての物語り手たらんことを努めているのである。たしかに、この既定方針を遺憾とし、そ

二時間の後、救急車のなかで、医師と女房とは病人の顔をのぞきこんでいた。いちめん菌状のぶつぶつでおおわれた口から、きれぎれの言葉がもれていた――「鼠のやつ！」と、病人はいっていた。上気色になり、唇は蠟のように、まぶたは鉛色に、息はきれぎれに短く、リンパ腺に肉を引裂かれ、寝床の奥にちぢこまって、まるでその寝床を体の上へ折りたたもうとするかのように、もしくはまた、地の底から来る何ものかに一瞬の休みもなく呼びたてられているかのように、門番は目に見えぬ重圧のもとにあえいでいた。女房は泣いていた。

「もう望みはないんでしょうか、先生」

「死んでしまった」と、リウーはいった。

門番の死は、人をとまどいさせるような数々の兆候に満ちた一時期の終了と、それに比較してさらに困難な一時期――初めのころの驚きが次第に恐慌に変っていった時期――の発端とを画したものであったということができる。わが市民は、後になって思い当ったのであるが、この小都市が、鼠が白昼環視のなかで死に、門番が奇怪な病のために死亡していくところとして、特に指定された場所でありうるなどとは、夢にも思っていなかった。この点からしても、彼らは結局誤っていたのであり、彼らの考えは修正すべきものがあった。それでも、もしすべてがそれだけにとどまったならば、習慣がおそらく勝ちを制したであろう。ところが、市民のうちでまだほかにも、しかも、必ずしも門番でも貧乏人でもない人々が、ミッシェル氏がまず第一に足を踏み入れ

「やれやれ！　で、いったいなんの病気だったんだい」
「知らんね。熱病だろう。それにやつは頑丈なはうじゃなかったからな。腋の下に腫物ができたんだそうだ。それをもちこたえる力がなかったんだな」
「見たところは、それでも、みんなの連中とおんなじようだったが」
「そうじゃないんだ。やつは胸が弱くてね、それで男声合唱隊の音楽をやってたんだ。しょっちゅう管を吹いてるっていうのは、こいつは根を使うからな」
「まったくなあ」と、第二の男が最後をしめくくった。「病気をもってる人間は、管なんて吹くもんじゃないよ」
こういう幾行かの報告に続いて、タルーは、なぜキャンは彼自身の最も明白な利益に反して男声合唱隊にはいったのか、彼をして日曜の祭式のために生命を危うくするに至らしめた深い理由は何であったかを、問題にしている。
タルーは、次に、彼の部屋の窓と向い合ったバルコニーでしばしば展開される一つの光景から、好ましい感銘を受けたようである。彼の部屋は、そういえば一つの小さな横町に面していたが、そこではよく家々の壁の陰で猫が眠っていた。ところが、毎日、昼食のあと、町じゅうが炎熱のなかで半ば眠っている時刻になると、通りの向う側のバルコニーに一人の小柄な老人が姿を現わすのであった。白髪を奇麗になでつけ、軍服仕立ての服をきちんといかめしく着こんだ老人は、「ニャオ、ニャオ」と、よそよそしいと同時にまたやさしい呼び声で猫を呼ぶ。猫はぼんやりねむそうな目をあげるが、まだ体を動かそうとはしない。老人のほうでは小さな紙きれを通り

してそれは心の冷淡さから来ているのではないかと見ることもできよう。しかし、それにしてもこの手帳が、この期間の一記録として、第二義的な些事を無数に提供しうることに変りはなく、しかもこれらの些事には各々それ相応の重要さがあり、かつその奇妙さそのものが、この興味ある人物についてあまりに早急に判断を下すことを妨げるであろう。

ジャン・タルーがとった最初のノートは、彼のオラン到着の日から始まっている。それは最初の書きだしから、町自体がこんなにも醜い町に来たことについての奇体な満足感を示している。市庁を飾っている二頭の青銅の獅子についての詳細な記述や、樹木のないこと、家屋の無趣味なこと、愚劣な都市計画などについての好意的な考察がそこに見られる。タルーはさらにまた電車や町なかで聞いた対話などもそれに混えているが、それにも別に注釈を付け加えるようなことはせず、ただ例外としては、少し後のことであるが、そういう会話の一つでキャンという男に関するものの場合があるだけである。タルーは二人の電車の車掌の問答をそばで聞いていた――

「お前もよく知っているだろう、あのキャンって男さ」と、一方がいった。

「キャン？　あの背の高い、黒い口髭をはやした？」

「うん、それさ。転轍のほうをやってたがな」

「うん、そりゃわかってるが」

「それがさ、死んだんだよ」

「へえ！　で、いつだい、いったい」

「例の鼠の一件からあとでさ」

こととか、詳しい記述を始め、そしてそういう考察を、「これは注目すべきことである」という一向なんの説明にもならないような句をもって結んでいる。

以下は、ともあれ、鼠の件に関してタルーが書きとめているところである——

「今日、向いの小柄な老人は困惑の体である。もう猫がいないのである。事実、かれらは街々におびただしく発見される死んだ鼠に刺激されて、姿を隠してしまった。私見によれば、猫が死んだ鼠を食うということは、問題になりえない。私は覚えているが、うちで飼っていた猫どもはそいつが大きらいであった。それはそれとして、やはりかれらは穴倉を駆けまわっているに違いないし、小柄な老人は困惑している。いつもほど髪もきちんとしていなくて、矍鑠たる感じもない。いかにも不安そうな様子である。しばらくして、彼はなかへ引っこんだ。しかし、一回だけ、むなしく空中に唾を飛ばしていった。

「市中で、今日、一台の電車が停止させられたが、それはどうしてそんなところへ出てきたのか、死んだ鼠が一匹車内に発見されたためである。二、三人の婦人が下車した。鼠は取捨てられた。電車はふたたび発車した。

「ホテルでは、夜警手——これは信頼に値する男であるが——が、自分はこの鼠どもから何かの不幸を予想していると、私にいった。『鼠が船から逃げだしていくときには……』。私は彼に答えて、それは船の場合には事実だが、町の場合は、まだこれまで検証されたことがない、といった。しかしながら、彼の確信はもう固まっていた。私は、彼の説に従えばいったいどんな不幸が予想されうるだろうか、と尋ねた。彼も、不幸というものは予見できないもので、それは知らな

の上でちぎってみせると、猫どもはこの白い蝶々の雨に引寄せられて、最後の紙片のほうへ躊いがちな足を伸ばしながら、道路のまんなかへ進み出る。小柄な老人は、そのとき、猫をめがけて、力をこめ、正確にねらいをつけて唾を飛ばす。飛ばした唾がうまく的に当ると、笑い声をたてるのであった。

最後に、タルーは、この市の、外観も活動も享楽さえも、すべて取引きの必要によって律せられているような、その商業的な性格に決定的に魅了されていたようである。この特異性（これはこの手帳に用いられている言葉である）は、タルーの賞讃を博し、その讃辞をつらねた考察の一つなどは、「遂に！」という感嘆の叫びをもって結ばれているくらいである。これは、この時期において、この旅行者の覚え書が個人的な性格を帯びるように思われる唯一の個所である。その意味するところとまじめさの程度を簡単に判定することは困難である。たとえば、一匹の死んだ鼠が発見されたためにホテルの会計係が勘定書に計算の間違いを犯してしまったことを述べたあとで、タルーは、いつもほど明瞭でない筆跡で、こう付け加えている――「問題――時間をむだにせぬためにはいかにすべきか。答え――時間の長さを残りなく味わうこと。方法――日々を歯医者の待合室ですわり心地の悪い椅子に腰掛けて過すこと。日曜の午後を自分の部屋のバルコニーで暮すこと。自分にわからない国語で行われる講演を聞くこと。最も長くかつ最も不便な汽車の旅程を選び、もちろん立ち通しで旅行すること。劇場の切符売場で行列に並び、しかも切符を買わないこと、等々……」。しかし、こういう言葉あるいは考えの上の脱線のすぐあとで、手帳は、この町の電車について、その艀舟のような形とか、どっちつかずの色とか、いつもきたない

したら許しませんよ』

『ほんとに、お父様のおっしゃるとおりですよ』と、二十日鼠夫人がいった。

「二人のちびころ君はめいめい餌皿に鼻をつっこみ、梟氏は、一向余情もない頭の頷きで感謝の意を示した。

「こういうりっぱな手本があるにもかかわらず、市中ではこの鼠の話が大いに語られている。新聞もその仲間入りをした。地方記事は、いつもはずいぶん多種多様であるのに、今ではまったく全部市庁に対する論戦によって占められている――『わが吏員諸君は、これらの齧歯獣の腐乱した死体が引起しうる危険というものに気づいているのであろうか？』。ホテルの支配人はもうそれ以外の話はなんにもできなくなっている。しかし、それはまた彼が腹だたしい気持になっているからでもある。れっきとしたホテルのエレベーターの中に鼠が発見されるなどということは、彼には考えられぬことのように思われるのである。彼を慰めるために私はこういってやった――

『しかし、世間みんながその始末なんだから』

『それなんですよ』と、彼は答えた。『われわれも、今じゃ、世間みんなとおんなじなんです』

「人々が不安をいだきはじめた例の突発的な熱病の最初の例について話してくれたのは彼である。彼の使っている部屋女中の一人がそれにかかったのである。

『しかし、もちろん、これは伝染性のものじゃありません』と、彼はとり急いで補足した。

「私は、そんなことは自分にはどうでもいいことだといった。

『ははあ、わかりました。あなた様も私とおんなじですよ。つまり運命論者なんですね』

かった。しかし、たとい地震がその役割を勤めようとも、彼は驚きはしないだろう。私も、それはありうるということを認めたが、すると彼は、それで不安にはならないかと、私に尋ねた。『僕の心をひかれる唯一のことは』と、私は彼にいった。『それは心のなかの平和を見出すということだからね』

「彼は私のいう意味を完全に理解してくれた。

「ホテルの食堂に、なかなか興味のある、おそろいの一家族がいる。父親は、やせた背の高い男で、黒い服を着、堅いカラーをつけている。頭のまんなかが禿げ、左右に二かたまり灰色の髪の毛が茂っている。丸くいかつい小さな目、細い鼻、真一文字の口など、育ちのいい梟という様子である。彼はいつも先頭に立って食堂の入口にやって来、身を退き、まるで黒い二十日鼠のようにほっそりした細君を先へ通し、さてそれから、学者犬よろしくといった衣装を着せられた小さな男の子と女の子を踵に従えて、はいっていく。食卓のところへ行くと、まず細君が席につくのを待ち、自分も腰を下ろし、そこでやっと二人のちびさんもめいめい自分の椅子にのっかることができる。彼は細君と子供たちに向って『あなた』といい、細君にはいんぎんな憎まれ口を、後継ぎたちにはきめつけるような言葉を、発する。

『ニコール、あなたのやり方はこのうえもなく感じが悪いですよ』

「すると、女の子は今にも泣きそうになる。それがまさに型どおりというわけである。

「今朝、男の子は鼠の話にすっかり興奮していた。彼は食卓で一言しゃべろうとした。

『食事中に鼠のことなんか話すんじゃありません、フィリップ。今後、鼠っていう言葉を口に出

タルーの数字は正確であった。医師リウーはそれについてある程度知っていた。門番の遺体を隔離してしまうと、彼はリシャールに電話をかけて、こういう鼠蹊部の熱について尋ねたのであった。

「僕も全然わからないんだがね」と、リシャールはいっていた。「死亡が二人、一人は四十八時間以内、もう一人は三日目だ。あとのほうの患者なんか、その朝診てきたときには、すっかりなおりかけてるように見えたんだが」

「ちょっと知らせてください、もしまたそういう例があったら」と、リウーはいった。

彼はさらに幾人かの医者を呼び出した。こうして行われた調査の結果は、二、三日の間に二十名ばかりの類似の症例があらわれた。ほとんど全部が死亡であった。そこで彼は、オラン医師会の会長をしているリシャールに、新たな患者の隔離を要請した。

「だって、そいつは僕にはどうにもできないよ」と、リシャールはいった。「それには県のほうからの手続きが必要だからね。それに、何かそういう事実があるのかね、伝染の危険があるっていう」

「なんにもありませんよ、そういう事実は。しかし、いろんな兆候がどうも不安なんです」

リシャールは、それでも、「自分にはその資格がない」と見なした。彼がなしうることといえば、それについて知事に話をすることぐらいのものであった。

「私は、そんなふうなことはなんにも主張したことがないし、だいいち、私は運命論者ではない。私はそのことを彼にいった……」

すなわち、この時期から、タルーの手帳は、公衆の間にすでに不安を呼び起していたその正体不明の熱病について、やや詳細に語りはじめるのである。例の小柄な老人が、鼠の消失とともにやっと猫どもに再会し、いつもの射撃を根気よく調整し直していることを記しながら、タルーは、この熱病の症例がすでに十件ぐらいあげられ、その大部分は死亡に至るものであったことを付け加えている。

資料としての意味で、最後に、タルーの筆になる医師リウーの肖像を掲げておくことができる。筆者の判断しうるかぎりでは、それはなかなか正確である――

「一見三十五歳ぐらい。中背。がっしりした肩つき。ほとんど長方形の顔。まっすぐな暗い目つき、しかし、顎は張っている。たくましい鼻は、形が整っている。ごく短く刈りこんだ、黒い頭髪。口は弓状をなし、その唇は厚く盛り上がり、ほとんどいつも固く結ばれている。皮膚は陽にやけ、毛は黒く、そしていつも暗い色の、しかし彼にはよく似合う服を着ているところは、ちょっとシチリアの百姓という風貌である。

「彼は早足に歩く。歩調も変えずに歩道を下っていくが、しかし二度に一度は、反対側の歩道に、ちょっと身をおどらせるようにして上る。自動車のハンドルを握っているときもぼんやりしていて、曲り角を曲ってしまったあとでも、方向を示す矢をあげたままにしていることがよくある。いつも無帽である。情報通といった様子」

の棚と、「花咲き乱れた小径」という言葉が半ば消されたまま、まだ読みとれる黒板とが目につくばかりである。グランの話では、コタールはきわめて良好な一晩を過した。しかし、朝、目をさますと、しきりに頭を痛がり、なんの反応も示す気力がなかった。グランは、どうやら疲れて神経質になっている様子で、部屋じゅうをぐるぐる歩きながら、机の上の、原稿用紙のぎっしりつまった分厚なつづりを開いたり閉じたりしていた。

彼がそれでも医師に語ったところによると、彼はコタールのことはよく知らないが、しかしちょっと小金ぐらいもっていると思うとのことであった。コタールというのは風変りな男だった。長い間、彼らの関係は階段でときどき挨拶をかわす程度にとどまっていた。

「たった二度きりですよ、あの人と話をしたのは。四、五日前でしたが、私は階段口のところで白墨の箱をひっくり返しちまったんですよ、家へ持って帰ろうとしてて。白墨は赤と青とありました。ちょうどそのとき、コタールさんが階段口へ出てきて、拾うのを手伝ってくれましてね。で、そんないろんな色の白墨をいったい何に使うのかってきくんですよ」

グランはそこで、じつはラテン語を少し勉強し直そうと思ってやっているのだと、説明して聞かせた。高等学校以来、知識がぼやけてしまっているからだ。

「そうなんです」と、彼は医師にいった。「それがたしかに役にたつって聞いたもんですから。フランス語の意味をよく知るのには」

彼はそこでラテン語の言葉を黒板に書くことにした。語の、性、数、格の変化と活用に従って変る部分を青の白墨で書き、全然変化しない部分は赤の白墨で書きつけた。

しかし、話などをしている間に、天候が崩れだした。門番の死んだ翌日には非常な濃霧が空をおおった。車軸を流すような豪雨が断続的に町の上に襲いかかった。嵐を含んだ暑気がこの突然の驟雨に続いた。海までがその深い青さを失い、そして濃霧の空のもとで、目の痛くなるような、銀色もしくは鉄色の輝きを帯びた。この春のじめじめした蒸し暑さは、夏の炎暑を望ましく思わせるほどであった。丘の上に螺旋状に作られ、海に面してほとんど開けていないこの市中には、どんよりした麻痺状態がみなぎっていた。長い荒塗りの外壁に囲まれたなかで、埃だらけのショーウィンドーの並んだ街々の間や、よごれた黄色の電車内にいると、ちょっと空の下にとりこめられた人間のような気がしてくるのであった。ひとり、リウーの患者の爺さんだけは、喘息を征服して、この天候をうれしがっていた。

「じりじり焼きつけるからね」と、爺さんはいっていた。「こいつは気管支のためにいいんでさ」

まったく、焼きつける暑さであったが、しかしその感じは熱病といささかも変るところがなかった。市じゅうが熱病にかかっている——少なくともこれは、コタールの自殺未遂に関する取調べに立ち会うためフェテルブ街におもむいた朝、医師リウーの心につきまとっていた印象であった。しかし、この印象は彼には不条理なものに思われた。彼はそれを目下神経過労と種々の心労に悩まされているせいだと思い、まず緊急に自分の考えを少し整理する必要があると認めた。

彼が着いたとき、警官はまだ来ていなかった。グランが階段口で待っていて、二人はひとまずグランのところへはいり、戸をあけ放したままにしておくことにきめた。市の吏員をしているこの男の住居は一部屋になっていて、家具などきわめて簡略であった。辞書を二、三冊並べた白木

グランはリウーのほうを振向き、そして照れたような様子で、こう付け加えた――

「個人的な仕事なんですがね」

警官はともかく病人に会うことを望んだ。しかし、リウーは、まずコタールにこの会見の心構えをさせておいたほうがいいと考えた。彼が部屋へはいっていくと、コタールは灰色がかったフランネルの寝間着一枚着たきりの姿で、床の上に起き直り、不安に駆られた表情で扉口のほうを振向いた。

「警察でしょう、ええ？」

「ええーと、リウーはいった。「だから、騒ぐことはありませんよ。一つ三つ型どおりの手順さえ済ませば、それですっかり落着けるんです」

しかし、コタールはそれに答えて、そんなことはなんの役にもたたないし、自分は警察はきらいだ、といった。リウーは、いらだった素ぶりを示した。

「僕だって好きだとはいやしません。ただ、向うの質問に手早く間違いなく答えるだけのことですよ、これっきりもうおしまいにするように」

コタールは沈黙し、リウーは戸口のほうへ引返した。しかし、この小柄な男コタールはそれより早く彼を呼びとめ、そして彼が寝台のそばへ来ると、その両手をとった。

「病人をどうこうするなんてことはできないでしょうね、こんな首をつったりした人間を。ねえ、そうでしょう、先生」

リウーはいっとき彼の様子を見まもり、それから最後に、そういう種類のことは全然問題には

「コタールさんはちゃんとのみこめたかどうか知りませんが、とにかく興味を感じた様子で、私に赤の白墨を一本くれというんですね。私はちょっと意外な気がしましたが、しかしまあ、なんにしても……。私はもちろん、それがあの人の計画に役だつなんてことまでは見抜けなかったわけで」

リウーは、二度目の会話の話題はどんなことだったかと尋ねた。しかし、書記を連れて、警官がやって来、まずグランの申したてから聞こうとした。リウーが気づいたのは、グランがコタールのことをいうとき、いつも「絶望に駆られたあの人」ということであった。ある瞬間などは、「宿命的な決意」というような表現を用いたりしたくらいである。彼らは自殺の動機について論議したが、グランは用語の選択に細心なこだわりを示した。最後に一同「内的な悲嘆」という言葉に落着いた。警官は、コタールの態度に、彼のいわゆる「この男の最後的決意」を予想させるようなものは、なんにもなかったかと尋ねた。

「あの人は前の日に私の部屋の戸をノックしました、マッチを貸してくれっていって」と、グランはいった。「私は一箱出してやりました。すると、どうも悪いんだが、まあ近所同士だからっていうようなことをいってましたっけ。それから、このマッチは必ずお返ししますっていうんです。私は、そいつは取っといてくれるようにいいました」

警官はグランに、コタールの様子が変には思われなかったかと尋ねた。

「私が変に思ったのは、あの人がなんだか話し相手でもほしがってるような様子だったことです。しかし、こっちは、ちょうど仕事をしてる最中だったもんですから」

例の爺さんの患者の近所のものが鼠蹊部を押え、熱にうかされながら吐瀉しつづけた。リンパ腺は門番のよりもずっと大きくなっていた。その一つは膿が流れはじめ、そして間もなく、いたんだ果物のように口をあけた。家に帰るとリウーは県の医薬品保管所に電話をかけた。彼の職業上のノートはこの日付のところに単にこう記載している――「否定的な回答」。しかも、早くも、ほかの方面から類似の症状で呼びに来ていた。膿瘍を切開する必要がある――それは明瞭であった。メスで二すじ十文字に切ると、リンパ腺からは血のまじったどろどろの汁が流れ出た。患者たちは体じゅう傷口だらけになって、出血していた。しかし、斑点が腹と足に現われてき、一つのリンパ腺は膿がとまったかと思うと、やがてまたはれ上がってくる。大部分の場合、患者は、すさまじい悪臭のなかで死んでいくのであった。

鼠の事件ではあれほど饒舌であった新聞も、もうなんにもいわなくなっていた。鼠は街頭で死に、人は室内で死ぬからである。そして、新聞は街頭のことしかとりあげない。しかし、県庁と市庁は不審をいだきはじめていた。医者たちがめいめい二、三件以上の症例を知らないでいた間は、誰も動きだそうと考えるものはなかった。しかし、要するに、誰かが合計を出すことを思いつきさえすればよかったのである。合計は驚倒すべきものであった。わずか数日の間に、死亡例は累増し、この奇怪な病を手がけている人々にとっては、それがまぎれもない流行病であることは明白となった。いよいよ潮どきと見てカステルという、リウーの同業で、ずっと年輩の男が、彼を訪ねてきた。

「むろん」と、カステルはいった。「君はこれがなんだか知ってるだろう、リウー君」

ならないし、それにまた病人を保護するために自分がひかえているからと、彼を安心させた。コタールはやっと緊張がほぐれたらしく、リウーは警官をはいらせた。

一同はコタールにグランの証言を読み聞かせ、彼の行為の動機をはっきりさせることができるかと尋ねた。彼は単に、それも警官の顔を見ないで、「内的な悲嘆というのは、たいへんよく当っています」と、答えただけであった。警官は、彼がまたやる気かどうかを、しきりにいわせようとした。コタールは急に勢いづいて、そんな気はない、ただ自分の平和な生活をそっとしておいてもらいたいだけだ、と答えた。

「ご注意申しますがね」と、警官はいらだった口調でいった。「今んところ、あんたこそ、他人の平和をかき乱しとるんですよ」

しかし、リウーの合図で、それもその程度で打切られた。

「あんたがたはどう思っとるか知らんが」と、出ていきながら警官は溜息をついた。「余計なことになんぞかかり合っとる暇はありゃせんですよ、例の熱病のうわさが始まってからってものは……」

彼は医師に、こいつは本気で考えなければならないようなものだろうかと尋ね、リウーは、それは自分も全然わからないといった。

「天気のせいですな、それだけです」と、警官は結論を下した。

たしかに、天気のせいに違いなかった。毎日時刻が進むにつれて何もかも手にべたつくようになり、リウーは彼の懸念が往診のたびごとに増大するのを感じた。同じ日の晩、外郭区のほうで、

「そうさ。それに、忘れちゃいかんよ、パリでもまだ、やっと二十年前にだ」

「わかりました。まあ、今度もあのとき以上にひどくならないように祈りたいですね。しかし、実際信じられないことです」

「ペスト」という言葉は、今はじめて発せられた。物語のここのところで、ベルナール・リウーを彼の部屋の窓際に残したまま、筆者はこの医師のたゆたいと驚きとを釈明することを許していただけると思う。というのが、さまざまのニュアンスはあるにせよ、彼の示した反応は、すなわちわが市民の大部分の示したそれであったのである。天災というものは、事実、ざらにあることであるが、しかし、そいつがこっちの頭上に降りかかってきたときは、容易に天災とは信じられない。この世には、戦争と同じくらいの数のペストがあった。しかも、ペストや戦争がやって来たとき、人々はいつも同じくらい無用意な状態にあった。医師リウーは、わが市民たちが無用意であったように、無用意であったわけであり、彼の躊躇はつまりそういうふうに解すべきである。同じくまた、彼が不安と信頼との相争う思いに駆られていたのも、そういうふうに解すべきである。戦争が勃発すると、人々はいう――「こいつは長くは続かないだろう、あまりにもばかげたことだから」。そしていかにも、戦争というものはたしかにあまりにもばかげたことであるが。しかしそのことは、そいつが長続きする妨げにはならない。愚行はつねにしつこく続けられるものであり、人々もしょっちゅう自分のことばかり考えてさえいなければ、そのことに気がつ

「僕は分析の結果を待ってるんです」

「僕は知ってるんだよ、それを。だから、分析なんぞ必要としない。僕は生涯の一部をシナで過したし、パリでいくつかの症例も見た、二十年ばかり前にね。しかし、ただ、世間はそいつに病名をつける勇気がなかったのさ、即座にはね。世論というやつは、神聖なんだ——冷静を失うな、何よりもまず冷静を失うな、さ。それに、ある同僚がいったことだが、『そんなことはありえない。誰でも知ってるとおり、それは西洋からは姿を消してしまったのだ』というわけだ。さよう、誰でもそのことは知っていた、死人以外はね。さあ、どうだね、リウー君、君は僕と同様よく知ってるんだ、それが何かっていうことを」

リウーはじっと考えていた。書斎の窓から、遠く湾口を閉ざしている断崖の岩だらけの肩のあたりを彼はながめていた。空は、青空でありながら、どんよりした輝きを放っていたが、それは午後遅くなるにつれて次第に柔らいできた。

「そうです、カステルさん」と、彼はいった。「まったく、ほとんど信じられないことです。しかし、どうもこれはペストのようですね」

カステルは立ち上がって、戸口のほうへ足を向けた。

「ご承知だろうな、それに対してどういわれるか」と、老医はいった。「……『それは気候の温和な国々からはもう何年も昔に消滅してしまった』……」

「いったい、どういうことを指すつもりですかね、消滅っていうのは」と、肩をすくめながら、リウーは答えた。

した。さまざまの数字が彼の記憶のなかに漂い、そして歴史に残された約三十回の大きなペストは、一億近い死亡者を出していると、彼は胸につぶやいた。しかし、一億の死亡者とは、いったいなんだろう。戦争に行ってきた場合でも、一人の死者とはなんであるかをすでに知っているかどうかあやしいくらいである。それに、死んだ人間というものは、その死んだところを見ないかぎり、向重みのないものであるとなれば、広く史上にばらまかれた一億の死体など、想像のなかでは一抹の煙にすぎない。リウーはプロコペウス（訳注　紀元六世紀史上最大のペスト流行を見た、ユスチニアヌス大帝時代のギリシャの歴史家）によれば一日に一万の犠牲者を出したという、コンスタンチノープルのペストのことを思い出した。一万の死亡者といえば、大映画館の観衆の五倍に当る。そうだ、こんなふうにでもやってみることだ。五つの映画館の閉館のときに観衆を集め、市の広場へ連れていって、ちょっとどんな具合か、ひとかためにして死なしてみる。そうすれば、少なくとも、見知った顔をこの無名の人山のなかに加えることができるだろう。しかし、もちろん、これは実現不可能だし、それに、誰がいったい、万人の顔など知っていよう。さらにまた、プロコペウスのような人々は計算の仕方を知らなかったということも、周知の事実だ。広東では、七十年前、四万の鼠が、災禍が住民に鉾先を向ける以前に、ペストのために死んだ。しかし、一八七一年には、まだ鼠の数を計算する方法というものがなかった。人々は概算で大づかみに計算したわけで、多くの誤差の機会が含まれていることは明瞭だ。それにしても、一匹の鼠の長さが三十センチとすれば、四万匹の鼠を前後につないで並べると、その長さは……。

しかし、リウーはそんな気持に反撥した。すっかり引きずられるままになっていたが、そいつ

くはずである。わが市民諸君は、この点、世間一般と同様であり、みんな自分のことばかりを考えていたわけで、別のいいかたをすれば。彼らは人間中心主義者であった。つまり、天災などというものを信じなかったのである。天災というものは人間の尺度とは一致しない、したがって天災は非現実的なもの、やがて過ぎ去る悪夢だと考えられる。ところが、天災は必ずしも過ぎ去らないし、悪夢から悪夢へ、人間のほうが過ぎ去っていくことになり、それも人間中心主義者たちがまず第一にということになるのは、彼らは自分で用心というものをしなかったからである。わが市民たちも人並以上に不心得だったわけではなく、謙譲な心構えを忘れていたというだけのことであって、自分たちにとって、すべてはまだ可能であると考えていたわけであるが、それはつまり天災は起りえないと見なすことであった。彼らは取引きを行うことを続け、旅行の準備をしたり、意見をいだいたりしていた。ペストという、未来も、移動も、談論も封じてしまうものなど、どうして考えられたであろうか。彼らはみずから自由であると信じていたし、しかも、天災というものがあるかぎり、何びとも決して自由ではありえないのである。

そして、医師リウーが、散発した一群の患者たちは、なんの警告も残さず、ペストで死んでいったものと、友の前で認めたその後でさえ、危険は彼にとって、依然、非現実的なものであった。ただ、しかし、医者ともなれば、苦痛というものの概念は身につけているし、多少は想像力も余分にある。一向変っていない市の様子を窓からながめながら、リウーは、かの不安と称せられる、未来に対するほのかな胸苦しさが、身のうちにわいてくるのさえほとんど感じるか感じないくらいであった。彼は、この病について知っているだけのことを、頭の中でまとめてみようと

（訳注　シリアの港。ナポレオンはエジプト遠征の際、この町を占領し、そのペスト患者収容所を視察した）とその町の醜悪な乞食たち。コンスタンチノープルの病院の、土間に密着して、湿気で腐りかかっている寝床のむれ。「黒ペスト」の最中に、鉤棒で引きだされる病人、覆面した医者たちの狂宴。ミラノの墓場における、まだ生きている者同士の交合。おびえきったロンドン市中における、死体運搬車のむれ。そして、いたるところ、つねに、人々の果てしない叫びに満たされた、夜また昼。いや、これらすべてのことも、まだ、この一日の平和を抹殺するに足るほど強烈ではなかった。窓ガラスの向う側で、姿の見えぬ一台の電車のベルが突如鳴り響き、そして一瞬にして残忍と苦痛との論拠をくつがえし去った。ひとり海だけが、家々の陰鬱な暮靄縞の果てに、不安を誘うものと永遠に休まることのないものとのこの世にあることを、身をもって示していた。そして医師リウーは、じっと湾をながめたまま、ルクレティウス（紀元前一世紀のラテンの詩人）が語っている、病禍に襲われたアテナイ人たちが海の前に築いたという、火葬台のことを考えていた。人々は夜の間にそこへ死人を運んでいったが、しかし場所が不足し、生存者たちは、自分の身に親しかった人々をそこへ入れようとして松明でなぐり合い、死体を捨てていくくらいならむしろ血みどろな争闘を続けていたという。静かな暗い水の前で赤く輝いている火葬台、火花にきらめく闇の中の松明の闘い、そしてじっとそれを見守る空に向って立ちのぼる、もうもうたる有毒な蒸気など、ありありと想像に描くことができる。そして、ことによると……。

しかし、この一瞬の幻は理性の前には抗しえなかった。いかにも「ペスト」という言葉が口に出されたことは事実であり、今この瞬間にも災禍は二、三の犠牲者を苛み打倒していたことも事

は禁物だ。二、三の症例だけで流行病とはいえないし、用心だけしておけばいいのだ。自分の知っているだけのことに手がかりを置くべきだ。――麻痺および虚脱、月の充血、口腔の汚染、頭痛、リンパ腺腫脹、猛烈な渇き、精神錯乱、身体の斑点、内部からの傷口破裂、そしてそれらすべての最後に……。それらすべての最後に、一つの文句が――彼の便覧に症候を列挙してある、まさにその最後の一句が、医師リウーの心によみがえってきた――「脈持よ極微となり、些細な動作の際に突然死の転帰をとる」。まことに、それらすべての最後には、もう糸一筋につながっている運命なのだが、そのなかの四分の三ぐらい（これは正確な数字であった）の人々は、結構気短かに、死につき落すそのかすかな動作をやりたがるのである。

リウーは相変らず窓からながめつづけていた。窓ガラスの一方の側には、春のさわやかな空。そして他の一方の側には、今なお室内に反響している言葉――ペスト。この言葉は、単に科学がはつきりそのなかに盛ろうとしたものを含んでいるばかりではなく、この黄色くまた灰色の市にはそぐわない、異常な幻の数々の長い行列を含んでいた。この時刻には穏やかに活気づき、騒音というよりも、むしろ羽音をたてていた、結局は幸福に（もし人間が同時に幸福かつ陰鬱でありうるものなら）暮しているこの市。そして、かくも天下太平な、かくも無関心な平穏さというものは、かの災禍の占めかしい幻を、ほとんど苦もなく否定し去っていた。ペストに荒され、鳥一羽住まなくなったアテナイ。声もなく断末魔にあえいでいる人々の充満したシナの町々。汁のしたたる死体を穴の中に積みあげているマルセイユの徒刑囚たち。プロヴァンス地方（訳注　地中海岸一帯の地方　フランス南部、）における、ペストの吹きすさぶ狂風を防ぎ止めるはずであった、大規模な防壁の建設。ヤッファ

みせた。

「数字は上昇していますよ、先生」と彼は報告した。「四十八時間に十一名の死亡者です」

リウーはコタールに挨拶し、気分はどうかと尋ねた。グランは事情を説明して、コタールがぜひとも先生にお礼をいい、いろいろご厄介をかけたおわびをしたいということだったので、といったが、しかし、リウーはじっと統計表を見つめていた。

「さあ」と、リウーはいった。「どうやら、いよいよ、この病気もはっきり病名どおりに呼ぶ決心をしなきゃならんようだ。今までのところ、われわれも足踏みしていた。ところで、いっしょに来ませんか、これから試験所へ行ってみなきゃ」

「そう、まったくです」と、リウーのあとから階段を降りながら、グランはいった。「ものごとははっきり名前どおりに呼ぶべきです。しかし、なんていうんです、その病名は」

「それはいえない。それに、いったって、あなたにはなんのたしにもならないことですよ」

「そら、そのとおりですからね」と、グランは笑った。「なかなかやさしいことじゃありませんよ」

彼らは閲兵広場のほうへ向った。コタールは相変らず黙りこんでいた。街路は人影で雑踏しはじめていた。この地方の暮れやすい黄昏は早くも過ぎ去ろうとして夜の闇が迫り、まだはっきり見える地平線のあたりに最初の星々が現われてきた。数刻ののち、街路の上の電燈が全体をたちまち暗く感じさせるようにともり、そして会話のさざめきは一調子高くなったように思われた。

実である。しかし、それはそこでとまってしまうかもしれないではないか。なすべきことは、確認さるべきものを明瞭に確認し、無用の亡霊をついに追い払い、適切な処置を講ずることである。そのうえで、ペストがやむとすれば、それはペストなど考えられなかったか、もしくは誤って考えられたためである。もしペストがやんだら——しかもこれは最もありそうなことであるが、万事うまく運ぶわけだ。それと反対の場合には、ペストというものがどんなものか、そしてまずそれに対処し、次いでそれに打勝つための方法があるかないかどうか、わかるわけだ。

リウーは窓をあけると、市の騒音がどっとみなぎった。近くの製作所から、機械鋸の短く反復するきしりが聞えてきた。リウーは身をゆすぶった。そこに、毎日の仕事のなかにこそ、確実なものがある。その余のものは、とるに足らぬつながりと衝動に左右されているのであり、そんなものに足をとどめてはいられない。肝要なことは自分の職務をよく果すことだ。

医師リウーが思いにふけりながらちょうどそこまで考えてきたとき、ジョゼフ・グランの来訪が伝えられた。市庁の吏員で、しかもその職務はきわめて雑多であったが、グランは定期的に統計課や戸籍のほうの仕事にもまわされていた。そういうわけで、彼はおのずから死亡の集計をすることになった。そして生来の世話好きから、そのえられた結果の写しを自分でリウーのところへ持ってくることを承知してくれたのであった。

リウーは、グランが隣のコタールを連れてはいってくるのを見た。グランは一枚の紙を振って

の木陰を小刻みな急ぎ足で登っていった。試験所の入口まで来ると、コタールはリウーに、いつかお訪ねしてご注意をうかがいたいのだが、といった。ポケットのなかでしきりに統計表をいじくっていたリウーは、それでは診察の時間に来てくれるようにといったが、それからまた思い直して、明日あの界隈に行くので、午後の終りごろ、寄ってみるから、といった。

コタールと別れると、リウーは自分がグランのことを考えているのに気がついた。ペストの渦中に置かれたグランの姿――それもおそらくたいしたことではあるまい今度のやつではなく、歴史上の大規模なペストの一つの渦中にある姿を想像してみているのであった。「あれこそそういう場合に無事に見逃されるという種類の人間だ」。彼はその記述のなかで、ペストは虚弱な体格の者は見逃し、特に強壮な体質の者を破壊するということを読んだのを思い出した。そして、引続きそのことを考えているうちに、リウーはグランのうちにちょっと謎めいたところを見出した。

一見したところでは、なるほど、ジョゼフ・グランは、その物腰もすっかり身についた市庁の小役人以上の何ものでもない。ひょろ長くやせていて、からだ全体がだぶだぶの服のなかでまるで漂っているようであるが、彼はそのほうが長期間着られるだろうという錯覚からいつも大きすぎる服を選ぶのである。下の歯茎には歯がまだ大部分残っているが、その埋合せに上顎の歯はなくなっている。彼の笑顔は特に上唇のほうをまくれ上がらせるので、そのためまるで亡者のような口つきになる。この肖像に、さながら神学生然たる物腰、壁にぴったりくっついて歩き、戸口にそっとすべりこむ術、穴倉とたばこの煙の香、とるに足らぬ人間のおよそあらゆる風貌――などを付け加えてみれば、事務机の前以外の場所には、そしてそこで、生懸命市内の浴場料金を検討

「どうも悪いんですが」と、閲兵広場の角でグランはいった。「私はもう電車に乗らなくちゃ。私の夜の時間は神聖なものなんです。私の国のほうでよくいうことですが、『決して明日に延ばすな』ですから……」

リウーはすでにグランのその癖に気がついていたが、モンテリマル（訳注　フランス南部の小都市）生れの彼は、何かというと自分の国のほうの慣用句をもちだして、そのあとには「夢みるような天気」とか「お伽の国のような照明」とかいうような、これはどこの国のものでもない陳腐な言いまわしを付け加えるのであった。

「いや、そうなんですよ」と、コタールはいった。「絶対にこの人を家から引っ張り出せないんです、晩飯のあとでは」

リウーは、それは市庁のために仕事をしているのかとグランに尋ねた。グランが答えるには、そうではなく、彼は自分自身のために仕事をしているのであった。

「ほう！」と、とにかく何かいうために、リウーはいった。「で、それは進んでるんですか」

「もう何年となくやってるんですから、そりゃどうしたってね。もっとも、別な意味からいえば、たいして進捗もしてないんですが」

「しかし、要するに、どういう方面の仕事なんです」と、立ち止りながら、リウーはいった。

グランは、大きな耳のあたりまでその山高帽をしっかりかぶりなおしながら、早口につぶやいた。そしてリウーには、きわめて漠然とながら、それが一人の人間の個性の伸長に関する何かであることが理解された。しかし、グランはすでに二人のそばを離れ、そしてマルヌ通りの無花果

い至る様子はなかった。ここにこそ彼の特異性が、あるいは少なくともその特徴の一つが存するのである。実際、彼は、権利とまでいう自信はないにしても、少なくとも先方が与えてくれた確約に、ものをいわすことはできたはずであった。しかし、第一に、彼を採用してくれた局長はとっくの昔に死んでいたし、それにグランも結局のところ、自分がしてもらった約束について正確な条件を覚えていなかった。最後に、そして特に、ジョゼフ・グランは適当な言葉が口に出てこない男だったのである。

この特性こそ、リウーもそれに注目したように、わがグラン君の風貌を最もよく示していたものである。事実、それがつねに彼をさまたげて、彼のもくろんでいる請求の手紙を書くこと、もしくは事情が必要とする運動を行うことをさせないのである。彼のいうところが事実とすれば、彼は自分がそれについて一向確信のない「権利」という言葉、また「約束」という、つまり自分が当然もらうべきものを請求するという意味を含み、したがって彼のついている職務のつつましさと相いれないある図太さめいた性格を帯びそうな——言葉は、特別用いにくい気がするのであった。一方また、「ご厚情」「懇願」「深謝」というような用語は、自分の人格的威厳と調和しないように考えられて、用いる気になれなかった。そんな次第で、的確な言葉が見出せないままに、わがグラン君は、かなりの年輩になるまで、相変らず日だたぬ陰の職務をやりつづけてしまったのである。それに、これまた彼のリウーに語ったところによれば、彼は、自分の物質的生活はいずれにせよ保証されている——なにしろ結局のところ必要を資力に適応させさえすれば済むものだから——ということを処世法として悟ったのであった。彼は、そこで市長のお得意の言葉の一つ

したり、若い編集者のために厨芥の除去についての新たな手数料に関して報告の材料を集めてやったりしている姿以外には、彼の姿を想像しえないことがうなずかれるであろう。たといまったく先入主のない頭でみても、彼は、日給六十二フラン三十の市臨時補助吏員という、つつましやかでしかも不可欠な職務を営むために、この世に生れてきたもののように思われるのであった。

この日給六十二フラン三十の市臨時補助吏員というのは、事実、雇用票の「職務資格」という語句の下に記入すると彼みずからいっている用語であった。二十二年の昔、大学を出て、金がないためそれ以上は進めず、この勤め口に甘んじたときには、彼にいわせると、急速な「専任昇格」が期待できるような話であった。この市の行政というものが課する種々の微妙な問題において、若干の期間、自分の有能さを証明してみせさえすればいい。そのあとでは、もう間違いっこなく——と相手は断言したのであった——編集者の地位まで行けるし、それで、はでに暮せるだろう。もちろん、ジョゼフ・グランは野心などに動かされたわけではなかったし、それは彼自身メランコリックな微笑を浮べつつ保証するところである。しかし、地道な方法で物質的に保証される生活という前途の見通し、また、したがって、自分の好きな仕事に良心の呵責なく没頭しうる可能性ということが、大いに彼の心をそそった。彼が提供された地位を受けいれたのは、名誉ある理由のためであり、いいうべくんば、一個の理想への忠実さからであった。

もう長い年月にわたってこの臨時の事態は続いていたし、生活費は途方もない割合で膨脹してしまって、グランの給料は、若干の総体的な引上げがあったにもかかわらず、まだお話にならぬほどわずかなものであった。彼はそのことをリウーにこぼしていたが、しかし誰一人その点に思

リウーはその晩、グランの去っていく姿をながめながら、突然、彼がいおうとしたことを理解した――彼はおそらく一冊の本か、あるいはそれに近い何かを書いているのだ。やっと試験所へ着いて中へはいってからも、そのことがリウーの不安を静めていた。この感じがばかげていることは彼も知っていたが、しかし、結構な道楽にうちこんでいるつつましいお役人が見られるような市に、ペストが本当に腰を落着けようとは、どうも信じかねる気持だったのである。つまり、正確にいえば、ペストの最中にそういう道楽の余地など想像できなかったし、そこで、実際上、ペストはわが市民の間には将来性なしと判断したのであった。

翌日、しきりに主張した結果――それもまるで見当違いな主張のように見なされはしたものの――リウーは県庁に保健委員会を召集してもらうことができた。

「いかにも、市民が不安になっていることは事実だ」と、リシャールもそれは認めていた。「それに、おしゃべりってやつが万事大袈裟にしちまうんでね。知事はこういわれたよ――『まあ、早いとこますとしましょうや。ただし日だたないようにね』って。もっとも、知事は結局空騒ぎだと確信しておられるんだがね」

ベルナール・リウーは県庁へ行くのにカステルを自分の車に同乗させた。

「君は知ってるかい」と、カステルはいった。「県には血清がないんだよ」

「知ってます。貯蔵所に電話をかけてみたんです。所長はまるで雲の上から落っこちたっていう

の正しさを認めたのであったが、市内の大実業家である市長は力強く断言して、究極のところ(そして彼は、その議論のすべての重みがそこにかかっているこの言葉に特に力を入れた)、すなわち究極のところ、かつて誰一人餓死する人間を見た者はないというのであった。いずれにせよ、ジョゼフ・グランが営んでいる、ほとんど禁欲主義といってもいい生活は、結局、事実上、この種の煩いからいっさい彼を解放してくれたのである。彼は依然としていうべき言葉を捜しつづけていた。

ある意味では、彼の生活は模範的なものであったともいいうる。彼は、よそと同様この市でもめったに見られない、いつも自分の善良な感情をはばかるところなく外に表わす人々の仲間に属していた。彼が自分の身の上について打明けたわずかばかりのことも、実際、こんにちでは、人人があえて告白しようとしないたぐいの、善良さや愛着心を示していた。彼は、残された唯一の親戚で、二年に一度ずつフランス本国へ会いにいく、甥たちと妹とを、自分が愛していると認めることを恥じなかった。自分がまだ若いころ死んだ両親のことを思い出すと悲しくなることを、はっきり認めていた。夕方五時ごろ静かに鳴り響く、その界隈の、ある鐘の音を、何ものよりも愛していると自認することをいとわなかった。しかも、そのくせ、そんな単純な感動を描き出すためにさえ、ごくわずかの言葉も彼にとって数限りない苦労を必要とした。ついには、この困難が彼の最大の心配ごととなってしまった。「ほんとに、先生」と、彼はいっていた。「なんとかしてうまくいい表わすことを覚えたいもんだと思いますよ」。彼はリウーに会うたびごとに、その話をもちだすのであった。

きわめてよく知っていること、しかしもちろん、それを公に認めるとなれば仮借のない処置をとることを余儀なくされるであろうということ、を指摘した。結局その点が同僚たちをしりごみさせているものであることは彼も承知しているし、したがって彼らの平穏のために、それがペストでないと結構認めてもいいつもりである。知事は興奮し、そして、いずれにしても、それはいい議論の仕方ではないと公言した。

「肝心なことは」と、カステルはいった。「こういう議論の仕方がいいとかなんとかいうことじゃない。それを聞いて、みんながよく考えてみるということです」

リウーが沈黙していたので、人々は彼の意見を求めた——

「要するにチフス性の熱病ですが、しかしリンパ腺腫脹と嘔吐を伴います。私はリンパ腺腫の切開をやってみました。で、それによって分析試験を要請することができたわけですが、分析の結果、試験所では肥大したペスト菌が認められるようだといっています。遺漏のないように、ひとついっておかねばならぬことは、しかしその菌特有の変化のあるものは、古くからの記述と必ずしも一致していないのです」

リシャールはその点が躊躇の余地のあることを強調し、少なくとも、数日来開始された一連の分析の統計的な結果を待つべきであろうといった。

「ある細菌が」と、ちょっと沈黙があった後、リウーがいった。「ある細菌が三日の間に脾臓の容積を四倍にも肥大させ、腸間膜リンパ腺にオレンジ大の容積と粥ぐらいの堅さをもたらすとしたら、事態はまさに躊躇を許さないのです。伝染の中心は刻々拡大しつつあります。病毒のこの

驚きようでね。どうしてもパリから取寄せなきゃなりません」

「長くかからなきゃいいがね」

「電報をうっときましたよ、もう」とリウーは答えた。

知事は愛想がよかったが、しかし神経質になっていた。

「さあ、始めましょうか、皆さん」と、知事はいった。「私からかいつまんで事態をお話しますかな」

リシャールは、それは無用だと考えていた。医師たちは事態は知っているのである。問題はただ、いかなる処置をとることが適当であるかをはっきりさせることであった。

「問題は」と、カステル老人がむきつけにいってのけた。「問題はそれがペストであるかどうかを知ることだ」

二、三の医者は叫び声をあげた。ほかの人々はちょっと迷っている様子であった。知事はといえば、これはいきなりとび上がり、機械的に戸口のほうを振向いて、まるでその扉が、この途方もない言葉の、廊下に広がるのをたしかに防いでくれたか、確かめようとでもする様子であった。リシャールは、自分の意見では、冷静を失ってはならぬと思う、と宣言した——これは鼠蹊部の併発症を伴う熱病であるということ、それがいいうるすべてのことであって、なにしろ仮説というものは、科学においても実生活のなかでも、つねに危険なものだから。カステル老人は、泰然として黄ばんだ口髭の先をかんでいたが、はっきり澄んだ眼をリウーのほうへあげた。それから、いかにも好人物らしい視線を一回のほうへ向けて、自分はそれがペストであることは

ために、ちゃんと知事というものが置かれているんです」
「それはそうです」と、知事はいった。「しかし、私としては、それがペストという流行病であることを、皆さんが公に認めてくださることが必要です」
「われわれがそれを認めなかったとしても」と、リウーはいった。「それは依然として市民の半数を死滅させる危険をもっています」
リシャールが、幾分神経をいらだたせた調子で、口をはさんだ。
「ありていにいえば、リウー君はペストだと信じているんだ。さっきの症候群の説明ぶりがそれを証明してるよ」
リウーはそれに答えて、自分は症候群などを説明したのではない、自分の見たままを説明したのだ、といった。そして自分の見たものは、リンパ腺腫であり、斑点であり、錯乱性の高熱であり、それが四十八時間以内に死をもたらすのだ。そもそもリシャール氏は、この流行病が厳重な予防措置を用いずして終息するだろうと断言する責任をとってもいいというのか？
リシャールはためらい、じっとリウーの顔を見た——
「ほんとうのところ、君の考えをいってくれたまえ。君はこれがペストだと、はっきり確信をもってるんですか」
「そいつは問題の設定が間違ってますよ。これは語彙の問題じゃないんです。時間の問題です」
「君の考えは」と、知事がいった。「つまり、たといこれがペストでなくても、ペストの際に指定される予防措置をやはり適用すべきだ、というわけですね」

伝播の具合から見れば、もしこれが阻止されないとすると、二カ月以内に全市民の半数が死滅させられる危険があります。したがって、諸君がこれをペストと呼ぶか、あるいは知恵熱と呼ぶかは、たいして重要なことではありません。重要なことは、ただ、それによって市民の半数を死滅させられることを防ぎとめることです」

リシャールは何ごとも暗いほうにばかり考える必要はないし、だいいち、患者の身内の人々がまだ無事である以上、伝染ということも証明されたわけではない、という意見であった。

「しかし、ほかの人たちが死んでますからね」と、リウーは指摘した。「それにもちろん、伝染は決して絶対的なものじゃありません。もしそうでなかったら、それこそ無限の数学的増加となり、電撃的な人口減少を来たすところです。暗いほうにばかり考えるとかなんとかいうことじゃありません。つまり警戒措置を講ずることです」

リシャールは、しかし、事態は結局つぎのように要約されると考えて、こう指摘した――この病を終息させるためには、もしそれが自然に終息しないとしたら、はっきり法律によって規定された重大な予防措置を適用しなければならぬ。そうするためには、それがペストであることを公に確認する必要がある。ところが、この点に関して確実性は必ずしも十分でないし、したがって慎重考慮を要する、と。

「問題は」と、リウーは主張した。「問題は、法律によって規定される措置が重大かどうかということじゃない。それが、市民の半数が死滅させられることを防ぐために必要かどうかということです。あとのことは行政上の問題ですし、しかも、現在の制度では、こういう問題を処理する

う証拠を引きだすことは困難であった。処置は峻厳なものではなく、世論を不安にさせまいとする欲求のために多くのものを犠牲にしたらしかった。法令の前書には、事実、つぎのように告示されていた――はたして伝染性のものであるか否かはまだなんともいえないが、悪性の熱病の若干例がオラン市区に発生した。これらの症例は、実際に不安を感じさせるほどには顕著な特徴を示していないし、市民が冷静を保ちうるであろうことは疑いをいれない。それにもかかわらず、そして何びともよく理解しうるに違いない用心深い趣旨から、知事は若干の予防的措置を講ずることにした。規定どおり正確に理解され、実行されれば、これらの措置は流行病のあらゆる脅威をたちどころに阻止しうるていのものである。したがって、知事たる者の努力に対し、市民諸君が最も献身的な協力を寄せてくれるであろうことは、知事としていささかも疑わぬところである。

ビラにはそれに続いて総括的な措置が告示されており、下水に毒ガスを注入する方法による科学的な鼠の駆除とか、水の供給に対する厳重な警戒とかいう項目がそのなかにあった。市民に対しては極度の清潔さを奨励し、最後に、蚤の保持者は市の無料診療所に出頭するように勧告してあった。一方、医者の診断があった場合は、家族のものはこれを義務的に申告し、その病人を市立病院の特別病室に隔離することに同意しなければならないことになっていた。これらの病室は、それにまた、最小限度の期間内に最大限度の治癒の機会をもって患者を看護できるよう設備されているのであった。幾つかの付記条項では、病人の部屋と運搬の車とに強制的な消毒の義務が課されていた。その他の点については、近親者に衛生上の警戒を守るよう勧告するにとどめて

「どうしても私の考えを、とおっしゃるんでしたら、いかにもそれが私の考えです」

医者たちは相談し合い、リシャールが最後にこういった――

「つまりわれわれは、この病があたかもペストであるかのごとくふるまうという責任を負わねばならぬわけです」

この言いまわしは熱烈な賛意をもって迎えられた。

「これは君の意見でもあるわけですね、リウー君」と、リシャールは尋ねた。

「言いまわしは、私にはどうでもいいんです」と、リウーはいった。「ただ、これだけはいっておきたいですね――われわれはあたかも市民の半数が死滅させられる危険がないかのごとくふるまうべきではない、と。なぜなら、その場合には市民は実際そうなってしまうでしょうから」

満場色をなすうちにリウーは退席した。それからしばらくして、揚げ油と小便のにおいのする場末の町で、鼠蹊部は血みどろになり、死のうめきをあげている一人の女が、彼のほうへ身を向けていた。

会議の翌日、熱病はさらにまたちょっとした進展を示した。この熱病のことは新聞にまで出たが、しかしそれも軽い扱い方で、新聞はそれについて二三言及する程度で満足したのである。翌々日になると、それでもとにかく、県庁が市内の最も目だたないすみずみに迅速に貼りだした小さな白いビラを、リウーは読むことができた。このビラから、当局が事態を正視しているとい

すべてそういうことが、グランによれば、だいぶ変ってきたのである――

「どういったらいいか、とにかくまあ、そんな感じがするんですがね、世間の人たちと仲直りしようと心掛けているっていうか、世間みんなを自分の味方にしたがってるっていうか。私にもよく話しかけて、いっしょに外へ誘ったりしますし、こっちもそうしょっちゅう断わってばかりはいられませんしね。それに、私には興味のある人物ですし、しかもとにかく、命を救ってやった人間ですから」

あの自殺未遂事件以来、コタールのところにはもう一人の来客もなかった。街なかや店屋で、彼はあらんかぎりの好感を得ようと努めた。こんなにも優しさをこめて食料品屋に話しかけ、こんなにも興味をもってたばこ屋の内儀の話に耳を傾けたものはないくらいであった。

「そのたばこ屋の内儀っていうのは」と、グランは説明した。「それこそまったくの悪性ものなんです。私はそうコタールにいったんですが、コタールが答えるには、それは私が間違っている、あの女にもいいところがあるし、そいつを見つけだすことを知らなきゃだめだ、というんです」

さらに、二、三度などは、コタールは市中の豪奢なレストーランやカフェにグランを連れていった。実際、彼はそういうところに足しげく出入りしはじめていた。

「こういうところだと気持がいいんでね」と、コタールはいっていた。「それに、まわりがみんな感じのいい人たちばかりだし」

グランはその店の人々のコタールに対する特別な注意ぶりに気がついたが、コタールが莫大なチップを置いていくのを見て、その理由がわかった。コタールは、それと引きかえに人々が示し

あった。

リウーはくるりとビラからきびすを返し、ふたたび自分の診療室へ向って歩きだした。ジョゼフ・グランが彼を待っていたが、彼の姿を見るとまたしても両手をあげた。

「うん、わかってる」と、リウーはいった。「数字が上昇してるんでしょう」

前の晩、十人ばかりの患者が市内で斃れていた。リウーはグランに向って、おそらく今晩また会えるだろう、コタールを訪問に行くつもりだから、といった。

「それはいいことですね」と、グランはいった。「きっと喜びますよ。なにしろ、あの人も変りましたから」

「そりゃまたどういうんです？」

「人付き合いがよくなってきました」

「そうじゃなかったんですか、これまでは」

グランはためらった。コタールは人付き合いが悪かったとはいえなかった。そういってしまっては正しくないことになる。つまり自分ひとりに閉じこもった、沈黙がちな人間で、ちょっと野猪という感じの男であった。その居室と安レストランと、そしてかなり謎に包まれたときどきの外出と――これがコタールの生活のすべてであった。表向きは、酒とリキュール類の代理販売業者となっていた。たまに、顧客らしい二、三人の男の来客があった。晩にはときどき、家の向い側にある映画館に行く。グランがおまけに気がついたところでは、コタールは好んでギャング映画を見るらしかった。いかなる場合にも、この男はひとりを好み、人を警戒していた。

ていく彼の姿をただ茫然とながめていた。

その後、もっとも、グランはまだほかにもコタールの性格の変化についてリウーに報告することになった。コタールはそれまでいつもきわめて自由な意見の持主であった。「大はつねに小を併呑する」という彼のお得意の文句が、よくそれを証明していた。ところが、しばらく前から、彼はオランの穏健派の新聞しか買わなくなり、しかもそれを公衆の場所で読むことにある衒いをもっているように思わざるをえないくらいであった。同様にまた、床を離れられるようになってから二、三日して、彼は、郵便局へ行こうとしていたグランに、遠方にいる妹に毎月送る百フランの為替をついでに送ってくれるように頼んだことがある。ところが、グランがいよいよ出かけるときになって——

「二、百フラン送ってください」と、コタールは頼んだ。「こいつは妹にとって意外な喜びでしょう。自分のことなんか考えてくれることはないと思ってるんですからね。ところが、事実は、私は非常に妹を愛してるんです」

最後に、彼はグランと奇妙な会話をしたことがある。グランは、自分の毎晩没頭しているささやかな仕事のことで、好奇心をそそられたコタールの質問に答えなければならなかった。

「なるほど」と、コタールはいった。「つまり、本を書いてるんですね」

「まあ、そういってもいいんですが、それよりももうちょっと複雑なんです」

「まったく」と、コタールは叫んだ。「私もやりたいな、あんたみたいに」

グランが驚いた顔をしたので、コタールは口ごもりながら、芸術家になるということによって

てくれる慇懃さにきわめて敏感のようであった。ある日、給仕頭が彼を送り出してオーヴァーを着せかけてくれたときなど、コタールはグランにこういったりした――

「まったく気のいい男でね。あれならきっと証人になってくれるな」

「証人って、どういう？」

コタールは口ごもった。

「つまり、なんですよ、私が悪い人間じゃないっていう……」

もっとも、彼にはときどき気分の急変があった。ある日、食料品屋がいつもほど愛想よくしなかったときなど、彼はとてつもなく腹をたてたまま家へ帰ってきた――

「ほかのやつらとよくなっちまいやがって、あの下司おやじ」と、彼はしきりにいっていた。

「ほかの誰と？」

「誰でもみんなですよ」

グランはさらに、たばこ屋の内儀のところで奇妙な場面に立ち会ったことがあった。活潑な会話の途中で、たばこ屋の内儀はアルジェで評判になった最近のある逮捕事件（訳注『異邦人』参照）について話した。それはある若い商店員が海岸で一人のアラビア人を殺した事件であった。

「こういう悪党どもはみんな牢屋へ入れちまったら」と、たばこ屋の内儀はいった。「まじめな人たちも安心して暮せるでしょうよ」

しかし、内儀は相手の突然の興奮ぶりに中途で話しやめなければならなかった。コタールは一言の断わりもなく、いきなり店の外へ跳び出してしまったのである。グランと内儀は、逃げ去っ

「いや」と、カステルはいった。「僕は君とは意見が違うね。ああいうやつらはいつでもちょっと変ったところがあるもんさ。しかし、根はつまりおんなじものなんだ」

「つまり、そう推定なさるわけですね、少なくとも。事実上、われわれはなんにも知らないんですから、そんな点についても」

「むろん、僕の推定さ。だが、誰も彼もまだその程度のことしか知らないんだからね」

その日一日じゅう、リウーは、ペストのことを考えるたびに襲ってくるちょっと頭のくらくらするような気持が、だんだんひどくなってくるのを感じた。とうとう、彼は自分が恐怖にとりつかれていることを認めた。彼は人のいっぱいはいっているカフェに二度もはいった。彼もコタールと同様に、人間的な温かさに触れたい欲求を感じていたのである。彼はそれを愚劣なことだと思ったが、しかしそのおかげでコタールを訪ねる約束をしていたことを思い出した。

夕方、リウーが行ってみると、コタールは食堂になっている部屋のテーブルの前にいた。彼がはいっていったとき、テーブルの上には一冊の探偵小説が開いたままになっていた。しかし、夕方ももう遅くなっていたし、おそらく、濃くなってくる暗闇のなかで本を読むことも困難なはずであった。コタールは、むしろつい今しがたまで、じっと腰掛けて、薄暗がりのなかでもの思いにふけっていたに違いなかった。リウーは、体の調子はどうかと尋ねた。コタールは腰を下ろしながら、ぶつぶつつぶやくように、体の調子はいいが、誰も自分にお節介などする者はないと安心していられたらもっと調子がよくなるのだが、といった。リウーは、人間はいつも一人っきりでいるわけにはいかないことを考えてみるようにいった。

ずいぶんいろんなことが都合よく片付くに違いないといった。

「どうしてです?」と、グランは尋ねた。

「つまりですね、芸術家はほかの者以上の権利をもってるからですよ。誰でもそれは承知してますからね。ひと以上のことが許されるんですよ」

「なに」と、ビラの貼りだされた朝、リウーはグランにいった。「なに、鼠の事件で頭がどうかしただけですよ、ほかにも大勢そういうのがあるから。それともまた、熱病がこわくでもなったか……」

グランは答えた——

「私はそう思わないんですがね、先生。もし私の意見をいえとおっしゃるんなら……」

鼠駆除の車が騒々しい排気音をたてて窓の下を通り過ぎた。リウーは、自分の言葉が相手に聞きとれるようになるまでちょっと沈黙して、それから気のない調子でグランの意見というのを尋ねた。相手は重々しく彼の顔を見つめて——

「あれは、何かしら心にとがめることのある人なんですよ」といった。

リウーは肩をすくめた。いつかの警官の言いぐさではないが、余計なことにまでかかり合ってる暇はないのだ。

午後に、リウーはカステルとちょっと協議をした。血清はまだ来ていなかった。

「それに」と、リウーは尋ねた。「その血清がはたして役にたちますかね。今度の菌はひどく変ってますよ」

さまざまのささやきや、焼肉の香や、にぎやかな若者たちに占領された街頭に次第にあふれてくる陽気でふくよかな解放のさざめきなどを運んできた。夜の暗さ、姿の見えない船のけたたましい叫び、海と流れる群衆とから立ち上がるざわめきなど――リウーのよく知っている、そしてかつては好きだったこの時刻が、今日は彼の知っているすべてのことのせいで、重くのしかかってくるような気がした。

「あかりをつけてもいいですか」と、彼はコタールにいった。

室内が今や明るくなってしまうと、この小柄な男は目をしばたたかせながらリウーの顔を見つめた――

「どうでしょう、先生。もし私が病気になったら、先生の病室に入院させてくださるでしょうか」

「そりゃかまいませんとも」

コタールは、すると、診療所や病院にいたものが誰か逮捕されたことがあるかと尋ねた。リウーはそれに答えて、そういうこともあったが、しかしすべては病人の容体いかんによるといった。

「私は」と、コタールはいった。「私は先生を信頼しています」

それから彼は、リウーの自動車で市中へ連れていってくれないかと頼んだ。

市内の中央のあたりでは、もう街頭の人影も減って、燈火もまばらになっていた。子供たちがまだ戸口の前で遊んでいた。コタールに頼まれると、リウーはそういう子供たちの一団の前に車を止めた。子供たちはしきりに叫び声をあげながら石けりをやって遊んでいた。ところが、その

「いや、そんなことじゃないんです。私がいうのは、お節介をして、いやなことをもってくる連中のことですよ」

リウーは黙っていた。

「何も私のことじゃないんです、それははっきりお断わりしておきます。しかし、じつはこの小説を読んでたんですが、一人の不幸な男が、ある朝、突然逮捕されるんです。お節介をされてたのに、男のほうじゃなんにも知らなかったわけです。お役所では男のことを話し合い、カードにその名前を書きこんでたんです。これが、いったい正当なことだと思いますか。一人の人間に対して、こんなことをする権利があると思いますか」

「場合によりますね」と、リウーはいった。「ある意味においては、絶対にそんな権利はありませんよ、実際。しかし、そんなことは二の次です。あんまり長い間、閉じこもってちゃだめですよ。外に出かけるようにしなきゃ」

コタールは急に興奮してきた様子で、自分はただそればかりしているし、もし必要なら、この界隈の人たちみんなが自分のために証人になってくれるだろう、といった。この界隈以外でも、交際相手はいくらでもあった。

「リゴーさんをご存じでしょう、建築家の？　あの人も私の友人なんです」

部屋のなかは闇が濃くなってきた。この場末町の街頭は活気づき、家の外ではほっとしたような、鈍い喚声が、街燈のついた瞬間を迎えた。リウーはバルコニーのところへ行き、コタールもそのあとに従った。近隣のすべての界隈から、この市内では毎夕のことであるが、軽い微風が、

合いをしたり、患者自身と言い争ったりすることだけで過されてしまった。リウーが、自分の職業をこれほど重苦しく感じたことはなかった。これまでは、患者は彼の仕事をしやすくしてくれ、彼に身をゆだねていた。今度はじめて、医者としての彼は、患者たちが隠しだてをし、一種警戒するような驚きをもって、病気の奥深く身を避けているのを感じた。それは一つの戦いであり、彼のまだ慣れていなかった戦いであった。そしてその夜十時ごろ、最後に往診にまわった例の喘息の爺さんの家の前に車が止ったときには、リウーは座席から腰を上げるのに骨が折れた。彼はしばらくそのままで、薄暗い街頭と、暗黒の空に明滅する星影とをながめていた。

喘息の爺さんは床のなかで起き上がっていた。呼吸もふだんより楽になった様子で、しきりにエジプト豌豆を選り分けながら、一方の鍋からもう一つの鍋に移していた。彼はいかにもうれしそうな顔つきでリウーを迎えた。

「で、なんですかい、先生、やっぱりコレラかね？」

「どこから聞いてきたんです、そんなことを？」

「新聞でさ。それにラジオでもそういってましたぜ」

「違うね。コレラじゃありませんよ」

「なにしろ」と、爺さんはひどく興奮した調子でいった。「えらくそんなふうな口ぶりですぜ、おえらがたの先生連は」

「本気にしないほうがいいな、そんなことは」と、リウーはいった。

彼は爺さんの診察を終り、そこで今、そのみすぼらしい食堂のまんなかに腰をおろしている。

なかで、ぺったりはりついた黒い髪をきちんと分け、汚れた顔をした一人の子供が、澄んだ、気おくれを感じさせるようなその目で、じっとリウーの顔を見つめた。リウーは目をそらした。コタールは歩道の上に下り立って、リウーと握手をかわした。彼はしゃがれた苦しそうな声でしゃべった。二、三度、うしろのほうを見まわしたりした。

「世間じゃ流行病のうわさをしてますが、いったいほんとうなんですか、先生」

「世間ってやつはいつでもうわさをするもんですよ。それが自然なことなんです」と、リウーはいった。

「まったく、そうですね。それに、十人も死亡者が出ると、もう、世界の終りって騒ぎだ。そんなことじゃないんですよ、今必要なのは」

モーターはもううなり声をたてていた。リウーは変速桿に手をかけていた。しかし彼は、相変らず重々しい静穏な顔つきで彼の顔を見つめつづけている子供のほうを、またながめた。すると突然、まるできっかけもなしに、いきなり子供は顔いっぱいに彼にほほえみかけた。

「いったいどういうことですかね、すると、今必要なのは？」と、子供のほうへほほえみ返しながら、リウーは尋ねた。

コタールはいきなり車のドアをつかんだと思うと、やがて逃げるように立ち去っていく前に、さながら泣くような狂おしげな声で、こう叫んだ――

「地震ですよ、それこそものすごい地震……」

地震は起らず、翌日の一日はリウーにとって、市内の八方に車を飛ばして、患者の家族と話し

合わなかったものがいるんです」

「埋葬のほうは警戒してあるのかな」

「してないんです。僕はリシャールさんに電話をかけたんですがね――徹底的な措置をとらなきゃ、なんのかんのいってるだけじゃだめだって。病疫に対してそれこそ完全な防壁を築くか、さもなきゃ全然なんにもしないのもおんなじだって、いったんです」

「で、それで？」

「自分にはそうする権力がないっていう返事なんです。僕の意見では、こいつ、勢いを増してきますよ」

三日の間に、事実、二つの分館は満員になった。リシャールの信ずるところによれば、当局はある学校を接収して、予備の病院を準備しようとしているらしいということであった。リウーはひたすらワクチンを待ちながら、腺腫の切開を続けていた。カステルは古い書物をまた引っ張りだし、図書館に出かけては長時間腰を据えていた。

「鼠は、ペストか、あるいはそれに非常によく似た何かで死んだのだ」と、彼は結論を下した。「その鼠が数万の蚤をばらまいていたわけで、つまりこいつが、病毒を伝播するのだ――それこそ幾何級数的にね、もし早いとこ阻止しなければ」

リウーは沈黙していた。

ちょうどこの時期に、天候も定まったように思われた。太陽は最近の驟雨による水たまりの水をポンプのように吸いあげた。黄色い光線のあふれている晴れ渡った青空も、きざしはじめた暑

まったく、彼は恐ろしくなった。この一郭でも、明朝になれば十人ぐらいの患者が、リンパ腺腫のために身を折り曲げながら彼を待っているであろうことを、彼は知っていた。これまでわずかに二、三の病例において、腺腫の切開がやや好結果をもたらしたにすぎなかった。しかし、大多数のものにとってはそれは直ちに入院であり、そして入院ということが貧しい人々にとって何を意味するかを、彼は知っていた。「いやですわ、実験の材料にされたりするのは一と、ある患者の細君は彼にいったのであった。患者は実験の材料にはならないであろう。彼は死んでしまい、そしてそれっきりなのだ。施行された措置は不十分なもので、それはもう明瞭なことであった。例の「特別に設備された病室」に至っては、彼はその実状を知っていた――二つの分館病棟から大急ぎでほかの患者たちを移転させ、その窓を密閉し、その周囲に伝染病隔離の遮断線を設けたものである。流行病のほうで自然に終息するようなことがないかぎり、施政当局が考えているぐらいの措置では、とうていそれに打勝つことはできないであろう。

しかしながら、その晩も、公式の発表は相変らず楽観的であった。翌日、報知通信社は、県知事の措置は平静に迎えられ、早くも三十名ばかりの患者が申告された、と報じた。カステルはリウーに電話をかけてきた――

「幾床あるんだね、分館の収容能力は？」

「八十床です」

「むろん、三十名どころじゃないだろうね、市内の患者は？」

「こわがってる連中がいますし、それから、このほうがもっと多いんですが、まだ手続きが間に

される。患者の出た家々は閉鎖され消毒されねばならず、近親者は一定期間の予防隔離に服し、埋葬は市によって営まれ、その条件はいずれ発表されることとなった。一日遅れて、血清が飛行便で到着した。それは現在加療中の件数には間に合う量であった。が、もし病疫が蔓延するものとすれば、それでは不十分であった。リウーの電報に対して救急用のストックはもう切れてしまって、新たに製造に着手している、という返事が来た。

その間にも、近在の郊外という郊外から、春が市場にはいりこんできた。幾千の薔薇が、ずっと歩道に沿って、花売りたちの籠の中でしおれ、その甘ったるい香りが町じゅうに漂っていた。うち見たところ、何ひとつ変ったものはなかった。電車は相変らずラッシュアワーには満員であり、昼間は空っぽできたなかった。タルーは例の小男の老人を観察し、小男の老人は猫に唾をひっかけていた。グランは毎晩家に帰って、謎の仕事を続けていた。コタールはぐるぐる歩きまわり、予審判事のオトン氏は相変らず動物園のような一団を連れて歩いていた。喘息の爺さんは例の豌豆の入れ替えをやっていたし、平静でいかにも関心の強そうな、新聞記者ランベールの姿もときどき見かけられた。夜になると同じ群衆が街頭をうずめ、映画館の前には行列が続いた。それに、流行病も衰退したように思われ、数日の間に、わずか十名ばかりの死亡者を数えただけであった。それから、突如として、それはまた鰻のぼりに上昇した。死亡者の数がふたたび三十台に達した日、ベルナール・リウーは、「すっかりおびえちまったんだね」といいながら知事が差出した、公電をながめていた。電文にはこうしるされていた――「ペストチクタルコトヲセンゲンシ シヲヘイサセヨ」

熱のなかでの飛行機のうなりも、季節のあらゆるものが晴朗の思いをそそった。しかしながら、この四日間に、熱病は四段の驚異的な躍進を示した――死亡十六名、二十四名、二十八名、そして三十二名。四日目には、ある幼稚園内に補助分院の開設が報ぜられた。これまでは、不安をずっと冗談に紛らしてきた市民たちも街頭で見受ける姿がうちしおれ、ひっそりとしてきたように思われた。

リウーは思い切って知事に電話をかけた――

「今の措置では不十分です」

「私の手もとにも数字が来てますがね」と、知事はいった。「実際憂慮すべき数字です」

「憂慮どころじゃありません。もう明瞭ですよ」

「総督府の命令を仰ぐことにしましょう」

リウーはカステルの見ている前で電話を切った――

「命令なんて！　それこそよっぽど頭を働かさなきゃならないときなんだが」

「血清は、ところで？」

「今週中に来るでしょう」

県庁は、命令を要請するために植民地総督府の所在地に送るべき報告書の作成を、リシャールを通じてリウーに依頼してきた。リウーはその報告書に臨床的な記述と数字とを記載した。同じ日に、約四十名の死亡者が数えられた。知事は、ご当人のいいぐさによれば、みずからの責任において、直ちに明日から所定の措置をさらに強化することにした。申告の義務制と隔離とは続行

のが、閉鎖は県知事布告の発表される数時間前に行われ、そして当然のことながら、個々の特例を考慮することは不可能であった。この病疫の無遠慮な侵入は、その最初の効果として、この町の市民に、あたかも個人的感情などもたぬ者のようにふるまうことを余儀なくさせた、といっていい。布告が実施された日の最初の数時間というもの、県庁は陳情者の群衆に攻めたてられ、彼らは電話口あるいは係員の前で、どれもこれも切実な、そして同時に、どれもこれも検討不可能な、それぞれの事情を申したてるのであった。実際のところ、われわれが、自分たちはまったく妥協の余地のない状態のなかにあり、「折れ合う」とか「特典」とか「例外」とかいう言葉はまったく意味がなくなっていることを納得するまでには、多くの日数を要したのである。

手紙を書くというささやかな満足さえ、われわれには与えられていなかった。事実、一方で、この町はもう通常の交通手段では国内の他の部分と連絡できなくなっていたが、さらにまた、新たな布告によって、手紙が病毒の媒介となることを防ぐために、いっさいの信書の交換を禁止されてしまったのである。初めのころは、特権的な地位にある二、三の人々は、市の出口で衛兵所の歩哨を抱きこんで、外部への音信を通させてもらうことができた。それもしかし、病疫の初期の、衛兵たちも同情の衝動に負けてしまうことを自然なことと心得ていた時期だけのことであった。しかし、しばらく時がたって、同じ衛兵たちが事態の重大さを十分のみこんでしまうと、その結果がどこまで及ぶか予想もできない、そういう責任をとることを拒むようになった。初め許されていた市外電話も、そのため公衆電話と回線の非常な混雑を引起すに至って、数日間全面的に停止され、次いで、死亡、出生、結婚というような、いわゆる緊急な場合だけに厳重に制限さ

2

この瞬間から、ペストはわれわれすべての者の事件となったということができる。それまでのところは、これらの奇怪な出来事によって醸された驚きと不安にもかかわらず、市民各自はふだんの場所で、ともかく曲りなりにもめいめいの業務を続けていた。そしておそらく、この状態は続くはずであった。しかし、ひとたび市の門が閉鎖されてしまうと、自分たち全部が、かくいう筆者自身までも、すべて同じ袋の鼠であり、そのなかでなんとかやっていかねばならぬことに、一同気がついたのである。そういう次第で、たとえば、愛する者との別離というようなきわめて個人的な感情が、すでに最初の数週から、にわかに一市民全体の感情となり、そして恐怖心とともに、この長い追放の期間の主要な苦痛となったのであった。

市門の閉鎖の最も顕著な結果の一つは、事実、そんなつもりのまったくなかった人々が突如別離の状態に置かれたことであった。母親と子供たち、夫婦、恋人同士など、数日前に、ほんの一時的な別れをし合うつもりでいた人々、市の駅のホームで二言三言注意をかわしながら抱き合い、数日あるいは数週間後に再会できるものと確信し、人間的な息かしい信頼感にひたりきって、この別離のため、ふだんの仕事から心をそらすことさえ、ほとんどなかった人々が、一挙にして救うすべもなく引離され、相見ることも、また文通することもできなくなったのである。という

気になったものであった。数日の考慮ののち、県庁は肯定をもって答えた。ただし、それに説明を加えて、復帰者はいかなる場合にもふたたび町から出ることはできず、帰ってくるのは自由であるが、出ていくのはそうでないということを明確にした。それでもまだ、若干の家庭――もっともきわめて少数ではあったが――は、事態を軽率に判断し、身内のものに再会したいという当面の欲求をあらゆる用心よりも先にたてて、相手にこの機会を利用することを勧めたのであった。しかし、きわめてすみやかに、ペストの虜となっていた人々は、それによって近親者を危険にさらすことを理解し、あきらめてこの別離を忍ぼうとした。病勢の最も深刻化したときには、人間的な感情のほうが、苦しみさいなまれる死に対する恐怖よりも強かったという例は、ただ一件しか見られなかった。それも、人々が期待しそうな、愛のため苦痛を越えて互いに引寄せられる恋人同士の場合ではなかった。それはほかならぬ、もう長年結婚生活を続けてきた、老医カステルとその夫人の場合であった。カステル夫人は、疫病の二、三日前にある近くの町へ出かけていたのである。それは別に、模範的な幸福の見本を世間に提供するていの家庭でもなかったし、筆者などはあらゆる確率から見て、この夫婦はこれまで自分たちの結合に満足していたかどうかお互いに確かでなかったのだ、といいうるものをもっている。ところが、このだしぬけの、しかも長びいた別居は、自分たちはお互いに離れては暮せないということ、そして突如明るみに出されたこの真相に対しては、ペストなど何ほどのものでもないということを、互いに確信させるに至ったのであった。

この場合は一つの例外であった。大多数の場合、別離は、もう明白に疫病の終るまで終らない

れることとなった。そこで、電報がわれわれに残された唯一の手段であった。理解と愛情と骨肉によって結ばれていたもの同士が、結局、わずか十語の電文の大文字のなかに、かつての心の繋がりの徴を捜さなければならぬ仕儀となった。そして、事実上、電報に使用しうる文句というものはたちまち使い尽されてしまうものであるから、長い共同生活とか、あるいは悩ましい情熱とかいうものも、結局は「コチラブジ アンジテイル ゲンキデ」というような常套句の定期的な交換に急速に転化していったのである。

われわれのうちでもある人々は、それでもなお手紙を書くことに執着し、外部と文通するために、ひっきりなしにさまざまの工夫を案じるのであったが、結局いつも当てはずれを確認する結果に終った。たといまた、こっちの案出した方法の幾つかが成功したとしても、返事が来ないので、それについてはなんにもわからなかった。何週間もの間、そこで、われわれはたえず同じ手紙を書き直し、同じ情報、同じ訴えを写し直すことになってしまい、そのあげく、ある期間が過ぎると、最初はわれわれの心臓から血のしたたるような、なまなましさで出てきた言葉も、すっかりその意味が失われてしまうのであった。われわれはそこでただ機械的にそれを写し直しながら、それらの死んだ文言を通じて、われわれの困難な生活の表徴を見せようと努めていたのである。そして最後には、この得るところのない執拗な独白、この無味乾燥な壁との対話よりは、電報の紋切型の呼びかけのほうがまだしもだと思われたのであった。

もっとも、数日後に、何びとも この町から出られる望みはないことが明らかになったとき、人人は、病疫の始まる前に出ていった人たちの帰還は許されるかどうかということを、尋ねてみる

そして筆者は、筆者自身がそのおり感じたことはつまりわが市民の多くの人々と同時に感じたことであるから、それをすべての人々の名においてここに書きしるすことができると信じる者である。実際、まさにこの追放感こそ、われわれの心に常住宿されていたあの空虚であり、あの明確な感情の動き——過去にさかのぼり、あるいは逆に時間の歩みを早めようとする不条理な願いであり、あの突き刺すような追憶の矢であった。かりに、ときおりわれわれが想像のおもむくままに任せて、帰宅の呼鈴の響き、あるいは階段を上がる聞きなれた足音を楽しみに待ってみたところで、そしてその瞬間、汽車が動かなくなっていることをみずから忘れる気になり、そこで普通夕方の急行で来た旅客がこの界隈にたどり着く時刻に、ちゃんと都合をつけて家にいるようにしてみたところで、もちろん、そういう遊びは長く続けていられなかった。必ずある瞬間がやってきて、汽車は到着しないということにわれわれははっきり気がつくのである。そのとき、われわれは、われわれの別離が続く運命にあり、時間というものに対してうまく折合いをつけるよう努めねばならぬことを知る。そこでわれわれは、結局現在の囚われの境遇をふたたび完全に認め、過去のことだけに追いこまれてしまい、そして、かりにそのうちの一、三の人々が未来に生きたいという誘惑を感じていたとしても、想像を心の頼りにしようとするものが、結局そのためにこうむるところの傷の痛みを感じて、少なくともできうるかぎりすみやかに、それをあきらめてしまうのであった。

特に、市民一同は、別離の期間を計算するという、あるいは生じえたかもしれぬ習慣を、いち早く、公開の場所においてさえ、捨ててしまった。それはなぜかといえば、かりに最も悲観的な

わけであった。そして、われわれすべての者にとって、われわれの生活をなしていた感情、しかもわれわれが十分知り尽していると思っていた感情（オランの人々は、前にもいったが、単純な情熱の持主である）が、一つの新たな相貌を呈してきた。妻や恋人に最大の信頼をいだいていた夫や愛人たちが、みずから嫉妬深い男であることを発見した。愛情に軽薄であると自認していた男どもが、変らぬ誠実さを取りもどした。母親のそばで暮しながら、ろくにその顔をながめようともしなかった息子たちが、たえず思い出に付きまとう彼女の顔の皺の一筋に、あらゆる不安となつかしみを注ぐようになった。このだしぬけの、つなぎ目のない、将来の予想もつかぬ別離にわれわれはただうろたえさせられ、今なおきわめて近く、しかもすでにきわめて遠いその面影の思い出に抗するすべも知らぬ状態で、今やその思い出がわれわれの日々を占領していたのである。事実上、われわれは二重の苦しみをしていた――まず第一にわれわれ自身の苦しみと、それから、息子、妻、恋人など、そこにいない者の身の上に想像される苦しみと。

それも、ほかの事情のときであったら、市民たちも、もっと外面的で活動的な生活に、はけ口を見出すこともできたであろう。ところが、同時にまたペストは、彼らを閑散な身の上にし、陰鬱な市内を堂々めぐりするより仕方がなくさせ、そして来る日も来る日も空しい追憶の遊戯にふけらせたのである。なぜなら、当てもない散歩のおり、彼らは結局いつも同じ道を通ることになり、しかも、たいていの場合、こんな小さな町では、その道がちょうど、別の時代に、いまいないその人といっしょに歩きまわった道だという結果になるのであった。

そういうわけで、ペストがわが市民にもたらした最初のものは、つまり追放の状態であった。

彼らはこのようにして、なんの役にもたたぬ記憶をいだいて生活するという、すべての囚人、すべての流刑者の深刻な苦しみを味わった。彼らがたえず回想していたその過去さえ、ただ悔恨の味わいをもつばかりであった。事実、彼らはできればその過去に、彼らが現在待っている彼あるいは彼女といっしょに、まだできるうちにしておかなかったことを残念に思う、いっさいの事柄を付け加えたかったのであり――同様にまた、自分たちの囚われの生活のあらゆる情況、比較的幸福な情況にさえも、彼らはその不在の人々を立ち混じらせていたのでもあるが、したがって自分たちの現在の状態は彼らを満足させることができなかった。みずからの現在に焦燥し、過去に恨みをいだき、しかも未来を奪い去られた、そういうわれわれの姿は、人類の正義あるいは憎しみによって鉄格子のなかに暮させられている人々によく似ていた。結局のところ、この堪えがたい休暇から免れる唯一の方法は、想像によってふたたび汽車を走らせ、じつは頑強に鳴りをひそめている呼鈴の繰返し鳴る響きで、刻々の時間を満たすことであった。

しかし、流刑といっても、大多数の場合、それは自宅への流刑であった。そして筆者は、世間一般並みの流刑しか経験しなかったのであるが、しかし、たとえば新聞記者ランベールその他の人々のように、たまたまペストにつかまって市内に抑留された旅行者として、そばへ帰れなくなった相手からも、自分の故郷だった国からも、共に隔てられてしまったという事実によって、別離の苦痛がさらに増大されているような、逆の場合も見落すわけにはいかない。全般的な流刑のなかでも、彼らは特に重い流刑囚であり、時間というものによって、みんなと同じように、時間本来の焦燥感をかきたてられると同時に、また空間にも縛られて、ペストに冒されたその仮の住居

人々がそれをたとえば六カ月間と予定して、来たるべきその月々のあらゆる苦渋を、あらかじめ味わい尽し、この試練の高さにまで辛うじて勇気をふるい起し、そんな長い日々の継続の上に引伸ばされる、その苦悩の頂上にも弱められないでいようとして、最後の力をふりしぼっていたとしても、そのとき、どうかすると、ふと出会った友達とか、新聞に示された意見とか、束の間の疑い、あるいは突然の洞察などが、結局のところ、この病疫が六カ月以上は続かないというなんの理由もないし、ひょっとすると一年、あるいはもっとかもしれないという考えを、彼らにいだかせるのである。

そうなったとき、彼らの勇気、意志、そして忍耐の崩壊は実に急激で、もう永久にその穴底からはい上がれないだろうと感じられるほどであった。彼らは、したがっていて心を抑えて、自分たちの解放の期限を決して考えまいとし、未来のほうへは振向くまいとし、そしてつねに、いわば月を伏せたままでいようとした。しかし、当然、この用心深さ、苦痛をごまかそうとし、戦闘を拒否するためにみずから警戒を解こうとするこのやり方からは、思わしい結果はえられなかった。彼らは、いかなることがあろうと生じさせたくないその崩壊を避けると同時に、また事実上、来たるべき会合のイメージのうちにペストを忘れうるという、結局のところかなり頻繁な瞬間を、みずから奪われることになったのである。そしてそのために、その深淵と山頂のちょうど中間に船を乗り上げて、彼らは生きているというよりもむしろ漂流しつつ、方向もない日々と、うるところのない思い出のまにまに、みずからの苦痛の大地に根をおろすことをうべなった暁にのみ生気を生じうるのであろうところの、さまよえる亡霊となり果てていたのであった。

ていた、自分の軽率さを責めるのであった。もうこの瞬間からは、彼らにとって、自分たちの愛情の跡をさかのぼり、その不完全な点を吟味することは容易であった。普通のときなら、われわれはみんな、はっきり意識するかどうかは別として、それ以上の愛はありえないというような愛はないことを知っており、しかも、自分たちの愛が月なみの域を脱しないことを、多少の幸はあれ、ともかく平静に受けいれたものである。しかし、思い出というものはもっとわがままなものである。そして、まことに筋の通った次第というものであるが、外部からやって来、全市を襲ったこの不幸は、われわれとして憤慨すればしえたような、不当な苦しみばかりをもたらしたのではなかった。それはまたわれわれをそそのかして、みずからわれわれ自身を苦しめさせ、むくしてみずから苦悩をうべなわせたのである。これも、病疫特有の、注意をそらし、事態を紛糾させるやり口の一つであった。

このようにして、各人はその日常しに、そしてただ独り天空に対しつつ、生きることをうべなわねばならなかった。一般のこの見捨てられた状態は、長い間には結局人々の性格を鍛えあげるべき性質のものであったが、しかし最初はまず人々をつまらぬことに動かされる浮薄な人間にした。たとえば、市民のなかのある連中の場合など、彼らはそこでまた別の奴隷状態に陥り、太陽と雨によって意のままに支配される人間になってしまった。彼らの様子を見ていると、生れてはじめて、それもじかに、その日の天気から受ける感じというものを感じたかのようであった。単に金色の光線が訪れたというだけでいかにもうれしそうな顔つきをしているかと思うと、雨の日にはその顔面にも想念にも厚い帷がおおいかぶさるのであった。彼らも数週間前には、こんな弱点

と見失われた故郷とを隔てる壁にたえず突き当っていたのである。一日じゅうあらゆる時刻に埃っぽい街なかをさまよい歩く姿が見られたのは、おそらく彼らに違いないし、彼らのみが知っている夕景色と、そしてまた故郷の朝とを、そうやって沈黙のうちに呼び求めていたのである。そうしては、燕の飛びかいとか、夕日の残照とか、ときおり人気のない街上に太陽が落している奇妙な光線とかいうような、量りようもない徴や、つかまえどころのない音信にも、その苦悩を慕らせるのであった。つねにあらゆるものから救ってくれるこの外界というものに対しても、彼らはそれには目を閉じて、ただひたすら、あまりにもなまなましいみずからの空想をいつくしみ、ある種の光線や、二、三の丘や、気に入りの木と、女たちの顔が、彼らにとってかけ替えのない風土を作っている土地について、力のかぎりそのイメージを追い求めていたのである。

最後に、特にはっきりと恋人たち——最も興味があり、また筆者はおそらくそれを語るに最も都合のいい位置にある、この人々についていうならば、彼らはさらにまた別の煩悶にも悩まされていたのであって、その一つとして後悔ということをあげておかねばならぬ。今度の事態は、事実、彼らにみずからの感情を一種熱病めいた客観性をもって考察することを可能ならしめた。そしてそういう機会に、彼ら自身の手落ちが彼らにもはっきり見てとれないことは、まれであった。それはまず、そばにいない相手の行為や動作を正確に想像することに困難を感じるという点に、最初のきっかけを見出した。そうなると、相手の時間の使い方について、現在自分がまったく無知だということが悔まれる。そして、それについてきいておくことを怠り、愛している者にとって、愛する相手の時間の使い方が、すべての喜びの源ではないと信じているようなふりをし

に翻訳されてしまうことが通例となったのである。わずかに、こういう代価を払うことによって、ペストの虜となった人々は門番の同情を、あるいは聞き手の関心をかちうることができたのであった。

しかしながら、そしてこれは最も重要な点であるが、こういう懊悩がいかに苦しいものであろうと、重いながらにうつろなこういう心をいだいていることがいかに重苦しくあろうと、これらの流刑囚たちは、ペストの第一の時期においては、たしかに恵まれた人々であったということができる。事実、市民が狂乱状態に陥りはじめたさいにさえ、彼らの思いはことごとく彼らの待っている人間のほうへ向けられていた。一般の憔悴のなかで、愛のエゴイズムが彼らを守ってくれ、そして彼らがペストのことを考えるとしても、それはつねにペストが彼らの別離を永久的なものにする危険があるという範囲においてであるにすぎなかった。こうして彼らは、疫病のただなかにさえ有効な気晴らしをもちこみ、それがどうかすると冷静と見なされかねないくらいであった。彼らの絶望が彼らを恐慌状態から救い、彼らの不幸には良い面もあったのである。たとえば、彼らの一人が病魔にたおれるようなことがあったとしても、それはほとんどつねに、彼らがそれを警戒する暇もないうちに起るのであった。亡霊を相手に続けていたその長い心のなかの会話から引っ張りだされたと思うと、彼らはそこでなんの中間状態もなく、いきなり大地の最も分厚い沈黙に投げこまれてしまう。彼らは何をする暇もなかったのである。

や没理性的な隷属状態に陥らないで済んでいたのであるが、それは彼らが世界に対してただ独りでなく、そして、自分といっしょに暮していた人間が、ある意味で自分の住む世界の前面に介在してくれていたためであった。これに反して、もうこの瞬間からは、彼らはむきつけに天の気紛れにゆだねられることとなり、すなわち、理由もなく苦しみまた希望をいだくこととなったのである。

こういう極度の孤独のなかでは、要するに何びとも隣人の助けを期待することはできず、めいめい自分一人でその屈託ごとに対しているばかりであった。かりにわれわれのなかの一人が、ふとしたはずみで、自分の感情上の何かのことを打明け、あるいは話そうと試みたとしても、相手のそれに対する返事は、どんな返事であろうと、たいていの場合、彼の心を傷つけるのであった。彼はそこで、その話相手と自分とは、同じことを話していなかったことに気がつくのである。彼のほうは、実際、長い反芻と苦悩の日々の奥底から語っているのであり、相手に伝えたいと思うイメージは、期待と情熱の火で長い間煮つめられたものである。これに反して相手のほうは、あり来たりの感動や市販の商品みたいな悲しみや、十把ひとからげの憂鬱などを心に描いているのである。好意的であろうと、反撥的であろうと、その返事はいつも的をはずれていて、結局あきらめるよりしようがなかった。あるいは少なくとも、沈黙が堪えがたく思われるような人人の場合など、他人が真の心の言葉を見つけ出せない以上は、彼らも初めから観念して売りものの言葉を採用し、自分もまたあり来たりの形式で、単純な叙述や雑報や、ある点で毎日の新聞記事のような形式で話すのであった。この場合にもまた、最も真実な悲しみが、会話の陳腐な語法

しかしこの場合もまだ、公衆の反応は即座ではなかった。事実、ペストの第三週には三百一名の死亡者が数えられたという報道などは、想像力に十分訴えてこなかった。一方からいえば、おそらく全部がペストで死亡したものでないかもしれない。また別のほうからいえば、市中で誰一人、ふだんのときには毎週何名ぐらいの人が死んでいるものか、知っているものはなかった。市は二十万の人口をもっていた。人々はこの死亡率が正常なものであるかどうかを知らなかったのである。この種の正確な知識というものは、明らかに興味をそそるものであるにもかかわらず、人々が決して心を向けようとしないものでさえある。公衆には、いわば、比較の基準が欠けていたのである。結局長い間に死亡数の増加を確認するに至って、世論も真相をはっきり理解したのであった。第五週目には事実三百二十一名の死亡者となり、そして第六週は三百四十五名となった。相次ぐ増加はともかく雄弁であった。しかし、それも十分力強いものであったとはいえず、市民たちは不安のさなかにも、これはたしかに憂うべき出来事には違いないが、しかし要するに一時的なものだという印象を、依然もちつづけていたのである。

彼らはそんなわけで相変らず街頭を練り歩き、カフェのテラスで卓を囲んでいた。総体的にいって、彼らはいくじのない態度ではなく、愚痴よりも冗談のほうを多くいい合い、明らかに一時的なものとわかっているさまざまの不自由を機嫌よく受けいれようとするそぶりを示した。外観だけはともかく保たれていたのである。しかしながら、月の終りのころ、そして祈祷週間（これについてはいずれあとで述べるが）の行われたほぼその最中に、さらに深刻な変貌がこの町の外見を変えた。まず第一に、知事は乗用車の運行と食糧補給についての措置をとった。食糧の補給

わが市民たちがこの突然の流刑になんとか対処しようと試みている間に、ペストのほうは市の出入口に衛兵を配置し、オランに向って航行していた船舶に針路を転じさせていた。閉鎖以来、一台の乗物も市内にはいってこなかった。その日からというもの、自動車は雪々めぐりを始めたという感じであった。港もまた、大通りの高みからながめるものの目に、異様な外観を呈していた。そこを沿岸最大の港の一つたらしめていたいつもの活気は、にわかに消えてしまった。検疫期間のため停船中の数隻の船がまだ見かけられた。しかし埠頭には、装置をはずされた大きな起重機、横っ倒しになったトロッコ、樽や袋のひっそりとした山などが、商業もまたペストで死んだことを表明していた。

この見慣れない光景にもかかわらず、市民たちは明らかに彼らの身に起ったことを容易に理解しかねていた。別離とか恐怖とかいうような共通の感情はあったが、しかし人々はまた依然として個人的な関心事を第一列に置いていた。誰もまだ病疫を真実には認めていなかったのである。大部分の者は、彼らの習慣を妨げたり、あるいは彼らの利益を冒すことがらに対して、特に敏感であった。彼らはそのためじれたり、いらだったりするものの、それはこの場合ペストに向ってぶっつけることのできるような感情ではなかった。彼らの最初の反応は、たとえば、施政当局に罪を着せることであった。新聞に反響となって表われているさまざまの批判(『考慮された措置の緩和を考慮することはできないものであろうか?』)に対する知事の答えは、相当予想外のものであった。それまでは、各紙も報知通信社も、病疫に関する統計の公式の通達は受けていなかった。知事はそれを日ごと日ごとに通信社に通達し、それを毎週報道するよう依頼したのである。

ころ、人々はずいぶん飲んだのである。あるカフェが「純良な酒は黴菌を殺す」というビラを掲げたので、アルコールは伝染病を予防するという、そうでなくても公衆にとって自然な考え方が、一般の意見のなかで強まってきた。毎晩、二時ごろ、カフェから追いたてられた相当の数に上る酔っ払いたちが街頭にあふれ、そしてしきりに楽観的な言葉をわめき散らしているのであった。しかし、これらの変化は、ある意味でじつに異常であり、しかもじつに急速になし遂げられたので、それを正常な、持続性あるものと見なすことはなかなか容易でなかった。その結果として、われわれは相変らず自分たちの個人的な感情をまず第一の関心事としていたのである。

市門の閉鎖から二日後、病院から出てきたところで、医師リウーはコタールに出会ったが、コタールが彼のほうへ向けた顔は、いかにも満足そうにさえ見えた。リウーはその顔色のよくなったことを祝した。

「そうなんです。すっかり調子がよくなってきて……」と、この小柄な男はいった。「ところで、先生、このペストってやつ、どうですか、そろそろ本物になってきそうじゃありませんか」

医師はそれを認めた。すると相手はなんだかおもしろがってでもいるような調子で、こう認定した——

「こいつが今になって熄むっていう理由はなんにもないんですからね。今にそれこそ上を下へって騒ぎになりますぜ」

二人はいっときいっしょに歩いた。コタールは、彼の住んでいる界隈の大きな食料品屋が、うんと高い値で売るつもりで食料品をストックしていて、その男を病院に連れていくために迎えの

は制限され、ガソリンは割り当て制となった。電気の節約ということまで規定された。わずかに必需品だけが、陸路と空路によってオランに届けられていた。そんな具合で、車の運行は次第に減少して、ついにはほとんど皆無に近くなり、ぜいたく品の店は今日また明日と店を閉じていき、ほかの商店もショーウィンドーに断わりの掲示を出し、一方その店頭には買手の行列が並んでいるという状態になった。

オランはこうして異様な外観を呈するに至った。歩行者の数は目だって多くなり、しかも閑散な時刻にさえ、商店あるいはある種の事務所などの閉鎖でなんにもすることのなくなった大勢の人々が、街頭やカフェにあふれていた。さしあたり、彼らはまだ失業しているわけではなく、休暇をとっているだけであった。オランはそこで、たとえば午後の三時ごろ、しかもよく晴れ上がった日など、どうかすると祝賀行事中の町と間違いそうな印象を与え、何か公の催しがとり行われるために交通を止め、商店を鎖し、そして市民はそのお祭り騒ぎに参加しようとして街頭にあふれ出たとでもいうようであった。

もちろん、映画館はこの一般の休暇状態によって利を収め、大もうけをした。しかし、県内に樹立されていたフィルムの配給網は途絶してしまっていた。二週間ののちには、各館はそのプログラムを互いに交換し合うことを余儀なくされ、ある期間後は、ついにどの映画館もいつも同じフィルムを映写することになってしまった。それでも各館の収入は減少しなかった。

最後にカフェは、葡萄酒とアルコール飲料の取引きが第一の地歩を占める都市に蓄積された相当量のストックのおかげで、これもまた同じように顧客の要求を満たすことができた。実際のと

であった。

彼は、近所のごく若い貧しい娘と非常に若いうちに結婚した。結婚するために、学業を中途にして就職したといってもよかった。ジャーヌも彼も、その界隈から外へは一歩も出たことがなかった。彼はいつも彼女の家へ訪ねていき、そして彼女の両親は、この黙りこくっているぶきっちょな求婚者を少々笑いものにしていた。父親は線路工夫であった。非番のときは、いつも窓ぎわの片すみに腰をおろし、大きな手を両膝にぴったり置いて、じっと考えこんだような面持で、路上の動きをながめていた。母親はいつも家事にかかりっきりで、ジャーヌがそれを手伝っていた。ジャーヌはじつにほっそりしていて、彼女が道を横切るのを見ているとグランははらはらしないではいられないくらいであった。そんなとき、彼には車が途方もなく大きいものに見えるのであった。ある日、クリスマスの飾り付けをしてある店の前で、ジャーヌはそのショーウィンドーを感嘆してながめていたが、いきなり彼のほうへ倒れかかりながら、こういった――「まあ、奇麗ね！」。彼は彼女の手首を握りしめた。こうして、結婚はきまったのであった。

それからの話は、グランにいわせれば、きわめて単純なものであった。世間誰でもそういうものなのである。――結婚する。まだ多少は愛したりもできる。そして働く。働いて働いて、そのあげく愛することも忘れてしまうのである。ジャーヌもまた働いていたが、それは例の局長の約束が履行されないためであった。ここのところで、グランのいおうとすることを理解するにはちょっと想像力が必要であった。疲労も手伝って、彼はつい自分に気を許すようになって、ますます黙りがちになり、若い妻の、自分は愛されていると思う気持をささえてやろうとしなかった。

ものが行ったとき、寝台の下から罐詰が発見されたという話をした。「そのまま病院で死にましたがね。ペストってやつは、勘定なんて払っちゃくれませんや」。コタールはそんなふうに今度の疫病に関する真偽とりどりの話題をうんともっていた。たとえば、中央のほうで、ある朝一人の男がペストの兆候を示し、そして病の錯乱状態のなかで戸外へとび出し、いきなり出会った一人の女にとびかかり、おれはペストにかかったとわめきながらその女を抱きしめた、というようなうわさが伝わっていた。

「さあ、いよいよってわけですな」と、そういうことを肯定するには似合わないにこやかな調子で、コタールは注釈を加えた。「われわれはみんな気違いになっちまいますよ、それこそ間違いなしに」

同様にまた、その同じ日の午後、ジョゼフ・グランは遂に個人的な打明け話を医師リウーにするようになった。彼は机の上にあったリウー夫人の写真をふと目にとめて、リウーの方を見た。リウーはそれに答えて、妻が市外で病を養っていることをいった。「ある意味では」と、グランはいった。「それは運がよかったですね」。リウーはそれに対して、いかにもそれは運がよかったに違いないが、しかしこのうえはただ妻が全快してくれることを祈らねばならない、と答えた。

「まったく、お察しします」と、グランはつぶやいた。

そして、リウーが知り合うようになって以来はじめて、彼は思いのままにこだわりなく話しはじめた。まだ言葉を捜し捜しではあったが、ほとんどいつでもその言葉を見つけることに成功し、それがまるで、今いおうとしていることを、もうずうっと前から考えていたとでもいうよう

してるんです。先生となら、お話ができるんです。そうすると、つい感情に引きずられちまって……」

明らかに、グランはペストから千里の遠くにいた。

その晩、リウーは妻に電報をうって、町が閉鎖されたこと、自分は元気であること、彼女はこれまでどおり体に気をつけていてくれなければいけないこと、そして自分はいつも彼女の身を案じていること、をいってやった。

市門の閉鎖から三週間後、リウーが病院から出てくると、一人の若い男が彼を待っていた。

「あるいは私を憶えていらっしゃるかもしれないと思いますが」と、その男はいった。

リウーは見覚えがあるような気がしたが、ちょっと口へ出てこなかった。

「まだこんな事件が起らないうちにおうかがいしたことがあります」と、相手はいった。「アラビア人の生活状態についてお尋ねにあがったのでしたが。レイモン・ランベールという者です」

「ああ、そうでした」と、リウーはいった。「それじゃ、今度はまたすばらしい特ダネができたわけですね」

相手はどうも神経質になっている様子であった。彼がいうには、じつはそんなことではなく、医師リウーにひとつ力添えを頼みたいことがあって来たのであった。

「どうも恐縮なのですが」と、彼は付け加えた。「しかし、私はこの町に誰も知ってる人がないもんですから。おまけに、私の新聞社の駐在員が、あいにく愚物ときてるんです」

リウーは中央の無料診療所までいっしょに歩いていこうといった。二、三さしずを与えねばな

働いている男、貧乏、徐々にふさがれていく未来、夕方食卓をとり巻く沈黙――このような世界に、情熱のはいりこむ余地はないのである。たぶん、ジャーヌは苦しんだのだ。それでも彼女は踏みとどまっていた。長い間、自分でも知らずに苦しんでいることがあるものだ。何年か過ぎていった。その後、彼女は行ってしまったのである。もちろん、去っていくときはひとりではなかった。「ずいぶんあなたを愛してましたわ。でも、今ではもう疲れてしまいましたの……。出ていくことを幸福だとは思っていませんけど、でも、何も幸福である必要はないんですわ、もう一度やり直すためには」。これが大略、彼女の書き残していったことである。

ジョゼフ・グランが今度は苦しんだ。彼にしても、リウーが指摘したように、もう一度やり直すこともできたであろう。しかし、ありていにいって自信がなかったのだ。

ただ、彼は相変らず彼女のことを考えていた。彼の望むところといえば、彼女に一通の手紙を書いて自分の釈明をすることである。「ところが、これがむずかしいことでしてね」と、彼はいうのであった。「もうずいぶん長い間、そのことを考えているんですよ。お互いに愛し合っていた間は、言葉なんか使わないでもお互いにわかっていたんですがね。しかし、そういつまでも愛し合ってるってわけにはいきません。ある時期が来たとき、私がちゃんと言葉を見つければよかったんですがね、しっかり彼女を引きとめておけるような。ところが、私にはそれができなかったんです」。グランは格子縞の手ぬぐいみたいなもので洟をかんだ。それから今度は口髭をふいた。リウーはじっとその姿をながめていた。

「失礼しました、先生」と、老人はいった。「でも、なんていうか、とにかく、私は先生を信頼

であって、何ごとも決定はできないというのであった。

「しかしとにかく」と、ランベールはいった。「とにかく、私はこの町には無関係な人間なんですからね」

「それはそうでしょう。だが、要するに、この疫病がそう続かないで済めばいいんですから」

最後に、相手はランベールを慰めようとして、この男もまた、オランには興味ある報道記事の材料が見つかるわけだし、よく考えてみればそれはそれなりにいい面をもたない事件などはないものだ、ということを指摘したのであった。ランベールは肩をすくめた。ちょうど市の中心のあたりまで来ていた。

「まったくばかげてますよ、なにしろ。僕は報道記事を書くためにこの世へ生れてきたんじゃありませんからね。そうじゃなく、おそらく、ある女といっしょに暮すために生れてきたのかもしれないんです。こいつは道理にかなった言いぶんじゃないですかね」

リウーは、いずれにせよ、それはもっともな言いぶんのように思われるといった。

中央付近の大通りも、いつもの雑踏は見られなかった。幾らかの通行人が遠い住居へ急いでいるだけであった。誰一人、笑い顔を見せているものはなかった。リウーはそれを、この日行われた報知通信社の発表の結果だと思った。二十四時間後には、市民はまた希望をいだきはじめたものである。しかし当日は、その数字がまだあまりにもなまなましく記憶のなかに刻まれていたのである。

「それというのが」と、ランベールはいきなりいいだした。「彼女と僕とはつい最近出会ったば

らないことがあったからである。二人は黒人街の路地をずっと下っていった。夕方が近づいていたが、かつてこの時刻にはあれほど騒々しかったこの町が、奇妙なほどひっそりとして見えた。まだ金色に染められている空に聞える幾度かのラッパの響きだけが、わずかに、軍人たちが職務を行うふりをしていることを示していた。その間、青やカーキや紫のモールふうの家々の壁にはさまれた急坂の街路をずっと歩いていきながら、ランベールは非常に興奮してしゃべった。彼は妻をパリに残してきた。じつをいうと、妻ではなかったが、しかしそんなことはどっちでも同じだった。彼は、町が閉鎖されると、さっそく彼女に電報をうった。初めは、これも一時的な出来事だと思って、彼女と文通し合うすべを捜すだけにしていたのである。ところが、オランの同業連中は自分たちにはどうにもできないというし、郵便局では追い返されるし、県庁のある書記には鼻であしらわれる始末であった。最後にやっと、二時間行列して待たされたあげく、電報を一通受けつけてもらうことができて、こう打った――「バンジシンパイナシ スグカエル」

ところが、朝、床から起きると、結局こいつはどれくらいの期間続くものか自分にもわからないのだという考えが、突然わき起ってきた。彼は出発することに決心した。紹介状をもらっていたので（彼の職業では便宜は幾らでもあった）、県の官房長に近づくことができて、そこで、自分はオランには関係のないもので、この町にとどまったりすることが能ではなく、偶然居合せただけだし、たといいったん外へ出たうえで隔離期間を課せられなければならないとしても、ともかく退去させてくれるのが正当だということをいった。官房長はそれに対して、事情はよくわかるが、しかし例外を設けるわけにはいかないし、ともかく考えてはみるが、要するに事態は重大

「たとい、どうなんです?」と、ランベールはいった。
「たとい、僕がその証明書を書いてあげたところで、それはあなたには、なんの役にもたたないでしょう」
「どうしてです?」
「つまりですね、この町にはあなたのようなケースのものが何千人といるんですよ。しかもその人たちを出してやるわけにはいかないんです」
「だって、そんな、ペストにかかってないものまで?」
「それは十分な理由にはならないんです。まったくばかげた話です。それはよくわかっているんですが、しかしこれはわれわれすべての者に関係のあることです。あるがままのかたちで受けとるよりしようがありません」
「だって、僕はここの者じゃないんですからね」
「もう今からは、お気の毒でも、あなたもここの者になるわけです、世間みんなと同じように」
ランベールは興奮してきた――
「そうなりゃ、もう人道問題だ、それこそ。おそらくあなたには理解できないんです、よく気持のわかり合ってる二人の人間にとって、こんなふうに引離されていることがいったいどんなものか」
リウーはすぐには答えなかった。それから、それは自分も理解できるつもりだといった。彼は満腔の熱意をもって、ランベールがその妻と再会し、愛し合うすべての人々がまたいっしょにな

かりなんですがね、それでいてすっかり気が合ってるんです」

リウーはなんともいわなかった。

「しかし、どうもつまらない話ばかりお聞かせしました」と、ランベールは語をついだ。「じつはただ、証明書をひとつ書いていただけないかどうか、それだけおうかがいしたかったんです、つまり僕が問題の病気にかかっていないことを確認するという意味の証明書なんですがね。それがあれば、そいつが役にたちそうに思うんです」

リウーは頭だけでうなずいた。小さな男の子が彼の足の間にころげこんできて、彼はそれをそっと抱き起してやったのである。二人はまた歩き出し、閲兵広場まで来た。無花果と棕櫚の枝が、埃だらけのよごれた共和の女神の像の周囲に、埃で灰色になって、じっとたれ下がっていた。二人はその記念像の下に立ち止った。リウーは白っぽい壁土みたいなものの一面にくっついた両方の足先を、かわるがわる地面にはたいた。彼はじっとランベールの姿をながめた。ソフトを少し阿弥陀にかぶり、ネクタイをしめたワイシャツの襟ボタンをはずしっぱなしにし、髯もろくにそらず、新聞記者はちょっとむっつりとすねたような様子をしていた。

「まったく、あなたのいわれることはよくわかるんですがね」と、ついにリウーはいった。「しかしあなたの議論は正しいとはいえないんです。僕はその証明書を書いてあげることはできません。というのは、事実上、僕はあなたがその病気にかかっているかいないか知りませんし、またかりにそうでない場合でも、あなたが僕の診療室を出た瞬間から県庁にはいる瞬間までの間に病毒に感染することがないとは、僕には保証できないからです。それに、たとい……」

を認めた。

「いや、わかってます」と、ランベールはいった。「つまり公益のための職務っていうことをいわれるんでしょう。しかし、公共の福祉ってものは一人一人の幸福によって作られてるんですからね」

「しかたのないことです」と、ふと放心からさめたような様子で、医師はいった。「この世にはそういうこともあれば、また別のこともあるんです。裁くことは禁物ですよ。しかし、腹をたてたりなさるのは見当違いですよ。もしあなたがうまくこの問題を切り抜けられたら、僕は心からうれしく思うんです。ただ、僕には職務上禁じられている事柄があるわけです」

相手はいらだたしげに頭をゆすぶった。

「いや、腹をたてたりして済みませんでした。それに、すっかりお暇をつぶしちまって、こんなことでもって」

リウーは、今後の奔走について経過を知らせてくれるように頼み、そして自分に対してうらみをいだかないようにしてくれといった。きっと、自分たち二人が合致しうる面があるに違いないのだ。ランベールは急に困惑したような様子をみせた——

「僕もそう思います」と、ちょっと間をおいてから、彼はいった。「自分の気持やあなたのいわれたことはともかくとして、やっぱり僕もそう思うんです」

彼はいいよどんだ——

「しかし、僕はあなたが正しいとは思えません」

ることを願っているのであるが、しかしそこには布告と法律というものがあり、ペストというものがあって、彼としての役目は、なすべきことをするということなのであった。

「いや」と、ランベールは苦っぽくいった。「あなたには理解できないんです。あなたのいっているのは、理性の言葉だ。あなたは抽象の世界にいるんです」

医師は共和の女神のほうへ目を上げ、そして、自分は理性の言葉を話しているかどうかは知らないが、つまり明白な事実の言葉を話しているのであり、それは必ずしも同じことではない、といった。ランベールはネクタイを直した。

「そうすると、つまり、ほかのやり方でなんとかしなきゃならんというわけですね。とにかく」と、一種いどむような調子で、彼は続けた。「とにかく、僕はこの町から出ていきますよ」

医師は、今度もまた彼のいうことはよくわかるが、しかしそれは自分には関係のないことだ、といった。

「いや、関係のあることですよ、あなたに」と、突然かっとなった様子で、ランベールはいった。「僕があなたのところへやって来たのは、今度の決定についてはあなたが大いに参画されたという話を聞いたからです。それなら、少なくとも一つの場合に対してぐらいは、ご自分が協力して作られた条項なら解いてくださることもできるだろうと、僕は考えたのでした。ところが、そんなことはあなたにはどうでもいいことなのです。あなたは誰のことも考えなかったのです。離れ離れになっている人たちのことなど、考慮に入れようともしなかったのです」

リウーは、ある意味でそれは事実であり、自分はそれを考慮に入れまいとしたのだということ

ているのに気がついたのであった。

「ええ、そうなんです」と、彼はいったのである。「しかし、頑張ってやってるうちには、僕ももっと神経質でなくなってくるでしょう」

彼は強壮で耐久力があった。そして事実、まだ疲れてはいなかった。しかし、たとえば毎日の往診というようなことが、彼には堪えがたいものになってきていた。流行性の熱病だと診断することは、結果としてたちまち病人を連れ去らせることであった。ここにおいて、事実、抽象と困難が始まるのであり、それというのが病人の家族たちは、全快もしくは死亡しないかぎりその病人に二度と会えないことを知っていたからである。「どうぞかわいそうだと思って、先生！」と、タルーのホテルに働いていた女中の母親に当るロレ夫人はいったものだ。それはいったい何を意味していたのか？　もちろん、彼はかわいそうに思っていた。しかし、そのことは誰の役にもたたなかった。電話はかけなければならなかった。やがて救急車のベルの音が響いてくる。近所の人々は、初めのうちは、窓をあけてのぞいたものであった。のちになると、あわてて窓をしめるようになった。さてそこで、争いが、涙が、説得が、つまり抽象が始まるのであった。病熱と不安で蒸れ返るような部屋部屋で、狂乱の場面が繰りひろげられる。しかし、病人は連れ去られてしまう。リウーもそこで引揚げることができるのであった。

初め何度かのころは、リウーは電話をかけるだけにして、救急車の来るのを待たず、ほかの患者のほうへまわることにしていた。ところが、そうすると、身内の人々は、今では結末のわかりきっている別離よりはむしろペストと顔突き合わしていることのほうがいいとして、戸口を締め

彼はソフトの縁を目深に引下げると、足早に去っていった。リウーは彼がジャン・タルーの住んでいるホテルにはいっていくのを見た。

ややあって、医師は頭を振った。あの新聞記者の、幸福へのあせりは無理もないことだ。しかし彼が自分を非難するのは無理のないことだろうか？「あなたは抽象の世界で暮しているんです」。ペストが猛威を倍加して週平均患者数五百に達している病院で過される日々が、はたして抽象であったろうか。なるほど、不幸のなかには抽象と非現実の一面がある。しかし、その抽象がこっちを殺しにかかってきたら、抽象だって相手にしなければならぬのだ。そしてリウーは、そのほうが容易なわけではないことを知っているだけだ。たとえば、彼が任されている例の分院（今ではそれが三つあった）を運営していくことなども、決して容易ではなかった。彼は診療室に面した一つの部屋に、受入れ室を設けさせた。床を掘り下げてクレシール酸液の湖が作られ、その中央にレンガ積みの小さな島ができていた。患者はその島の上に運ばれ、手早く脱衣させられて、衣服は水のなかに落ちる。体を洗い清め、よく乾かし、病院用のざらざらした寝巻に着かえさせられたうえで、患者はリウーの手に渡され、次いで病室の一つに運ばれるのである。そこの学校では雨天体操場まで利用しなければならなくなって、今では総計五百の病床が設けられ、そのほとんど全部がすでにふさがっていた。彼がみずから指揮して行われる朝の受入れが終ると、患者にワクチン注射を施し、リンパ腺腫の切開を済ましてから、リウーはさらにまた各種の統計を検討し、そして午後の宅診にもどってくる。最後に晩には、往診に出かけ、夜遅く帰宅する。前の晩も、母親は嫁のリウー夫人からの電報を彼に渡そうとして、医師の手がぶるぶる震え

ベールが姿を消したホテルの入口を相変らず見つめつづけていたとき、そのことを感じたのであった。

町じゅうの者が街頭にあふれ出てひとつところを徘徊していたあの宵々に次いで、この疲労困憊の幾週を過してしまうと、リウーは自分がもう同情の念を抑えようとする必要がなくなっていることを悟った。同情がむだである場合、人は同情にも疲れてしまうのである。そして心の扉がおのずから徐々に閉ざされていくその感じのうちに、医師はこういう圧しつぶされそうな日々の唯一の慰めを見出していたのであった。彼は自分の仕事がそれによって容易になることを知っていた。彼がそれを喜んだのはその理由からである。彼の母が朝の二時に彼を迎えて、自分に注がれたうつろな目つきを悲しがったとき、彼女はまさに、リウーがそのとき与えられることのできた唯一の安らぎを嘆いていたのであった。抽象と戦うためには、多少抽象に似なければならない。しかし、どうしてそんなことがランベールに通じえたであろうか？　抽象はランベールにとって、およそ彼の幸福と相反するものであった。そして、じつをいえばリウーもランベールがなるほどある意味においては正しいことを知っていた。しかし彼はまた、抽象が幸福にまさる力をもつものになることがあり、その場合には、そしてその場合にのみ、それを考慮に入れなければならぬ、ということを知っていたのである。これはやがてランベールの身にも起ったことであって、医師はその後ランベールから聞かされた打明け話によってつぶさにその次第を知ることができた。リウーはこうして引続き、しかも新たな角度の上から、一人一人の幸福とペストの抽象との陰鬱な戦いともいうべきもの――この長い期間の間、われわれの町の全生活となった、その戦

きってしまうのであった。怒号や、強制命令や、警察の干渉や、そしてのちには武装された兵力で、患者は突撃によって奪取されるのであった。最初の数週間というものは、リウーは救急車の到着するまで残っていることを余儀なくされた。その後医者が各自巡回のさいには志願の監察員を一人ずつ同行することになってからは、リウーも一人の患者からすぐつぎの患者へまわることができるようになった。しかし初めのうちは来る晩も来る晩も、あのロレ夫人のところへ行った晩と同じで、その晩、扇と造花で飾られたささやかなアパートの部屋へはいっていくと、彼を迎えた母親に、半ば硬ばりかけた笑顔で、こういわれたのであった——

「まさか、どこでもうわさしてるあの熱病じゃないと思いますけど」

で、彼のほうは、毛布と下着をまくりあげ、腹部と大腿部の赤い斑点と、各部リンパ腺の腫脹とを、無言のまま見守る。母親は娘の足の間からのぞいて見て、思わず制しきれぬ叫び声をあげる。毎晩、母親たちは、死のあらゆる兆候を呈してあらわにされる腹部の前に、そんなふうに、どこか抽象的な様子で泣きわめき、毎晩、人々の腕はリウーの腕にしがみついて、すべもない言葉、約束、涙が降り注ぎ、毎晩、救急車のベルは、あらゆる悲嘆と同様にむなしい、感情の発作を誘発するのであった。そして、こういういつも似かよっている夜々の長い連続の果てに来るものとして、リウーは際限なく繰返される同じような場合の長い連続よりほかには、なんにも期待できなかった。まったく、ペストというやつは、抽象と同様、単調であった。ただ一つのものだけが、あるいは変ったかもしれないといえば、それはリウー自身であった。彼はその夕方、共和の女神の像の足もとで、自分の心を満たしはじめた骨の折れる無関心さだけを意識しながらラン

すい性であった彼は、託された使命を決然たる態度で引受けた。その説教が行われるずっと前からすでに人々のうわさに上り、そしてそれはそれらしいかたちで、この期間の歴史に一つの重大な日付を印したのである。

祈祷週間には多数の一般人が参加した。これは、平常時においてオランの市民が特に信仰心に厚いというわけではない。たとえば日曜日の朝など、海水浴はミサに対する手ごわい競争相手となっているのである。これはまた、突然の回心が彼らを覚醒させたというわけでもなかった。しかし一方では、町が閉鎖され港は遮断されて海水浴も不可能になっていたのと、また一方では、彼らはまさにはなはだ特殊な精神状態にあり、彼らを襲った驚くべき出来事を心の奥底ではまだ受けいれないでいながらも、何かが変ったということだけは明らかに感じていたのである。それでも多くの人々は、疫病がやがて終息し、自分たちは家族もろとも助かるであろうと、相変らず望みをかけていた。したがって、彼らはまだ何をしなければならぬという必要も感じていなかった。ペストは彼らにとって不愉快な訪問者――元来やって来たものである以上、いつかは立ち去っていくべき訪問者であるにすぎなかった。おびえてはいたが、絶望してはいなかったし、やがてペストが、さながら彼らの生活形態そのものと観じられ、それまで彼らの営みえた生活を忘れてしまうに至ったあの時期は、まだ到来していなかった。要するに、彼らは待望のなかにあったのである。宗教に関しても、他の多くの問題についてと同様、ペストは彼らに一つの奇妙な精神的態度――冷淡からも熱心からも同じくらい遠く、そして「客観的」という言葉でかなりよく定義されうるような態度をとらせた。祈祷週間に参加した大部分の人々は、たとえば、信者の一人

いを続けていくことができたのであった。

しかし、ある人々が抽象を見たところに、ある人々は真理の姿を見ていた。ペストの第一月の終りは、事実、病疫の顕著な再昂進と、パヌルー神父――ミッシェル老人を発病の初めに介抱したあのイエズス会士である――の熱烈な説教とによって、暗鬱にいろどられたのであった。パヌルー神父は、オラン地理学協会会報への頻繁な寄稿によってすでに著名であり、その金石文学上の考証は会報紙上で権威をなしていた。しかし彼は、近代個人主義に関する一つの連続講演を行なって、一専門家としてのそれよりもさらに広範な聴衆を獲得した。彼はその講演において、近代の放逸からも過去の世紀の蒙昧主義からも等しく遠ざかった、求むるところ多きキリスト教の熱烈な護持者となった。その際、彼は聴衆の前に無慈悲な真実を語ることを容赦しなかった。そこから、彼の名声が生れた。

ところで、この月の末ごろ、町の教会首脳部は、集団祈祷の週間を催すことによって、彼ら独自の方法でペストと戦うことを決定した。この公の信仰心の表示は、最後に、日曜日に、ペストに襲われた聖者たる聖ロック（訳注 十四世紀のフランスの聖者。中部イタリアでペスト患者の救護に献身した。ペストに対する守護聖者としてあがめられている）の加護にささげられる荘厳なミサをもって終ることになっていた。その際、パヌルー神父が説教者たることを託された。すでに半月も前から、神父は、彼のために会派内でまったく別格の地位を獲得させてくれた、聖アウグスチヌスとアフリカ教会に関する研究も抛っていた。生来血の気の多い、熱しや

のなかにいます。皆さん、それは当然の報いなのであります」と、一語一語、句切るようにして痛烈な一句をまず会衆にあびせたとき、一陣のざわめきが前庭のほうまで会衆の間を走った。

論理的には、そのあとに続いた言葉はこの悲壮な前置きと一致しないように思われた。演説がさらに進められたとき、ようやく市民たちは、神父が巧みな雄弁術によって、あたかも一撃を加えるもののように、その説教全体にわたる主題をまず一挙に提示したものであることを悟ったのであった。事実、パヌルーはこの言葉にすぐ続けて、エジプトにおけるペストに関する出エジプト記の聖句を引用し、そしてこういった――「この災禍がはじめて史上に現われたのはすなわち神の敵を打砕くためでありました。埃及王（訳注　モーゼの率いるイスラエル人たちを迫害したエジプト王パロ）は永遠者の御心に逆らっておりましたが、そのときペストが彼をひざまずかせたのであります。すべての歴史が始まって以来、神の災禍は心おごれる者どもと盲いたる者どもをその足下にひざまずかせているのであります。よくこのことに思いをいたし、皆さんひざまずいてください」

外では雨が激しさを増し、静まり返った静寂のなかで発せられたこの最後の一句は、焼絵ガラスにはね返る驟雨の音によって一層深遠なものを帯び、一種特別な調子をもって響き渡ったので、幾人かの聴衆は一瞬ためらったのち、腰掛から跪台の上へ身をすべらしたほどであった。ほかの人々もその手本に従わねばならぬと思い、その結果、隣から隣へ、幾つかの椅子のきしみ以外にはなんの物音もないなかで、やがて全聴衆がひざまずいていた。パヌルーはそこで身を起し、深く息を吸いこみ、そしてますます力をこめた調子で語りつづけた――「今日、ペストがあなたがたにかかわりをもつようになったとすれば、それはすなわち反省すべきときが来たのであ

が医師リウーの前で口にしたところの「いずれにしても、害はありっこないことですから」という言葉を、そのまま彼らの言葉としたであろう。タルーでさえも、例の手帳に、このような場合シナ人はペストの精霊の前に鼓を奏しに行くということをしるしたあとで、はたして事実上、鼓が各種の予防措置よりも有効な効力を発揮するかどうか、それを知ることは絶対に不可能であることを指摘している。彼は単に付記して、この問題を裁断するためには、まずペストの精霊というものの存在について知るところがなければなるまいが、その点に関するわれわれの無知は、人人のいだきうるいっさいの意見を空疎ならしめる、とだけ述べている。

町の中央聖堂は、ともかくも、その週間じゅうほとんど信者の人々でうずめられた。最初二、三日は、まだ多くの市民が車寄せの前に続く棕櫚と柘榴の庭にたたずんで、街頭にまで打返してくる祈願と祈祷の波に耳を傾けていた。そのうち次第に、お手本を示す者が出てくるにつれて、その同じ聞き手たちも思い切ってなかにはいり、会衆の追唱に恐る恐る声をまじえるようになった。そして日曜日には、かなりの群衆が陪者席に侵入し、前庭と階段のはしばしにまであふれていた。前夜から空は曇りはじめ、雨が上砂降りに降っていた。外にいる人々は、かさを広げていた。香とぬれた布の香が会堂のなかに漂い、やがてパヌルー神父が壇に上がった。

彼は、背は中背ぐらいであったが、しかしずんぐりしていた。彼が太った両手で壇を締めつけるようにして説教壇の縁に身を乗せかけたとき、人々の目には、なにやら厚ぼったい黒い形の上に、鋼鉄の眼鏡の下の赤味を帯びた頬が、二つの斑点のようにのっかっている姿しか見えなかった。彼は力強い、熱情的な、よくとおる声をもっていたので、彼が「皆さん、あなたがたは禍い

人の善の天使が肉眼に姿を現わし、狩猟用の猪槍を持った悪の天使に命令を下しながら、家々の戸をたたくように命じていました。そうして一軒の家がたたかれた回数だけ、それと同じ数の死人がその家から出たということであります」

パヌルーはここでその短い両腕を、前庭の方向へあたかも雨のはためく帷のかなたに何ものかを指し示そうとするかのごとく、差伸べた――「皆さん」と、彼は力をこめていった。「その同じ死の狩りたてが、今日私どもの町の路上を駆けめぐっているのであります。ごらんなさい、そのペストの天使を――さながら魔王のごとく堂々として、悪そのもののごとくきらきらかに、あなたがたの屋根の上につっ立ち、右手には頭の高さに赤い猪槍をささげ、左手ではあなたがたの家々の一つを指し示しています。今この瞬間にも、おそらく彼の指はあなたがたの戸口に伸び、猪槍が扉の板に音をたてているのです。さらにまたこの瞬間に、ペストはあなたがたの家のなかにはいり、あなたがたの部屋にすわり、あなたがたの帰りを待っているのです。ペストはそこにいます――しんぼう強く、注意深く、この世の秩序そのもののように落着き払って。ペストがあなたがたの方へ伸ばすその手は、いかなる地上の力も、また――よく銘記しておいていただきたいことでありますが――かのむなしい人知なるものといえども、あなたがたがこれを避けうるようになどすることはできないのであります。そして苦痛の血みどろな麦打ち場で打ちのめされ、あなたがたは藁屑とともに投げ捨てられるのであります」

ここで神父はさらに豊かな潤色をもって、災禍の悲壮なイメージを語りつづけた。彼は、巨大な木片が町の上空を旋回し、手当り次第にたたきつけてはまた血みどろになって舞い上がり、最

ります。心正しき者はそれを恐れることはありえません。しかし邪なる人々は恐れ戦くべき理由があるのであります。世界という宏大な穀倉のなかで、仮借なき災厄の殻竿は人類の麦を打って、ついにわらが麦粒から離れるまで打ちつづけるでありましょう。そこには麦粒よりもさらに多くのわらがあり、選ばれた者よりもさらに多くの召し寄せられる者があるでありましょうが、しかもこの禍いは神の望みたもうたものではないのであります。あまりにも長い間、この世は悪と結んでおりました。あまりにも長い間、神の慈悲の上に安住しておりました。ただ悔悛しさえすればよかった。どんなことでも許されていたのであります。しかも悔悛することにかけては、誰もが自信をもっておりました。いよいよその時が来れば、きっと悔悛が感じられるに違いない。それまでのところ、いちばん楽な道は気の向くままに任せておくことだ。神の慈悲があとのところはいいようにしてくださるだろう。ところがです！　そういうことは長く続きえなかったのです。じつに長い間、この町の人々の上にそのあわれみの御顔を臨ませたもうていられた神も、待つことに倦み、永劫の期待を裏切られて、今やその目をそむけたもうたのであります。神の御光を奪われて、私どもは今後長くペストの暗黒のなかに落ちてしまいました！」

聴衆席のほうで誰かまるではやりたつ馬のように鼻を鳴らした。ちょっと間を置いて、神父は前より調子を低めながら、さらに言葉を続けた――「《黄金伝説》（訳注　紀元一二六〇年ころジェノアで編纂された聖者列伝）を読むと、こういうことがあります――ロンバルジアのフムベルトゥス王（訳注　紀元七世紀のロンバルジア国王）の時代、イタリアはじつに猛烈なペストに荒され、生きている者が死者を葬るのに、かろうじて足りるほどで、このペストは特にローマとパヴィア（訳注　イタリア北部、旧ロンバルジア王国の首府）で猛威をふるいました。そして一

らねばならぬことを知ったのであります」

しめっぽい風が今では陪者席まで吹きこんできて、蠟燭の火は細まりながらなびいた。濃い蠟の香、咳、誰かの嘘などがパヌルー神父のほうへ流れてき、神父はそこで大いに賞讃を博した巧妙な手ぎわで自分の論題にもどると、穏やかな声でこう続けた――「皆さんのなかには、さてそこで私がどういう結論へ行き着こうとしているのかと、疑問をいだかれるかたも多いことでありましょう。私は皆さんを真理に行き着かせたい、そしてたとい私が述べたようなすべてのことがらはあろうとも、喜びをもつことを皆さんに教えたいと思うのであります。忠告や友愛の手が皆さんを善へ押しやる手段であった時期は、もう過ぎ去りました。こんにちでは、真理はもう命令であります。そして救済への道は、すなわち赤い猪槍がそれを皆さんにさし示し、またそこへ押しやるのであります。ここにこそ、皆さん、あらゆるもののうちに善と悪とを置き、怒りとあわれみと、ペストと救済とを置きたもうた神の慈悲が、ついに明らかに顕現されているのであります。皆さんを苦しめているこの災禍そのものが、皆さんを高め、道を示してくれるのであります」

「ずっと皆のことでありますが、アビシニアのキリスト教徒たちは、ペストというものを、永生をかちうるための、神から出た、有効な手段というふうに見ておりました。ペストにかかっていない者たちは、みずからペスト患者の毛布にくるまって、確実に死のうとしました。もちろん、こういう狂熱的な救済欣求は推賞すべきではありません。そこにはじつに傲慢にも近い、遺憾とすべき性急さが表われております。神以上に急いではならず、およそ神がひとたび永久に建てたも

後には「真理の収穫を準備する種まきのために」人類の血と苦痛とをまき散らすありさまを描いて見せたりした。

この長い一節が終ると、パヌルー神父は、髪を額にたらし、全身を震わし、その震えを両手の先から説教壇にまで伝えながら、ちょっと休止した。それから、今までよりももっと内にこもった、しかし責めるような調子で、また話しつづけた――「そうです。反省すべきときが来たのであります。あなたがたは、日曜日に神の御もとを訪れさえすればあとの日は自由だと思っていた。二、三度跪坐しておけば罪深い無関心が十分償われると考えていた。しかし、神はなまぬるいかたではないのであります。そんな遠々しい交わりでは神の飽くなき慈愛には十分でありません。した。神はあなたがたともっと長く面接することを望んでおられたのであります。それが神のあなたがたを愛したもう愛し方であり、またじつをいえば、これこそ唯一の愛し方なのであります。こういう次第で、あなたがたの来ることに待ち疲れたもうた神は、災禍があなたがたを訪れるに任せ、およそ人類の歴史なるものが生れて以来、罪ある町のことごとくに訪れたごとく、それが訪れるに任せたもうたのであります。あなたがたは今や罪の何ものたるかを知るのであります――カインとその子らがそれを知ったように、洪水以前の人々が、ソドムとゴモラ（訳注　いずれも旧約創世記中の町）の人々が、ファラオンとヨブとまたすべてののろわれし者どもがそれを知ったように、知るのであります。そしてこの町があなたがたとこの災禍を閉じこめて囲いを閉ざした日以来、あなたがたはちょうどそれらすべての人々がしたように、一つの新たな目を生きものや事物の上に向けているのであります。あなたがたは今こそ、そしてついに、本質的なものに帰

生きていて、まったく地獄へ落ちてしまったと嘆いたことに、言及した。つまりそれは、マシウー・マレーは盲いていたのである！ それどころか、かつて今日ほど、パヌルー神父は、万人に差出された神の救いとキリスト者の希望とを感じたことはないのである。彼はあらゆる希望を越えて、わが市民がこの日々の惨状と瀕死の人々の叫びにもかかわらず、キリスト者の唯一の言葉たる、すなわち愛の言葉を天に捧げるであろうことを期待している。その余のことは神がなしたもうであろう。

この説教がわが市民たちに影響を与えたかどうか、それをいうことは困難である。予審判事のオトン氏はリウーに向って、自分はパヌルー神父の論旨は「まったく反駁の余地がない」と思うと明言した。しかし、誰も彼もが、それと同じように明確な意見をもったわけではなかった。ただ、この説教はある人々に、それまではおぼろげであった観念、すなわち自分たちは何か知らない罪を犯した罰として、想像を絶した監禁状態に服させられているのだという観念を、一層はっきりと感じさせたのである。そして、ある人々が相変らず彼らのささやかな生活を続け、幽閉状態に順応していたそのとき、反対に他の人々にとっては、彼らの唯一の考えは、そのときからもうこの牢獄を脱出することであった。

人々は最初外部から遮断されることを、彼らの習慣の幾つかをかき乱すにすぎない程度の、なんだろうと、とにかく一時的な不愉快事を受入れるようなつもりで、受入れたのであった。とこ

うた不易の秩序を早めようなどとすることは、すべて異端に導くものであります。しかし、少なくともこの例は、それとしての教訓を含んでおります。もっとはっきりすべてを見ることのできる私どもの曇りなき精神にとっては、それはすべての苦悩の底に宿る、かの永生の無上の輝きを一層輝かしいものとするばかりであります。この輝き、それは解放に至るほの暗い道々を照らすものであります。あやまつことなく悪を善に変えたもう、神の御心を示現するものであります。今日もなお、死と懊悩と叫喚のこの歩みを通じて、それは私どもを本質的な静寂に、あらゆる生活の本義に導いてくれるのであります。これこそ、皆さん、私が皆さんにもたらしたいと願った広大無辺の慰めなのであり、つまりこれを述べることによって、皆さんにはこの席から、単に懲戒の言葉ばかりではなく、また心をなごめる生気をももち帰っていただきたいのであります」

人々はパヌルーがいうべきことを終ったと感じた。外では、雨はやんでいた。水分と日光の入りまじった空が、ひときわ若々しい光線を広場に注いでいた。街路のほうからは、人声や車馬のきしめきや、ふたたび活動しはじめた町のいっさいのさざめきが上ってきた。聴衆はかすかにざわつきはじめながら、そっと身のまわりのものを集めていた。神父はしかしながらふたたび言葉を次いで、ペストが神から出たものであることと、この災禍の懲戒的な性格とを明らかにした以上は、自分のいうべきことは終ったのであり、最後の結びのために、このように悲劇的な題目に関して場違いというべき雄弁術に助けを求めることはしないつもりである、といった。彼には、何もかもすべての人々にとって明瞭であることと思われるのである。彼はただ、マルセイユの猛ペストのさい、その記録者マシウー・マレー（訳注　ルイ十五世時代のパリ裁判所付き弁護士）がこのように救いも希望もなく

た。

疲労も手伝って、彼はのどがかわいたのを感じた。

「何か飲みましょう」

彼らのはいった、カウンターの上方のたった一つの明りで照らされている小さなカフェでは、人々がどんよりした赤っぽい空気のなかで、別になんというわけもなく声を低めて話し合っていた。カウンターで、グランは、リウーが驚いたことに、アルコールを注文してそれを一気に飲み乾し、そして自分はそのほうはいける口だと明言した。それから彼は外に出ようといった。外へ出ると、リウーにはあたりの夜がうめき声で充満しているように思われた。街燈の上のあたり、暗黒の空のどこかに、ふと鈍いうなりの音が聞え、それが、熱い空気を飽くことなくかきまわしている目に見えぬ殻竿を思い起させた。

「よかった、よかった」とグランはいっていた。

リウーは、彼が何をいおうとしているのかいぶかった。

「よかったですよ、私には自分の仕事があって」と、相手はいった。

「そう、それは一つの強みですね」と、リウーはいった。

そして、うなりの音に耳を向けまいと心をきめて、彼はグランにその仕事が思いどおりにいっているかどうかと尋ねた。

「それがね、どうやらうまくいきそうに思ってるんです」

「まだ長いことかかるんですか、そいつは？」

ろが、夏の燃え盛りはじめた空がまるで蓋をしているような一種の監禁状態を突如意識して、彼らは漠然とこの蟄居が彼らの全生活を脅やかしていることを感じ、そして、夜になると、涼気とともによみがえる精力が、ときとして彼らを自暴自棄の行為に走らせるのであった。

最初まず、そしてこれは偶然の暗合の結果であるかどうか、すなわちこの日曜日を境として、われわれの町にはかなり一般的かつ深刻な一種の恐怖が生じ、それは、市民たちが彼らの置かれた状況について真に自覚しはじめたことを臆測させるものがあった。この観点からすれば、この町でわれわれの暮してきた雰囲気は多少変ってきた。しかし、実際のところ、変化は雰囲気にあったのか、あるいは人々の心にあったのか、そこが問題である。

説教から幾日もたたないころ、リウーはグランといっしょに今度の出来事についてあれこれと話し合いながら町はずれの方へやって行くと、前方のやみのなかで一人の男がふらふらしながら前に進もうともせずにいるのにぶつかった。ちょうどこの瞬間、次第にますます遅くつくようになっていた町の街燈が、突如輝き渡った。二人の散歩者の背後にある高い街燈が、急にその男を照らしだし、男は目をつぶったまま、声もたてずに笑っていた。声もない高笑いにたるんだその蒼白な顔には、大粒の汗が流れていた。二人は通り過ぎた。

「気違いですね」と、グランはいった。

リウーはグランを急いで引っ張っていこうとしてその腕をつかんだところであったが、グランが神経の発作で震えているのを感じた。

「そのうち気違いしかいなくなるだろうな、この町の囲いのなかには」と、リウーはつぶやい

ランはその間も相変らず話しつづけ、そしてリウーにはこの好人物のいうことがすっかりはつかめなかった。ただわかったことは、問題の作品はすでにおびただしいページ数に達しているが、しかしそれを完璧なものに仕上げるために作者の注いだ労苦は彼にとってまことに苦しいものだったということであった。「幾晩も幾週間もすっかりつぶしちまうことがありますからね、言葉一つのために……。しかもそれがときには単なる接続詞一つだったりするんです」ここまでいうと、グランは立ち止り、リウーのマントのボタンをつかんだ。言葉が、引っかかり引っかかり、歯の抜けた口から出てきた。

「わかっていただけますかね、先生。ぎりぎりの場合、《しかし》と《そして》とどちらを選ぶかということはかなり容易です。それがもう、《そして》と《それから》とどっちにするかということになると、だいぶむずかしくなってきます。《それから》と《次に》とではますますむずかしくなります。しかし、なんといっても、いちばんむずかしいことは、《そして》を入れるべきか入れるべきでないかを判断することです」

「そうでしょうね、それはわかります」と、リウーはいった。

そういって、彼はまた歩きだした。相手は当惑したような様子で、またいつもの彼らしさに返った。

「失礼しました」と、彼は早口につぶやいた。「まったくどうしたんだか、今夜は！」

リウーは軽くその肩をたたいて、自分は彼に力を貸したいと思っているし、彼の話はたいへん興味がある、といった。相手はやや気が晴れた様子で、家の前まで来ると、少しためらったの

グランは活気づいた様子で、アルコールの熱っぽさが声にも出てきた。

「さあ、どうですか。しかし、問題はそこじゃないんですよ、先生、そんなことは問題じゃありません、まったく」

暗闇のなかで、リウーには彼が腕を振動かしているのがわかった。彼は何かしら話しだす準備を整えている様子であったが、それが突然能弁に口をついて出てきた――

「私の望むところはですよ、いいですか、先生、つまり原稿が出版屋のところへいった日にですね、その出版屋がそれを読んでから立ち上がって、社員たちにこういうってことなんです――《一同、脱帽！》」

この突然の宣言はリウーを驚かした。どうやらグランは、片手を頭にやり、それから腕を水平に伸ばして、脱帽の身ぶりをしたようであった。上空では、例の奇妙なうなりが一層強く聞えはじめたように思われた。

「そうです」とグランはいった。「それは完璧なものでなきゃなりません」

文壇の慣習というものについてはほとんど知識がなかったが、リウーはそれでも、ものごとがそう単純には運ばないであろうし、またたとえば出版屋の連中も事務所では帽子をかぶっていないに違いないというような気がした。しかし、実際には、どんなことがないともしれないし、リウーは黙っているほうがいいと思った。知らず知らず、彼はベストのひそやかな気配に耳を傾けていた。もうグランの住んでいる界隈に近づいて、そのあたりはちょっと小高くなっているので、軽い微風がさわやかに感じられ、同時にそれが町からすべてのもの音を吹き払っていた。グ

だいたのであった。グランの声が低く起った――「美しく晴れた五月の月の朝まだき、一人の端麗な女騎手が、颯爽たる栗毛の牝馬にまたがり、ブーローニュの森の花咲き乱れた小道を駆けめぐっていた」。ふたたび沈黙が広がり、そしてそれといっしょに、苦悶する町のあの定かならぬざわめきがまた聞えてきた。グランは紙片を置き、そして相変らずそれをながめつづけていた。ややあって、彼は目を上げた――

「どうお考えです?」

リウーは、その書き出しによってさらに先のほうを知りたい興味をそそられた、と答えた。しかし、グランは気負った調子で、そういう見方は正しくない、といった。彼は掌で紙片の上をたたいた。

「これはまだ、大体それに近いところまで行ってるだけなんです。私が自分の想像に描いている画面を完全に写し出すことに成功して、私の文章がその速足の散歩の《一二三、一二三》という調子そのままの文章になった暁には、そうなればあとはもっと楽ですし、何より目に見えるような情景がもう冒頭から鮮やかで、いきなり《脱帽》といわれる可能性さえあります」

しかし、そのためには、彼はまだしなければならぬことがたくさんある。彼はこの文章を現在のままのかたちで印刷屋に渡すことは絶対に肯んじないであろう。というのは、ときたまこの文章に満足を感じることはあっても、それがまだ現実に完全に密着していないことに気がついているし、またある程度、調子の安易なところがあって、それがこの文章を常套的なものに、わずかながらとはいえ、ともかくも近づけているには違いないからである。これが、ともかく、彼のい

ち、ちょっと上がっていかないかと医師に勧めた。リウーはそれに応じた。

食堂で、グランは、顕微鏡で見るような字が書きつけられているいちめん消したあとだらけの紙片のいっぱい載った、机の前にすわるように勧めた。

「ええ、そうなんです」と、目で問いかけた医師に、グランはいった。「ところで、何かお飲みになりませんか。酒が少しありますよ」

リウーは断わった。彼はそれらの紙片をながめていた。

「見ないでください」と、グランはいった。「そいつは冒頭の一句なんです。これで苦労しましてね、ずいぶん苦労させられています」

彼自身もしきりにそれらの紙片をながめていたが、彼の手は打勝ちがたい力でそのうちの一枚にひきつけられるらしく、彼はそれを取りあげて、笠のない裸電球の前にすかして見た。紙片は彼の手のなかで震えていた。リウーはグランの額が汗ばんでいることに気づいた。

「まあ、腰をおろして」と、彼はいった。「ひとつそいつを読んで聞かせてください」

相手は彼の顔をながめ、一種の感謝をこめてほほえんだ。

「そうですね」と彼はいった。「自分でも聞いていただきたいような気がします」

彼は相変らずその紙片をながめながら少し待ち、それから腰をおろした。リウーはそれと同時に、はっきりしない羽音のようなものを聞いたが、それは町のなかであの殻竿のうなりに答えているもののように思われた。彼はまさにこの瞬間、足下に広がるこの町――この町が形作る閉ざされた世界と、この町が暗夜のなかに圧し殺している恐るべき叫喚との――異常に鋭い知覚をい

れた考えを持っている人々であった。係争とか保険とかいう問題にかけては、しっかりした免許状と明らかな善意を勘定に入れないでも、争う余地のない知識の持主たちであった。しかも、そのすべての人々に最も顕著だったことといえば、それは善意ということであったといえるくらいである。しかし、ペストの問題となると、彼らの知識はほとんど無に近かった。

それでも彼らの一人一人の前で、そしてそれができうるたびごとに、ランベールは自分の立場を弁明した。彼の議論の根底は、相変らず、自分はこの町に無縁の人間であり、したがって自分の場合は特別に検討さるべきだというにあった。大体において、ランベールの会談した人々は、異議なくその点を認めた。しかし彼らは通例、それと同じ場合の人々は他にも若干数あり、彼の問題は彼が思っているほど特殊なものではないということを、考えさせようとするのであった。それに対してランベールは、そのことは自分の議論の根底をなんら変えるものではない、とやり返すことができたが、相手はそれに答えて、そのことは行政上の難点について幾分の相違をもたらすものであり、はなはだしい嫌忌の表明をもって《前例》と呼ばれるところのものを作りだす危険のあるような、いっさいの特恵的措置は排されねばならぬ、といった。ランベールが医師リウーに提案した分類に従えば、この種の議論をなす人々は、形式屋の範疇を構成するものであった。彼らと並んでさらにまた口上手な連中もいて、依頼者に向ってこんなことは何もかもそういつまで続くものではないと安心させ、はっきりしたことを求められるとやたらに親切な助言をふりまくやり方で、これは単に一時的な不愉快なのだときめてしまってランベールを慰めようとした。またもったいぶった連中もあり、来訪者に向って自分の場合についての要点をしるした覚え

ったことの意味であったが、そのとき、窓の下を人々が走っていく足音が聞えた。リウーは立ち上がった。

「まあ、見ててください、どんなふうにできるか」と、グランはいった。それから、窓のほうを振向いて、こう付け加えた――「この騒ぎがすっかり済んだうえでですがね」

しかし、あわただしい足音はまた始まった。リウーはもう下へ降りかけていたが、路上へ出たとき、二人の男が前を通り過ぎていった。明らかに、彼らは町の門のほうへ行くのであった。市民のなかのある人々は、事実、暑さとペストのはさみ撃ちで分別を失ってしまい、早くも不法手段に走り、関所の警戒の目をくぐって町の外へ逃げだそうと試みていたのである。

別にまたランベールのような人々は、やはりこのきざしはじめた恐慌の空気から逃げだそうとして、一層好首尾にとはいえないまでも、一層根気強くまた巧妙にそれを試みていた。ランベールは最初まず正面からの奔走を続けた。彼のいうところによれば、彼はいつも根気強さは結局あらゆるものに打勝つと考えていたし、またある観点からすれば、難関を巧みに切り抜けることは彼の本職であった。そこで彼はおびただしい数の役人や種々の人々に会ったが、それはふだんならその職務能力については議論の余地のない人々であった。ところが、この問題に関する限り、その能力も彼らにとってなんの役にもたたなかった。彼らは、たいていの場合、銀行とか、輸出とか、柑橘類とか、あるいはまた酒の取引きとかいうことに関しては、およそ正確な、よく整理さ

が送られてき、それに正確に記入するようにということだったのである。調査票は、彼の身元、家族状況、過去および現在の収入、それから彼の履歴（クリクルム・ヴィタエ）と称されるものなどのことを気にかけていた。彼は、それがふだんの居住地に送り返される可能性のある人々の件数を調査することを目的とした調べである、というふうに感じた。ある役所で聞きこんだ二、三のおぼろげな情報もこの感じを裏書きした。ところが、幾つかの型どおりの手続きを経て、やっとその調査票を送ってきた課に当ってみることができたが、すると先方がいうには、その調査は《万一の場合のために》行われたのだということであった。

「つまり、どういう場合です？」と、ランベールは尋ねた。

すると、相手はその点を明確にして、それはつまり彼がペストにかかって死んだ場合、一方では家族に通知できるようにするためであり、また一方では病院の費用を市の予算に計上すべきか、それとも近親者からの弁済を期待しうるかを知るためであるということであった。明らかに、これは、彼が自分を待っている彼女から完全に引離されてはいないことを証明しており、社会は彼ら二人のことを考慮に入れていたのである。しかし、それは慰めにはならなかった。それよりも注目すべきことは、そしてランベールもそれゆえそこに注目したのであるが、それは、ある変災の絶頂においても、一つの役所が相変らずその事務を続け、そしてそれがその事務のために設けられた役所だというそれだけの理由で、しばしば最高当局も知らぬ間に、さらに別の時期についての自発的な方策をとるという、その動き方であった。

それに続いた時期は、ランベールにとって最も楽でもあればまた最もつらくもあった時期であ

書を置いていくようにいい、そしてこの場合についてはいずれ規定を設けるであろうと通知してきた。いい加減な連中は、宿泊券や格安の下宿の番地を提供しようとした。方式屋は、カードに記入させ、それからカードを分類した。忙殺されている連中は両腕をあげ、うるさがっている連中は目をそむけた。最後に慣例派が、これは他を引離して最も多く、ランベールに向って別の役所や、あるいはさらにとるべき新たな手続きを指示した。

ランベールはこうして人を訪ねることで疲れ果ててしまい、そして模造皮の腰掛に腰を下ろし、免税の国債の申込み勧誘や植民地軍志願の勧誘の大きな掲示の前でしょっちゅう待っているうちに、また、そこにいる人々の顔つきが、つづりこみや書類棚と同様、容易に予想されるような事務室にしょっちゅう出入りしているうちに、彼は市庁あるいは県庁なるものがそもそもいかなるものでありうるかということについて、一つの正確な観念をもつようになった。そんなふうにしていて、得をしたことといえば、ランベールが一抹の苦渋を混えてリウーにいったように、つまりそういうことのおかげで真実の事態が彼の目から遮られていたということである。ペストの進行には、実際上、彼は気がつかないでいた。さらにそれ以外にも、そうやっていると日のたつのが早く、そして町じゅうすべてのものが置かれていたその状況のなかでは、一日過ぎ去るごとに、一人一人の者が、万一死にさえしなければ、試練の終りにそれだけ近づいたわけであった。リウーもこの点が真実であることは認めなければならなかったが、しかしそれにしてもこれはいささか大ざっぱにすぎる真実であると思われた。

ひところ、ある時期に、ランベールは希望をいだいたことがあった。県庁から未記入の調査票

外部からはいれる待合室は開かれたままになっていて、ときどき、乞食たちが、暑さの烈しい日には影になっていて涼しいので、そこに陣取っていた。ランベールはそこへやって来ては、昔の時間表や、唾を吐くことを禁じるはり札や、列車内の警察規則などを読んでみるのであった。それから、彼は一隅に腰を下ろす。室内は暗い。古い鋳物のストーブが一つ、古臭い手法の八面の模造画に囲まれて、もう何カ月も冷えきったままになっている。壁には幾つかのビラが、バンドル（訳注　南仏の避寒地として知られた小村）あるいはカンヌにおける幸福にして自由なる生活のために弁じている。ランベールはここで、窮迫のどん底に見出されるあのむごたらしい自由ともいうべきものに触れていたのであった。そのとき、彼にとって心に浮ぶのが最もつらかったイメージは、少なくとも彼がリウーに語ったところによれば、パリのイメージであった。古い石壁と水の風景、パレー・ロワイヤルの鳩、北停車場、人気のないパンテオン界隈など、その他自分がそれほど愛していたとは知らなかったその町の幾つかの場所が、そうなるとランベールの心に付きまとい、何ひとつ、これときまったことはできなくしてしまうのであった。リウーはしかしながら、ランベールはそれらのイメージを彼の愛のイメージと一つに見ているのだと思った。そして、ランベールが、朝の四時に目をさまして自分の町のことを考えるのが好きだと語った日にも、リウーは自身の経験の奥にあるものに照らして、つまり彼は自分の残してきた女性のことをそのとき想像するのが好きなのだと、造作なく解釈し直すことができたのであった。それは事実、彼が彼女を捕えることのできる時刻であった。朝の四時までは、人々は一般になんにもせず、そしてたといその夜が裏切りの夜であったとしても、ただ眠っている。実際、この時刻には、人々は眠っており、そしてこ

った。それはつまりぐったりしていた時期である。彼はあらゆる役所を訪れ、あらゆる奔走を行なったが、この方面の出口はさしあたりふさがれていた。彼はそこでカフェからカフェへさまよい歩いた。朝がた、どこかのテラス席に、一ぱいのなまぬるいビールを前にしてすわり、病疫の近く終りそうな何かの兆候でも見つかりはしないかと希望をかけながら新聞を読み、道を通る人人の顔をまじまじとながめ、その悲しげな表情にうんざりして目をそむけ、それから、真向いにあるいろんな商店の看板や、もうどこでも出さなくなった名題の食前酒の広告などをすでに百回も読み返したうえで彼は立ち上がり、市中の黄色っぽい街々を足の向くままに歩いていった。孤独な散歩からカフェへ、カフェからレストランへと、そんなふうにしながら夕刻にたどり着くのであった。リウーはちょうどある夕方、ランベールがとあるカフェの入口で、はいろうとしてためらっているのを見かけた。やがて決心したらしく、店の奥へ行って腰を下ろした。ちょうど、カフェでは、上からの命令で、明りをつける刻限をそのころはできるだけ遅らしていたその時刻であった。黄昏の影はあたかも灰色の水のように店内に侵入し、夕空の薔薇色は窓ガラスに反映し、そしてテーブルの大理石が、漂いはじめた暗がりのなかでほのかに光っていた。人気のなくなった店内のまんなかで、ランベールはとり残された亡霊のように見え、つまり彼の放心の時刻なのだなとリウーは思った。しかし、それはまた、この町に囚われているすべての人々が彼らの放心を感じる瞬間であり、そして解放を早めるためには何ごとかをなさねばならなかった。

リウーはきびすを返した。

ランベールはまた駅で長いおりおりを過した。ホームに近づくことは禁じられていた。しかし

上にじっと聞き耳をたてているのを見かけたものである。しかし、こういう長期間にわたるたびたびの警報を経て、どの人間の心臓も硬化したように思われ、みんな、それらの愁嘆が人間の自然な言葉でもあるかのように、そのかたわらで歩いたり生活したりしていた。

市門での騒動は、その際憲兵は武器の使用を余儀なくされたのであったが、なんとなく不穏な気配をかもしだした。たしかに負傷者はあったに違いないが、しかし市中では死亡者のうわさまで出て、暑さと恐怖のせいですべてが誇張された。いずれにしても、不満は刻々増大するばかりで、当局も最悪の事態を恐れて、こうして災禍のなかにとりこめられている住民が万一反抗に走った場合に、とるべき措置を真剣に考慮したことは事実である。新聞には、町から出ることを重ねて禁止し、違犯者には投獄の刑をもって臨む旨の布告が発表された。パトロール隊が市中を巡回していた。よく、人気のないほてりきった路上で、舗石に当る蹄の音をまず前触れにして、騎馬の警備隊が閉ざされた窓の列の間を通って進んでくるのが見られた。パトロール隊の姿が見えなくなってしまうと、疑心の漂う重苦しい沈黙が、脅やかされた町の上にふたたびおおいかぶさるのであった。ときおり間遠に、最近の命令で蚤を伝播するかもしれない犬や猫を殺す任務を持った特別隊の、発砲の音が響いた。このけたたましい爆発の音は、それも一つの原因となって、市中にただならぬ空気を漂わせた。

暑さと沈黙のなかで、しかも市民たちのおびえきった心にとっては、元来あらゆるものが普通以上の重さをもつようになっていた。空の色や土の香など、季節の移り変りをなしていたものが、はじめてすべての人々に感じられるようになった。みんなが、暑熱は病疫を助長するであろ

れは心を安らかならしめることである。というのが、不安な愛情の切なる願いは、自分の愛する者を際限なく所有していたいということ、あるいは、万一そばを離れるときが来た場合には、その愛する者を、ふたたびいっしょになる日まで終ることのない、夢も交えぬ眠りのなかに、できれば沈めておきたいということだからである。

説教があって間もなく、暑さが始まった。もう六月の終りになっていた。説教のあった日曜日を印象づけたあの季節遅れの雨の翌日には、夏が一足とびに空と家々の上に照り渡った。激しい熱風が、まずまき起り、それがまる一日吹きつづけて、家々の壁を乾燥させた。天気はすっかり定まった。暑熱と光線の絶え間ない波が、日がな一日、町を浸しつづけた。アーケードのある街路と高層建築内の住宅以外には、それこそ目のくらむような反射のなかに置かれないところは、市内に一つもないように思われた。太陽は市民たちをあらゆる街角に追いまわし、そして万一立ち止りでもすると、たちまち襲いかかった。この最初の暑熱が、週七百名近い数に上った犠牲者の鰻のぼりの上昇と一致したので、一種の鎖沈の気が町にみなぎった。町はずれのあたりの、歩道のない街路と露台付きの家々の間では、活気が薄れ、そして人々がいつも戸口で暮していたこの界隈も、すべての扉は閉じられ、鎧扉は閉ざされ、しかもそれがそうやってペストから身を守るつもりなのか、それとも日光からなのか、どちらとも知りえないのであった。幾つかの家からは、それでも、うめき声が聞えていた。以前は、そういうことが起ると、よく物見高い連中が路

るが、病疫の一段階が画されたのは、ラジオがもう週に何百という死亡数ではなく、日に九十二名、百七名、百二十名というような死者を報じるようになったときであった、と的確な観察をもって記している。「新聞と当局とは、ペストに対してこのうえもなく巧妙に立ちまわっている。彼らは、百三十は九百十にくらべて大きな数ではないというわけでペストから得点を奪ったつもりなのである」。彼はまた、病疫の悲壮な、あるいは芝居めいた様相も描きだして、鎧扉を閉ざした人気のない街の一角で、彼の頭上の窓を突然押し開き、大きな叫び声を二度あげてから、深く陰のたちこめた部屋にまた鎧扉を下ろしてしまった、そんな一婦人のことなどを述べている。しかし、また別のところでは、ハッカのドロップが薬屋から姿を消してしまったが、それは多くの人人が、不測の感染を予防するために、それをしゃぶるようになったからである、と記している。

彼はまた自分の気に入りの人物たちの観察も続けている。それによれば、例の小柄な猫の老人も、同様にまた悲劇のなかに生きていたことがわかる。事実、ある朝、数発の銃声が響き、そしてタルーも書いているように、幾つかの鉛の唾が大部分の猫を殺し、その他の猫はおびえてその街からいなくなってしまった。同じ日、小柄な老人はいつもの時間にバルコニーの上に出てきたが、はっきりとある驚きの色を示し、身を乗り出して街路の果てまで見きわめ、それからあきらめて待っていた。その手は小刻みにバルコニーの柵をたたいていた。彼はまだ待ち続け、紙を少しばかり切りこまざき、なかへ引っこみ、また出てき、それから、ある時間たつと、窓口の戸を腹だたしげに背後に閉めて、突然姿を消してしまった。その後数日、同じような場面が繰返されたが、しかし小柄な老人の風貌には、悲しみと混乱の色が日一日とあらわになってくるのが読み

うことを恐怖の念をもって理解し、しかもそれと同時に、夏がいよいよ本格的になったことをみんな見てとったのであった。夕べの空の雨燕の鳴き声も、町の上空にずっとか細くなってきた。それはもう、地平線がこれまでより遠く遙かになる六月のこの地方の黄昏どきには、そぐわないものであった。市場の花も蕾では来なくなり、すでに咲ききっていて、朝の販売の後では、その花びらが埃っぽい歩道に散乱していた。春は哀え果てたこと、いたるところに次々に咲きでた幾千の花に力を使い尽して、今やペストと暑熱の二重の圧力の下に徐々に圧し潰され、眠りにはいろうとしていることが、明瞭に看取された。市民一同にとって、この夏空、埃と屈託の色に染みて色あせていくこの街々は、毎日町の空気を重くしている百名ばかりの死亡者と、同じくらい心を脅やかす意味をもっていた。絶え間のない日ざし、眠りと休暇の思いをそそられるその刻々も、もう以前のように水と肉体との饗宴をそそのかすことはなかった。逆にその時刻は、閉ざされてひっそりとした市中に、うつろなものを響かせた。幸福だった季節のその銅色の輝きは失われてしまった。ペストの日ざしは、あらゆる色彩を消し、あらゆる喜びを追い払ってしまったのである。

これは病疫による大きな革命の一つであった。市民一同は、ふだんは嬉々として夏を迎えていた。町はそのころは海に向って開かれ、町の若ものどもを浜べに押しだすのであった。この夏はこれに反して、近くの海も禁止され、身体はその楽しみを味わう権利を失ってしまった。こういう条件のなかで、いったいどうしたらいいか？　これもやはりタルーが、当時のわれわれの生活の最も忠実な面影を伝えている。彼は、もちろん、全般的に見たペストの進行の跡をたどってい

ずだということを、もちだすのを忘れなかった。彼はよくタルーに、病疫の続くおおよその期間を見積ってくれるように頼んだ。「話によると」と、タルーは一つの意見をあげた――「寒さっていうものをこういう種類の病気はきらうそうですがね」。支配人は滅相もないという様子で――「だって、ほんとに寒くなるなんてことはないじゃありませんか、ここじゃ。いずれにしろ、それじゃまだ何カ月ってありますぜ」。彼はそれに、旅行者はそれからまだ長い間、この町に寄りつかないであろうと確信していた。今度のペストは観光旅行の破滅であった。

食堂では、ちょっと姿を見せなかったあとで、例のふくろう男のオトン氏がふたたび現われるのが見られたが、しかし今度は例の学者犬みたいな二人のちびさんを連れているだけであった。得られた情報によると、細君は自分の実母の看病をして葬式を済まし、目下隔離期間に服しているということであった。

「どうもいやなんですがね、こんなのは」と、支配人はタルーにいった。「隔離期間だろうがなんだろうが、奥さんのほうはあやしいんだし、したがってあの人たちだってやっぱりあやしいんですよ」

タルーは、そういう見方をすれば誰だってあやしいのだということを考えさせようとした。しかし相手はまったく旗幟鮮明で、その問題については実にはっきりした見解をもっていた。

「そんなことはありませんよ。あなただって、私だって、あやしいなんてことはないんです。それが、あの人たちのほうはあやしいんです」

しかし、オトン氏はそれっぱかりのことで変りはしなかったし、今度ばかりはペストのほうの

とれた。一週間たつと、タルーはその毎日の出現をむなしく待たされ、窓はいかにもよくわかる悲しみをひそめて頑強に閉ざされたままであった。「ペスト流行時においては、猫に唾を吐きかけることを禁ず」というのが、手帳の結論であった。

一方また、タルーが夕方帰ってくると、いつもきまりきって、入口のホールで、縦横に歩きまわっている夜警手の暗い顔つきに出くわした。この先生はしょっちゅう人の顔さえ見れば、自分が今度の出来事を予知していたことをもちだすのであった。タルーが、彼が災厄を予言したのはたしかに聞いたことを認めて、しかし彼の考えていたのは地震ということだったのを指摘したのに対して、老警手はこう答えた――「まったく、こいつが地震だったらね！　がっと一揺れ来りゃ、もう話は済んじまう……。死んだ者と生き残った者を勘定して、それで勝負はついちまうんでさ。ところが、この病気の畜生のやり口ときたら、そいつにかかってない者でも、胸のなかにそいつをかかえてるんだからね」

支配人の弱りこみようもこれに劣らなかった。初めは、旅客たちも町を離れることができず、市の閉鎖によってホテルに引きとめられていた。しかし、次第に病疫が長びいてくると、多くの者は友人のところへ宿をとるほうがいいと思うようになった。そこで、ホテルのすべての部屋を満員にしていたその同じ理由が、それ以来それらの部屋を空っぽにしていたわけで、それというのが、この町には新たな旅客はもうやって来なかったからである。タルーは引続きごく少数の宿泊者の一人になっていたが、支配人は、おりさえあればタルーをつかまえて、最後のお顧客たちによくしてあげたいという気持さえなかったら、自分はもうとっくにこのホテルを閉めていたは

がら、もみ手をしてタルーを迎えた。彼は床のなかで、枕に背をもたせ、例の二つの豌豆の鍋の上に身をかがめていた。「やあ、またもう一人ですかい」と、タルーの姿を見て、彼はいった。「まったく世の中はさかさまになったね、病人よりも医者のほうが多くなっちまって。つまり、なんですかい、ばたばた片付いちまうってわけですかね？　神父様のおっしゃったとおりさね、まったく当然の報いでさ」。翌日、タルーは別に前ぶれもなしに、またやって行った。

彼の手帳にしるされたところを信ずるならば、喘息病みの爺さんは小間物屋を業としていたが、五十になったとき、もうこの商売もいい加減やり尽したと思った。彼は寝こんでしまい、それ以来もう起きなかった。彼の喘息はしかしながら、じっと立っていてもなんとかやっていけたのである。ささやかな年金のおかげで七十五まで暮してき、その年になっても陽気なものであった。彼は時計というものを見ると我慢がならなかったし、また実際、彼の家じゅう捜しても一つの時計もなかった。「時計なんてものは」と、彼はいっていた。「こいつ、高いもんでね、おまけにばかばかしいしろものでさ」。彼は時間を、それも特に彼にとって唯一の重要な時間である食事の時刻を、一方のには目がさめたとき豌豆がいっぱいはいっている、一つの鍋で測っていた。彼はいつも同じ勤勉な規則正しい動作で、一粒一粒、一方の鍋に豆を入れていく。彼はこうして、鍋で測られた一日のうちに目じるしとなるものを見出していたのである。「鍋十五はいになるたんび、わしのパン割りが人用になるってわけだね。まったく、簡単なことでさ」と、彼はいっていた。

もっとも、彼の女房のいうところを信ずるならば、彼はごく若いころから、そういう道を選ぶ

骨折り損であった。彼はおんなじやり方で食堂の部屋へはいっていき、子供たちより先に腰を下ろし、そして彼らに向っていつも上品な、意地の悪い口のきき方をしていた。ひとり、小さな男の児だけは外観が変っていた。姉と同じように黒い服を着、以前より少しかがまり気味になったところは、その父親の小さな影法師のように見えた。夜警手は、オトン氏がきらいで、タルーにこういったことがあった——

「まったく、あの先生ときちゃ、くたばるときも正装のままでしょうぜ。そうしときゃ、身じまいをする世話なんていりませんや。まっすぐあの世へ行けるってもんでさ」

パヌルーの説教もやはり報告されているが、しかし、つぎのような注がついている——「好感のもてるこの熱情的な気持は私にもよくわかる。災禍の初めとそれが終ったときとには、人々はつねに多少の修辞を行うものだ。第一の場合には、習慣がまだ失われていないのであり、第二の場合には、習慣が早くも回復されているのである。不幸の時期にこそ、人々は真実に、すなわち沈黙に慣れるのだ。今後を待とう」

タルーは最後に、医師リウーと長い会話を行なったことを記し、それについては単にそれがいい結果を得たことを指摘しているのみであるが、そのついでに母親のリウー夫人の目の明るい栗色に注意を向け、これほどまで善良さの表われている目つきはつねにペストに打勝つであろうと、彼女について奇妙な断言を行い、おしまいに、リウーが診ている喘息病みの爺さんに、相当長文の一節を割いている。

彼は医師との会見のあとで、いっしょに爺さんに会いに行った。爺さんは滅らず口をたたきな

かり、もし聖者の徳なるものが習慣の総和であるならば」

しかし、同時にタルーは、ペストに冒された町における一日のかなり精密な描写を試み、それによってこの夏の市民たちの仕事と生活について一つの的確な観念を提供している――「誰も、酔っ払い以外には笑うものはない」と、タルーはいっている。「そして、酔っ払いたちは笑いすぎる」。それから、彼はその描写の筆を起す――

「夜の明けそめるころ、かすかな息吹きがまだ人気のない町を渡っていく。夜中の死と昼の苦悶との間に位するこの時刻には、ペストもいっときその努力を中止し、ひと息つくように思われる。すべての店はしまっている。しかし、そのうちの幾軒かには、《ペストのために閉店》のはり紙があり、もうしばらくしてもほかの店といっしょに開店はしないであろうことを明示している。まだ眠っている新聞売子たちはニュースを叫びたてはしないが、そのかわり街角に背をもたせかけたまま、夢遊病者のような身ぶりでその商品を街燈のほうへ差出している。もうしばらくしたら、最初の電車で目をさまして町じゅうへ散らばっていきながら、《ペスト》という言葉の大きく目につく紙面を腕をいっぱいに伸ばして差出すことであろう。《ペストは秋まで続くか？B教授は否と答える》。《死亡者百二十四名に達す――ペスト九十四日目の現状》

「用紙の危機はますます激化し、ある種の定期刊行物などはページ数を減らすことを余儀なくされたにもかかわらず、《病疫時報》という別の新聞が創刊され、その任務と称するところは、《病疫の進行あるいは衰退について、厳密な客観性に留意しつつ、市民に報告し、病疫の今後に関して最も権威ある証言を提供し、有名無名を問わず、災禍と戦う意志あるすべての人々にその紙面

のに向いた兆候を示していた。事実、何ものも、彼の仕事も、友達も、カフェも、音楽も、女も、散歩も、かつて彼の興味をひいたことがなかった。彼はついぞ自分の町から出たことがなく、ただある日一度だけ、家族の用事でアルジェに行かなければならなくなったが、オランにいちばん近い駅で、どうしてもそれ以上冒険を進める気になれず、そこで打切ってしまったことがあった。彼は最初の汽車で家へもどってきた。

彼の営んでいる浮世離れのした生活に驚いた様子を見せたタルーに向って、彼はほぼこんなふうに説明した——宗教の説くところによれば、一人の人間の前半生は上昇、後半生は下降であり、下降期においてはその人間の一日一日はもはや彼のものではなく、いつなんどき奪い去られるかもしれないものであって、したがって彼はそれをどうすることもできず、そしていちばんいいのはなさにそれをどうもしないことなのだ。もっとも、矛盾撞着も一向彼の恐れるところではなかったわけで、その後間もなくタルーに向って、たしかに神は存在しないに違いない、なぜなら、そうでない場合には神父などというものは無用だろうから、といったりした。しかし、その言葉に続いていわれた幾つかの考察から、タルーはこの哲学が、その教区の頻繁な寄付金集めによってもたらされた彼の気分と密接につながっていることを理解した。しかし、老人の肖像の最後の仕上げとして記されているのは、一つの願望——どうやら心底からの願望らしく、話相手のタルーの前で何回となく繰返した願望——である。つまり、彼は非常に年をとって死にたいと願っているのであった。

「これは聖者であろうか?」と、タルーはみずから問うている。そしてこう答えている——「し

ことができる。病疫が増大すれば、道徳もまた拡大される。墓のほとりでのミラノの狂宴（訳注十六世紀ミラノ市の大ペストの際の挿話）がふたたび見られるであろう。

「正午になると、レストーランはまたたく間に満員になる。すぐさま、席の見つからなかった人人の小さな集団がその戸口に作られる。空はあまりの暑さに輝きを失いはじめる。大きな日よけの陰にはいって、食糧恐慌者たちは、日ざしにはじけそうな街路のほとりで順番を待っている。レストーランに押し寄せるというのは、それが大いに食糧補給の問題を簡単にしてくれるからである。しかし、レストーランでも、伝染に対する不安はそのままに残されている。会食者たちは、彼らの食器を根気よく拭き清めることに、長い時間を浪費している。少し前までは、こんなはり紙を出しているレストーランもあった――《当店では、食器は煮沸済みです》。しかし次第に、いっさいの広告を断念するようになってしまった。というのが、客は来ることを余儀なくされていたからである。客はそれに好んで金を使いたがった。純良もしくは純良と目された酒、最も高価な添え物など、まずそんなところから無軌道な競争が始まった。また、あるレストーランで、気分の悪くなった一人の客が、真っ蒼になり、立ち上がり、よろめき、そしてすぐさま店を出ていったというので、恐慌の場面がまき起ったこともあったらしい。

「二時ごろになると、町は次第に空っぽになり、そしてこれは沈黙と埃と日光とペストとが街頭で相会する瞬間である。ずっと、灰色の大きな家々に沿って、暑熱は、こやみなく流れつづける。長い捕われの時刻であり、それが終るころには、熱しきった夕暮れが、人出の多い、おしゃべりのあふれる町に落ちかかってくる。暑さの始まった最初のころには、たまにときおり、そし

で支持を与え、住民の上気を維持し、当局の指令を伝え、一言にしていえば、われわれを襲った不幸に対して効果的に戦うため、あらゆる人々の善き意志を結集すること》であった。実際には、この新聞は、ペストの予防に確実な効力のあるさまざまの新製品の広告を掲載することに、きわめて急速に限定されてしまった。

「朝の六時ごろになると、これらすべての新聞は、開店の一時間以上も前から店の入口に陣取っている行列のなかで売りはじめられ、ついで町はずれから満員になってやって来る電車のなかで売られる。電車は唯一の輸送手段となってしまい、昇降台も手すりもはち切れそうなほど積みこんで、やっとのことで前進している。それでも奇妙なことには、すべての乗客は、できうるかぎりの範囲で背を向け合って、互いに伝染を避けようとしているのである。停留所で、電車が積んできた一団の男女を吐き出すと、彼らは、遠ざかり一人になろうとして大急ぎのていである。頻繁に、ただの不機嫌だけに原因する喧嘩が起り、この不機嫌は慢性的なものになってきた。

「最初の電車が通っていってから、町は次第に目ざめ、一番早いビヤホールが、《コーヒー売り切れ》《砂糖ご持参ください》等々のはり紙のあるカウンターに面して戸を開く。それから商店が開き、街頭は活気づく。同時に、陽がさしはじめて、暑さが次第に七月の空を鉛色に染めていく。このころが、なんにもしていない連中の、大通りに出かけてみる時刻である。その大部分の者は、彼らの豪奢を見せびらかすことによってペストの病魔を祓うことを、みずからの任務としているように見える。毎日十一時ごろには主な幹線道路に、若い男たちと若い女たちのきらびやかな行列があり、そこに、大いなる災禍のさなかに増大するあの生きることへの情熱を感知する

彼が手帳のなかでいっているその会見は、タルーのほうからリウーに求めたのであった。リウーが彼を待っていた晩、ちょうど医師は、母親が食堂の片すみで一つの椅子にちんまり腰を下ろしているのをながめていた。家庭内の用事に手をとられていないときには、いつもそこで彼女は毎日を過しているのであった。両手を膝の上にそろえて、彼女は待っていた。リウーは、彼女がはたして自分を待ってくれているのかどうかさえ、はっきり知らなかった。しかし、それでも、彼が姿を現わすと、母親の顔のうちで何ものかが変化した。およそ労苦の生涯がその顔に印したいっさいの沈黙がちなものが、そのとき生気を帯びるように思われた。それから、彼女はふたたび沈黙のなかに沈むのであった。その晩、彼女は窓から、今はもう人気の絶えた街頭をながめていた。夜の照明は三分の二を減じられていた。そしてぽつりぽつりと、ごく弱い電燈の光が一つずつ、町の暗がりのなかに幾らかの反映を投げていた。

「明りを減らすっていうのは、ペストの間ずっと続けるのかねえ?」と、リウー夫人はいった。

「たぶんね」

「冬まで続かなきゃいいがね。陰気なこったろうよ、そうなったら」

「まったくね」と、リウーはいった。

見ると、母親の目は彼の額に注がれていた。彼は、最近数日の不安と過労が自分の顔を落ちくぼませていることを知っていた。

「うまくいかなかったの、今日は?」と、リウー夫人はいった。

「いや、いつものとおりですよ」

てなぜとも知れず、夕方まったく人気が絶えてしまうことがあった。しかし今では、涼気が訪れはじめると、希望ではないまでも、一つのくつろぎをもたらす。みんなそこで街頭へ出ていき、夢中になってしゃべったり、喧嘩をしたり、いちゃつき合ったりし、そして七月の赤い空のもとで、町は二人連れと喧噪の声を満載して、あえぐような夜に向って漂流しはじめる。毎晩、大通りで、啓示を受けた一人の老人が、ソフトをかぶり、ラヴァリエール・ネクタイをつけて、群衆のなかを横切りながら《神は偉大にまします。神のみもとに参りたまえ》と、ひっきりなしに繰返してもなんのかいもなく、みんなは反対に何かしら自分たちの十分知り尽していないもの、あるいは神よりももっと緊急だと思われるものの方へは せ集まるのである。最初、彼らが今度もほかの病気と同じようなものだと思っていたときには、宗教もその位置を保っていた。しかし、それがいよいよ本物だと見てとったとき、彼らは享楽ということを思い出したのである。昼間人々の顔に浮んでいるすべての懊悩の色は、そのとき溶け去って、熱く埃っぽい黄昏のなかで、一種の荒々しい興奮、それこそ全民衆が熱に浮かされたような、ぎごちない放縦さと化してしまうのである。

「そして私もまた、彼らと同様である。何も不思議はない。私と同様な人々にとって、死は何ものでもないのだ。それは一個の事件、彼らの態度が正しいことを証明する一個の事件なのである」

ってそういってるんだってことは、わかってますから」

戸口のベルが鳴り響いた。医師は母親にほほえんでみせてドアをあけに行った。階段口の薄明りのなかで、タルーの姿は、灰色の服を着こんだ大きな熊というかっこうであった。リウーは客を自分の仕事机の前に腰かけさせた。自分のほうは肘掛椅子のうしろに立ったままであった。彼らは、室内でたった一つつけてある、机上の電燈を隔てて対していた。

「あなたとは単刀直入にお話ができると思ってるんです」と、いきなり前置きもなしにタルーはいった。

リウーは無言のままうなずいた。

「あと半月か一月もすれば、あなたがたはこの土地でなんの役にもたたなくなってしまうでしょう。あなたがたは事件の進行に追いつけないのです」

「それは事実ですね」と、リウーはいった。

「保健課の組織がまるでだめです。あなたがたには人手も時間も不足している」

リウーはまたもそれが事実であることを認めた。

「聞くところによると、県では、一般救助作業に壮健な男子を義務的に参加させるために、一種の民間奉仕のようなものを考慮しているそうですね」

「お聞きの情報は正確なものです。しかし、不満の声がすでに相当あって、知事は躊躇しています」

「なぜ志願者を募らないんです」

いつものとおりですよ！　それはつまり、パリから送られた新たな血清が最初のものよりも効力がない様子で、統計が上昇しているということである。予防の血清接種をすでに患者を出した家庭以外にも行いうるだけの可能性は、相変らずえられていなかった。血清の使用を一般化するためには、それこそ工業的な量を必要としたであろう。リンパ腺腫の大部分のものは、あたかも硬化の季節でも来たかのようにどうしても口を開かず、そして患者を責めさいなんだ。昨夜から、病疫の新たな型を示す症例が市内で二つばかりあった。この場合、ペストは肺臓性のものになっていた。その日直ちに、ある会合の席上で、疲労困憊した医者たちは、途方に暮れた知事を前に置いて、肺ペストの場合には口から口へ行われる感染を防ぐために、新たな措置を要求し、その許しをえた。いつものとおり、相変らずなんにもわかっていなかった。

彼は母をながめた。美しい栗色のまなざしが、彼の心にかつての慈愛の年月をよみがえらせた。

「こわくなりましたか、お母さん？」

「この年になると、もうこわいものなんて、そうたいしてありゃしないよ」

「毎日毎日ずいぶん長い時間だし、それに僕がもうまるでそばにいないんだから」

「平気ですよ、待ってることぐらい、お前がきっと帰ってくるとわかってさえいればね。それに、お前がそばにいないときには、わたしはお前が今どうしてるか、ひとりで考えてるのさ。たよりはあったの？」

「ええ、調子はいいようです。最後に来た電報だけで見るとね。しかし、僕を安心させようと思

「もちろん、それはもうおわかりでしょうが、私は喜んで承諾します」と、リウーはいった。「どうしても手伝っていただく必要があります、ことにこういう仕事を手がけていれば。その考えを県に受諾させることは私が引受けます。それに彼らは択り好みなんてしてられないんです。しかし……」

リウーはちょっと考えた。

「しかし、この仕事は命にかかわるかもしれませんからね、よくご承知のことでしょうが。で、いずれにしても、私としては一応ご注意はしておかねばなりません。あなたはよく考えてごらんになりましたか？」

タルーは例の灰色の目で、リウーの顔をながめた。

「パヌルーの説教についてどうお考えです、あなたは？」

質問は自然な調子で発せられたし、リウーも自然な調子でそれに答えた。

「私はあんまり病院のなかでばかり暮してきたので、集団的懲罰などという観念は好きになれませんね。しかし、なにしろ、キリスト教徒っていうのはときどきあんなふうなことをいうものです、実際には決してそう思ってもいないで。結局、外に表われたところよりはいい人たちなんですがね」

「そのくせ、あなたもやっぱりパヌルーのように考えてるんでしょう、ペストにもいい効能がある、人の目を開かせ、考えざるをえなくさせる、っていうふうに？」

医師はいらだたしげに頭を振った。

「それはやってみたのですが、しかし結果は微々たるものでした」
「表向きの方法でやったんでしょう、それも多少、当てにはならないと思いながら？　彼らに欠けているのは、つまり想像力です。彼らは決して災害の大きさに尺度を合わせることができない。で、彼らの考える救済策といえば、やっと頭痛風邪に間に合うかどうかというようなものです。彼らに任せておいたら、みんなやられてしまいますよ、しかも彼らといっしょにわれわれまでも」
「それはありうることです」と、リウーはいった。「ただ申しあげておかねばなりませんが、彼らもそれでも囚人を使うことは考えたのです、つまり、まあ荒仕事といったようなことにですがね」
「私は、それを自由な人間がやってくれたほうがいいですね」
「私もそう思います。しかし、なぜなんです、結局のところは？」
「私は死刑の宣告というやつはまっぴらなんです」
リウーはタルーの顔を見つめた――
「それで？」と、彼はいった。
「それで、私は志願の保健隊を組織するための一つの案をもってるんです。私にそいつをやることを許していただいて、それで当局は抜きにしてやろうじゃありませんか。それに、彼らはどうせ手がまわらないんです。私はまあ、あちこちに友達がありますし、その連中がまず最初の中核になってくれるでしょう。そして当然、私も参加します」

も、ちゃんと教区の人々に接触して、臨終の人間の息の音を聞いたことのあるものなら、私と同じように考えますよ。その悲惨のすぐれたゆえんを証明しようとしたりする前に、まずその手当てをするでしょう」

リウーは立ち上がったが、その顔は今は陰のなかにはいっていた。

「やめましょう、この話は」と、彼はいった。「なにしろ、あなたが答えようとなさらないんだから」

タルーは椅子から動こうとせず、ほほえんだ。

「答えのかわりに、一つ質問をしてもいいですか？」

今度は、医師のほうがほほえんだ――

「謎がお好きですね」と、彼はいった。「まあ、承りましょう」

「つまり、こういうことです」と、タルーはいった。「ただ、あなた自身は、そんなに献身的にやるんですか、神を信じていないといわれるのに？　あなたの答えによって、あるいは私も答えられるようになるかもしれないんですがね」

陰のなかから出ようとはせず、医師は、それはすでに答えたことで、もし自分が全能の神というものを信じていたら、人々を治療することはやめて、そんな心配はそうなれば神に任せてしまうだろう、といった。しかし、世に何びとも、たといそれを信じていると信じているパスルーといえども、かかる種類の神を信じてはいないのであって、その証拠には何びとも完全に自分をうち任せてしまうということはしないし、そして少なくともこの点においては、彼リウーも、ある

「それは、この世のあらゆる病気がそうだという意味でね。しかし、この世の不幸というものに関して事実であることは、ペストの場合にも事実です。それはある人々を大ならしめるために役だつことがあります。しかしながら、それがもたらす悲惨と苦痛とを見たら、それこそ気違いか、盲人か、卑怯者でない限り、ペストに対してあきらめるなどということはできないはずです」

リウーはほとんど語調さえ高めていなかった。しかしタルーは、まるで彼を静めようとでもするかのように、手で制する身ぶりをした。彼はほほえんでいた。

「ええ」といって、リウーは肩をすくめた。「ところで、さっきの返事をうかがってませんが。あなたはよく考えてごらんになりましたか？」

タルーは肘掛椅子のなかでちょっとくつろいだ姿勢になり、頭を明りのなかへ突き出した。

「神を信じていますか、あなたは？」

質問はまた自然な調子でなされた。しかし今度は、リウーはちょっとためらった。

「信じていません。しかし、それはいったいどういうことか。私は暗夜のなかにいる。そうしてそのなかでなんとかしてはっきり見きわめようと努めているのです。もうとっくの昔に、私はそんなことを別に変ったことだとは思わなくなっていたのですがね」

「つまりそこじゃありませんか、あなたとパスルーの違いは？」

「そうは思いませんね。パスルーは書斎の人間です。人の死ぬところを十分見たことがないんです。だから、真理の名において語ったりするんですよ。しかし、どんなつまらない田舎の牧師で

も世間並みの一つの地位で、若い連中が考えるうちの一つだからというわけです。あるいはまた、それが僕のような労働者の息子には特別困難な道だったからかもしれません。そうして、やがて、死ぬところを見なければならなかった。知っていますか、どうしても死にたがらない人たちがあることを？　聞いたことがありますか――一人の女が死のうとする瞬間に《いや、いや、死ぬのはいや！》と叫ぶ声を？　僕は聞いたんです。そうして、自分はそういうことに慣れっこにはなれないと、そのとき気がついたんです。僕は、そのころ若かったし、自分の嫌悪は世界の秩序そのものに向けられていると思っていました。その後、僕ももっと謙譲な気持になりました。ただしかし、僕は相変らず、死ぬところを見ることには慣れっこになれないんです。僕はそれ以上はなんにも知りません。しかし、結局……」

リウーは口をつぐみ、ふたたび腰を下ろした。彼は口のなかがからからになっているのを感じた。

「結局？」とタルーが静かにいった。

「結局……」と、医師は言葉を続け、そして、なおためらいながら、じいっとタルーの顔を見つめた。「これは、あなたのような人には理解できることではないかと思うのですがね、とにかく、この世の秩序が死の掟に支配されている以上は、おそらく神にとって、人々が自分を信じてくれないほうがいいかもしれないんです。そうしてあらんかぎりの力で死と戦ったほうがいいんです、神が黙している天上の世界に眼を向けたりしないで」

「なるほど」と、タルーはうなずいた。「いわれる意味はわかります。しかし、あなたの勝利は

がままの被造世界と戦うことによって、真理への路上にあると信じているのだ。

「ははあ、そうするとあなたはそういうふうに考えていられるわけですね、ご自分の職業について？」と、タルーはいった。

「ええ、まあ大体」と、また明りのなかへもどってきながら、医師は答えた。

タルーがそっと口笛を吹くと、医師はその顔を見つめた。

「なるほど」と、彼はいった。「あなたはそうお思いでしょう、それにはよっぽどの傲慢さが必要だ、と。しかし、僕は必要なだけの傲慢さをもっているにすぎないんですよ、まったく。この先、何が待っているか、こういうすべてのことのあとで何が起るか、僕は知りません。さしあたり、大勢の病人があり、それをなおしてやらねばならないんです。そのあとで、彼らも反省するでしょうし、僕もそうするでしょう。しかし、最も急を要することは、彼らをなおしてやることです。僕は自分としてできるだけ彼らを守ってやる、ただそれだけです」

「何ものに対して守るんです、それは？」

リウーは窓のほうを振返った。遠くに海が、視界を限る線のひときわ濃い暗さによってそれと判じられた。彼はただ疲労だけを感じながら、しかも同時に、この風変りな、しかしまるで兄弟のような気のする人物に、もうちょっと心を打明けてみたいという、突然の、不条理な欲望と戦っていた。

「全然わからない、それは。まったく、僕には全然わからない。僕がこの職業にはいったときは、ただ抽象的にそうしたんです、ある意味からいえば。つまり、その必要があったから、これ

彼女が行ってしまうと、タルーはまたそのほうを振返った。階段口で、医師は自動照明のボタンを押してみたがだめだった。階段は、やみのなかに沈んだままであった。医師は、これは新たな節約措置の結果であろうかと考えてみた。しかし、どうだかわかったものではなかった。もう、しばらく前から、家のなかでも町のなかでも、何もかも調子が狂いだしていた。これはおそらく、門番たちも、また市民一般も、もう何ごとにも気を配ろうとしなかったという、単にそれだけのことかもしれなかった。しかし、医師はそれ以上考えてみる暇がなかった、というのは、タルーの声が背後で響いたからである——

「もう一言いわせてください、滑稽に見えるかもしれないが——あなたの考えは完全に正しいですよ」

リウーは暗黒のなかで、自嘲的に肩をすくめた。

「僕にはなんにもわからないんです、本当に。ところで、あなたは、いったいどこまでわかってるんです？」

「いや」と、相手は動ずる気配もなくいった。「僕には、これ以上知らなければならぬことなんて、まずありませんね」

医師は立ち止り、そしてタルーの足は彼のうしろで段を一つ踏みはずした。タルーはリウーの肩につかまって、身をささえた。

「人生について、もうすっかり知っていると、あなたは思ってるんですか？」と、リウーは尋ねた。

つねに一時的なものですね。ただそれだけですよ」

リウーは暗い気持になったようであった。

「つねにね、それは知っています。それだからって、戦いをやめる理由にはなりません」

「たしかに、理由にはなりません。しかし、そうなると僕は考えてみたくなるんですがね、このペストがあなたにとってはたしてどういうものになるか」

「ええ、そうです」と、リウーはいった。「際限なく続く敗北です」

タルーはいっときじっと医師の顔を見つめ、それから立ち上がると、重々しい足どりで戸口のほうへ歩きだした。で、リウーもそのあとを追った。彼がすでに追いついていたとき、タルーはじっと足もとを見つめている様子であったが、彼にこういった――

「誰が教えてくれたんです、そういういろんなことを？」

答えは即座に返ってきた――

「貧乏がね」

リウーは部屋のドアを開け、そして廊下に出ると、自分も町はずれのほうに患者の一人を診に行くので、いっしょに出かけるからとタルーにいった。タルーが彼についていくことを申し出ると、医師は承諾した。廊下のはずれで、二人は、リウー夫人に出会い、医師はタルーを彼女に紹介した。

「友達です」と、彼はいった。

「それはまあ、初めまして」と、リウー夫人はいった。「ほんとに、よくいらしてくださって

こんなことにまで頭をつっこむなんて」
「知りませんね。僕の道徳ですかね、あるいは」
「どんな道徳です、つまり？」
「理解すること、です」
タルーは家のほうを向いてしまい、リウーはそれっきり、二人が喘息もちの爺さんのところへはいった瞬間まで、彼の顔を見なかった。

さっそく翌日から、タルーは仕事にとりかかり、まず最初の一隊を集めたが、それに続いてその他にも多くの隊ができるはずであった。
筆者は、しかしながら、これらの保健隊を実際以上に重要視して考えるつもりはない。筆者の立場に立てば、なるほど、多くの市民が、今ではその役割を誇張したい誘惑に負けるであろう。しかし、筆者はむしろ、美しい行為に過大の重要さを認めることは、結局、間接の力強い讃辞を悪にささげることになると、信じたいのである。なぜなら、そうなると、美しい行為がそれほどの価値をもつのは、それがまれであり、そして悪意と冷淡こそ人間の行為においてはるかに頻繁な原動力であるためにほかならぬと推定することも許される。かかることは、筆者の与しえない思想である。世間に存在する悪は、ほとんどつねに無知に由来するものであり、善き意志も、豊かな知識がなければ、悪意と同じくらい多くの被害を与えることがありうる。人間は邪悪である

答えは、同じ平静な声に運ばれて、暗黒のなかを返ってきた――

「そうです」

路上へ出てみると、もうかなり遅く、おそらく十一時ごろであることがわかった。町は声をひそめ、ただひそやかな物音の気配ばかりが充満していた。はるか遠くに、救急車のベルが鳴り響いた。二人は車に乗り、リウーはエンジンをかけた。

「明日、病院に来ていただく必要があるでしょうね、予防注射を受けに」と、リウーはいった。

「しかし、もう一度最後のところで、その話にはいる前に、よく考えてみてください――あなたは三つに一つしか無事に助かる機会はないんですよ」

「そんな計算なんて意味のないことですよ、あなたもそれは僕とおんなじにわかってるはずです。百年前、ペストの流行でペルシャのある町の全住民が死んだとき、死体を洗い清める役の、まさにその男だけが助かったんですからね、ちっとも休まずその仕事をやっていたのに」

「その男はつまり第三の機会をつかんだというだけのことですよ」と、リウーは急に一層響きの鈍くなった声で、いった。「しかし、そういえば、何から何まで、まだ知らなければならぬことばかりですよ、この問題については」

道は今、町はずれにはいっていた。信号燈が、人影の絶えた街頭に輝いていた。車は止った。自動車の前で、リウーはタルーになかへはいるかと尋ね、タルーは、はいるといった。空からの一抹の反射が二人の顔を照らしていた。リウーは急に、親しみのこもった笑いを爆発させた――

「まあ、いってみてくれませんか」と、彼はいった。「いったい何があなたをそうさせるんです、

お祝いをいわれはしない。お祝いをいわれることがあれば、それはおそらくそういうりっぱな職業を選んだということであろう。だから、タルーやその他の人々が、どちらかといえばその逆よりも、二たす二は四になることを証明するほうを選んだのは、ほめるべきことであったといっておくとして、しかしまたこの善き意志は、彼らとともに教師および教師と同じ心をもつすべての人々に共通のものであることもいっておきたいのであって、こういう人々は、人類の名誉にかけても、普通考えられている以上に多いのであり、少なくともそれが筆者の確信なのである。もっとも筆者としても、これに対する反駁がありうることは十分意識しており、それはつまり、これらの人々は生命の危険を冒していたということである。しかし、歴史においては、二たす二は四になることをあえていうものが死をもって罰せられるというときが、必ず来るものである。教師もそれはよく知っている。そして問題は、いかなる褒賞あるいは懲罰がその推論を待ち受けているかを知ることではない。問題は、二たす二がはたして四になるか否かを知ることである。市民のなかでそのとき生命の危険を冒した人々の場合も、彼らの決すべきことは、自分たちがはたしてペストのなかにいるか否か、そしてそれに対して戦うべきか否か、ということであった。

新たな道学者が当時は大勢市内に横行し、何ものもなんの役にもたたないし、ひざまずくよりしかたがないとふれ歩いていた。そしてタルーも、リウーも、彼らの友達も、あれやこれやといい返すことはできたが、しかし結論はいつも、彼らの知っていること、――すなわちかくかくしかじかの方法で戦うべきで、ひざまずいてはならぬということであった。問題のすべては、できるだけ多くの人々をして、死んだり終局の別離を味わったりさせないようにすることであった。

よりもむしろ善良であり、そして真実のところ、そのことは問題ではない。しかし、彼らは多少とも無知であり、そしてそれがすなわち美徳あるいは悪徳と呼ばれるところのものなのであって、最も救いのない悪徳とは、みずからすべてを知っていると信じ、そこでみずから人を殺す権利を認めるような無知の、悪徳にほかならぬのである。殺人者の魂は盲目なのであり、ありうるかぎりの明識なくしては、真の善良さも美しい愛も存在しない。

このゆえに、タルーの尽力により実現されたわれわれの保健隊も、客観性をもった満足の念をもって判断されねばならぬのである。このゆえに、筆者はその意図とヒロイズムとのあまりにも雄弁な歌手となろうとはせず、それにそれ相応の重要さを認めるにすぎないのである。そのかわり、彼は相変らず、ペストによって当時すべての市民がいかに胸をえぐられる思いをし、切迫した気持になっていたかということについての、一個の歴史家として書きつづけるであろう。

保健隊に献身的に働いた人々も、事実そうたいして奇特なことをしたわけではなく、つまり彼らはこれこそなすべき唯一のことであるのを知っていたのであって、それを決意しないことのほうが、当時としてはむしろ信じられぬことだったかもしれないのである。こういう隊が作られたことは、市民たちが一層深くペストのなかにはいりこむことを助け、病疫が現に目の前にある以上は、それと戦うためになすべきことをなさねばならぬということを、一部分、彼らに納得させたのである。こうしてペストがある人々の当然なすべき仕事となったため、ペストは現実にそのあるがままのもの、すなわちすべての人々にかかわりのある事件として、眼に映ずるに至った。

これはいいことである。しかし、教師が二たす二は四になることを教えたからといって、別に

の彼そのままの善き意志をもって、躊躇なく、「うん」といった。ただ、彼が望んだのは、ささやかな仕事で役にたちたいということだけであった。ほかのことをするには年をとりすぎていたのである。十八時から二十時まで、彼は時間をさくことができた。そしてリウーが熱意をこめて礼をいうと、彼はけげんな顔をした――「こんなことはいちばんたいへんな仕事ってわけじゃありませんからね。現にペストってものがあるんですから、とにかく防がなきゃなりません、これはわかりきったことです。まったく、なんでもこれくらい簡単だといいんですがね」。そういって、彼はまた例の文章のことを話しだすのであった。ときどき、晩に、カードの仕事が片付くと、リウーはグランと話し合った。ついには、その会話にタルーも加えるようになって、グランは日ましにあらわになってくる喜びをもって二人を相手に打明け話をするのであった。二人のほうでも、グランがペストのさなかで続けているしんぼう強い仕事の進行ぶりを、興味をもって見守っていた。彼らもまた結局、そこに一種の息抜きのようなものを見出していたのである。

「どんな具合です、女騎手の君は？」と、よくタルーは尋ねることがあった。すると、グランはいつもきまりきって、「いや、駆けてますよ、駆けてね」と、気むずかしげな微笑を浮べながら答えるのであった。ある晩、グランがいうには、彼はその女騎手のために《端麗な》という形容詞を決定的に放棄し、今後はそれを《なよやかな》と形容することにした。「そのほうがもっと具体的ですから」と、彼は付け加えた。また一度は、彼はその二人の聞き手に、つぎのように修正された最初の一句を読んで聞かせた――「美しく晴れた五月の朝まだき、一人のなよやかな女騎手が、颯爽たる栗毛の牝馬にまたがり、ブーローニュの森の花咲き乱れた小道を駆けめぐって

そのためには、ただ一つ、ペストと格闘するという方法以外にはなかったのである。この事実は別に感嘆すべきことでもなんでもなく、つまり当然の帰結であったにすぎない。

それゆえにこそ、これも自然なことといえるのであるが、カステル老人は、間に合せの器材を用いて現場で血清を製造することに、あらゆる信念と精力を傾け尽していたのであった。リウーと彼とは、この町を荒しているその菌自体の培養によって製造された血清は、外部から来た血清よりもさらに直接な効力があるだろうと期待していたが、それというのが、その菌は古くから定説として規定されているとおりのペストの病原菌とはいささか違っていたからである。カステルは彼の最初の血清がかなり早急に得られることを期待していた。

またそれゆえにこそ、これも自然なことであったが、グランというなんらヒーロー的なものをもたぬ男が、今ではそれらの保健隊の一種の幹事役のようなものを勤めることになったのである。タルーによって作られた各隊の一部は、あたかも、人口稠密な地区における予防上の補助作業に当っていた。人々はその地区に必要な衛生状態をもたらすことに努め、消毒の手の届かなかった納屋や穴倉の数を調べた。別の一部の隊は病者の往診の手助けをして、ペスト患者の運搬に手落ちのないようにしたり、後には、専門の職員がいない場合、患者や死者の車を運転したりまでした。こういうことはすべて、登録や統計の仕事を必要とするものであり、それをグランが引受けてやっていたのである。

この点から見れば、そしてリウーやタルーにもまして、筆者はグランこそ、それらの衛生隊の原動力となっていたあの平静な美徳の、事実上の代表者であったと見なすのである。彼はいつも

しかし、このとおり、ずいぶんむずかしいもんでしょう?」

「どう思います、《悠揚たる》っていうのは?」と、タルーがいった。

グランはその顔を見つめた。彼は思案していた——

「そうだ」と、彼はいった。「それがいい」

すると、ほほえみが次第に彼の顔に浮んでくるのであった。

それからしばらくたって、彼は《花咲き乱れた》という言葉に悩まされていると告白した。彼はオランとモンテリマル以外はついぞ知らなかったので、ときどきこの友人二人にブーローニュの森の小道がどんな具合に花咲き乱れているか教えてくれと頼んだ。的確にいえば、リウーにしろ、タルーにしろ、その小道が花咲き乱れたという感じはかつて受けたことがないのであったが、グランの確信は彼らを動揺させた。彼は二人の不確かさを不思議がった。「ただ芸術家のみが、ものを見るすべを知っているのです」。しかし、リウーは一度彼が非常に興奮しているのを見かけた。彼は《花咲き乱れた》を《花の咲き満ちた》に代えたのである。彼はしきりにもみ手をしていた。「とうとうこれで、ちゃんと目に浮び、感じられるようになりましたよ。《諸君、脱帽!》です」。彼は意気揚々として、その文章を読みあげた——「美しく晴れた五月の朝まだき、一人のなよやかな女騎手が、悠揚たる栗毛の牝馬にまたがり、ブーローニュの森の花の咲き満ちた小道を駆けめぐっていた」。ところが、声に出して読むと、終りのほうの《の》が三つ重なるところが変な具合に響き、グランは少しつかえた。彼は打ちのめされたようなかっこうで、腰を下ろした。それから、医師に向って、席をはずす許しを求めた。彼は少し考えてみる必要があったので

いた」

「どうです」と、グランはいった。「このほうが姿がはっきり目に浮ぶでしょう。それから、私は《五月の朝まだき》のほうがいいと思ったんです。というのは、《五月の月の》とすると、少し歩調が伸びてしまいますからね」

彼は次いで《颯爽たる》という形容詞に大いに苦心の様子を示した。彼によれば、これは十分訴えるものがなく、彼は自分の心に描いている威風堂々たる牝馬を一筆で正確に再現するような言葉を捜しているのであった。《豊満な》というのもどうもしっくりせず、これは只体的ではあるが、少々下卑ている。《艶々しい》という言葉には一時心をひかれたが、言葉の響きがどうにもそぐわない。ある晩彼は意気揚々として、《漆黒の栗毛の牝馬》という言葉を見つけたと報告した。漆黒というのは、これも相変らず彼の説で、端麗なものをそれとなく指し示しているのであった。

「そんなことはありえないな」と、リウーはいった。

「それはどうしてです？」

「栗毛っていうのは馬の種類じゃなく、色を指すんですからね」

「どんな色です？」

「どんな色って、黒とは違う色ですよ、とにかく」

グランは非常に気を落した様子であった。

「いや、どうも」と、彼はいった。「こうしてあなたがたが付いててくださるんでね、幸いに。

まにはさまっているというかたちになることは、彼にとって身内にとげがささったような感じだった。ある晩などは、彼はまったくそれこそ、リウー以上に疲れた様子をしていることがあった。

まったく、彼は全精神を奪われているこの探求によって疲労していたのであるが、しかも依然として変るところなく、保健隊の必要とする集計と統計をやりつづけていた。根気よく、毎晩、彼はカードを整理し、それに曲線を書き添え、そしてゆっくりと時間をかけて、できるだけ精細な表を提出するために精を出すのであった。かなりたびたび、彼は病院の一つにリウーを訪ねていき、何かの事務室か病室の机を貸してくれということがあった。彼は書類をかかえてその机に、まるで市庁の自分の机に向うと同じように腰を下ろし、そして消毒薬とまた病気そのもののためによどんだようになった空気のなかで、書いた紙片のインキを乾かそうとしてしきりにそれを振動かすのであった。彼はそのときは、もう例の女騎手のことは考えないで、なすべきことだけをなそうと、律儀に努めていたのである。

まったく、もし人々が、彼らのいわゆるヒーローなるものの手本と雛型とを目の前にもつことを熱望するというのが事実なら、またこの物語のなかに、ぜひともそれが一人必要であるのなら、筆者はまさに微々として目だたぬこのヒーロー――その身にあるものとしては、わずかばかりの心の善良さと、一見滑稽な理想があるにすぎぬこのヒーローを提供する。これは、真理には真理に帰すべきものを、二と二の加算にはその四という合計を、そしてヒロイズムにはその本来あるべき第二義的な地位――すなわち幸福というものの惜しみなき要求のすぐ次に位し、絶対に

ある。

つまりこの時期に、これはあとでわかったことであるが、彼は役所でぼんやり気をとられているような兆候を示しはじめ、それは市庁が減少した人員をもって背負いきれぬほどの任務に対処しなければならぬときにおいて、遺憾な兆候と見なされたのであった。課内はそのために支障を来たし、局長は彼をきびしく叱責して、彼はある仕事を遂行するために給料をもらっているのに、まさにその仕事を彼は遂行していない、と注意をうながした。「聞くところによると」と、局長はいった。「君は、君の仕事以外に、保健隊に志願して働いてるそうじゃないか。そいつは僕には関係のないことだ。しかし、僕に関係のあるのは、君の仕事だ。そうして、こういうひどい情況のなかで君を役だたせる第一の方法といえば、つまり君の仕事をちゃんとやることなんだ。さもなきゃ、あとのことなんかなんの役にもたちゃしない」

「局長のいうとおりです」と、グランはリウーにいった。

「うん、そのとおりだね」と、医師は同意した。

「しかし、つい気をとられちまうんですよ、あの文章の終りのところをどう切り抜けたらいいかわからないんです」

彼は、誰だってそれでわかるだろうと思って、《ブーローニュの》という言葉を削ろうかと考えた。しかし、そうすると《森の》という句が花に付くようなかっこうになってしまうが、これは実際には《小道》にかかっているのだ。彼はまたつぎのように書きうる可能性も検討してみた——《花の咲き満ちた森の小道》。しかし《森》という言葉の位置が、修飾語と名詞との間に気ま

ことのできぬ苦痛はどんな人間でも本当に分かち合うことはできないという、恐るべき無力さを証明するのであった。「オラン！　オラン！」——むなしく呼び声は海を渡ってき、むなしくリウーは耳をすますばかりで、やがて雄弁は調子を高め、グランとその演説者とを二人の無縁者たらしめる根本的な隔たりをいよいよはっきりさせるのである。「オランの人々！　まことに、オランの人々は……」。「いや、だめだ」と、医師は考えるのであった。「愛するか、あるいはともに死ぬかだ、それ以外に術はないのだ。彼らはあまりにも遠くにいる」

さて、ペストの頂点——病疫がそのあらゆる力を集結してこの町にたたきつけ、決定的に町を占拠しようとしていた期間のことに筆を進める前に、この際ここでもう一つ述べておかねばならぬことは、すなわちランベールのような最後に残された個人たちが、ふたたび自分たちの幸福を見出そうとして、そして彼らがあらゆる侵害に対して守り抜く彼ら自身の持ち分をペストから取りもどそうとして、絶望的でまた単調な、長い努力を試みたことである。これもつまり、身に迫る屈従を拒もうとする、彼らなりの一つの拒み方であって、この拒否は一見もう一つの拒否ほど有効でなかったとはいえ、筆者の意見としては、それはやはりそれとしての意味をもち、また同時にそれはその己惚れや矛盾においてさえも、当時われわれめいめいのうちにどれほどの気概というようなものが存在したかについて、証明するのである。

ランベールは、ペストに取りこめられてしまうことを防ごうとして戦っていた。合法的な手段

その前ではない地位――を授けることになろう。それはまたこの記録にも記録らしい性格を授けることになるであろうが、その性格なるものは、よき感情をもって――すなわちあらわに悪意的でもなく、また見世物流に下劣に煽情的でもない感情をもって――なされた記述という性格であるべきである。

これは少なくとも、外部の世界がこのペストに襲われた町へ届かせようとしてくる呼びかけや激励を、新聞で読んだり、ラジオで聞いたりしたさいの、医師リウーの意見であった。空路および陸路から送られてくる救助物資と同時に、毎晩、電波に乗ってあるいは新聞紙上で、同情的なあるいは賞讃的な注釈の言葉が、あれ以来孤立しているこの町めがけてとびかってきた。そしてそのたびごとに、叙事詩調の、あるいは受賞演説調の調子が医師をいらいらさせた。もちろん、彼はそういう懇切な心遣いが見せかけではないことを知っていた。しかし、それは、人々が自分を人類に結びつけるものを表現しようと試みる場合の、慣例的な言葉で表現されるよりしかたがなかった。そしてそういう言葉は、たとえば、ペストのさなかにおいてグランなる人物の意味するところなど理解しえないために、グランの日々のささやかな努力に対しては用いられようがなかったのである。

夜の十二時に、ときどき、もうすっかり人気の絶えた町の深い静寂のなかで、短かすぎる眠りにつこうとして床にはいるとき、医師は受信機のスイッチをまわしてみることがあった。すると、世界の果てから、幾千キロを過って、未知の友愛の幾つかの声が、彼らも連帯者であることをいおうと無器用に努力し、そして事実それをいうのであるが、しかし同時に、自分の目で見る

いるある組織が存在することを聞きこんでいるのだ、と説明した。事実は、コタールはあれ以来支出が収入を越えるようになっていたし、配給物資の密輸の仕事に関係していたのである。彼はそうしてたばこや質の悪いアルコール飲料を又売りしていたが、その値はたえず上がり、今や彼にちょっとした財産をもたらしかけているところであった。

「それはたしかに間違いのない話ですか？」と、ランベールは尋ねた。

「ええ、現にその話をもちかけられたくらいですからね」

「それで、その話に乗らなかったんですか？」

「あやしまなくてもいいんですよ」と、気のいい様子でコタールはいった。「私が話に乗らなかったのは、つまり私には出ていこうって気がないからです。私には私だけの理由があるんです」

彼はちょっと沈黙したあとで、こう付け加えた——

「あなたは聞こうとしないんですね、私の理由っていうのがどんな理由か？」

「たぶん、僕には関係のないことだろうと思って」と、ランベールはいった。

「ある意味では、なるほど、あなたには関係のないことだ。しかしまた別の意味からいうと……。とにかく、ただ一つはっきりしていることは、つまり私には、ここがずっといごこちがよくなったんです、ペストといっしょに暮すようになってから」

一方はその長口上を早く切りあげさせようとする言い方で——

「どうしたら連絡がつくんです、その組織には？」

「そうしますか」と、コタールはいった。「ちょっと手軽にはいかないんですがね。まあ、いっ

では町から出られないという実証を得たので、別の手段を用いることに決心したと、彼はリウーにいった。新聞記者は、まずカフェの給仕からはじめた。カフェの給仕というものはつねにあらゆる消息に通じているものである。しかし、彼が最初に質問した給仕たちは、この種の企てがきわめて重い刑罰をもって制裁されるということの消息に、特に通じていた。一度など、それをそそのかす者と間違えられたくらいである。結局、リウーのところでコタールに出会って、やっと少し事が運ぶようになった。その日、リウーと彼とは、ランベールが諸官庁で行なったむだな奔走について、また語り合ったのであった。数日後、コタールはランベールに街なかで会うと、このごろではあらゆる交際にそんな調子を見せるようになった、ざっくばらんな態度で、彼を迎えた——

「相変らずなんにもありませんか？」と、彼はいった。

「ええ、なんにも」

「お役所なんて当てにはなりませんよ。てんで、人の話を理解できるような連中じゃないんだから」

「まったくです。しかし、僕は別のほうで捜しているんですがね。こいつがどうもむずかしくって」

「なるほど、そういうことなんですね」と、コタールはいった。

ところで彼は、二つの手順を知っていて、それを驚くランベールに向って、自分はずっと前からオランのあらゆるカフェにかよっていたし、いろいろ友達もあって、この種の工作を仕事にして

がこびりついていて、彼にはそいつがいったいどこから来たものかどうも合点がゆかないでいたのであるが、そのうち暗い隅っこのほうから、ちょっとがさがさしていたと思うと、一羽の堂々たる雄鶏がひょこひょことび出してきた。

暑さは、このときさらに増してきたように思われた。コタールは上着をとり、ブリキの上をたたいた。一人の小さな男が、長い水色の前掛けのなかに体じゅうが隠れてしまいそうなかっこうで、奥から出てき、遠くからコタールの姿を見るより早くおじぎをし、力をこめた蹴りで雄鶏を追いのけながら進み寄り、そして鶏の鳴き騒ぐ声のなかで、お客様がたには何を差上げたらよろしいでしょうと尋ねた。コタールは白葡萄酒を注文し、そしてガルシアとかいう男のことを尋ねた。小男のいうところによると、もう四、五日も、彼の姿をこのカフェでは見かけないということであった。

「今晩は来ると思うかい?」

「さあね」と、相手はいった。「わしもそう深い付き合いじゃないんでね。しかし、旦那は先生の都合はご存じなんでしょう?」

「うん。しかし、別にそうたいしたことじゃないんだ。ただ、ちょっと紹介したい友達があってね」

給仕は前掛けの表で汗ばんだ手をふいた。

「ああ、旦那もやっぱり例の仕事のほうをやっておいでなんで?」

「そうなんだ」と、コタールはいった。

しょに来てごらんなさい」

ちょうど午後の四時であった。重苦しい空のもとで、町はじりじりと焼けていた。すべての店は日よけをおろしていた。舗道にはまったく人影が絶えていた。コタールとランベールはアーケードになっている道を選び、長い時間、黙々として歩いた。それはペストが目に見えぬものとなる時刻の一つであった。この沈黙、この色と動きの死滅は、病疫による沈黙と死滅であるとともに、また夏のそれでもありうるのであった。あたりの空気を重苦しく閉ざしているのが、病疫の脅威なのか、それとも埃や炎熱なのか、わからなくなるのである。観察し、よく考えてみないことには、ペストの在処を尋ね当てることはできなかった。というのは、ペストの存在が否定的な兆候にしか顔を出していないからである。コタールは、ペストと縁故を結んでいただけに、ランベールに向って、たとえば、ふだんなら廊下の入口にぐったりと寝て、望みえない涼しさを求めつつあえいでいるはずの犬が、まったくいないことなどを指摘してみせた。

彼らは棕櫚樹通りを行き、閲兵広場を横切って、海軍街の一画へ降りていった。左手に、緑のペンキ塗りの一軒のカフェが、あらい麻布の黄色い日よけを斜めに張り出していた。はいりながら、コタールとランベールは額をふいた。二人は緑色のブリキのテーブルを前にして、折畳み式の庭椅子に席をとった。店内は全然人影がなかった。蝿が空中でじいじいいっていた。足の曲ったカウンターの上に置かれた黄色い鳥籠のなかでは、羽根のすっかり抜け落ちた鸚鵡が、止り木の上にぐったりしていた。軍隊的な情景を描いた古ぼけた絵が、垢と、網の目のつんだ蜘蛛の巣におおわれて、壁にかかっていた。どのブリキ卓の上にも、ランベール自身の前にまで、鶏の糞

ろいろ質問をし、そのなかでランベールのことを「先生は」というふうにいって、彼の存在などまるで眼中にない様子だった。

「なんのために、そうしたいんだい？」と、彼はいった。

「細君がフランスにいるのさ」

「ふうん！」

そして、ちょっとたってから――

「先生は何をやってるんだい、商売は？」

「新聞記者さ」

「だいぶ口のうるさい商売だな」

ランベールは黙っていた。

「友達なんだよ」と、コタールはいった。

彼らはそのまま黙々として歩いていった。とうとう波止場のところまで来たが、波止場は大きな柵で立ち入り禁止になっていた。しかし、彼らは、そのにおいが彼らのところまで漂ってきていた、鰯の空揚げを売っている小さな屋台店のほうへ足を向けた。

「どっちみち」と、ガルシアは最後のしめくくりをつけるようにいった。「こいつは俺の関係じゃなく、ラウルのほうなんだ。そうなると、やつを見つけなきゃならんわけだが、こいつがちょっと手軽にゃいくまいて」

「ほう、身を隠しているのかい」と、コタールは声を弾ませて尋ねた。

小男は洟をすすった――

「そいじゃ、夕方おいでなさい。小僧を使いにやっときまさ」

外へ出ると、ランベールは、仕事というのはどんな仕事かと尋ねた。

「密輸ですよ、もちろん。いろんな品物をうまく市の門を通させるんです。そうして、うんと高い値で売るんですよ」

「なるほど」と、ランベールはいった。「つまり、共謀ができてるんですね」

「そうなんですよ」

その日の暮れ方、日よけは上げられ、鸚鵡は籠のなかでおしゃべりし、そしてブリキのテーブルはワイシャツ一枚になった男たちに囲まれていた。そのなかの一人、麦藁帽をあみだにかぶり、白のワイシャツをはだけて焼土色の胸をのぞかせている男が、コタールがはいっていくと立ち上がった。整った赤焼けのした顔、黒い小さな目、白い歯並み、指には指輪を二つ三つはめていて、年のころは三十ぐらいと思われた。

「まずあいさつだ」と、男はいった。「カウンターで飲もう」

彼らは黙々として三ばいずつ重ねた。

「出ようか」と、そこでガルシアはいった。

彼らは港のほうへ下っていき、ガルシアは自分への用件を尋ねた。コタールはそれに対して、ランベールを紹介しようとしたのは、実は直接に仕事の件ではなく、単に彼のいわゆる「外出」の件なのだといった。ガルシアは、たばこをふかしながら、まっすぐに前を見て歩いた。彼はい

起ってることはなかなかおもしろいじゃありませんか」

「そうじゃないですね、僕にとっては」と、ランベールは答えた。

「いや、そりゃもちろん、何かしらんの危険はありますよ。しかし、結局、ペスト以前にだっておんなじぐらい危険はあったんですからな、往来の激しい四辻を渡るときなんか」

ちょうどそのとき、リウーの自動車が、二人のいるあたりまで来て止った。タルーが運転し、リウーは半ば眠っているような様子であった。

彼は目をさまして、紹介をしようとした。

「もう知ってますよ」と、タルーはいった。「おんなじホテルに住んでるんです」

彼はランベールに、町まで車で送っていこうかといった。

「いや、ここでちょっと待ち合せる約束がありますから」

リウーはランベールの顔を見た。

「そうなんです」と、ランベールはいった。

「おや。先生も事情をご存じなんですか？」と、コタールは驚いた顔をした。

「予審判事が来ましたよ」と、コタールのようを見ながら、タルーが注意した。

コタールは顔色を変えた。オトン氏がなるほど通りを下って、力のこもった、しかし一定した足どりで彼らのほうへ進んできた。彼はこのささやかな一団の前を通り抜けながら、ちょっと帽子をとった。

「おはようございます、判事さん」と、タルーがいった。

ガルシアは返事をしなかった。屋台店の近くまで来ると、彼は立ち止り、そしてはじめてランベールのほうに向き直った。

「明後日の十一時としよう。町のてっぺんの税関署の角だ」

彼はそのまま行ってしまいそうにしたが、また二人の男のほうを振返った。

「費用がかかるぜ」と、彼はいった。

つまり念を押したわけであった。

「そりゃあ、もう」と、ランベールは承認した。

ちょっとたってから、ランベールはコタールに礼をいった。

「いや、なに」と、相手は気さくな調子でいった。「私としちゃ、お役にたてばうれしいんですよ。それに、あんたは新聞記者ですからね、きっとお返しをしていただくことがありますよ、いずれそのうちに」

翌々日、ランベールとコタールとは、町の頂上へ通じる、木陰のない大きな通りの坂道を登っていった。税関署の庁舎の一部は病舎に改造されていて、その表門の前には、許されるはずのない面会に望みをかけて、あるいは結局一時間かそこいらで無効になってしまう情報を求めて、やって来た人たちがたたずんでいた。いずれにしても、この人むれのせいでずいぶん人の行き来はあるわけだったので、この点の考慮が、ガルシアとランベールの待ち合せ場所がきめられた事情に無関係ではなかったという推測もできないことはなかった。

「不思議だな、そんなにどうしても出ていきたがるなんて」と、コタールはいった。「結局、今

ですからね。その点、われわれとしてはどうしようもないのです」

「あの先生は」と、判事が行ってしまうと、コタールはいった。「さしずめ、敵第一号ってわけだ」

車は動きだした。

それからちょっとして、ランベールとコタールは、ガルシアがやって来るのを見た。ガルンアは別に合図もせず彼らのほうへ進み寄り、いきなりあいさつみたいにこういった――「まだちょっと間があるぜ」

彼らのまわりでは、群れをなした人々が――そのなかには婦人が圧倒的に多かったが――一同完全な沈黙のうちに待っていた。ほとんどすべてのものが手籠をもっていたが、彼女らはそれを身内の病人に届けられるかもしれないというむなしい希望と、また病人が彼女らのもってきたその食糧を役にたてることができるかもしれないという、これはさらに愚かしい考えをいだいていたのである。門は武装した監視兵が警備していて、そしてときおり、異様な叫びが、舎屋と門とを隔てている前庭を渡って聞えてきた。すると、その場の人々のなかで、不安そうな顔が病舎のほうへ向けられるのであった。

三人の男はこの光景をじっとながめていたが、そのとき、背後から「お早う」と、はっきりした重々しい声が彼らを振向かせた。この暑さにもかかわらず、ラウルはきわめてきちんとした服装をしていた。背が高くがっしりした体に、くすんだ色のダブルの服を着こみ、縁を反らしたソフトをかぶっている。顔の色はかなり白いほうであった。茶色の目で、口は固く結ばれ、ラウル

判事は車内の二人にあいさつを返し、それから、うしろのほうへさがっていたコタールとランベールを見ると、頭を下げて重々しく会釈した。タルーはこの金利生活者と新聞記者を紹介した。判事はいっとき空を仰いでいたが、溜息をつきながら、まったくずいぶんいやな時代になったものだといった。

「ちょっと承ったのですが、タルーさん、あなたは予防的措置の実施についてご尽力の由で。あなたのお気持はいかほど賞讃しても足りない気がいたしますな。いかがですか、先生、病気はまだ蔓延するとお考えですか？」

リウーは、ぜひともそうならないように希望しなければならぬといい、判事は、神の摂理は測り知られぬものであるから、いかなるときにも希望をもたねばならぬと力説した。タルーは、今度の出来事によって彼の仕事は増加するようになったかと尋ねた。

「反対ですな。われわれが普通法関係の事件と呼んでいるものはかえって減少しています。このごろ私が審理に当るものといえば、今度の新措置に対する重大な違犯事件ばかりですね。かつて見なかったほど、従来の法律はよく尊重されていますよ」

「それはつまり」と、タルーがいった。「比較してみれば、そっちのほうがいい法律だと思えるからですね、なんといっても」

判事は、それまでまるで目を宙に迷わしているようだった、夢想的な態度を一変した。そして冷やかな様子で、タルーの姿をまじまじとながめた。

「それがどうだとおっしゃるんです？」と、彼はいった。「肝心なのは法規ではなく、刑の決定

シャツの袖口から突き出ていた。男は、ランベールを紹介されると、二度ほどうなずいた。男の名前は口にされず、ラウルは彼のことをいうのに「この友達は」としかいわなかった。

「この友達があんたの手助けをできそうだっていうんだ。で、これからあんたを……」

ラウルは、給仕女がランベールの注文をききに顔を出したので、ちょっと話しやめた。

「で、これからあんたを仲間うちの二人のもんと連絡をつけさせてくれようっていうんだが、つまりその連中が、こっちに抱きこんである衛兵たちとあんたを近付きにしてくれるわけだ。それですっかり済んだわけじゃない。衛兵たちのほうでいい潮時だと思わなきゃだめだ。いちばん簡単なのは、あんたが二、三日やつらの一人のところに泊りこむことなんだが、門のすぐそばに住んでるのがいるんでね。しかしその前に、この友達に必要な額つなぎをさせてもらっとくわけだ。万事手はずがととのったら、あんたはこの友達に費用を払えばいい」

友達は、またもう一度その馬面をうなずかせながら、一方トマトとピーマンのサラダを潰す手は休めず、しきりにむしゃむしゃ平らげていた。それから、彼はちょっとイスパニアなまりのある調子で話しだした。彼はランベールに、明後日の朝八時に、中央聖堂の垂木の陰で待ち合せることにしようといった。

「また二日ですね」と、ランベールは特にその点を口にした。

「それが、手軽にゃいかんからさ」と、ラウルはいった。「連中をつかまえなきゃならんしな」

馬の先生は今度もまた鼻面を上下し、ランベールは気のない調子で同意した。残りの食事の時間は、話題を捜すことに費やされた。しかし、馬面がフットボールの選手であることが、ランベ

は早口に無駄のない口のきき方をした――

「町のほうへ降りよう」と、彼はいった。「ガルシア、お前はもういいぜ」

ガルシアはたばこに火をつけ、黙って彼らを見送った。二人はまんなかにはいったラウルの足に合わせながら、早足に歩いていった。

「ガルシアから話は聞いた」と、ラウルはいった。「そいつはできない相談じゃない。いずれにしろ、一万フランはかかるぜ」

ランベールはそれでいいと答えた。

「明日、いっしょに昼飯を食おう、海軍通りのスペイン料理屋で――」

ランベールは承知の旨を答え、そこでラウルははじめて笑顔を見せて、彼と握手をした。ラウルが行ってしまうと、コタールは断わりを述べた。彼は明日は体があいていなかったし、それにランベールも、もう彼を必要としなかった。

翌日、新聞記者がそのスペイン料理屋へはいっていくと、すべての頭が彼の通るほうを振向いた。黄色っぽく日光でからからに乾いた横町の街路より一段低いところに設けられた、この暗い地下の酒場は、ふだんの客は男ばかりで、それも大部分はイスパニア人のタイプであった。しかし、奥のほうのテーブルに陣取ったラウルが新聞記者に合図をし、そしてランベールが彼のほうへ向うと見ると、人々の顔から好奇の色は消え、その顔はふたたび皿の料理のほうへもどった。ラウルのテーブルには、無精髭をはやし、肩幅が途方もなく広く、馬面で、髪の毛の薄い、のっぽのやせ男がいっしょにいた。黒い毛におおわれた長くて細い腕が、その男のまくりあげたワイ

「タルーがもう来るだろうと思うんだが」と、リウーはつぶやいた。
彼は疲れた様子をしていた。
「流行の勢いが予想外にひどくなってきてるんですか？」と、ランベールは尋ねた。
リウーがいうには、別にそんなわけではなく、統計の曲線は上昇度が緩慢になってきたくらいだ。ただ、ペストと戦うための手段が、十分豊富でなかったのである。
「資材が足りなくてね」と、彼はいった。「世界じゅうどこの軍隊でも、一般に資材の不足は人員で補っています。ところが、われわれには人員も不足してるんです」
「外から医者が来たじゃありませんか、それから保健関係の職員も」
「ええ」と、リウーはいった。「医者が十人と、人が百名ばかりね。これはたいした人数です、ちょっと考えると。しかもこれで、現在の病勢にやっと間に合うか合わないかという程度なんです。これ以上蔓延してきたら、それでは足りなくなるでしょう」
リウーは内部の物音に耳を傾け、それからランベールにほほえんでみせた。
「まったくですよ」と、彼はいった。「あなたも早くめどをつけるようになさったがいいですよ」
一抹の影がランベールの顔をかすめた――
「わかってくださるでしょうね」と、低くこもった声で彼はいった。「そんなことのために、僕は出ていくわけじゃないんです」
リウーはそれはわかっていると答えたが、しかしランベールはいいつづけた――
「僕は自分が卑怯者ではないと信じています、まずたいていのときは。それをためしてみる機会

ールにわかってからは、万事はなはだ楽になった。彼自身も、このスポーツを大いにやったものだった。そこで、フランス選手権や、イギリスのプロ・チームの真価や、W陣形の戦法などの話が出た。食事の終るころには、馬面はすっかり熱中してきて、ランベールを友達扱いにしながら、チームのなかでセンター・ハーフの位置ほどすばらしい位置はないということを納得させようとした。「いいかい」と、彼はいった。「センター・ハーフっていうのは、つまり、プレーをみんなに割り振る人間なんだ。ところで、プレーを割り振るっていえば、それがつまりフットボールなんだからな」。ランベールも自分ではいつもフォワードのセンターをやっていたのであるが、それと同意見だった。議論はやっとラジオの放送の声でさえぎられたが、ラジオはまず感傷的なメロディーをしのびやかな調子で繰返しておいてから、前日ペストは百三十七名の犠牲者を出したと放送した。居合せた人々の間に、誰一人反応を示すものはなかった。馬面の男は肩をすくめ、そして立ち上がった。ラウルとランベールもそれにならった。

別れていくとき、センター・ハーフはランベールの手を力強く握りしめた――

「俺の名前はゴンザレスってんだ」と、彼はいった。

この二日間が、ランベールには果てしないもののように思われた。彼はリウーのところを訪ね、その奔走の次第を詳しく語った。それから、医師がある家へ往診に行くのにいっしょについていった。彼は、疑わしい患者が待っている家の門口で、医師にさようならをいった。廊下のほうでは、走ったり何かいったりしている物音が聞えていた。家族のものに医師が来たことを知らせているのである。

「失礼します」と、ランベールはいった。「もう行かなきゃなりませんから」

待ち合せ当日の木曜日、ランベールは八時五分前に、中央聖堂の車寄せのところへやって行った。空気はまだかなりさわやかだった。空には丸い小さな白雲が盛んにわいていたが、それも、もう少しして暑さが上昇してくれば、いっぺんに吸いこまれてしまうのであった。ほのかな湿り香が。まだ芝生から立ち上っていて、しかも芝生は乾ききっていた。太陽の光線は、東のほうの家家の陰から、広場を飾る全身金色のジャンヌ・ダルク像の兜のところだけを温めていた。どこかの時計が八つ鳴った。ランベールは人気のない車寄せの陰を二足三足歩いた。おぼろげな読唱の声が、穴倉と抹香の古めかしいにおいとともに堂内から流れてきた。突然唱声は絶えた。十人ばかりのちっちゃな黒い姿が聖堂から出てくると、町のほうへ小走りに駆けだしていった。ランベールはじりじりしだした。別の黒い姿が幾つか、大階段を上って車寄せのほうへ向っていった。彼はたばこに火をつけたが、そのあとで、場所がらあるいはいけないかもしれないと気がついた。

八時十五分に、聖堂のパイプ・オルガンがしのびやかに奏しはじめた。ランベールは暗い丸屋根の下にはいった。いっときたつと、陪者席に、彼より一足先にはいっていったちっちゃな黒い人影のむれが見分けられた。それらの人影は全部一隅に固まって、この町のどこかのアトリエで大急ぎで製作された聖ロックの像が最近すえられたばかりの、間に合せの祭壇のようなものの前に集まっていた。ひざまずいたその姿は一層ちぢこまって見え、灰色の浮き彫り画のなかに没し去って、あたかも凝結した影の塊のごとく、あたりの靄よりもわずかに濃く、点々とそのなか

にもぶっつかりました。ただ、僕にはどうしても堪えられない考えってものがあるんです」

医師はまともに相手の顔を見つめた。

「きっとその女に会えますよ」と彼はいった。

「あるいはね。しかし僕には堪えられないんです——これはいつまでも続くだろう、そうしてそんなことをしてる間に彼女は年をとってしまうだろう、と考えると。三十になれば、そろそろ年をとってきますし、あらゆるものを有効に使わなきゃなりません。こういっても、あなたにはわかっていただけるかどうか」

リウーは、自分にもわかるつもりだとつぶやいたが、そこへタルーが、ひどく意気ごんでやって来た。

「僕は今パヌルーにわれわれの仲間入りをしてくれるように頼んで来たんだがね」

「どうだった、それで?」と、医師は尋ねた。

「ちょっと考えてね、それからうんといったよ」

「そいつはうれしいことだね」と、医師はいった。「彼があの説教よりはましな人間だとわかっただけでもうれしいね」

「みんな誰でもそういうものさ」と、タルーはいった。「ただ機会を与えてやることが必要なのだ」

彼はほほえみ、そしてリウーのほうへちょっと目くばせをしてみせた。

「このほうは人生の上での僕の仕事だからね、機会を提供するってことは」

の時間に先に来て、名誉の戦場における死者の氏名表を念入りに読んでいた。数分の後、二人の男が近づいてき、彼の姿を無関心にながめ、それから遊歩場の手すりのところへ行って肘をついたきり、がらんとして人気のない埠頭をながめることにすっかり心を奪われている様子であった。二人とも同じくらいの背で、二人とも青いズボンに袖の短いセイラー・ジャケツを着ていた。ランベールは少し遠ざかり、それから一つのベンチに腰を下ろして、ゆっくり彼らをながめることができた。すると、彼らがおそらく二十歳以上にはなっていないことに気がついた。ちょうどそのとき、ゴンザレスが言いわけをしながら彼のほうへ歩いてくるのが目についた。

「あすこへ友達が来てるんだ」と彼はいって、ランベールを二人の若者のほうへ連れていき、マルセルとルイという名前をいって紹介した。正面から見ると、二人は非常によく似ていて、ランベールはきっと兄弟だろうと考えた。

「さて」と、ゴンザレスはいった。「これでもう顔つなぎは済んだわけだ。いよいよ肝心の用件を片付けなきゃ」

マルセルだかルイだかがそこでいうには、彼らの警備当番は二日後に始まって一週間続くので、その間でいちばん都合のいい日に目星をつける必要があろう。彼らは四人で西口の門を守っていて、あとの二人は本職の軍人だった。その連中を仕事の仲間に入れるなどということは問題にならなかった。彼らは確かな連中でなかったし、それにそうすれば費用もふえるわけだ。しかし、日によっては、二人の同僚が夜の時間の一部を過しに顔なじみのバーの別室へ出かけることがある。マルセルだかルイだかは、そんなわけでランベールに門の近所の彼らの家へ身を落着け

に漂っているようであった。その頭上ではパイプ・オルガンが果てしない変調（ヴァリエーション）をかなでていた。

ランベールが出てきたときには、ゴンザレスはもう階段を降りて、町のほうへ向おうとしていた。

「もう行っちまったと思ったんだ」と、彼はランベールにいった。「それで当り前だからな」

彼が説明するには、彼はほかにもう一つ待ち合せる約束をして、ここから遠くないある場所で、八時十分前に友達を待っていた。ところが、二十分待ってみたが、だめだった。

「何か故障ができたのさ、そいつは間違いなしだ。いつも自由がきくとは限らないんでね、俺たちのやってるような仕事じゃ」

彼は、明日、同じ時刻に、戦没者記念碑の前で、もう一度待ち合せることにしようといった。

ランベールは溜息をつき、ソフトをうしろへはねあげた。

「これぐらいなんでもないぜ」と、笑いながら、ゴンザレスはきめつけた。「まあ考えてみろよ、どれだけ策を使ったり、後退したり、パスしたりしなきゃならんか、一ゴールものにするまでにな」

「そりゃそうさ」と、ランベールはなおもいった。「しかし、試合は一時間半しか続かないんだからね」

オランの戦没者記念碑は、この町で海が見える唯一の場所であるところの、かなり短距離ながら港に臨む断崖に沿っている一種の遊歩場のようなところにある。翌日、ランベールは待ち合せ

なってからでもいいんですが、ホテルのバーにお二人でいらしてください」

「先生とペストの都合次第ですがね」と、タルーはいった。

夜の十一時に、それでも、リウーとタルーは狭い小さなそのバーのなかへはいっていった。三十人ばかりの人々が、ぎっしり肩を並べてひどく大声にしゃべっていた。ペストにとりつかれた町の静寂のなかからやって来たので、二人はいささか茫然として、立ち止った。この騒がしさは、アルコール飲料がまだ出されているのを見るに及んで彼らにも納得がいった。ランベールはカウンターの一方のはずれにいて、椅子の高いところから彼らに合図をした。二人は彼をとり囲みながら、タルーのほうは騒々しい隣席の男を悠然と押しのけた。

「アルコールはかまいませんか？」

「いや、かまうどころか」と、タルーはいった。

リウーは自分のグラスのほろ苦い野草の香をかいでみた。この騒々しさのなかでは話をすることも困難であったが、しかしランベールは特に飲むほうに気をとられている様子だった。医師には、彼が酔っ払っているかどうかまだ判断がつかなかった。彼らのいる狭い一画の残りの空間をふさいでいる二つのテーブルの一つには、一人の海軍士官が両腕に女を一人ずつかかえ、真っ赤に顔をほてらした太っちょの話相手に、カイロでのチフス流行当時のことを話していた――「営舎があってね」と、彼はいっていた。「つまり土人用の営舎を設けて、患者を収容するテントを作って、そのぐるりにずっと歩哨線を配置してね、家のものがこっそり民間療法の薬をもちこんだりしようとすると、そいつを射撃するんだ。つらい仕事だったがね、しかし正しい処置だった

て、迎えに来るのを待つことにしてはどうかといった。そうすれば、門を通り越すのはまったく易々たることだ。しかし、ともかく急ぐ必要がある、というのは、市の外側に第二の哨所をもうけるという話がすこし前から出ているからだ。

ランベールは同意し、最後のたばこを二、三本出して勧めた。二人のうちでそれまでまだしゃべらなかったほうの男が、そこでゴンザレスに、費用の問題はもう話がついているのか、前金はもらえるかと尋ねた。

「いや、そんな必要はない」と、ゴンザレスはいった。「この男は仲間内なんだ。費用は出発のときにちゃんとするとしよう」

またあらためて落合うことに話がきまった。ゴンザレスは、明後日、スペイン料理屋で夕食ということにしようといった。そこから、まっすぐ衛兵たちの家へ行けるわけだった。

「最初の晩は」と、彼はランベールにいった。「俺が相客になってやるよ」

翌日、ランベールは、自分の部屋へ上がっていくと、ホテルの階段でタルーとすれ違った。

「これからリウーのいるとこへ行くんですが」と、タルーはいった。「君も来ませんか？」

「どうもわからないんでね、迷惑じゃないかと思って」と、ちょっとためらった後、ランベールはいった。

「そんなことはないと思うな。君の話をずいぶん聞かされましたよ」

新聞記者は考えていた——

「じゃ、こうしましょう」と、彼はいった。「晩飯のあとでちょっと暇がおありでしたら、屋く

「そういう保健隊は有用だとは思われませんか？」と、飲み終ったタルーはそういって、じっとランベールの顔を見つめた。

「きわめて有用ですー」と、新聞記者はいって、杯をあおった。

リウーはランベールの手が震えているのに気がついた。いよいよ完全に酔っ払ってしまったのだなと、彼は思った。

翌日、ランベールがまた二度目に例のスペイン料理屋へはいっていったときには、幾人かの人人のむれが、彼の通り道の、入口の前へ椅子をもちだして、緑と金色にいろどられた夕方の、暑さがやっと弱まりはじめる時刻を楽しんでいるところであった。彼らはつんとするようなかおりのたばこをふかしていた。店内はほとんど人気がなかった。ランベールは、最初のときゴンザレスと会った例の奥のほうのテーブルに行って腰を下ろした。給仕女には、ちょっと待つ人があるからといった。ちょうど十九時三十分であった。次第に、人々は室内に食事をしにもどってき、席につきだした。料理が出はじめ、そして扁円形の丸天井の下は、食器と不明瞭な会話の響きで満たされた。二十時になっても、ランベールは相変らず待っていた。あかりがともされた。新たな客たちが彼のテーブルのところに腰を下ろした。彼は一人で食事を注文した。二十時三十分には、すっかり済ましてしまったが、ゴンザレスも二人の若者も姿を見せなかった。彼はたばこをふかした。店内は徐々に空っぽになっていった。外は、急速に夜になりかけていた。海から来るなま温かいそよ風が、窓口のカーテンをそっと吹きあげていた。二十一時になったとき、ランベールは、室内が空っぽで、給仕女が不思議そうに自分のほうをながめていることに気がつい

よ」。しゃれたかっこうの青年たちが占領しているもう一つのテーブルでは、なんだかわけのわからない会話がかわされていて、上方にとりつけてある拡声器から流れ出る《セント・ジェームス・インファーマリイ》（訳注 ジョー・プリム（ジョー・プリムローズ作のブルース曲）の楽節のなかにかき消されていた。

「首尾よくいきましたか」と、リウーは声を高めながらいった。

「いよいよ近くなってきました」と、ランベールはいった。「あるいは今週中ぐらいかもしれません」

「残念だな」と、タルーは叫んだ。

「どうしてです？」

タルーはリウーの顔を見た。

「いや」と、リウーはいった。「タルーがそういうのは、あなたもこっちにいてくれたら、われわれのために役にたってもらえたんだがと思うわけなんですよ。しかし、僕としては、あなたの出ていきたい気持があんまりよくわかるんでね」

タルーはもう一ぱいずつやろうといった。ランベールは椅子から降りると、はじめてまともにタルーの顔を見つめた――

「いったいどういうことで、僕がお役にたてるんです？」

「どういうことって」と、自分の杯のほうへゆっくり手を伸ばしながら、タルーはいった。「つまりわれわれの保健隊の仕事でですよ」

ランベールはいつもの癖のむっと考えこんだような顔をして、また椅子の上にあがった。

んです、どういうわけだか知らないが。あちらは十時に来るはずです。十時半ぐらいに来てくださればいいでしょう」

翌日、コタールが医師の家にやって来たとき、タルーとリウーは、リウーの所管内に起った一つの意外な治癒例について話していた。

「十人に一人だ。運がよかったんだな」と、タルーはいった。

「なあに、そりゃね」と、コタールはいった。「つまり、ペストじゃなかったんですよ」

二人は彼に向って、それはたしかにその病気であったことを断言した。

「そんなはずがありませんよ、なにしろなおったくらいですもの。私でなくたって、よくご存じのはずじゃありませんか、ペストってやつは助かりっこないんですからね」

「一般にはそうです」と、リウーはいった。「しかし、少うしねばり強くやれば、思いがけない結果が得られることもありますよ」

コタールは笑った。

「そうは見えませんね。例の数字をお聞きでしたか、今晩？」

タルーは、好意的な目でコタールを見まもっていたが、そこでいうには、自分はその数字を承知しており、事態は重大であるが、しかしそれはどういうことを証明しているだろうか？　それは、さらにもう一段特例的な措置が必要であることを証明しているのだ。

「だって、それはもうやってるんでしょう」

「ええ、しかし、そいつをめいめいが自分でやる必要があるんです」

た。彼は勘定を済まして外に出た。その料理屋と向い合って、一軒のカフェが開いていた。ランベールはそこのカウンターに陣取って、料理屋の入口を見張っていた。二十一時三十分に、彼は、住所も聞いていないゴンザレスをどうやってつかまえたものかと、むなしく思案しながら、またやり直さなければならないすべての手続きを考えるとまったく心の張りもうせる思いで、自分のホテルのほうへ歩きだした。

つまりこの瞬間に、走り去る救急車の横切っていく暗夜のなかで、彼は、やがて医師リウーにもいったように、自分と女房とを隔てる壁にどこか出口を見つけようと全力を傾けていたために、ずっとこの期間中、ある意味で彼女のことを忘れていた、ということに気がついたのであった。しかし、同時にまたこの瞬間に、すべての道がまたもう一度ふさがれてしまってみると、またしても自分の願望の中心に彼女の姿が見出され、しかもそれが実に突如たる苦痛の激発を伴ってやって来たので、彼はいきなりホテルのほうへ駆けだしながらこの無残な痛みを逃れようとしたのであったが、しかしその痛みはどこまでも彼についてきて、彼の顳顬を締めつけたのである。

翌日、非常に早く、彼はそれでもリウーを訪ねてきて、コタールに会うにはどうしたらいいかと尋ねた。

「残された方法っていえば」と、彼はいった。「結局またその手順をたどっていくよりないんです」

「明日の晩おいでなさい」と、リウーはいった。「タルーがコタールを招んでくれっていってる

コタールはいきなりのけぞると、今にも倒れそうなかっこうで椅子につかまった。リウーは書くのをやめて、成行きを注目するような真剣な様子でその姿を見つめた。

「誰がそんなことをいったんです?」と、コタールは叫んだ。

タルーはまるで意外なことでもきかれたという様子で、いった――

「あなたがおっしゃったじゃありませんか。そうでないにしても、とにかく、そういうふうに、リウーと私はうかがったつもりなんですがね」

そしてコタールが、突如制しきれぬ忿怒に襲われて、わけのわからぬ言葉をまくしたてると――

「まあ、興奮なさらないで」と、タルーは言葉を添えた。「リウーにしろ、私にしろ、あなたのことを密告したりする人間じゃないんですから。あなたの話は私たちに関係のないことです。それに、警察なんて、私たちはついぞ好きになったことはないんです。いいから、まあ、お掛けなさい」

コタールは自分の椅子をながめ、ちょっとためらってから腰を下ろした。しばらくして、彼は溜息をついた。

「古い話なんですよ」と、彼はみずから認めた。「そいつが今ごろ引っ張りだされて。私はもう忘れられたことと思ってたんですよ。ところが、一人しゃべったやつがあるんです。そこで呼び出されて、取調べの終るまで、いつでも出頭できるようにしていろといわれたんです。それで、結局私は逮捕されるだろうとわかったわけです」

「重いことなんですか?」と、タルーは尋ねた。

コタールはよくのみこめないで、じっとタルーの顔をながめていた。タルーは、あまりにも多くの人々が無為に過していること、疫病はみんな一人一人の問題であり、一人一人が自分の義務を果すべきであること、をいった。奉仕隊はすべての人々に開放されているのだ。

「それも一つの考えです」と、コタールはいった。「しかし、そんなことはなんの役にもたちませんよ。ペストなんて、とても手に負えるしろものじゃないですからね」

「さあ、それはわからないでしょうね、あらゆることをやってみたうえでないと」と、しんぼう強い調子で、タルーはいった。

その間、リウーは机に向ってカードを写し直していた。タルーは、椅子の上でしきりにもじもじしているコタールの様子を、相変らずじっと見まもっていた。

「どうしてわれわれといっしょにやってくださらないんです、コタールさん？」

相手は傷つけられた様子で立ち上がり、山高帽を手にとった――

「そんなことは私の柄じゃありません」

それから、ことさらいどみかかるような調子で――

「それに、私には気持がいいんですからね、ペストのなかで暮すのが。だから、それを終らせようなんてことに手を出す理由は、私には見当らないんですよ」

タルーは、突如真相が心にひらめいたかのように、ぽんと額をたたいた――

「ああ、そうでした、すっかり忘れてしまって。あなたは逮捕されるわけでしたね、このことがなければ」

ら撤いたりしないようにだけはしてくださいよ」

コタールは抗弁して、自分はペストを望んだわけではなく、ペストは来たのだから来たまでで、おかげで今のところ自分の事件が具合よくなっているからといって、それはなにも自分の罪ではない、といった。そしてランベールが戸口へ到着したときには、コタールは卢にまで大いに力をこめて、こう付け加えたのであった――

「それに、私の考えでは、あなたがたはなんの結果も得られやしませんよ」

ランベールがきいてみると、コタールもゴンザレスの住所は知らなかったが、しかし例の小さなカフェから出直すことは今でもできるということであった。翌日待ち合せることに話がきまった。そして、リウーが今後の様子を知らせてほしいという希望を表明したので、ランベールは、今週の終りに夜の何時でもいいから、タルーといっしょに自分の部屋に来てくれるようにいった。

朝がた、コタールとランベールは例の小さなカフェに行き、ガルシアに、今晩か、あるいは、もしさしつかえがあった場合には明日待ち合せてくれるようにいいおいてきた。その晩、二人は待ってみたがだめだった。翌日、ガルシアは来ていた。彼は黙々としてランベールの話を聞いた。彼にはよく事情はわからなかったが、しかし彼の知っているところでは、戸別検査を実施するためいろんな区画の全部にわたって二十四時間の交通遮断が行われた。ひょっとすると、ゴンザレスと二人の若者は遮断線を突破できなかったのかもしれない。しかし、彼のなしうることといえば、またもう一度彼らをラウルと連絡させることだけだった。当然、それは明後日より早く

「それはおっしゃる意味によりますがね。いずれにしても、殺人じゃありません」
「禁錮、それとも懲役ですか？」
コタールはひどく打ちしおれた様子であった。
「禁錮でしょう、運よくいって……」
しかし、ちょっとしてから、彼はまた猛烈な勢いでいいだした――
「ひょっとした間違いなんです。誰でも間違いってものはあります。私は、考えるだけでもたまらないんです、そんなことで連れていかれるなんて、そうして自分の家からも、慣れた暮しからも、知合いのみんなの人たちからも引離されるなんて」
「なるほど、それでだったんですね、首をくくるなんて気を起されたのは？」と、タルーが尋ねた。
「ええ、ばかなまねをしたもんです、まったく」
リウーははじめて口を開いて、コタールに、彼の不安はよくわかるが、しかしおそらく万事うまい具合に片付くかもしれない、といった。
「いや、今のところ、別になんにも心配はないのはわかっています」
「どうやら」と、タルーはいった。「われわれの隊には、はいっていただけないようですな」
相手は、両手の間で帽子をぐるぐるまわしていたが、曖昧な目つきをタルーのほうへあげて――
「悪く思わないでください」
「もちろんですよ。しかし、少なくとも」と、タルーは笑いながらいった。「病菌をわざわざ

と同じところまで来たこと、そして程なく最後の待ち合せをするはずになっていること、をいった。彼は杯をあおり、そしてこう付け加えた――

「もちろん、やつらは来やしませんよ」

「なにも原則にしちまうことはないですよ、そんなことを」と、タルーはいった。

「あなたがたにはまだわかってないんです」と、ランベールは肩をすくめながらいい返した。

「何がです、いったい？」

「ペストというものがね」

「へえ！」と、リウーはつぶやいた。

「そうです、あなたがたにはわかってないんですよ、こいつの正体はしょっちゅう繰返すってことなんです」

ランベールは部屋のすみへ行って、小さな蓄音器のふたをあけた。

「なんです、そのレコードは？」と、タルーが尋ねた。「聞いたことのある曲だが」

ランベールは、これは《セント・ジェームス・インファーマリイ》だと答えた。

レコードの半ばほどで、遠くに二発の銃声が響くのが聞えた。

「犬か、それとも脱走かな」と、タルーはいった。

間もなくレコードが終ると、救急車の警笛が次第にはっきり大きくなってきて、ホテルの部屋の窓の下を通り過ぎ、また次第に細くなりながら、やがて最後に消えてしまった。

「こんなレコードはおもしろかありませんがね」と、ランベールはいった。「それに、今日はこ

はできない。

「どうやら」と、ランベールはいった。「すっかり初めっからやり直さなきゃならんようですね」

翌々日、ある街角で、ラウルはガルシアの推測を肯定した――下町のほうが交通遮断になっていたのである。またゴンザレスと連絡をとる必要があった。二日後、ランベールはそのフットボール選手と昼食をともにしていた。

「頓馬な話さ」とゴンザレスはいった。「何か連絡の方法をきめとくんだったな」

それはランベールも同意見であった。

「明日の朝、子供たちのところへ行くとしよう。そこでなんとか手配をつけちまおう」

翌日、子供たちは家にいなかった。そこで彼らに、明日の正午、高等学校の広場で待ち合せるようにいいおいてきた。そしてランベールが帰ってきたときの表情は、その午後タルーが出会ったとき、ぎょっとしたほどだった。

「うまくいってないんですか？」と、タルーは尋ねた。

「やたらにおんなじことのやり直しばっかりでね」と、ランベールはいった。

彼は先日の招待をあらためて繰返した――

「今晩、いらしてください」

その晩、二人がランベールの部屋へはいっていくと、ランベールは横になっていた。彼は起き上がり、用意しておいた杯を満たした。リウーは自分の杯をとりながら、例の件はうまく進行しているかと尋ねた。ランベールは、自分がまたもう一度完全に道順を一巡りしたこと、やっと前

「人間はどんな能力でももちうるような気がしますがね」と、タルーはいった。
「そんなことはありません。人間は長い間苦しんでいることも、幸福でいることもできません。つまり、価値のあることなど、なんにもなしえないのです」
彼はじっと二人を見つめていたが、やがて――
「どうでしょう、タルーさん、あなたは恋愛のために死ぬことができますか？」
「さあ、どうだか。しかし、どうも死ねないような気がするな、今は」
「そうでしょう。そのくせ、あなたがたは一つの観念のためには死ねるんです。それはありありと目に見えてますよ。ところがです、僕はもう観念のために死ぬ連中にはうんざりしているんです。僕はヒロイズムというものを信用しません。僕はそれが容易であることを知っていますし、それが人殺しを行うものであったことを知ったのです。僕が心をひかれるのは、自分の愛するもののために生き、かつ死ぬということです」
リウーは新聞記者の言葉を熱心に傾聴していた。そしてじっと相手を見つめていた目を放さず、彼はやさしくこういった――
「人間は観念じゃないですよ、ランベール君」
相手は、激情に顔を燃え上がらせて、寝台からとび降りた。
「観念ですよ、しかもまるでちっぽけな観念なんです、人間が愛というものに背を向けたってことになれば。ところでまさに、われわれはもう愛というものをもちこたえられなくなってしまったんです。そう思って、あきらめることですね。いつかは、それができるようになるのを期待す

れでもう十遍も、こいつを聞いてるんです」
「そんなに好きなんですか、これが？」
「そうじゃないんですがね、なにしろこれしかもってないんです」
そして、ちょっとしてから——
「だから、そういってるんですよ、こいつの正体は繰返すってことだって」
彼はリウーに保健隊のほうはどんな具合かと尋ねた。現在、五つの班が活動している。まだほかにも幾つかの班ができそうだ。ランベールは寝台に腰を下ろして、爪の手入れに余念がない様子であった。リウーは寝台の縁にかがまった、その低くたくましい側面像（シルエット）をうちながめていた。突然、気がつくと、ランベールがこっちをじっと見つめていた。
「そりゃあね」と、彼はいった。「僕はずいぶん考えたんですよ、あなたがたの隊のことは。それでいっしょになってやらないっていうのは、僕には僕だけの理由があるからです。ほかのことなら、今でもまだ身を抛（なげう）ってやることができるつもりです。僕はスペインの戦争もやりましたからね」
「どっちの側です？」と、タルーが尋ねた。
「負けたほうの側です。しかし、それ以来、僕はいささか考えさせられたんです」
「どういうことを？」と、タルーはいった。
「勇気っていうことです。今では、僕は人間が偉大な行為をなしうることを知っています。しかし、もしその人間が偉大な感情をいだきえないなら、それは僕には興味のない人間です」

「あなたがたは二人とも、なんにも失うところはないんでしょうからね、そういうことのために。いいほうの側に立つのはやさしいことです」

リウーは杯をほした。

「さあ」と、彼はいった。「まだ仕事が残ってる」

彼は出ていった。

タルーもそのあとを追ったが、出ようとする瞬間ふと思い直したらしく、新聞記者のほうを振向いて、こういった——

「知ってますか、リウーの細君は療養所にいるんですよ、ここから何百キロか離れた……」

ランベールは驚きの身ぶりをしたが、タルーはすでに行ってしまっていた。

翌日、朝早々に、ランベールは医師に電話をかけた——

「僕もごいっしょに働かせていただけますか、町を出る方法が見つかるまで？」

線の向うではちょっと沈黙の気配が漂ったが、やがて——

「どうぞ、ランベール君。おこころざしありがとう」

るとして、もしいよいよそれが不可能ときまったら、万人必定の解放の日を待つばかりです、ヒーローを気どったりしないでね。僕はまあ、それ以上はご免こうむりますね」

リウーは、急に疲れが出てきたような様子で立ち上がった。

「君のいうとおりですよ、ランベール君、まったくそのとおりです。ですから、僕は、たとい何ものためにでも、君が今やろうとしていることから君を引きもどそうとは思いません。それは僕にも正しいこと、いいことだと思えるんです。しかし、それにしてもこれだけはぜひいっておきたいんですがね――今度のことは、ヒロイズムなどという問題じゃないんです。これは誠実さの問題なんです。こんな考え方はあるいは笑われるかもしれませんが、しかしペストと戦う唯一の方法は、誠実さということです」

「どういうことです、誠実さっていうのは？」と、急に真剣な顔つきになって、ランベールはいった。

「一般にはどういうことか知りませんがね。しかし、僕の場合には、つまり自分の職務を果すことだと心得ています」

「ああ、まったく」と、ランベールは狂おしくつぶやいた。「僕には何が自分の職務だかわからない。実際、ちゃんと愛を選んだのが間違いだったかもしれない」

リウーは彼のほうに向き直った――

「そんなことはない」と、力をこめて彼はいった。「君は間違ってはいませんよ」

ランベールはもの思わしげに二人のほうをながめた。

うな埃でおおわれていたが、それが風に吹かれてぽろぽろはがれ落ちた。風は、そこで波のように埃と紙屑を吹きあげ、ますますまれになってきた道行く人々の足に吹きつけた。それらの人々は前かがみにハンカチか手を口に当てて、街々を急いでいるのが見られた。夕方になると、これまでは毎日これが最後となるかもしれないその一日をできるだけ長びかせようとして人々がむらがっていたのに代って、自分の家か、あるいはカフェへの道を急いでいる人々の小人数のむれに出会うようになり、そのため幾日かの間というもの、この季節にはずっと早目になる黄昏時には、街頭には人影が絶え、風だけが絶え間のないうなり声をあげているようになってしまった。うねりの高まった、相変らず姿の見えない海から、海藻と塩の香が立ち上ってきた。埃に真っ白になり、海の香をいっぱいに漂わせ、風のうなりに鳴りはためくこの無人の町は、このときまるで哀しみの島のようにうめき泣くのであった。

これまで、ペストは、町の中心部よりも、人口稠密で住み心地のよくない外郭区域のほうにずっと多くの犠牲者を出していた。ところが、それが突如としてオフィス街にも近づき、そこに腰をすえたように思われた。住民たちは、それを、風が病毒の種を運んできたせいにした。「風が何もかも引っかきまわしちまう」と、ホテルの支配人はいっていた。しかし、その点はどうであろうと、中心地区の人々は夜中に、しかもますます頻繁に、ペストの陰鬱な無感情な呼び声を窓の下に響かせる、救急車のベルをすぐ身近かに聞くようになって、いよいよ自分たちの番が来たことを知るのであった。

市内それ自体のなかでも、特に被害のひどい若干の区域を隔離して、そこからは必要欠くべか

こうして、うち続く週また週にわたって、ペストにとりこめられた人々は、みんなそれぞれに精いっぱいの奮闘を続けたのであった。そして彼らのうちのある者、たとえばランベールなどは、自分がまだ自由な人間として行動しているのであり、まだ自分で選択することができるものと、思うことにさえ成功していたことがわかる。しかし、事実上、八月の半ばというこの時期には、ペストがいっさいをおおい尽したといってよかった。もうこのときには個人の運命というものは存在せず、ただペストという集団的な史実と、すべての者がともにしたさまざまの感情があるばかりであった。その最も大きなものは、恐怖と反抗がそれに含まれていることも加えて、別離と追放の感情であった。それゆえに筆者は、この暑熱と病疫の絶頂において、総括的な情況と、そして――例証的な意味で――生存者市民の暴行、死亡者の埋葬、引離された恋人たちの苦しみなどについて、書いておくのが適当だと信ずるのである。

ちょうどこの年の半ばごろになって、風が起り、ペストの蔓延した市中に幾日も吹きつづけた。風はオランの住民の特に恐れるところであるが、それは町の建設されている台地の上では風がなんら自然の障害に出会うことなく、そのためあらんかぎりの激しさで街々に吹きこむからである。幾月もずっと一滴の雨の恵みにも浴さないでいたあげくで、町はいちめん灰色の塗料のよ

つけた人々に対して特に猛威をたくましくするように思われた。ある種の拘禁者は個々に隔離されているとはいえ、牢獄は一つの共同体であり、そしてそのことをよく証明するものは、この市の牢獄において、看守たちも囚人に劣らず、病疫に対する犠牲を納めたということである。ペストという一段高い見地からすれば、所長から最も軽微な拘禁者に至るまで、すべての者が逃れぬ運命を宣告された人間であり、そしておそらくはじめて、完全無欠の正義が牢獄内に行われたのである。

当局はこの水平化状態に階級性をもちこもうと試みて、職務の遂行中に死亡した看守たちに勲章を授けるという考案を思いついたが、結局むなしい努力であった。戒厳令が発令されていて、ある角度からすれば刑務所の看守は応召者と見なすこともできたので、当局は彼らに死後の追贈として従軍章を授けた。ところが、拘禁者たちからはなんら抗議の声は聞かれなかったものの、軍関係の方面ではこれを快しとせず、一般公衆の感情に好ましからぬ混同を生ぜしめる恐れがあると、いかにも至当な点に注意を喚起した。当局は彼らの要求をもっともであると認め、最も簡単な方法は、死亡した看守たちに防疫功労章を贈ることだと考えた。しかし、最初の連中にはもう後の祭りで、今さら勲章を取返すことは考えられなかったし、軍関係の方面は依然として彼らの見解を主張しつづけた。一方また、防疫功労章に関する面からいえば、疫病時にはこの種の勲章をもらうなど月並みなことなので、軍の勲章の授与によって得られたような精神的効果をもたらさないという難点があった。結局、誰も彼も不満に終る結果となった。

それに、刑務所当局は、教会関係や、またそれよりは控え目な程度で軍関係がやったようには

らざる職務をもつ人間しか出ることを許さないようにすることが考えられた。これまで、そこに住んでいた人々は、この措置を、特に自分たちだけを目当てにした一つの新しい者いじめみたいに見なす気持を抑ええなかったし、いずれにしても、彼らは対照的にほかの地区の居住者たちのことを、まるで自由な人間のことでも考えるように考えていたのである。ほかの地区の居住者は、それに引きかえ、彼らの最も困難な瞬間にも、他の人々は自分たちよりもまたさらに自由を奪われているのだと考えることに、一つの慰めを見出していた。「それでもまだ俺以上に束縛されている者があるのだ」というのが、そのとき、可能な唯一の希望を端的に示す言葉であった。

ほぼこれと同じ時期にまた、特に市の西口のあたりの別荘街において、火事がひんぴんと起るようになるという事態が生じた。事情を調査してみると、予防隔離から帰ってきて、喪の哀しみと不幸に半狂乱になった人々が、ペストを焼き殺すような幻想に駆られて、自分の家に火をつけるのであった。こういう企てを抑えるのは非常に骨が折れ、それが頻発することは、はげしい風のせいでその界隈全部を不断の危険にさらしていた。当局によって行われる家屋の消毒だけで、病毒汚染のあらゆる危険を駆逐するに十分であることをいかに証明してみてもむなしく、そのあげく、これらの罪なき放火者に対してきわめて厳重な刑罰を公布しなければならなかった。しかもおそらく、この不幸な人々をそのとき逡巡させたものは投獄という観念ではなく、すべての市民に共通の確信――市の獄舎において指摘される極度の死亡率の結果、投獄の刑は死刑に等しいという確信――であった。もちろん、この信念は根拠のないものではなかった。一見明白な理由からして、ペストは兵士、修道者、あるいは囚人など、すべて集団をなして生活する習慣を身に

扱い、それに基づく規則を適用するに至ったのである。二人の窃盗犯人が銃殺されたが、しかしこのことがほかの連中に感銘を与えたかどうかは疑わしかった。というのは、こんなに多くの死亡者のあるなかでは、この二つの処刑など一向目につくこともなく済んでしまったからである。まさに大海の一滴であった。そして実際のところ、同じような場面が相当頻繁に繰返され、しかもそれに対して当局は一向乗りだす気配も見せなかった。すべての市民に感銘を与えたと思われる唯一の措置は、消燈時刻の制定であった。十一時を境として、完全な闇のなかに沈んでしまった町は、さながら石と化した町であった。

月明りの空のもとに、町はその家々の白っぽい壁と、直線的な街路――一本の樹木の黒くはびこった影に汚点をつけられることもなく、一人の散歩者の足音にも一匹の犬の吠え声にも乱されることのない街路――を連ねている。静まり返った大都会は、このときもう生気を失った巨大な立方体の集合にすぎず、その間にあって、忘れられた慈善家たちや、永久に青銅のなかに封じこまれたかつての大人物たちの無言の肖像だけが、石あるいは鉄製のそのまがいものの顔をもって、かつて人間であったものの落ちぶれた面影を呼び起そうとひとり試みているのであった。これらの陳腐な偶像は、たれこめた空のもとで、生気の絶えた四辻にその身をひけらかしていたが、無感覚な愚鈍者のようなその姿は、今やわれわれの突入した不動状態の時代、あるいは少なくともその終局の様相――ペストと石塊と暗夜とが遂にすべての声を沈黙せしめた一個の穴倉の墓地のごとき様相――を、かなりよく象徴していたのである。

やれなかった。市内に二つきりの修道院の会士たちは、事実、信心深い家々に臨時に分散宿泊させられていたのであった。同様に、兵営からは、そうできるときにはいつでも、小分隊が分遣されて、学校や公共の建物に駐屯させられていた。こうして、一見、攻用された者の連帯性を住民に強制していたと見られる病疫は、同時に、伝統的な結合を破壊し、また各個人をめいめいの孤独に追いやっていたのである。これは混乱を生みだした。

これらのすべての状況が、風の襲来に加えて、ある種の人々の精神にもまた火事を生ぜしめたことは考えられる。市の各門口はまたしても、夜間、何回となく、しかも今度は武装された小集団によって襲撃された。銃火の応酬、負傷者、そして若干の逃亡があった。衛兵所は強化され、こういう企てはかなり急速に跡を絶った。それでもこれは、市内に一抹革命の息吹きを生ぜしめるに十分であり、それが若干の暴力的な場面を誘発した。火災をこうむった、あるいは保健上の理由から閉鎖された家屋が、略奪されたのである。実際のところ、かかる行為があらかじめ計画されたものであったと推定することは困難である。たいていの場合は、突然の機会が、それまでりっぱな人物であった人々をけしからぬ行動に出させ、それが即座に見習われるのであった。そんな次第で、まだ炎に包まれている家へ、悲しみのため茫然としている当の家主の目の前で、とびこんでいくようなすさまじい人間も出た。家主の無関心ぶりがわかると、最初の連中の手本は多くの見物人によって見習われ、そしてその暗い街頭には、消えかけた炎の輝きと肩にかついだ品物あるいは家具のために異様にゆがんだ影のむれが、四方八方に逃げていくのが火事場の明りで見られるのであった。こういう付随事件のために、当局はやむなくペスト令を戒厳令と同一に

病人は家族から遠く離れて死に、通夜は禁止されていたので、結局、宵のうちに死んだ者はそのまま死体だけでその夜を過し、昼の間に死んだ者は時を移さず埋葬された。もちろん、家族には知らされたが、しかしたいていの場合は、その家族も、もし病人のそばで暮していた者なら予防隔離に服しているので、そこから動くことができなかった。家族が故人といっしょに住んでいなかった場合には、その家族は指定された時刻に出向くのであったが、その時刻というのは、遺体が清められ、棺に納められて墓地へ出発する時刻だったのである。

かりにこの手続きが、医師リウーの受けもっている例の分院で行われたとする。その学校には母屋の裏手に出口が一つ設けられていた。廊下に面した広い物置小屋に死亡者たちの棺が収容されている。その廊下に、家族のものは、すでにふたを打ちつけてしまった棺が一つだけ置いてあるのを見出す。さっそく、人々は最も重要な事柄に移るのであるが、それはつまり戸主にそれぞれの書類に署名させることである。次いで遺体を自動車へ乗せるが、これはただのトラックであることもあれば、大きな救急車を改造したものであることもある。身内の人々はまだ許されているタクシーの一台に乗り、そして全速力で、車は外郭の街々を通って墓地に達する。入口で、憲兵が一行を止め、それがなくてはわが市民たちが最後の住処と呼んでいるものを得ることも不可能であるところの、公式の通行許可証にほんとゴム印を押し、あとへさがり、そこで車は、幾つもの墓穴が満たされるのを待っている一区画の近くまで行って停車する。一人の司祭が遺体を迎える。というのは埋葬の儀式は教会では禁止されていたからである。祈祷のうちに棺を下ろし、綱をかけ、棺は引かれ、すべり落ち、穴の底に当り、司祭が灌水器を振ると、早くも最初の土が

しかし、暗夜はあらゆる人々の胸のなかにもあり、そして埋葬のことに関して伝えられる真相も伝説も、ともに市民の心を安んずるていのものではなかった。というのは、埋葬についてもやはり語る必要があるわけであり、筆者の失礼は許していただきたい。この点に関して非難をこうむるかもしれぬことは筆者も十分感じているのであるが、しかし筆者の唯一の弁解は、この期間中を通じていつも埋葬があったことであり、そして埋葬について心を悩ますことを、すべての市民が余儀なくされたと同様に、ある意味で筆者も余儀なくされたのだということである。いずれにせよ、これは筆者がこの種の儀式に趣味をもっているからではなく、筆者はむしろ反対に、生きている人々といっしょに過すこと、一例を示せば海水浴などのほうが好きなのである。しかし、結局、海水浴は禁止されてしまっていたし、そして生きている人々のいっしょに過す社会は、死者たちの社会に席を譲らねばならなくなることを、来る日も来る日もたえず恐れていた。つまり、これは明白な事実だったのである。もちろん、相変らずそれを見まいと努め、眼をふさいでそれを受けつけないでいることはできたが、しかし、明白な事実というものは恐るべき力を有するものであり、最後にはつねにすべてのものに打勝ってしまう。たとえば、諸君の愛する人人が埋葬を必要とすることになった暁に、いかにして埋葬を受けつけないでいられるか、ひとつうかがいたいものである。

ところで、初めのころわれわれの葬式の特徴をなしたものは、迅速さということであった。すべての形式は簡略化され、そして一般的なかたちでは葬儀の礼式というものは廃止されていた。

行程を幾度も繰返すことであると思われた。そこで、リウーの受持に関していえば、その病院はこの時期には五つの棺を使用していた。それがいっぱいになってしまうと、救急車がそれを積んでいく。墓地では、棺はからにされ、鉄色をした遺体は担架に載せられて、この用途のために改造された用具小屋のなかで待っているのである。柩は消毒液を散布されて、病院へ持ち帰られ、そしてこの手順が必要な回数だけ繰返される。この仕組みはそういうわけでなかなかよかったし、知事もそれに満足のていであった。知事はリウーに向って、これは結局のところ、昔のペストの記録に見られるような、黒んぼが引いていく死体運搬車などというものよりはましだ、といったくらいである。

「そうです」と、リウーはいった。「結局おんなじような埋葬の光景ですが、われわれのほうはカードを作ってますからね。進歩は歴然たるものですよ」

こういう処理面の成功があったにもかかわらず、こうなるとこの手続きが帯びる不快な性格のために、県庁は身内の人々を葬式から遠ざけることを余儀なくされた。単に、彼らが墓地の人口まで来ることだけが許容されたが、しかもそれさえ公式のことではなかった。というのは、最後の儀式に関する点で、事情が少し変ってきたのである。墓地のはずれの、乳香樹におおわれた裸地に、巨大な墓穴が二つ掘られていた。男子用の墓穴と女子用のそれとがきまっていた。この点からすれば、施政当局は在来の礼儀を尊重していたわけであり、そしてずっと後になってはじめて、事態の圧力により、この最後の羞恥心も消失し、男たちと女たちとを、礼儀上の慎しみも何も構わず、互いにごちゃまぜに積み重ねてうずめるようになったのであった。幸いにして、この

ふたの上にはね返る。救急車は消毒液の散布を受けるために少し前に帰ってしまい、そしてシャベルにすくわれる粘土が次第に鈍くなる響きをたてている間に、家族のものたちはタクシーのなかにもぐりこむ。十五分の後には家に帰り着いているのであった。

こうして、すべてはまさに最大限の速度と最小限の危険性をもって取行われた。そして疑いもなく、少なくとも初めのころは、家族の人々の自然の感情はそれによって傷つけられた。しかし、ペスト流行時においては、そういう考慮はとうてい斟酌していられない。実用性というもののためにすべてを犠牲にしていたのである。それに、最初のころは市民の精神状態もこういうやり方を苦にしていた（というのは、ちゃんと作法どおりに埋葬されたいという欲求は、人々が思っている以上に広くいきわたっているのである）としても、のちには、幸いにも食糧補給の問題が微妙になり、住民の関心はもっと直接な顧慮のほうへ向わせられた。食っていこうと思えば、行列に並んだり、手続きを済ましたり、書式を整えたりしなければならぬことにすっかり手をとられて、人々は自分たちのまわりで死んでいく者の死に方や、またいつか自分が死んでいくときの死に方など、考えている暇がなかった。そんなわけで、本来一つの災いであるはずのこういう物質的困難が、のちには一つの天恵たる性質を示した。そして、もしすでに明らかにしたごとく病疫が蔓延していなかったら、万事上乗の首尾ということになるところであった。

というのは、棺がそのころには数少なくなり、屍衣にする布も、墓地内の場所も足りなくなったのである。なんとか考えなければならなかった。いちばん簡単なのは、これも相変らず実用性という理由からであるが、葬式を一まとめにし、そしてその必要がある場合には、病院と墓地の

からである。大部分の場合、彼らは幹部の組織に対する充員とはならなかったが、しかし下層の仕事のほうは、それによって事情が楽になった。この時期からは、実際、困窮が恐怖にまさる力を示す事実がつねに見られたのであり、仕事は危険の度合いに応じて賃金を支払われていただけに、なおさらのことであった。保健課は就職希望者の名簿を用意しておくことができ、そしてどこかに欠員が生じたといえば、さっそくその名簿の先頭の連中に通知するのであったが、すると、それまでの間に彼ら自身も欠員の仲間入りをしてしまったような場合は別として、彼らはいつも間違いなく出頭するのであった。そういうわけで、有期あるいは無期の囚人をこの種の作業に使用することを長い間躊躇していた知事も、この究極の手段まで行くことを避けえたのであった。失業者がある間は、彼はまだ待っていられるという意見であった。

とにかく曲りなりにも、それも八月の終りまでは、市民たちはそういうわけでその最後の住処へ、礼儀にかなったやり方ではないまでも、少なくとも施政当局がみずからその義務を果しているという意識をもちつづけるに足りるだけの秩序正しさをもって、送られることができたのであった。しかし、ちょっとその後の事件にまで先走りすることになるが、ついに採用しなければならなかった最後の手段について述べておかねばならぬ。八月にはいって以来、事実上ペストが頂上に達した状態を持続している時期において、犠牲者の累増は、この町のささやかな墓地が提供しうる可能性をはるかに越えてしまった。へいの一部を取壊し、死者たちのために隣の地所へ掘り口を作ってみても追っつかず、たちまちまた別の方策を捜さねばならなかった。まず、埋葬を夜間に行うことが決定されたが、これはたしかにある種の顧慮を用いる手数をはぶいてくれる

終局的な混交は、わずかに病疫の最後の時期を画しただけであった。今ここで述べている時期においては、墓穴の区別が存在し、県庁は大いにこの点に固執していた。この墓穴のそれぞれの底には、たっぷり厚い層をなした生石灰が、湯気をたててわきたっていた。穴の縁には、同じ石灰の山が、外の空気に向って泡を吹きたたせている。救急車の往復が済んでしまうと、担架が行列をなして運ばれ、裸にされたやや損れ気味の死体が、ほとんど相接して並びつつ穴の底へ滑り落され、そしてその瞬間、生石灰と、次には上がその上におおいかぶせられるのであるが、しかしそれも来たるべき宿主に場所をあけておくために、ある深さまでにとどめられる。翌日、身内の者は一通の登録書に署名することを求められるが、これは人間とたとえば犬との間にありうる差異を示すものであった。すなわち、登録ということがいかなる場合にも可能だったのである。

こういうすべての作業のためには人員が必要であり、そしてしょっちゅう、まさにそれに事欠こうとする状態にあった。最初は正式の、後には間に合せの職員であったこれらの看護人や墓掘り人夫も、多くのものがペストで死亡した。どんなに用心してみても、いつかは感染してしまうのであった。しかし、よく考えてみると、最も驚くべきことは、病疫の全期間を通じて、この職業をやる人間に、ついに事欠くことがなかったということである。危機は、ペストがその絶頂に達したほんの少し前にあったわけで、そのとき、医師リウーの不安は根拠のあるものであった。幹部の組織にも、彼のいわゆる荒仕事にも、人手は十分ではなかった。しかし、ペストが事実上全市を占領するに至った時期からは、その激烈さそのものがそこではなはだ好都合な結果をひき起した。というのは、それがあらゆる経済生活の組織を破壊し、相当多数の失業者を生ぜしめた

づくことを禁じていたにもかかわらず、よく幾組もの人々が波の上に突き出ている岩々の間に首尾よくもぐりこんで、電車の通るとき、遊覧車のなかに花を投げることがあった。すると、夏の夜のなかでなおも揺れながら、花と死体の荷を積んでいく車の音が聞えるのであった。

それはともかく、初めのころは、朝がた、胸の悪くなるような濃い煙が、市の東寄りの地区の上空に漂った。すべての医者の意見では、この蒸気は、不快な感じのものではあるが、誰にも害になるようなものではないということであった。しかし、これらの地区の住民は、それによってペストが上空から自分たちに襲いかかってくると思いこんでいて、直ちにその地区から退去してしまうと威嚇したので、ついにその煙を複雑な導管装置でほかへ向けることを余儀なくされ、住民は静まった。ただ大風の日にだけ、東の方から流れてくるかすかなにおいが、彼らは一つの新たな秩序のなかに置かれており、そして、ペストの火炎が毎日彼らの貢物を食い尽しつつあることを、彼らに思い出させるのであった。

これが病疫の極限に達した最後の状態であった。しかし、病疫がその後増大しなかったことは幸運であって、それというのが、われわれの役所の明敏さも、県庁の処理能力も、焼き場の竈の消化能力さえも、あるいは追っつかなくなったかもしれぬことが、考えられるのである。リウーは、そうなれば、死体を海に捨てるというような、万策尽きた解決が予想されていたことを知っていたし、青い水面にそれらの死体が悽惨な飛沫をあげるさまを、容易に想像することができた。彼はまた、もし統計が上昇しつづけたならば、いかなる組織も、いかに優秀な組織であろうと、それに抗しえず、たとい県庁はあっても人々は折重なって死に、街頭に腐っていくであろう

ことであった。これによって次第にますます多くの死体を救急車に積みこむことができた。そして、あらゆる規則を無視して、消燈時の後にも外郭区域にはまだ見られる、幾人かの遅くなった散歩者（あるいは職業上のことでそうなった人々）は、ときどき、ひょろ長い白色の救急車数台が、そのつやのないベルの音を深夜のうつろな街々に響かせながら、全速力で走り去るのに出くわすのであった。大急ぎで、死体は墓穴へ投げこまれる。死体の動揺がまだすっかり落着かないうちに、シャベルの石灰がその顔にたたきつけられ、そして土がそれを、ますます深く掘るようになった穴のなかに、まったく無名のかたちでおおってしまうのであった。

しかしながら、もう少し後になると、もっとほかの方面を捜して、さらに手を広げることを余儀なくされた。県知事布告が出て、永代墓地の占有者の権利が収用され、発掘された遺体はすべて焼き場へまわされた。間もなく、ペストの死亡者たちまでも火葬に向けなければならなくなった。ところで、そうなると、市の東の、市門の外にある昔の火葬場を利用しなければならなかった。警備の前哨は今までより遠くに移され、そして市庁のある役人が、むかし臨海道路を走っていた線で当時は廃線となっていた市電を利用することを進言して、当局の仕事を大いに楽にした。これがため、遊覧車や牽引車から腰掛を取除いて内部を改造し、そして線路を焼き場のところまで迂回させ、そこで焼き場は一つの線の起点となったわけであった。

そして夏の終りの間じゅう、また秋の雨続きの最中にも、ずっと臨海道路に沿って、毎晩真夜中ごろに、乗客のない電車の異様な縦列が、海岸の上をひょろつきながら通るのが見られた。市民もついにはその間の事情を知るようになった。そして、パトロール隊が巡回して臨海道路に近

の客観性が、ここで筆者に命じてこういわせるのであるが、この時期における大きな苦痛、最も一般的であるとともに最も深刻な苦痛は、別離ということであったとしても、またそれについてペストのこの段階における新たな叙述を良心的に行うことが不可欠であったとしても、その苦痛そのものさえ当時はその悲壮なものを失っていたということは依然として事実なのである。

市民たち、少なくともこの別離に最も苦しんでいた人々は、現在の状況に慣れてしまったのであろうか？ それを肯定することは完全に正しいとはいえないであろう。彼らは精神的にも肉体的にも、肉のやせ細るのに苦しんでいたといったほうが、もっと正確であろう。ペストの初めのころには、彼らは自分の手もとから失われた者のことを、きわめてよく思い出して、なつかしがったものであった。しかし、愛するその顔や、その笑い声や、今になってそれは幸福な日だったとわかった、ある日のことなどは、あざやかに思い出せたとしても、彼らがそうして思い出しているその時刻に、しかもそれ以来じつに遠いところとなった場所で、相手がどんなことをしているものか、それを想像することは困難であった。要するに、この時期においては、彼らには記憶はあったが、想像が不十分だったのである。ペストの第二段階においては、彼らは記憶も失ってしまった。その顔を忘れてしまったわけではなく、しかし結局同じことになるが、その顔が内づけを失ってしまい、彼らはその顔を自分の内部に見出しえなくなってしまったのである。そして、最初何週間かの間は、自分の愛に関することがらにおいて、もう亡霊ばかりしか相手にできなくなったことを、彼らはとかく嘆きたがったものであったのに、その後彼らは、これらの亡霊がさらにやせ細って、思い出によって残されていた最も些細な色合いまで失ってしまいうることに気

こと、そして市内には、死にかけている人々が、正当な憎悪と愚かしい希望の入りまじった気持で、生存者にすがりつく姿も、公共の場所で見られるようになるであろうことを知っていたのである。

つまりこの種の明瞭な事実、あるいは懸念が、いずれにしても、わが市民たちの心に、彼らが流刑にされ隔離されているという感じをもちつづけさせたのである。この点に関して、たとえば人を力づけるなんらかのヒーローとか、めざましいなんらかの行動とか、古い記述に見られるそれにも似た真に観物たりうるような何ものをもここに述べえないことが、どんなに遺憾なことであるかは、筆者も十分承知している。それはつまり、天災ほど観物たりうるところの少ないものはなく、そしてそれが長く続くというそのことからして、大きな災禍は単調なものだからである。みずからペストの日々を生きた人々の思い出のなかでは、そのすさまじい日々は、炎々と燃え盛る残忍な猛火のようなものとしてではなく、むしろその通り過ぎる道のすべてのものを踏みつぶしていく、果てしない足踏みのようなものとして描かれるのである。

まったく、ペストは、病疫の初めに医師リウーの心を襲った、人を興奮させる壮大なイメージとは、同一視すべき何ものももっていなかった。それは何よりもまず、よどみなく活動する、用心深くかつ遺漏のない、一つの行政事務であった。つまりそういうわけで、ついでながらいえば、何ものをも偽らず、特に自分自身を偽らないために、筆者は客観性ということに努めてきたのである。筆者は、一つの叙述をほぼ筋の通ったものにするための基本的な必要に関するものを除いては、ほとんど何ものも芸術的効果のために変更しようとはしなかった。そしてすなわちそ

輝きがあった。今では、街角やカフェやその友人たちのところで見られる彼らの姿は、平静でかつ放心したように、そしてじつにうんざりした目つきをしているので、彼らのせいで町じゅうが待合室の観を呈するほどであった。職業をもっている連中にしても、その職業をさながらペストそのものの物腰で、せせこましく、精彩もなくやるのであった。誰も彼も、みんな謙遜になっていた。今はじめて、引離されている人々も、いなくなった相手のことを語ったり、万人向きの用語を用いたり、自分たちの別離を病疫の統計と同じ角度において検討したりすることを、嫌がらなくなった。それまでは、自分たちの苦痛を集団的な不幸からがむしゃらに引離していたのに、今ではその混交を許容していた。記憶もなく、希望もなく、彼らはただ現在のなかに腰をすえていた。実際のところ、すべてが彼らにとって現在となっていたのである。これもいっておかねばならぬが、ペストはすべての者から、恋愛と、さらに友情の能力さえも奪ってしまった。なぜなら、愛は幾らかの未来を要求するものであり、しかもわれわれにとってはもはや刻々の瞬間しか存在しなかったからである。

もちろん、こういうことはどれも絶対的なものではない。というのは、引離されている人々がすべてこの状態にたどりついたことは事実であったとしても、みんながそれに同時に到達したわけではなく、かつまた、いったんこの新たな態度に身を落着けてからも、ふとひらめいたり、取りもどしたりする突然の覚醒状態によって、それらの忍従者たちがもっと若々しい痛切な感受性を呼びもどされることがあったということは、付け加えておくほうが正しいからである。そういうなかには、ペストが終ったことが内容の一部となっているような何かの計画を彼らが描いたり

がついたのであった。この長い別離の期間の果てには、彼らはもう、かつて自分たち同士のものだったあの親しさも、また、いつでもその肩に手をかけることのできた相手が、自分のそばでいったいどんなふうに暮していたものかも、想像できなくなってしまった。

この点から見れば、彼らはペストの世界そのもの、平々凡々であるだけに、一層威力のある世界に、はいっていたわけである。われわれの町では、もう誰一人、大袈裟な感情というものを感じなくなった。そのかわり、誰も彼もが、単調な感情を味わっていた。「もう終ってもいい時分だ」と、市民たちはいっていたが、それは天災時においては集団的な苦痛の終了を願うのは普通のことだからであり、また実際に彼らはそれが終ることを願っていたからである。しかし、これらの言葉も、初めのころのような熱っぽさや痛切な感情はなく、ただ、われわれがまだはっきり取りとめている、つまり貧弱なものである、若干の分別をもっていわれるのであった。最初の数週の激しい、がむしゃらな衝動に続いて、一つの鎮沈状態が訪れ、それはあきらめと見るのは間違いであったろうが、しかしそれにしても一種の一時的な同意であるには違いなかった。

市民たちは事の成行きに甘んじて歩調を合わせ、世間の言葉を借りれば、みずから適応していったのであるが、それというのも、そのほかにはやりようがなかったからである。彼らはまだ当然のことながら、不幸と苦痛との態度をとっていたが、しかしその痛みはもう感じていなかった。それに、たとえば医師リウーなどはそう考えていたのであるが、まさにそれが不幸というものであり、そして絶望に慣れることは絶望そのものよりもさらに悪いのである。以前には、引離されている人々も実際には不幸でなく、彼らの苦しみのなかには、消え去ったばかりの、光明の

んなことを考えていたりする始末であった――「あのリンパ腺腫ってやつ、もうおしまいにならないもんかな！」。しかし、彼らはじつはすでに眠っていたのであり、そしてこの期間全部が長い眠りにほかならなかったのである。町は目をあいた睡眠者のむれが充満し、これらの人々が現実にその運命から抜け出すことといえば、たまに夜中に、一見癒着したような彼らの傷口が、突然また口をあけるときだけであった。そして、はっとして目を覚ましながら、一種の放心したような気持で、その疼く傷口をそこでさわってみ、一閃のうちに、突然清新さを取りもどした彼らの苦悩と、それに伴って、彼らの愛のかき乱されてしまった面影とをふたたび見出すのであった。朝になると、彼らはふたたび天災へ、すなわちおきまりの習慣へもどっていったのである。

ところで、いったい、この引離された人々は何に似た様子をしていたか、と問うものがあるかもしれない。そうきかれれば、それは簡単なことで、彼らは何の様子もしていなかったのである。あるいは、そういったほうがよければ、彼らは世間みんなのような様子、まさにまったく一般共通の様子をしていたのである。彼らは、この市の平静さと他愛もない興奮とを、等しく共有していた。彼らは、一見冷静らしく見えるようになったくせに、批評的感覚があるように見えなくなってしまった。たとえば彼らのなかで最も聡明な連中が、世間みんなと同じように、新聞紙上や、あるいはラジオ放送のなかに、ペストの急速な終息を信ずる理由を捜すような素ぶりを見せて、空想的な希望をあからさまにいだいたり、あるいは、どこかの新聞記者が退屈さにあくびをしながら、多少出まかせに書きとばした考察を読んで、根拠のない恐れを感じたりしているのが見られたものである。そのほかの点では、めいめいビールを飲んだり病人を看病したり、なま

する、うっかり気の紛れているおりおりもなくては済まなかった。不意に、それも何かの天恵のおかげで、当てもない嫉妬の苛みを彼らが感じるようなことも、ないわけにはいかなかった。別の人々はまた、突然の蘇生にぶつつかることがあり、週のある日々にその麻痺状態を脱するのであったが、それは当然日曜や上曜の午後などであって、それというのが、今いないその相手がいたころには、それらの日はなんらかの儀礼的な楽しみにささげられていたからである。あるいはまた、日々の終りに彼らのとらえられるある種の憂鬱症が、記憶がまたもどってきそうだという、それも必ずしも確証されない、前ぶれを彼らに感じさせることもあった。夕べのこの時刻、信者たちにとって良心の吟味の時刻たるこの時刻は、吟味するものといえば空虚だけしかない、捕われの、あるいは流刑の人々にとっては、つらい時刻である。その時刻になると、彼らはいっときとまどい、それからまた無気力状態にもどり、ペストのなかへ閉じこもってしまうのであった。

すでに理解されたことと思うが、これは結局のところ彼らの有する最も個人的なものを断念するということであった。ペストの初めの時期には、彼らは、他人にとってはなんの存在ももたないのに、彼らにとっては大いに問題であるような、些細な事柄がたくさんあるのに驚かされたものであったし、またそれによって個人生活なるものを体験していたわけであったが、今では反対に、彼らは他人が興味をもつことにしか興味をもたず、一般的な考えしかもたなくなり、その愛さえも彼らにとって最も抽象的な姿を呈するに至った。彼らがどれほどペストの蹂躙にゆだねられていたかは、ときどきもう睡眠中にしか希望などいだかなくなり、ふと気がつくとひとりでこ

を千倍も拡大された尺度に高める必要があろう。なぜなら、この場合には、また別の飢餓、しかもあらゆるものを食い尽す可能性のある飢餓の問題であったからである。

いずれにしても、この町の引離されていた人々の当時の精神状態について正確な観念をえたいとかりに思うものがあるなら、ここでもう一度、あの永劫に繰返される、金色の、埃っぽい夕暮れ——それが樹木のない町の上に落ちかかるころ、男たち女たちが街頭へ流れ出る、あの夕暮れを思い浮べてみる必要があろう。なぜなら、異様なことに、そのとき、まだ日の当っているテラスのほうへ立ち上がってくるのは、普通に都市のすべてのさざめきをなしている車や機械の音とうものがなくなってしまった結果、ただ鈍い足音と人声の巨大なざわめき——重くたれこめた空いの災厄の殻竿のうなりにリズムを刻まれる数千の靴底の苦しげなきしめきだけであり、要するに、次第次第に町じゅうを満たしていった、果てしなくまた息苦しい足踏み、そしてわれわれの心のなかでそのとき愛に代る位置を占めていた盲目的な一念にとって、来る夕べも来る夕べも、それを表わす最も忠実にして陰鬱な声となっていた、果てしなくまた息苦しい足踏みだけであったのである。

けたり精根を尽したり、カードを整理したりレコードを回転させたりしているというだけで、それ以外に互いに区別されるところはなかった。別ないい方をすれば、彼らはもうなんにも選り好みはしていなかったのである。ペストは各種の価値判断を封じてしまった。そしてこのことは、誰も自分の買う衣服あるいは食糧品の質を意に介さなくなったという、そんなやり方にも明らかに見えていた。人々はすべてを十把ひとからげに受入れていたのである。

これを要するに、引離された人々も、当初彼らだけを保護してくれていたあの奇妙な特権をもうもっていなかったということができる。彼らは愛のエゴイズムと、また同時にそこから引出されていた利得とを失ってしまった。ともかく、今や事態は明瞭であり、災禍はすべての人々に関することであった。われわれはすべて、市門に鳴り響く発砲の音や、われわれの生あるいは死亡の各段階をはっきり句切るゴム印の押捺に囲まれて、火事やカードや、恐怖や手続きに囲まれて、見苦しい、しかし登録される死を予約されて、恐ろしい煙と救急車の静かなベルの音のなかで、みんな同じ流刑のパンで身を養いながら、無意識のうちに同じような驚天動地の再会と平和を待ち設けていたのである。われわれの愛はたしかに相変らずそこに控えていたが、ただ単に、それは用いようのないものであり、になうには重く、われわれの内部に沈滞して、さながら罪悪か処罰のようにみのりのないものであった。それはもう、将来のない忍従と、頓挫した期待であるにすぎなかった。そしてこの点から見れば、市民のある人々の態度は、町の方々の食糧品店の店頭に見られるあの長い行列を思わせるものがあった。それは、無際限であるとともに幻想のない、同じあきらめ、同じしんぼう強さであった。ただ、しかし、別離に関する面では、この感情

た。急に病気の兆候をあらわす人々のために彼が考案した即時退去の手順についても、微細な細部に至るまですっかり心得ていた。予防隔離者に対する血清の効果についての統計は、彼の記憶に焼きついていた。しかし彼は、ペストの犠牲者の一週間の数をいうことはできなかったし、ペストが昂進中であるか、衰退中であるかについては実際に知らないでいた。しかも彼としては、それらすべての事実にもかかわらず、近々脱出できるだろうという希望をもちつづけていたのである。

日夜めいめいの仕事に没頭しているそのほかの連中となると、新聞も読まず、ラジオも聞かなかった。そしてかりに誰かが、ある結果を報告すると、彼らはそれに興味をもつようなふりをするが、しかし実際にそれを迎える態度は上の空の無関心さであり、それは、労役に疲れ果て、自分の日々の任務に欠けるところがないようにとだけ努めながら、決定的な作戦行動も休戦の日ももう期待しなくなっている、大戦争の戦闘員において想像されるような態度であった。

グランは、相変らずペストのために必要となった計算を行いつづけていたが、彼にはおそらくその総括的な結果を指摘することはできなかったに違いない。明らかに疲労に対して頑丈な、タルーやランベールやリウーと反対に、彼の健康はついぞ良好であったためしがなかった。ところが、彼は、市庁における補助員の職務と、リウーのところでの書記の仕事と、そして彼自身の夜の仕事とを兼務していた。そんなわけで、彼はしょっちゅう疲れきった状態にあり、わずかに二、三の固定観念――ペストが終ったら少なくとも一週間ぐらい完全に休暇をとり、そしてそこでみっちりと、それこそ「脱帽」して、今やりかけている仕事をやろうというような――固定観

4

九月と十月の二月間、ペストは町をその足もとにひれ伏させていた。なにしろその正体は足踏みであったから、数十万の人間が、いつ果てるとも見えぬ週また週の間を、なおも足踏みしつづけていた。露と暑熱と雨が相次いで空に訪れた。南から来た椋鳥と鶫のひっそりとした隊列は、はるかに上空を通っていったが、しかしあたかも、異様な木片が家々の上をうなりながら飛びまわっているという、パヌルーの殻竿に押し隔てられてでもいるように、町の上を迂回していった。十月の初めには豪雨が街上を一掃した。そしてこの明間じゅうというもの、その巨大な足踏み以上には、なんら重要なことは起らなかった。

リウーと友人たちは、そのとき、どの程度にまで自分たちが疲れているかということを発見したのであった。事実上、保健隊の人々は、もうどんなにしてもこの疲労をこなしきれなくなっていた。医師リウーは、友人たちや自分自身の態度に奇妙な無関心さが増大しつつあるのを看取して、そのことに気がついた。たとえば、それまで、ペストに関係のあるあらゆる報道に対してじつに活潑な関心を示していたこれらの人々が、もうまるでそんなことを気にかけなくなってしまった。ランベールは、少し前から彼のホテルに開設された、予防隔離所の一つの管理を臨時に受けもたされていたのであるが、自分のところに隔離中の人々の数についてきわめてよく知ってい

ていた。この期間中ずっと、実際、彼はュタールにしか長向き興味を示していない。ホテルが防隔離所に改造されて以来、とうとう住みこむことになったリウーの家で、晩がた、彼はグランやリウーがいろいろ結果を発表してもほとんど聞いているかいないくらいであった。彼はすぐさま、総じて彼の関心の的であるオランの市井生活のちょっとした些事に話をもどすのであった。

カステルはどうかといえば、彼がリウーのところへ血清の準備ができたと知らせに来た日、そしてその最初の試験を、ちょうど病院へ連れてこられたばかりで、その症状がリウーには絶望的であると思われていた、オトン氏の小さな男の子にやってみることに二人できめたあとで、リウーがその老友に最近の統計を伝えていたとき、ふと気がつくと、相手は肘掛椅子のくぼみのなかでぐっすり眠りこんでいた。そしてこの顔――ふだんは抹のやさしさと皮肉の影が永劫の若さを宿しているのに、突然あるがままに投げ出されて、半ば開いた唇のあいだにずっと唾の糸を引きながら、その疲弊と老衰とをあらわにしているこの顔を前にして、リウーはのどがしめつけられるように感じた。

つまりそんなふうな心弱さによって、リウーは自分の疲労ぶりを判定することができたのであった。彼の感受性はもう彼の自由にならなかった。大部分のときは強直したまま、硬化しひからびてしまっていたが、それがおりおり堰を切っては、もう制御のできないような感動に溺れさせてしまうのであった。彼の唯一の防禦は、例の硬化作用に逃げこみ、自分のうちにできている結ぼれをかたく引きしめることであった。彼はそれが、続けてやっていくためのいい方法であることをよく心得ていた。そのほかのことについては、彼はたいして幻想もいだいていなかったし、

念によって、ささえられていることが見てとれるのであった。彼はまた突然しんみりした気持になることがよくあり、そんなおりには、自分からジャーヌのことをリウーに話しかけて、今この瞬間に彼女はいったいどこにいるのだろうとか、新聞を読んで彼女は自分のことを考えてくれているだろうかとかいうことを問題にするのであった。その彼を相手に、リウー自身もある日、ふと気がつくと、最も月並みな調子で自分の妻のことを話していたのであるが、そんなことはこれまでついぞしたことがなかった。妻からのいつも安心させるような電報をどの程度に信用していいかわからないので、彼は思い切って、妻が療養中の療養所の主任医師に電報を打ってみたのであった。折返し、病状の悪化の報告と、病の進行を食いとめるためにあらゆる手段を尽すという保証を彼は受取った。彼はその知らせを自分ひとりの胸にしまっておいたし、疲労のせいというよりほかには、どうしてそれをグランに打明けたりしたものか、自分でも説明がつかなかった。グランは、ジャーヌのことを話したあとで、彼の夫人のことを尋ね、リウーはそれに答えたのであった。「まあ、それでも」と、グランはいった。「この病気も今じゃずいぶんよくなおるようになりましたから」。そしてリウーもそれに同意しながら、ただ、別居がそろそろ長びいてきて、自分としてもおそらく妻が病に打勝つのを助けてやることもできただろうに、現在では彼女はまったく一人ぼっちの気持でいるに違いない、とだけいった。それから彼は黙りこみ、グランの質問に対してもまるで逃げるような調子でしか答えなくなってしまった。

ほかの人々も同じような状態にあった。タルーがいちばんよくもちこたえていたが、しかし彼の手帳に示されたところでは、彼の好奇心も、深刻さは減じないにしても、その多方面さを失っ

がままに見る。つまり、正当さ――いとわしくまた愚劣な正当さ――の面から見るのである。そして相手方、つまり宣告された人々も、同様にまたそのことをちゃんと感じていた。ペストの前までは、彼は救いの神のように迎えられたものである。丸薬三粒と注射器一本ですべて片付く段取りであり、人々は彼の腕をかかえながらずっと廊下を案内してくれたものであった。これは悪くない気持であったが、しかし警戒すべきことであった。今では、それどころか、彼は兵隊を連れて出向き、そして銃尾の乱打によってやっとその家の人々も戸をあける決心をするのであった。彼らは彼を、また全人類を、彼らといっしょに死のなかへ引きずりこみたかったことであろう。まったく、それはたしかに事実であった――人間は人間の仲間なしではいられないのであり、彼もそれら不運な人々と同じくらいすべてを奪われていたのであり、そして彼自身、彼らと別れて出てくると胸のうちに高まるに任せていた、あの同じ憐憫のおののきに値する人間であったのである。

これが、ともかく、この果てしない週また週の間、医師リウーが自分の別居状態に関するそれとともにしきりに心にかきたてていた思いであった。そしてこれはまた、彼の友人たちの顔にもその反映が読みとられるところの思いであった。しかし、この天災との戦いを続けているすべての人々を次第に冒しつつあった疲労困憊状態の最も危険な結果は、外部の事件や他人の感動に対するこういう無関心さのなかにはなく、むしろ彼らがみずから陥るに任せている投げやりな態度のなかにあった。というのは、そのころ、彼らは絶対に不可欠なものではないような動作――しかもそれが彼らにはつねに彼らの力にあまることのように思われていたのであるが――そういう

彼の疲労は彼がまだいだきつづけていた幻想まで奪ってしまった。というのは、まるで期限の見当もつかないある期間にわたって、彼の役割はもはや治療することではないことを彼は知っていたのである。彼の役割は診断することであった。発見し、調べ、記述し、登録し、それから宣告する——これが彼の務めであった。夫や妻たちは彼の手首をつかんで泣きわめいた——「先生、どうか命を助けてやってください」。しかし、彼は命を助けるためにそこに控えているのではなく、隔離を命ずるためにそこに控えているのであった。そのとき人々の顔に読みとる憎悪の色などが、いったい何になっただろう。「あなたには人情というものがないんです」と、ある日、彼はいわれたものである。そんなことはない、彼はちゃんとそれをもっていた。それが彼の場合には、生きるように作られた人間たちが死んでいくのを見る、毎日の二十時間をもちこたえるために、役だっていたのである。毎日また同じことを始めるために役だっていたのである。以来、彼はそのためにちょうど十分なだけの人情をもつようになっていたのであった。そんな人情だけで、どうして命を助けることなどできたであろうか？

まことに、彼が日がな一日人々に分かち与えているものは、救済ではなく、知識であった。こんなことは、もちろん、人間の職務といえるものではなかった。しかし、結局、恐怖にさらされた、死者続出のこの民衆のなかで、いったい誰に、人間らしい職務など遂行する余裕が残されていたであろうか？　疲労というものがあったことは、まだしも幸福であった。万一、リウーがもっと生気潑剌たる状態にあったら、いたるところにあふれたこの死臭は彼を感傷的にしたかもしれなかった。しかし、四時間しか寝なかった場合、人間は一向感傷的ではない。彼は事物をある

ールにいったものであった。「なにしろ、ありゃ人物ですからな。こっちのいうことがいつでもわかってもらえるんです」

こういう理由から、タルーの覚え書は、この時期において、次第にコタールという人物に集中されてくるのである。タルーはコタールから打明けられたままの形、あるいは彼の解釈を加えた形で、コタールの種々の反応と考察との、覧表を作ろうと試みている。《コタールとペストとの関係》という見出しのもとに、この一覧表は手帳の数ページを占めており、そして筆者はその要約をここに示しておくのが有用なことだと信じるのである。この小男の金利生活者に対するタルーの総括的な意見は、つぎのような判定に要約される――「これは成長しつつある人物である」。外見上のことからいっても、彼の上機嫌はたしかに成長しつつあった。彼は事件が現在のような推移をとったことについて不満ではなかった。ときどきタルーの前で自分の考えの根底を表明して、つぎのような種類の考察をすることがあった――「そりゃたしかに、一向よくなりゃしませんがね。しかし、とにかく、みんながおんなじように巻きこまれてるんですから」

「もちろん」と、タルーは付け加えている。「彼もほかの連中と同様に脅やかされているのであるが、しかしまさに、それはほかの連中といっしょに、そうなのである。それから、これはもう確かなことであるが、彼は自分がペストにかかることがありうるとは本気で考えていないのである。彼はこういう考え――それも案外ばかにならない考えであるが、何かの大病あるいは深刻な煩悶に悩まされている人間は、それといっしょにほかのあらゆる病気あるいは煩悶を免除されるという考えに基づいて生活しているように見える。《あなたはこういうことに気がついたことが

動作はいっさい避けようとする傾向があった。そんなわけで、この人々は次第次第に頻繁に、彼ら自身が規定した衛生規則をなおざりにするようになり、自分の身に行うべき数多くの消毒のあるものを忘れたり、ときどきは、伝染に対してなんの予防の用意もなく、肺ペストにかかった患者のもとへ駆けつけたりするようになった。それというのが、病毒に冒された家へ行かねばならぬことを、最後のぎりぎりのときになって知らされたりすると、どこかの消毒所まで引返して、必要な薬液の注入を受けることなど、やらないうちからもう疲れ果ててしまうような気がするのであった。そこにこそ真の危険が存在したのであって、つまりペストとの戦いそのものが、そうなると彼らを最もペストに冒されやすくするわけであった。彼らは結局、僥倖にかけていたわけであり、しかも僥倖は誰の味方でもないのである。

ところが、この町のなかで、一向憔悴した様子も気落ちした様子もなく、さながら満足の権化という姿を保っている人間が一人あった。それはコタールであった。彼はほかの人々と関係を保ちながらも、依然として一人だけみんなから離れていた。しかし、彼は特に選んでタルーと、タルーの仕事の許すかぎり頻繁に会っていたが、それは一つには、タルーが彼の事情についてよく承知していたためであり、また一つには、タルーがこの小男の金利生活者をいつも変らぬ親身な態度で迎えるすべを知っていたためであった。まったく尽きることなく繰返される奇蹟であったが、タルーはたいへんな労力を捉供しているにもかかわらず、相変らず人に対して好意的な注意深い態度を保っていた。たといある晩は疲労に圧しつぶされそうになっていても、翌日になるとまた新たな精力を取りもどすのであった。「あの人とは話ができますよ」と、コタールはランベ

や、その点からいって、誰一人、ひとといっしょになれるものなんかありゃしませんよ》。それから、また――《まあ、大丈夫、そう思っておいでなさい、こいつは私がそういうんですから。連中をいっしょにならせる唯一のやり方は、やっぱりペストを差向けることですよ。まあ、自分のまわりを見てごらんなさい》。そして実際、私には彼のいおうとすることも、現在の生活が彼にとってどんなに快適に思われるに違いないかということも、よくわかるのである。どうして彼が、かつては自分の経験であったさまざまの反応に、通りすがりに気がつかないでいられようか――世間みんなを自分の仲間に引入れようと、誰も彼もが試みている努力。道に迷った通行人にときたま道を教える際に人々が振りまく親切さと、かつてはそういう場合に見せつけられた不機嫌さ。高級レストランへの人々の殺到ぶり。その店にはいり、そこにゆっくりしていることに対する彼らの満足ぶり。毎日映画館に行列を作り、あらゆる演芸場からダンスホールまでも満員にし、堰を切った潮のようにあらゆる公共の場所にあふれている、無秩序な群衆の流れ。あらゆる接触に対する尻込み、しかも一方で、人々を他の人々のほうへ、肘を肘に、異性を異性に押しやる、人間的なぬくもりへの欲求……。コタールは、こういうすべてのことを、彼らより前に経験したのだ。それは明瞭である。ただし、女だけは別であろう、なにしろあのご面相では……。それに、私の推測では、彼がもう少しで女たちのところへ出かけそうな気持になったときにも、あとで身の不ためになるかもしれないような、悪い風儀を身につけたりしないようにと思って、おそらくそれを差控えたのだ。

「要するに、ペストは彼にはうってつけのものである。孤独な、しかも孤独であることを欲しな

ありますか、人間はいろんな病気をかけもちすることはできないんですよ》と、彼は私にいった。《かりにあなたが、本物の癌だのちゃんとした肺病だのっていうような、重症とか不治とかいう病気にかかっているとしてごらんなさい。あなたは決してペストやチフスにかかりゃしませんよ。そんなことはありえないんです。それに、こいつはもっと推しひろめていえるんです。というのは、あなただって癌にかかってる人間が自動車事故で死んだなんてことは見たためしがないでしょうが》。真偽はともかく、こういう考えがコタールを上機嫌にさせているのである。彼の欲しない唯一のことは、つまりほかの人々から引離されることである。彼としては、みんなといっしょに襲われているほうが、一人ぽっちで囚われの身となっているよりましなのだ。ペストというものがある間は、秘密調査も書類もカードも、秘密に包まれた審理も差迫った逮捕も、もう問題にはなりえないのだ。的確にいえば、もう警察というものもなく、昔の、あるいは新規の犯罪というものも、罪人というものもなく、あるのはただ、特赦のうちでも最も自由裁量的な特赦を待っている受刑者のむれだけであり、しかもそのなかに警官たち自身も含まれているのである」。そういうわけでコタールは、これも相変らずタルーの解釈によれば、市民たちが呈している懊悩と混乱の兆候を、「とにかく、話してごらんなさい。こっちは、あなたなんかより前に、そういう思いをしたことがあるんですから」という言葉で表現されうるような、寛容な、理解のある満足の念をもって考察するための十分な根拠をもっていたのである。

「私が、ほかの人々から引離されないようにする唯一の方法は、結局、正しい良心をもつことだと、いくらいってやっても、彼は嘲るように私の顔を見て、こういうのであった――《そうなり

についていくことがあったが、以前は彼らを結びつけているものを一生懸命隠そうとしていたその人々が、今では互いにぴったり寄り添って、飽きもせずいつまでも町なかを歩きつづけながら、大きな情熱に見られる少々思いつめたような放心のなかで、周囲の群衆も目にはいらぬ様子であった。コタールはすっかり心を動かされた様子であった――「まったく、楽しそうだな！」と、彼はいっていた。そして彼は大声でしゃべり、集団的な熱っぽさや、周囲でばらまかれる豪勢なチップや、眼前に繰りひろげられる数々の艶事のなかでのびのびとうちくつろいでいた。

しかしながら、コタールの態度には、ほとんど悪意というようなものは混じっていないと、タルーは見ていた。彼の「こっちは彼らより先にそれを味わったんだから」という口ぶりも、勝ち誇った気持というよりはむしろその身の不幸を示すものであった。「私は思うのであるが」と、タルーはいっている。「彼は、空と市の外壁との間に閉じこめられたこれらの人々を、愛しはじめているのである。たとえば、彼らに向って、これがそんなに恐ろしいことではないことを、できたら説明してやりたいくらいであろう――《あなたもお聞きでしょうが》と、彼は私にはっきりいったことがある。《あの連中がよくいってますね――ペストが終ったらこうしよう、ペストが終ったらああしようなんて……。彼らは自分でわざわざ生活を暗くしてるんですよ、黙って平気でいればいいのに。おまけに、彼らのほうの有利な点さえ理解できないでいるんですからね。私なんかいったいそんなことがいえますか――逮捕が終ったらこうしようなんて？　逮捕ってやつは、事の始まりですからね、終りじゃないんです。ところが、ペストのほうは……。ひとつ私の意見をいいましょうか。彼らが不幸なのは、自分で心の手綱を弛めないからですよ。これがどういう

い一人の男を、ペストは一個の共謀者に仕立てた。なぜなら、明瞭にこれは一個の共謀者であり、しかも悦に入っている共謀者である。彼はその目に映るすべてのもの――さまざまの迷信、不条理な慴えこれら切迫した人々の心の感じやすさ。できるだけペストの話をすまいとし、しかもそのくせひっきりなしにその話をしたがる、彼らのおかしな傾向。この病が頭痛から始まると知って以来、ちょっと頭が痛くなってもおろおろし真っ青になる彼らの態度。いらだたしく、感じやすく、要するに不安定で、単なる失念を侮辱ととってしまい、半ズボンのボタン一つなくしたことを嘆き悲しむような彼らの感受性など――これらすべてのことの共謀者である」

タルーはよく晩にコタールといっしょに出かけることがあった。彼はそのあとで彼の手帳のなかに、彼ら二人が、夕暮れ時あるいは夜の陰鬱な群衆のなかに肩を並べてはいりこんでいきながら、ときおり間遠に一つの電燈が珍しく照らしだす、白くまた黒い集団のなかへ沈みこみ、そしてこの人間のむれをなした一隊が、ペストの冷気から守ってくれる温かい歓楽のほうへ流れていくのについていった、その有様を物語っている。コタールが数カ月前公衆の場所に求めていたもの、豪奢と余裕のある生活も、彼が夢みながらついにその望みを満足させることができなかったもの――すなわち羽目をはずした享楽も、今では住民全体がそれを追い求めていた。あらゆるものの値段はとめどもなく上がっていたのに、人々がこのときほど金を浪費したことはなく、そして必需品が大部分の者に欠乏していた反面に、このときほど余計なものが濫費されたことはなかった。じつは休業状態であるにすぎぬ有閑性から生れるあらゆる慰みが、さまざまの形で増えていくのが見られた。タルーとコタールとは、ときどき、ずいぶん長い間、二人連れの一組のあと

人でそれに堪えている場合ほどには重荷でないように、彼には思われるのである。この点が彼の誤っているところであり、ほかの人々よりも理解しにくいところである。しかし、結局、この点において、彼はほかの人々以上にわれわれが理解しようと試みる価値があるのである」

最後に、タルーの記述は、コタールにもペストに襲われた人々にも等しく生じたこういう奇妙な意識をそのまま絵にしたような、一つの物語で終っている。この物語は、その時期の険悪な雰囲気をほぼそのままに再現するものであり、そしてそれゆえに筆者はこれを重視するのである。

二人は、ちょうど「オルフェイスとエウリディケ」（訳注　オルフェイスはギリシャ神話の人物で音楽の名手。その音楽の力により冥府の王を動かして死んだ妻エウリディケをこの世に連れ帰る許しを得たが、最後の瞬間に妻を振返ったため、ふたたび永久に妻を失った）をやっていた市立オペラ劇場へ行った。コタールがタルーを誘ったのであった。出演しているのは、ペストの始まった春に、この町へ公演にやって来た一座であった。疫病のために封鎖されてしまったこの一座は、余儀なく、オペラ劇場側と協定したうえで、毎週一回その演題を繰返すことになったのであった。そういうわけで、数カ月以来、金曜日ごとに、この町の市立劇場では、オルフェイオスの婀々たる嘆きとエウリディケの弱々しい呼び声が響き渡っていたのである。しかしながら、この演題は依然として公衆の人気を博しつづけ、いつも大入りの成績をあげていた。いちばん上等の席に陣取ったコタールとタルーのところからは、市民のなかでも最もしゃれた連中で超満員になっている平土間が見おろせた。はいってくる連中は抜かりのない登場ぶりを見せようとして、見ていてもわかるほど一生懸命努めていた。舞台前面の煌々たる照明のもとで、楽士たちがそっと楽器の調子を合わせている間に、さまざまの人影の側面像がくっきりと浮び上がっては、一つの列からほかの列に移った

意味になるかってことは、十分承知のうえで、私はいってるんですがね》「彼はなるほど自分のいっていることの意味をよく承知している」と、タルーは付け加えている。「彼はオランの住民たちの矛盾をありのままに批判しているのであって、住民たちは彼らを近づけ合う温かなものへの欲求を深く感じていると同時に、しかもまた彼らを互いに遠ざける警戒心のためにすっかりそうなりきることもできないでいるのである。隣人に信用がおけないということ、こっちの知らぬ間にペストを持ってこられたり、うっかりしているすきに乗じて病毒を感染させられたりしかねないということが、あまりにもよくわかっているのだ。コタールのように、自分がじつは交際をもちたいと思っているすべての人々が、ひょっとすると密告者であるかもしれぬと思いながら暮してきた人間には、この感情はよく理解できるのである。ペストが今日か明日にも彼らの肩に手をかけるかもしれず、ひょっとすると、こっちがまだ無事息災であることを喜んでいる瞬間に、ちょうどそうしかけているかもしれない——という考えのなかで生活している人々に対しては、こっちも結構仲間同士のような気持でいられる。ともかく、可能な範囲で、彼は恐怖のうちに安んじているのである。しかし、彼はそれらすべてのことを彼らより先に味わったのであるから、この不安のむごたらしさを完全に彼らといっしょに感じることは、彼にはできないのではないかと思う。要するに、まだペストで死なないわれわれ一同とおんなじに、彼も自分の自由と生命とが毎日もう明日にも破壊されそうになっていることは十分感じている。しかし、彼自身恐怖のなかで暮した覚えがあるので、ほかの連中が今度はそれを経験することを普通のことと思っているのである。もっと正確にいえば、そうなるとその恐怖も、彼がたった一

もすさまじいかたちで時代錯誤なものとなったのである。なぜなら、それと同時に、オーケストラは途絶え、平土間の人々は立ち上がって徐々に小屋を引揚げはじめたのであった。最初はあたかも儀式が終って教会から、あるいは弔問を済まして死者の部屋から出てくるときのように黙々として、婦人たちはスカートの裾を引上げ、頭をたれて出ていき、男たちは連れの女に肘を貸しながら、補助椅子にぶつつからないように気をつけてやっていた。しかし、次第に人々の動きは急激になり、ささやきは叫びに変り、群衆は出口に殺到して押し合い、最後にはわめきながらもみ合いをはじめた。コタールとタルーは、やっと立ち上がったばかりだったが、当時の彼らの生活をさながらに示す画面の一つに、ただ二人相対していた——舞台の上には、関節の自由を失った道化役者の扮装をしたペスト、そして観覧席には、いすの赤いクッションの上に置き忘れられた扇子や、引きずっているレースというかたちで横たわっている、不要になったいっさいの贅沢。

ランベールは、九月の上旬の間、リウーのかたわらで真剣に働いた。ただ、男子高等学校の前でゴンザレスや二人の若者と落合うことになっていた日に、一日の休みをもらっただけであった。その日、正午に、ゴンザレスと新聞記者とが見ていると、例の二人の子供がやって来て、笑うのであった。彼らにいわせると、この前は運が悪かったが、しかしそれくらいのことはまあ覚悟しておくべきだ。いずれにしても、今はもう彼らの警備当番の週ではない。次の週まで辛抱する必要がある。そのうえでまた繰返すわけだ。ランベールは、まさに適切な言葉だといった。ゴンザ

り、気どったかっこうで身をかがめたりしていた。品のいい会話のかすかなざわめきのなかで、人々は、何時間か前に市の暗黒な街路のなかでは失われていた、心の落着きを取りもどすのであった。燕尾服がペストを追い払っていたのである。

第一幕の間ずっと、オルフェイオスはのびのびと嘆き声をあげ、寛衣をまとった数人の女たちが彼の不幸に姿優しく注釈を加え、そして愛の思いが、小詠唱によって歌われた。場内はつつましやかな熱中をもってこれにこたえた。オルフェイオスが第二幕の歌に、楽譜には載っていない顫音を混じえ、そしてやや悲壮味の激しすぎる調子で、冥府の王に向って、彼の涙に心を動かしてくれるように願ったことにも、ほとんど気がついたものはないくらいであった。彼の動作にふと表われたある種の乱調子な身ぶりも、最も通の連中にさえ、その歌手の演技にさらに輝きを添える、一つの様式化の表われと見えたのであった。

ついに第三幕のオルフェイオスとエウリディケの壮大な二重唱のところ（つまりエウリディケが愛する夫の手から離れていく瞬間である）まで来て、やっとある驚きの色が場内に流れた。そして、あたかもその歌手は見物のその衝動だけを待っていたかのように、あるいはこういったほうがもっと確かかもしれないが、あたかも平土間から伝わってきたざわめきが、彼の予感していたものを確かめてくれたとでもいうように、彼はちょうどこの瞬間に、古代の衣装を着けたまま手足を突っ張らせ、グロテスクな様子でフットライトのほうへ進み出ると、背景のさまざまの牧歌的な道具立てのまったただなかにそのままぐずおれてしまい、そしてその背景は、かつて、いっときも時代錯誤でなかったことはないにもかかわらず、見物の目には、このときはじめて、しか

きつづけた。夜遅くなってから床につき、そして昏々として眠った。暇な身分からこの精根をすす仕事に移ったために、彼はほとんど夢もなく、気力もない状態になってしまった。近づいた脱走のこともほとんど口にしなかった。ただ一つ特記すべき事実があった――一週間たったとき、彼はリウーに、前の晩、生れてはじめて酔っ払ったと打明けたのである。バーを出ると、彼は突然、鼠蹊部が腫れぼったく、腕の付け根のあたりも楽に動かないような気がした。こいつはペストだと、彼は思った。そしてそのとき彼のなしえた唯一の反射的動作は――彼もそれが理屈に合わない行為であることをリウーとともに認めたのであるが――市のいちばん高いあたりに駆け登り、そしてそこで、相変らず海の姿は見られないが、しかし少し余分に空が見えるちょっとした広場から、大声をあげて、市の外壁越しに女房に呼びかけることであった。家に帰ってから、自分の体になんら感染の兆候を発見できないでみると、彼はこの突然の発作があんまり自慢にならない気がしたのであった。リウーは、人間がそんなふうに行動する場合もありうることはきわめてよく理解できる、といった。「いずれにしても」と、彼はいった。「そんなふうにしてみたいような気持になることは、ありえますね」

「オトンさんが、今朝、君のことをいってましたよ」と、ランベールが帰ろうとしたとき、急にリウーは付け加えた。「僕が君を知ってるかってきいてね、《それじゃ忠告しておあげなさい》って、いってましたよ。《あんまり密輸のほうの連中と往来しないように、目だちますからね》って」

「つまりどういうことです、それは？」

レスはそこでつぎの月曜日に待ち合せることを提案した。そのかわり、今度は、そこでランベールをマルセルとルイのところへ泊りこませるわけだ。「二人で待ち合せるとしよう、お前と俺と。万一、俺が来なかったら、お前はまっすぐこの連中のところへ行けばいい。今、これたちの住んでるところを教えてやるから」。しかし、マルセルだかルイだかがこのときいうには、いちばん簡単なのは今すぐこの仲間を案内することだ。先生が、もし気むずかしいほうでなければ、四人で食うぐらいのものはある。で、そういうふうにすれば、先生にもよくのみこめるわけだ。ゴンザレスは、そいつはなかなかいい思いつきだといい、そこで彼らは港のほうへ降りていった。

マルセルとルイは海軍街のはずれの、臨海道路に面して開いている門のそばに住んでいた。壁の厚い、イスパニア風の小さな家で、窓には外に開くペンキ塗りの木の扉が付き、室内はなんの飾りもなく薄暗かった。食事には米が出て、若者たちの母親だという、にこやかで皺だらけのイスパニア人の老婆が、給仕をしてくれた。ゴンザレスは驚きの色を見せた。というのは、米はすでに市中にはなかったからである。「門で都合をつけるのさ」と、マルセルがいった。ランベールは食いかつ飲み、そしてゴンザレスはこいつは本当の仲間内なんだというようなことをいっていたが、その間、新聞記者のほうはただこれから過さねばならぬ一週間のことだけを考えていた。

実際には、彼は二週間待たねばならぬわけであった。というのは、警備当番は、班の数を少なくするために、十五日交替になっていたのである。そして、その十五日の間、ランベールは、骨身を惜しまず、息つぐ間もないように、ある意味ですべてに目を閉じて、明け方から夜半まで働

褐色の顔に、なかなか奇麗な白髪をいただいていた。黙々としていて、ただランベールの顔を見ると、にこやかな目つきで顔いっぱいにほほえむのであった。

いつだったか、婆さんはラシベールに、奥さんのところへ、ペストをもっていったりすることは心配していないのか、と尋ねたことがある。彼の考えとしては、そういう万一の危険もありうるが、しかしそれは微々たるものであり、一方、市内に残っていれば、彼ら二人は永久に引離されてしまう恐れがあるわけであった。

「やさしい女なんでしょう、その女は？」と、婆さんはほほえみながらいった。

「ええ、とても」

「奇麗な女なんでしょう？」

「ええ、たぶん」

「なるほどね」と、婆さんはいった。「つまり、そのせいなんですね」

ランベールは考えていた。たしかにそのせいであるには違いないが、しかし、単にそのせいだけということはありえなかった。

「あなたは神様はお信じじゃないの？」と、毎朝ミサに出かけている婆さんはいった。

ランベールがそうだと肯定すると、婆さんはまたしても、つまりそのせいなのだといった。

「やっぱりその女のとこへいらっしゃることですね。あなたのお考えはもっともですよ。そうしなきゃ、あなたには何か残るものがありますかね」

あとのときは、ランベールは、むき出しの荒塗りの壁のまわりをぐるぐるまわりながら、壁面

「つまり、急がなきゃいけないってわけですよ」

「ご親切に、どうも」と、医師の手を握りながら、ランベールはいった。

出口のところで、彼は突然振返った。リウーはペストが始まって以来はじめて、彼がほほえんでいるのに気がついた。

「ところで、どうして、あなたは僕を行かせないようになさらないんです？　そうする手段はおありなのに」

リウーはいつものしぐさで頭を振り、そして、これはランベールの問題であり、ランベールは幸福のほうを選んだわけで、リウーとしてはそれに反対する論拠はない、といった。彼は、この問題において、何が善であるとも何が悪であるとも、自分には判断しかねるという気がしているのである。

「どうして、僕に早くしろなんていわれるんですか、そんな具合なのに――

今度はリウーがほほえんだ。

「おそらく、自分も何かしてみたいからでしょうね、幸福というもののために」

翌日、彼らはもうなんにも話し合わなかったが、そのかわりいっしょに仕事をした。つぎの週、ランベールはいよいよ例のイスパニア風の小さな家に泊りこむことになった。共同の部屋に彼のために寝台が設けられていた。若者たちは食事に帰らなかったし、またなるべく外へ出ないようにいわれていたので、彼はたいていのときそこで、人っきりで暮し、あるいは、母親の老婆と会話をまじえていた。婆さんは引きしまった体つきでまめまめしく、黒い服を着、皺の寄った

「忘れちゃだめだぜ」と、マルセルがいった。「今晩十二時だからな。すっかり手はずはついてるんだ」

ランベールはリウーのところへ行った。リウーの母親はランベールに、山の手の病院へ行ったら会えるだろうといった。衛兵所の前には、相変らず同じ群衆が、つところをぐるぐる動きまわっていた。「立ち止ってないで！」と、ぎょろりと目をむいた一人の巡査がいった。相手の連中は動きだしたが、しかしただぐるぐるまわるだけであった。「なんにもありゃせんのだ、待ってたって」と、上着まで汗をにじませながら、巡査はいっていた。これは相手の連中も同じ意見であったが、しかしそれでも、殺人的な暑さにもかかわらず、彼らはやはり踏みとどまっていた。ランベールが通行証を見せると、巡査はタルーの事務室を教えてくれた。その室の入口は前庭に面していた。ランベールは、ちょうどその室から出てきたパヌルー神父と途中ですれ違った。

薬剤としめった毛布の香のする、白色の小さなきたない部屋で、タルーは黒い木の事務机の向うにすわり、ワイシャツの袖をまくりあげたまま、腕のくぼみに流れる汗をハンカチで抑えていた。

「まだいたんですか？」と、彼はいった。

「ええ、ちょっとリウーさんに話があるんですが」

「病室のほうにいますよ。しかし、リウーがいなくても片付くことなら、そうしたほうがいいんですがね」

に釘づけにしてある扇子をなでてみたり、あるいはテーブル掛けの房になっている毛糸の玉を数えてみたりしていた。夕方になると、若者たちが帰ってきた。彼らはたいしてしゃべるほうではなく、しゃべるとすれば、まだ時期じゃないということをいうぐらいのものだった。夕食が済むと、マルセルはギターをひき、アニス入りのリキュールを二人で飲んだ。ランベールは考えこんでいる様子であった。

水曜日に、マルセルは帰ってくるなり、こういった――「明日の晩、十一時だ。用意をしといてくれ」。彼らといっしょに歩哨に立っていた二人の男が、一人はペストにかかり、もう一人はふだんその男と部屋をともにしていたので、隔離中であった。そういうわけで、二、三日の間、マルセルとルイは二人きりになる。今晩のうちに、彼らは最後のこまごました点の手はずを整えておく。明日はいよいよ大丈夫かもしれない。ランベールは礼をいった。「うれしいでしょう?」と、婆さんは尋ねた。彼は「ええ」といったが、しかし別なことを考えていた。

翌日は、重苦しい空模様で、じめじめと蒸し暑く、息苦しかった。ペストの情報は悪かった。イスパニア人の婆さんはそれでも依然として平静であった。「この世には罪っていうものがありますからね」と、婆さんはいっていた。「だから、どうしたって、そりゃね!」。マルセルやルイと同じように、ランベールも上半身は裸になっていた。しかし、どんなにしてみても、汗が背筋と胸の上を流れた。鎧扉を閉めきった屋内の半ば薄暗がりのなかでそうやっていると、彼らの上半身は褐色を帯びて、てらてらしてきた。ランベールは、口もきかずに、ぐるぐるまわっていた。突然、午後の四時に、彼は服を着こみ、そしてちょっと出かけてくるといった。

「この年になると、いやでも本気のことをいっちまいますよ。うそをつくなんて、とてもめんどうくさくて」

「済みませんが」と、ランベールはいった。「ちょっとリウーさんに会いたいんです、悪いんですが」

「わかってます。先生は僕よりも人間的ですからね。そいじゃ、行ってみましょう」

「そういうわけじゃないんですが」と、ランベールはなんだか話しづらそうにいった。そうして、途中で口をつぐんでしまった。

タルーは彼の顔をながめ、そして突然、ふっとほほえんで見せた。

二人は、壁を明るい緑色に塗った、まるで水族館のような光線の漂っている、小さな廊下についていった。ちょうど、ガラス張りの、その向う側には奇妙な亡霊どもの動きが見えている二重扉のところまで行き着く、すぐ手前のところで、タルーはランベールを、壁面全部が戸棚になっている、ごく小さな一室にはいらせた。彼はその戸棚の一つを開き、消毒器から吸湿性ガーゼのマスクを二つ引っ張りだし、その一つをランベールに渡して、それを被るように勧めた。ランベールが、こんなものが何かの役にたつのかと尋ねると、タルーは、そうではないが、しかしこれを被っていると向うが安心するのだと、答えた。

二人はガラス扉を押し開いた。そこは大きな広々とした部屋で、この季節にもかかわらず、窓はぴったり閉め切ってあった。壁の上部に換気用の装置がうなり声をたてていて、その湾曲したプロペラが、二列に並んだ灰色の寝台の上方で、クリーム状の過熱した空気をかきまぜていた。

「どうしてです？」

「先生も過労なんでね。こっちでできることは、なるべくさせないようにしてるんですよ」

ランベールはタルーの姿をながめた。タルーは、やせてしまっていた。疲労のため、目つきも顔の線も崩れている。がっしりした肩も、丸くちぢこまっていた。ドアをたたく音がしたと思うと、一人の看護人が、白いマスクをつけて、はいってきた。彼はタルーの机の上に一束のカードを置き、そして布片に押し消された声で、ただ「六名です」とだけいい、それから出ていった。タルーはランベールの顔をながめ、そしてそのカードを扇形にひろげながら、彼に見せた。

「すてきなカードでしょう、どうです？　ところが、そうじゃない。これは死亡者ですよ、夜の間の」

彼の額は翳った。彼はカードの束を元どおりに直した。

「われわれに残された唯一のものは、つまり簿記の仕事ですよ」

タルーは、テーブルに身をささえながら、立ち上がった。

「もう間もなく、お発ちですか」

「今晩、十二時です」

タルーは、それは自分にとってもうれしいことだし、どうかランベールも体に気をつけてくれるように、といった。

「それは、本気でそうおっしゃるんですか」

タルーは肩をすくめた――

則としてですがね」

彼らの誰かがものをいうたびに、ガーゼのマスクは膨らんで、口に当るところが湿りを帯びた。それがまるで彫像同士の対話のような、多少非現実的な会話の趣をなしていた。

「ちょっとお話したいんですが」と、ランベールはいった。

「いっしょに帰りましょう、君さえかまわなければ。タルーの部屋で待っててください」

それから間もなく、ランベールとリウーは医師の車の後部の席に乗りこんだ。タルーが運転をした。

「もうガソリンがないよ」と、車を動きださせながら、タルーはいった。「明日は歩くんだな」

「やっぱり」と、ランベールはリウーにいった。「僕は行きません。あなたがたといっしょに残ろうと思います」

タルーは身じろぎ一つしなかった。そのまま運転を続けていた。リウーは、もうなんとしても疲労から浮び上がれないような様子だった。

「じゃあ、奥さんは？」と、つぶれたような声で、彼はいった。

ランベールがいうには、彼はあれからまた考えてみたし、今も依然として自分の信じていたとおりに信じているが、しかしもし自分が発っていったら、きっと恥ずかしい気がするだろう。そんな気持があっては、向うに残してきた彼女を愛するのにも邪魔になるに違いないのだ。しかし、リウーはまっすぐに身を起し、そしてしっかりした声で、それは愚かしいことだし、幸福のほうを選ぶのになにも恥じるところはない、といった。

あらゆる方向から、にぶい、あるいは、鋭いうめき声が立ち上り、それがすべて一つに合して単調な悲鳴となっていた。白衣を着けた男たちが、格子のはまった高い壁穴から流れこむどぎつい光のなかで、のろのろと動いていた。ランベールはこの部屋の猛烈な暑さのなかで、どうも気分が落着かず、何かうめいている物影の上にかがみこんでいるリウーの姿が、なかなかわからなかった。リウーは、二人の看護人が寝台の両側から大の字に抑えつけている患者の、鼠蹊部を切開していた。やがて身を起すと、彼はその手術道具を、一人の助手が差出す盆のなかに落し、いっときじっと立ったまま、人々が包帯を巻いてやっているその男をながめていた。

「何か変ったことでも……」と、そばへ寄ってきたタルーに彼はいった。

「パヌルーが予防隔離所のほうのランベールのあとを引受けてくれたよ。これまでも、ずいぶんよくやってくれてたがね。あとは第三検索班を、ランベールを抜いて再編成することだ」

リウーはうなずいた。

「カステルは最初の製品を仕上げたそうだ。ひとつ試験してみたいっていってるよ」

「ほう！」と、リウーはいった。「そいつはよかった」

「それから、ここにランベールが来てるんだがね」

リウーは振向いた。マスクの上から、ランベールの姿を認めると、彼は目をひそめた。

「こんなところで何をしてるんです」と、彼はいった。「君はもうほかのところに行ってるはずじゃありませんか」

タルーが、いよいよ今晩の十一時にきまったことをいうと、ランベールは付け加えた――「原

自動車がちょっと横すべりをしたので、彼は口をつぐんだ。それから、じっと前を見つめながら、また続けた――

「自分の愛するものから離れさせるなんて値打ちのあるものは、この世になんにもありゃしない。しかもそれでいて、僕もやっぱりそれから離れてるんだ、なぜという理由もわからずに」

彼はまたぐったりクッションにもたれた。

「これは一つの事実だし、つまりそれだけのことだ」と、彼は疲れきった調子でいった。「まあ、そのまま記録しておいて、それから引出される結論だけを採りあげようじゃないですか」

「どういう結論です？」と、ランベールは尋ねた。

「そうですね」と、リウーはいった。「人間は、同時に治療したり、わかったりはできないんですからね。それなら、できるだけ早く治療するってことですよ。このほうが急を要することです」

夜の十二時に、タルーとリウーはランベールに、彼が検索を受持つことになった地区の地図を作ってやっていたが、ふとタルーは彼の腕時計をながめた。頭をあげると、ランベールの視線にぶつかった。

「知らしてはおいたんですね？」

ランベールは目をそむけた――

「一言いってやっときました」と、口の重い調子で彼はいった。「あなたのところへうかがう、あの前に」

「そうなんです」と、ランベールはいった。「しかし、自分一人が幸福になるということは、恥ずべきことかもしれないんです」

タルーは、それまで口をつぐんでいたが、二人のほうへ首を向けようともせず、こういう注意を述べた――もしランベールが人々と不幸をともにしようとするなら、幸福のための時間はもう決してえられないかもしれない。どちらか選ばなければならぬ。

「そんなことじゃないんです」と、ランベールはいった。「僕はこれまでずっと、自分はこの町には無縁の人間だ、自分には、あなたがたはなんのかかわりもないと、そう思っていました。ところが、現に見たとおりのものを見てしまった今では、もうたしかに僕はこの町の人間です、自分でそれを望もうと望むまいと。この事件はわれわれみんなに関係のあることなんです」

誰も答えようとせず、ランベールはいらいらしてきた様子であった。

「それにあなたがただって、それはよくご存じなんだ。さもなきゃ、何をなさろうというんです、あの病院で？　いったい選んだんですか、あなたがたは？　そうして、幸福を断念なさったんですか？」

タルーもリウーも、それでもまだ答えようとしなかった。沈黙は長い間続き、とうとう医師の家が近くなってきた。そしてランベールは、またあらためてさっきの質問を、さらに力をこめて繰返した。すると、リウーだけが彼のほうを振向いた。リウーは努力した様子で身を起した――

「悪く思わないでくれたまえ、ランベール」と、彼はいった。「しかし、僕にもそれはわからないんだ。僕たちといっしょに残ってくれればいいさ、君が自分でそうしたいっていうんなら」

「さて、そうきまれば、先生、われわれは規定どおりのことをやらなきゃなりません」

リウーは、相変らずハンカチを口に当てたままの母親のほうを、なるべく見ないようにしていた。

「それはすぐできますがね」と、ためらいながら、彼はいった。「ちょっと電話をかけさせていただければ」

オトン氏は、いま案内するからといった。しかし、リウーは夫人のほうを振向いた――

「なんと申しあげようもありません。しかし、奥さんにはいろいろ身のまわりのものなど用意していただかねばなりません。用意するものはおわかりになってると思います」

オトン夫人はすっかりうろたえた様子であった。彼女はじっと足もとを見つめた。

「はい」と、彼女は首を振りながらいった。「今いたします」

別れを告げる前に、リウーは、何か入用なものはないかと、彼らにきかずにはいられなかった。夫人は相変らず黙って彼の顔をながめていた。しかし、判事のほうは、今度は目をそむけた。

「いや、別に」と、彼はいって、それから唾をのみこんだ。「ただ、あの子を助けてください」

予防隔離は、当初は単なる形式にすぎなかったのであるが、リウーとランベールによって組織されて、きわめて厳重なかたちのものとなっていた。とりわけ、彼らは、同じ一つの家の家族同士が必ず互いに隔離されるようにすることを強制した。万一その家族のものの一人が、知らない間に感染していたとすれば、発病の機会を増加させるようなことはすべきでなかった。リウーは

カステルの血清がためされたのは十月の下旬であった。事実上、それはリウーの最後の希望であった。万一これもまた失敗に終った場合には、市は病の気紛れのままに、病禍がまだ延々数カ月にわたってその威力を継続するか、あるいは、なんの理由もなく終息する気になるか、そのなすままに任せられるであろうことを、リウーは確信させられていたのである。

カステルがリウーを訪ねてきた日のちょうど前の晩、オトン氏の息子が病気になり、そして家族全部が予防隔離所にはいらねばならぬことになった。母親は、ほんの少し前そこから出てきたばかりであったが、そこでまたしても一人だけ引離される羽目に陥った。所定の禁令を律儀に守って、判事は、子供の体に病の兆候を認めると、さっそく医師のリウーを呼ばせたのであった。リウーが行ったとき、父親と母親は寝台の足もとに立っていた。小さな女の子は遠ざけられていた。子供はちょうど虚脱期にあり、別にいやがりもせず診察されるままになった。医師が頭をあげたとき、彼は判事の視線と、そのうしろで、ハンカチを口に当てて、医師の動作を大きく見開いた目でじっと見守っていた母親の、青ざめた顔とにぶつかった。

「やっぱりそうなんでしょうな？」と、判事は冷淡な声でいった。

「ええ、そうですね」と、また子供のほうをながめながら、リウーは答えた。

母親の目は一層大きく見開かれたが、それでも彼女は相変らず口をきこうとしなかった。判事もやはり黙っていたが、やがて、前より低い調子で、こういった——

は、立っているリウーのそばに腰を下ろして、カステルが、表面はまったく平静に、何か古めかしい著作を読んでいた。次第に、朝の明りがこの昔の教室のなかに広がるにつれて、ほかの人々がやって来た。まずパヌルーが、これはタルーに対して、寝台の反対側に、壁を背にして陣取った。苦しげな表情がその顔に読まれ、そして彼が身を挺してきたこの日々の疲労が、その青く筋張った額に皺を刻んでいた。今度はジョゼフ・グランがやって来た。ちょうど七時で、グランは息を切らしたりしていることをわびた。自分はほんのいっときしかいられないのだが、おそらくもう何かはっきりしたことがわかったのではあるまいか。なんにもいわず、リウーは少年のほうを――変り果てた顔つきで目を閉じたまま、力のかぎり歯を食いしばり、体は身動きもせず、おおいのない長枕の上でしきりに頭を左右に回転させている、少年のほうを指し示した。だいぶ明るくなって、とうとう、部屋の奥の、もとの場所にそのまま残されている黒板の上に、昔の方程式の消え残った跡が見分けられるようになったころ、ランベールがやって来た。彼は隣の寝台の足もとに背をもたせ、たばこの箱を取出した。しかし、ちょっと少年のほうを見てから、その箱をまたポケットにしまった。

カステルは相変らずすわったまま、ずりさがった眼鏡越しにリウーのほうをながめた。

「父親のほうのことは何か聞いたかね？」

「いや」と、リウーはいった。「いま隔離収容所のほうにいるんです」

リウーは、少年がうめいている寝台の横木を力いっぱい握りしめていた。彼はその小さな患者からじっと目を離さないでいたが、少年は突然体を硬直させると、歯をさらに強く食いしばり、

それらの理由を判事に説明し、判事はそれをもっともだと認めた。しかしながら、夫人と判事とが互いに顔を見合せたその様子から、この隔離が彼らをどれほどまで寄るべない気持にしてしまうかを、リウーは感じた。オトン夫人と小さな女の子は、ランベールの管理している、ホテルの隔離所に収容されることができた。しかし予審判事のほうは、県が道路課から借りたテントを利用して市立競技場に建設中の隔離収容所以外には、もう場所がなかった。リウーはそのことをわびたが、オトン氏は、万人のために規則は一つしかないのだし、それに従うのが正当だ、といった。

少年のほうは、分院の、昔の教室のなかに寝台が六個設けられている部屋に運ばれた。二十時間ばかり後には、リウーはもう絶望的な症状と判断した。小さな体は、反応一つ示さず、病毒のむしばむに任せていた。痛そうな、しかしほとんどまだ形をなしていないくらいの、ごく小さなリンパ腺腫が、か細い手足の関節を閉塞していた。初めから、もう負けてしまっていたのであった。そんな理由から、リウーはカステルの血清をこの子に試みてみようと思いついたのであった。直ちにその晩、夕食のあとで、彼らは長時間にわたる接種を行なったが、少年からはただつの反応もえられなかった。翌日、明け方になると、すべての者がこの決定的な実験の効果を見きわめようとして、少年のかたわらにおもむいた。

少年は、麻痺状態からさめて、毛布のなかで痙攣的に寝返りをうっていた。リウーとカステルとタルーとは、朝の四時からそのそばに付き添って、病の一進一退を刻一刻と見守っていた。寝台の枕もとには、タルーのがっしりした体が、少し背をかがめ気味にしていた。寝台の足もとに

そして毛布をはねのけながら、狂おしく頭を振動かした。大粒の涙が、ぼうっと赤くなったまぶたからほとばしって、鉛色の顔面を流れはじめ、そして発作がついに終ったとき、まったく力尽きて、四十八時間の間にすっかり肉のなくなってしまった両腕と骨ばった両足とを引きつらせながら、少年は、荒し尽された床の中で、磔にかけられた者のようなグロテスクなポーズを作った。

タルーはかがみこみ、そして動きも重い手で、涙と汗にぬれた小さな顔をふいてやった。ちょっと前から、カステルは本を閉じて、じっと病人を見つめていた。彼はひとくちいいかけたが、それをしまいまでいうのには、途中で咳払いしなければならなかった。声が突然調子はずれになってしまったからである——

「明け方の病勢弛緩がなかったようじゃないか、どうだい、リウー君？」

リウーは、それはそうだが、しかし少年は通常見られるよりも長い時間にわたって病いに抗しつづけている、といった。パヌルーは、ちょっとぐったりしたように壁にもたれていたが、そのとき、鈍い声でつぶやいた——

「これで死ぬとしたら、人より長く苦しんだことになってしまうが」

リウーはいきなり彼のほうへ振向き、口を開いて何かいおうとしたが、しかしそのまま口をつぐみ、明らかに努力して自分を抑え、そしてまた少年のほうへ視線をもどした。

光線は室内にみなぎっていた。ほかの五つの寝台では、ものの姿がうごめき、うめいていたが、しかしそれも遠慮がちに、まるでみんなが示し合せているようであった。一人だけ、部屋の

胴の表面の線を少し内側へくぼませながら、手足をゆっくりと突っ張った。軍隊毛布の下で裸のままの、小さな体から、毛糸と、すっぱい汗のにおいが立ち上った。少年は次第にぐったりとなり、腕と足を寝台の中央に向って引きつけ、相変らず目を閉じ声をひそめたまま、前より呼吸が早くなったように見えた。リウーはタルーと視線が合ったが、タルーは目をそむけた。

数カ月以来、病魔の猛威はもう相手を選ばなくなっていたので、彼らはすでに子供たちの死ぬところを見てきたのであったが、しかし今朝からずっとやっているように、そういう子供の苦悶を刻々に見守りつづけたことは、まだ一度もなかった。しかももちろん、これら罪なき者に加えられる苦痛は、彼らの目に、かつて一度も、その実体どおりのもの、すなわち公憤に価する事実として映らなかったことはなかったのである。しかし、少なくともそれまでは、彼らはある意味で抽象的に公憤を感じていたわけであり、それはつまり、彼らがこれまで、罪なき者の断末魔の苦しみをこんなに長く、まともに見つめたことがなかったからであった。

ちょうどこのとき、少年は胃のあたりでも責めつけられるように、か細いうめき声をたてながら、またしても体を折曲げた。彼はそうやって長い数秒の間じっと身を縮めたまま、あたかもその華奢な骨組みが吹きすさぶペストの風にたわみ、相次ぐ熱の煽りにきしむかのように、痙攣的なわななきと身震いに揺すぶられていた。その突風が過ぎ去ると、彼は少し体をゆるめ、熱は引き退いて、毒気のこもった湿っぽい浜べに、あえぐ体を打捨てていったように見え、その静まった姿はすでに死に似ていた。焼けつくような熱の波が三度また襲いかかり、そしてその体を少し持ち上がらせたとき、少年はすっかりちぢこまり、焼きつける炎の恐怖に寝台の奥へ身を引き、

ぼみのなかで、口が開いたと思うと、ほとんど直ちに、単一の持続的な悲鳴――ほとんど呼吸による抑揚さえ伴わず、突如、単調な不協和な抗議で部屋じゅうを満たし、そしてまるで、ありとあらゆる人間から同時に発せられたかと思われるほど非人間的な悲鳴――が、その口からほとばしり出た。リウーは歯を食いしばり、タルーは顔をそむけた。ランベールはカステルのそば近く寝台に進み寄り、カステルは膝に広げたままだった本を閉じた。パヌルーは、病に汚染され、このあらゆる年齢の悲鳴に満たされた、あどけない口を見つめた。そして、彼がばったりひざまずいたと思うと、やや圧し殺したような声、しかし絶えようともせぬ無名の悲鳴の陰にはっきり聞きとれる声で、こう唱えるのを一同自然なこととして聞いた――「神よ、この子を救いたまえ」

しかし少年は叫びつづけ、そしてその周囲では、患者たちが興奮しはじめた。さっきから部屋の向う端で叫びをやめないでいた患者は、そのうめきのリズムを早め、ついにはこれまたまったくの悲鳴を発するに至り、その間、ほかのものはますます激しくうめきはじめた。潮のようなすすり泣きが室内に打寄せつつ、パヌルーの祈り声をおおい、そしてリウーは、寝台の横木にすがりついたまま、疲労と嫌悪に酔ったようになって目を閉じた。

ふたたび目をあけると、タルーがそばにいた。

「とてもこれ以上、僕はいられない」と、リウーはいった。「もう聞いてられないんだ」

ところが、突然、ほかの患者たちが沈黙した。リウーはそのとき、少年の悲鳴が弱まっていたこと、それがさらに弱まり、そして今途絶えたことに気がついたのであった。彼の周囲では、うめき声がまた始まった――しかし忍びやかに、あたかも今しも終りを告げたその戦いのはるか

向う端でわめいている患者が、規則正しい間隔を置いて、苦痛よりもむしろ驚きがにじみ出ているように思われる、小さな叫びをあげていた。そういう様子が、患者たち自身の場合でさえ、最初のころのような恐怖状態とは違ってきたように思われた。今では、病を迎えるその態度のなかに、一種の同意のようなものが含まれていた。ひとり、少年だけがあらんかぎりの力を尽して戦っていた。リウーはときどき、それも別にその必要があるわけではなく、むしろ現在自分の置かれている無力な無為状態から脱するために、少年の脈をとってみていたが、目を閉じると、少年のそのあがきが自分自身の血の波だちと入り混じるのを感じた。すると、その死刑に処せられている少年と自分とが一つに溶け合ってしまい、まだ健全な自分のあらゆる力をもって少年をささえてやろうと試みるのであった。しかし、一瞬間いっしょになったと思うと、彼らの二つの心臓の鼓動は調子が合わなくなり、少年は彼の手から抜けだし、そして彼の努力は空虚のなかへ沈んでいく。そこで、彼はその細い手首を放し、自分の席にもどるのであった。

ずっと漆喰の壁に沿って、光線は薔薇色から黄色に変っていった。窓ガラスの向うには、炎熱の朝がはためきはじめていた。グランが、また来てみるといいながら帰っていったのも、誰も聞いたか聞かないくらいであった。みんなじっと待っていた。少年は相変らず目を閉じたまま、少し静まった様子であった。まるで鳥の爪のようになった手は、静かに寝台の両側をかき撫でていた。その手がもとへもどり、膝のあたりの毛布をかきむしったと思うと、突然、少年は足を折曲げ、両腿を腹のそばまで引きつけ、そして動かなくなってしまった。彼はそこではじめて目を開き、目の前にいたリウーの姿を見つめた。今はもう灰色の粘土に凝固してしまったその顔のく

こみそうになっている汗をふいた。彼は心臓も砕けんばかりにしめつける激しいしこりを、今こそ解きほぐすために、まだもっとわめきたい気がした。暑さが、無花果の枝々の間に、徐々に降り注いできた。朝の青空はすぐにもう白っぽいくもりにおおわれてきて、それが大気を一層息苦しくした。リウーはベンチの上でぐったりと身を休めた。じっと木の枝や空をながめながら、徐徐に呼吸を取りもどし、少しずつ疲労をほぐしていった。

「どうして私にあんな怒ったようないい方をなさったのです」と、うしろで声がした。「私だって、あの光景は見るに忍びなかったのですよ」

リウーはパヌルーのほうを振向いた。

「ほんとに、そうでした」と彼はいった。「悪く思わないでください。なにしろ、疲れたときは気違い同然になってますからね。それに、この町では、僕はもう憤りの気持しか感じられなくなるときがよくあるんです」

「それはわかります」と、パヌルーはつぶやいた。「まったく憤りたくなるようなことです。しかし、それはつまり、それがわれわれの尺度を越えたことだからです。しかし、おそらくわれわれは、自分たちに理解できないことを愛さねばならないのです」

リウーはいきなり上体をぐっと伸ばした。彼はそのとき身のうちに感じえたかぎりの力と情熱をこめて、じっとパヌルーの顔を見つめ、そして頭を振った。

「そんなことはありません」と、彼はいった。「僕は愛というものをもっと違ったふうに考えています。そうして、子供たちが責めさいなまれるように作られたこんな世界を愛することなど

な反響のように。なぜなら、戦いは終りを告げたのである。カステルは寝台の向う側にまわり、そしてもう終ったといった。口をあけたまま、しかも声はなく、少年は、乱れた布団のくぼみに急にちっちゃくなり、涙の名残りを顔にとどめて横たわっていた。

パヌルーは寝台に近づき、祝別のしぐさをした。それから、自分の法衣を拾い上げ、中央の通路を通って出ていった。

「またすっかりやり直さなきゃならんでしょうか」と、タルーはカステルに尋ねた。

老医は頭を振った。

「あるいはね」と、ひきつったようなほほえみを浮べて、彼はいった。「要するに、長くもちこたえることはもちこたえたわけなんだが」

しかしリウーはすでに部屋を去りかけ、しかも恐ろしく急ぎ足で、ひどく気色ばんでいたので、彼がパヌルーを追い越していこうとしたとき、パヌルーは腕を伸ばして引きとめようとしたほどだった。

「まあ、ちょっと、リウーさん」と、彼はいった。

同じ激した身ぶりで、リウーは振向くと、激しくたたきつけるようにいった――

「まったく、あの子だけは、少なくとも罪のない者でした。あなたもそれはご存じのはずです！」

それからまた顔をそむけると、彼はパヌルーより先に部屋の出口を通り抜けて、校庭の奥のほうへ行った。彼は埃だらけの小さな木立の間にある一つのベンチに腰を下ろし、すでに日に流れ

す」とつぶやき、そして立ち上がったときにはその目は光っていた。彼が行こうとしかけると、そのとき、じっと考えこんでいたリウーが、これも立ち上がり、そして一足彼のほうへ歩み寄った。

「どうも済みませんでした。もう一度おわびします」と、彼はいった。「あんな癇癪はもう二度と起しません」

パヌルーは手を差出し、そして悲しげにいった――

「そのくせ、私はあなたを説き伏せることはできなかったんですからね」

「それがどうだというんです」と、リウーはいった。「僕が憎んでいるのは死と不幸です、それはわかっていられるはずです。そうして、あなたが望まれようと望まれまいと、われわれはいっしょになって、それを忍び、それと戦っているんです」

リウーはパヌルーの手を引きとめた。

「そら、このとおり」と、パヌルーの顔を見ないようにしながら、彼はいった。「神さえも、今ではわれわれを引離すことはできないんです」

保健隊にはいってからというもの、パヌルーは病院とペストの見られる場所とを離れたことがなかった。彼は救護者たちのなかで、当然自分の占めるべきものと思われた地位、すなわち最前列の地位に身を置いていたのである。死の場面に接することも乏しくはなかった。そして、原則

は、死んでも肯んじません」

パヌルーの顔を、一抹悪乱したような影がかすめた。

「ほんとにリウーさん」と、哀しげに彼はつぶやいた。「私には今やっとわかりました、恩寵といわれているのはどういうことか」

しかし、リウーはまたベンチの上にぐったり身を投げ出した。またもどってきた疲労の底から、前より柔らげた調子で、こう答えた——

「それは僕にはないものです、たしかに。しかし、僕はそんなことをあなたと議論したいとは思いません。われわれはいっしょに働いているんです、冒瀆や祈祷を越えてわれわれを結びつける何ものかのために。それだけが重要な点です」

パヌルーはリウーのそばへ腰を下ろした。彼は感動した様子であった。

「そうです」と、彼はいった。「たしかに、あなたもまた人類の救済のために働いていられるのです」

リウーはしいてほほえもうとした。

「人類の救済なんて、大袈裟すぎる言葉ですよ、僕には。僕はそんな大それたことは考えていません。人間の健康ということが、僕の関心の対象なんです。まず第一に人間の健康です」

パヌルーはちょっとためらった。

「リウーさん」と、彼はいった。

しかし、彼はそのまま口をつぐんだ。彼の額にも汗がしたたりはじめていた。彼は「失礼しま

ックのお守りを身につけていたのである。

その例として、市民たちが、予言というものをやたらに愛用したことをあげることができる。春には、実際、人々は今か今かと病の終息を待っていながら、しかも病疫の持続期間についてはっきりしたことを人に求めようと思う者などはなかったのであるが、それはどうせいつまでも続くようなことはあるまいとみんなが確信していたからであった。しかし、日がたつにつれて、人人はこの不幸が実際終りを告げることはないのではあるまいかと心配しはじめ、そしてそれと同時に、病疫の終息ということが、あらゆる希望の対象となったのである。そこで、古代の道士やカトリック教会の聖者たちによるさまざまの予言が、手から手へ渡り歩くようになった。町の印刷業者たちはこの熱中ぶりを種に、もうけできることを逸早く見てとり、流布していた原文を大部数印刷してばらまいた。一般の好奇心が飽くことを知らぬ様子を認めると、彼らは市の図書館で、民間説話の類いが提供しうるこの種のあらゆる証言の探索を試みさせ、そしてそれを市内に流布させた。説話でも予言が足りなくなってしまうと、ジャーナリストの連中に注文が発せられたが、この連中も、少なくともこの点に関するかぎり、過去の世紀のお手本に劣らず有能なところを示した。

これらの予言のある種のものは新聞紙上に連載したりまでされ、しかもそれが、健康時代にその欄に見られた感傷的な物語にくらべて、それより熱心に読まれなかったわけではなかった。こういう予見の幾つかのものは、その年の紀元年数や、死亡者の数や、ペストの体制のもとにすでに経過した月数などが加味された、奇妙な計算を根拠としていた。またあるものは史上の大規模

的には血清によって安全を保証されているわけではあるが、自分自身の死に対する顧慮というものも全然知らないわけではなかった。一見したところ、彼は相変らず平静を保っていた。しかし、一人の少年の死んでいくのを、ながながとながめていたあの日から、彼は変ったように思われた。増大する緊張の色がその顔に読まれるようになった。そして、彼がリウーに向って、自分は目下《司祭は医師の診察を求めうるや?》という論題について短い論文を準備中だと、笑いながらいったとき、リウーは、それが何かしら、パヌルーのいっているらしく見えるよりも、もっと真剣なものだという感じを受けた。リウーがその労作の内容を知りたいという希望を表明すると、パヌルーは自分は今度男子のためのミサで説教をすることになっていて、その機会に、少なくとも自分の見解の幾つかを述べるつもりだ、と告げた。

「あなたにも来ていただきたいんですがね。論題は、きっとあなたにも興味があると思うんです」

神父は彼の第二回目の説教をある大風の日に行なった。実際のところ、聴衆の列は第一回のときよりもまばらであった。それはつまり、この種の催しが、市民たちにとって、もう新奇なものとしての魅力はなくなっていたからである。市が経験しつつあった困難な状況のなかでは、「新奇」という言葉そのものがもう意味を失っていた。それに、大部分の人々は、たとい宗教上の務めを完全に捨て去っていないまでも、あるいはそれをはなはだしく背徳的な個人生活にまったく調子を合わせたようなものにしてしまっていないまでも、通常の宗教的な務めをまるで不合理な迷信に置き換えてしまっていた。彼らはミサに出かけるよりも、好んで災厄よけのメダルや聖ロ

しかしながら、彼の声は次第にしっかりしてきた。彼はまず、数カ月の長きにわたってペストがわれわれの間に存在したことを指摘し、そして今や、それがわれわれの食卓あるいは愛する者の枕べにすわり、われわれのそばを歩み、仕事場にわれわれの来るのを待ち受けているのをかくもたびたび目撃して、それを一層よく知った現在では、すなわち今こそ、それが仇むことなく語りつづけていたもの——しかも当初の驚きのなかで、あるいはわれわれがよく聞こうとしなかったかもしれぬものを、おそらく一層よく受けとることができるであろう、ということから説き起した。この同じ場所で、前回すでにパヌルー神父が説いたところは、依然として真実である——あるいは少なくとも、彼はそう確信している。しかもおそらくなお、われわれ同誰でもそういうところがあったであろうし、そして自分は胸をたたいてみずから責めるのであるが、彼はそのことを慈悲の心なく考え、かつ、いったのであった。しかしながら、依然として真実であることは、あらゆる事柄において、つねに採るべき点があるということである。最も残酷な試練も、キリスト者にとっては、なおかつ利益である。そして、まさに、キリスト者が本件において探求すべきものは、すなわちその利益であり、その利益がいかなる点にあるか、いかにしてそれを見出しうるかということである。

このとき、リウーの周囲では、人々が椅子の腕木の間で姿勢を楽にし、できるだけ気持よくすわり直そうとする様子であった。入口のレザー張りの扉の一つが、軽くはためいた。誰かが立っていって、それを押えた。そしてリウーが、この騒ぎに気をとられて、ちょっと聞きとれないでいる間に、パヌルーはまたその説教を続けた。彼は、ペストのもたらした光景を解釈しようとし

なペストとの比較を試み、そこから類似点（予言はこれをつねに不変であると称していた）を取出し、そしてこれも前者に劣らず奇妙な計算を用いて、現在の試練に関する教訓をそれから引出しうるとしていた。しかし、最も一般に珍重されたのは、むろん、黙示録風の言葉をもって、一連の出来事――その一つ一つが現在この町の経験しているものでありえて、しかもその複雑さからあらゆる解釈が許されるような一連の出来事――を予告したものであった。ノストラダムス（訳注　十六世紀フランスの占星術者。一五五五年以後十世紀間の出来事に関する予言集を著わし、アンリ二世の変死その他、彼の予言が的中したと認めうる事実が少なくないため、今日でもなおその研究者が絶えない）と聖女オディール（訳注　六世紀におけるアルザスの王女。生来の盲目が開眼の奇蹟を授かり、モン・サント・オディール修道院を創建した。アルザスの守護聖女とされている）がそこで毎日のように引合いに出され、しかもつねに、しかるべき収穫があった。それに、あらゆる予言に一貫して共通であったことは、それが結局において安心を与えるものであったということである。ひとり、ペストだけはそうでなかった。

これらの迷信がそこで市民たちにとって、宗教の代りとなっていたわけで、つまりそういう理由から、パヌルーの説教もわずかに七分どおり満たされた会堂のなかで行われたのであった。説教の晩、リウーが行ったときには、入口の観音開きの扉から隙間風になって吹きこむ風が、聴衆の間を自由に駆け巡っていた。そして、寒くひっそりとした教会の、特に男たちだけの会衆のなかに、彼は席をとり、そして神父が壇上に上るのを見たのである。神父は第一回のときよりももっと穏やかな考え深い調子で話し、そして幾度も、会衆はその話しぶりにある種のためらいが見られることに気がついた。さらに興味深いことには、彼はもう「あなたがたは」とはいわず、「私どもは」というのであった。

うものは、その五体にも霊魂にも苦痛を味わいたもうた主に仕える、キリスト者とは断じていえないであろう。否、神父は壁際に追い詰められたまま、十字架によって象徴されるあの八裂きの苦しみを忠実に身に体して、子供の苦痛にまともに向い合っているであろう。そして、彼はこの日、自分の話を聞いている人々に向って、恐れるところなく、こういうであろう――「皆さん。その時期は来ました。すべてを信ずるか、さもなければすべてを否定するかであります。そして、私どものなかで、いったい誰が、すべてを否定することを、あえてなしうるでしょう？」

リウーが、神父は異端とすれすれのところまで行っていると、考える暇もほとんどないうちに、神父は早くも力強く言葉を続けて、この命令、この無条件の要求こそ、キリスト者の恵まれた点である、と断言した。それはまたキリスト者の徳操でもある。神父は、彼がこれから語ろうとする徳操に激越なものの存することが、もっと寛容な、もっと古風な道徳に慣れている、多くの人々の精神に反撥を感じさせるであろうことを知っている。しかし、ペストの時代の宗教は、ふだん毎日の宗教と同じものであることはできないし、神も、幸福の時代において人々の魂が安息しかつ楽しむことを、許し、あるいは願いさえしたもうことがありえたとしても、極度の不幸のなかではその魂が激越ならんことを望みたもうのである。神は今日そのつくられし者どもに恩寵をたれたまい、彼らが「全」か「無」かの操持という最も偉大な徳操を、ぜひとも見出しかつ実践しなければならぬほどの不幸のなかに、彼らを投じたもうたのである。

ある瀆神的な著者が、最近の世紀に、教会の秘密を発くと称して、煉獄なるものは存在しないと断言したことがある。その著者がそういういい方で言外におわせようとしたことは、中途半

てはならぬ、ただそこから学びうるものを学びとろうと努めるべきであると、ほぼそんなふうなことをいったようであった。リウーのおぼろげに読みとったところでは、神父にいわせれば、そこにはなんら解釈すべきものはないのであった。彼の興味がまったくひきつけられたのは、パヌルーが、世には神について解釈しうるものと、解釈しえないものがあると、力をこめていったときであった。たしかに、善と悪というものはあり、また一般に、両者を区別するところのものは容易に説明される。しかし、悪なるものの内部の世界で、困難が始まるのである。たとえば、一見必要な悪と、一見無用な悪とがある。地獄に落されたドン・ジュアンと、子供の死とがある。なぜなら、遊蕩児が雷電の一撃を受けることは正当であるとしても、子供が苦しむということは納得できないのである。そして、じつに、この地上における何ものも、子供の苦しみと、この苦しみにまつわるむごたらしさ、またこれに見出すべき理由というものほど、重要なものはないのである。そのほかの生活においては、神はわれわれのためにすべてを容易ならしめたまい、そしてそこまでは、宗教も別に功徳はない。これに反して、ここで神はわれわれを壁際に追い詰める。われわれはつまりそういう状態でペストの囲壁のもとにいるわけであり、そしてその囲壁の死の影のなかにこそ、われわれの利益を見出さねばならぬのである。パヌルー神父は、その壁を乗り越えさせてくれるような安易な好都合さを自分の立場とすることさえしようとは思わなかった。彼としては、その子供を待ち受けている久遠の歓喜はその苦しみを償いうると、いうことも容易であったろうが、しかし真実のところ、彼はその点に関してはなんにも知らなかった。そもそも永遠の喜びが、一瞬の人間の苦痛を償いうると、誰が断言しうるであろうか？　そんなことをい

今この瞬間にも方々の教会で、けなげな婦人たちが、患部にできるリンパ腺腫は身体がその病毒を排除する自然の方法なのだと聞かされて、「神様、どうかあの子にリンパ腺腫をお授けくださいますように」といっているように、キリスト者は神の意志に――たといそれが不可解なものであろうとも――身をゆだねるすべを知るであろう。「あれは理解できる。しかし、これは受入れることができない」などということはいえない。われわれに差出された、その受入れえぬものの心臓に、まさにわれわれの選択を行うために、とびついていかねはならぬ。子供の苦しみは、われわれの苦きパンであるが、しかしこのパンなくしては、われわれの魂はその精神的な飢えのために死滅するであろう。

ここで、たいていパヌルー神父の休止のたびごとに起る、かすかなざわめきの気配が聞えはじめたが、そのとき、不意に説教者は力をこめてまた話しはじめ、聴衆に代って尋ねるようなかたちで、結局、いかなる身の処し方をとるべきかを尋ねた。彼も十分予想しているところであるが、人々は運命論という恐ろしい言葉をもちだそうとするであろう。そういわれるのなら、彼もその言葉の前に必ずしもたじろぎはしないが、ただしそれに《能動的》という形容詞を加えることが許されさえすればである。たしかに、そしてもう一度いうが、彼が前に話したアビシニアのキリスト教徒のまねはすべきでない。また、キリスト教徒の保健班に自分たちの衣類を投げつけながら、神のつかわされた災に抗おうとするこの不信者たちにペストをお送りくださるよう、声に出して天に祈願したあのペルシャのペスト患者たちを見習おうなどとは、考えることさえすべきでない。しかし、逆にまた、前世紀の疫病の際に、病毒が宿っていることのありうる湿潤温暖

端な度合いというものは存在しないということ、天国と地獄だけしか存在しないということ、そして人はみずから選んだところに従って救われるか、あるいはおとされるかする以外にはありえないということであった。これは、パヌルーのいうところを信ずるならば、放縦な魂のなかにしか生れえない類いの異端である。なぜなら、煉獄というものはやはり存在するからである。しかし、たしかに、そういう煉獄があまり期待されるべきでないような時代があり、赦免されうべき罪などということを口にしえないような時代がある。すべての罪は大罪であり、すべての冷淡さは罪せられる。全か、しからずんば無である。

パヌルーはちょっと話しやめ、リウーにはそのとき、外ではますます激しくなったらしい風の、扉の陰にうなる音が、一層よく聞えた。神父はちょうどその瞬間にまた話しだした——自分がいっている全的な受容という徳は、普通に考えられているような狭い意味に理解されるべきではなく、それは月並みな諦めでも、困難な自己卑下ということでさえもない。これは屈従であるが、しかし屈従する者が自ら同意している屈従である。たしかに、子供の苦しみということは、精神にとっても心情にとっても屈辱的なことである。しかし、それゆえにこそ、そのなかへはいっていかねばならぬのである。しかし、それゆえにこそ——そういってパヌルーは、自分が今いおうとしていることは決していいやすいことではないと、聴衆に向って断言した——神が望みたもうがゆえにそれを望まねばならぬのである。このようにしてのみ、キリスト者は何ものをも見すごすことなく、しかもすべての出口を閉ざされて、本質的な選択の深奥に向いうるであろう。彼は、すべてを否定する羽目に陥るまいとして、すべてを信ずることを選ぶであろう。そして、

でどおりの態度を守り、またみずから納得して、すべてを、子供の死さえも、神のみ心に任せ、そして個人の力に頼ろうなどとしないようにすべきである。

ここで、パヌルー神父は、マルセイユのペストの際のベルザンス司教（訳注　マルセイユの司教。一七一〇―一一年の猛ペストの際最も献身的な救援活動を行なって、讃仰の的となり、史上にその名をとどめた）という格式高い人物の姿をもちだした。彼が指摘するには、疫病の終りのころ、司教はなすべきことをすべてし尽したあげく、もう手段はないものと信じ、食糧を蓄えて家に閉じこもり、その家には塀をめぐらした。それまで彼を偶像こあがめていた町の住民たちは、極度の悲しみの際によく見られるような、感情的な反動で、司教に対して憤慨し、その家の周囲に死体を積みあげて感染させようとし、もっと確実に死なしてやろうとして、塀のなかへ死体を投げこんだりまでした。そんなわけで、司教は最後の心弱さから、死の世界のなかでひとり孤立することができたように思っていたのであるが、しかも死者たちは空から彼の頭上に降ってきたのであった。われわれの場合もまたそれと同様であり、ペストのなかに離れ島はないことを、しっかり心に言い聞かせておかねばならぬ。まことに、中間というものは存在しない。公憤に値するような事実も許容しなければならない。なぜなら、われわれは神を憎むか、あるいは愛するか、選ばねばならぬからである。そして、何びとが、神を憎むことをあえて選びうるであろうか？

「皆さん」と、いよいよ結論にはいったことを知らせる調子で、最後にパヌルーはいった。「神への愛は困難な愛であります。それは自我の全面的な放棄と、わが身の蔑視を前提としております。しかし、この愛のみが、子供の苦しみと死を消し去ることができるのであり、この愛のみが

な口との接触を避けるために、ピンセットで聖体のパンをつまみながら聖体拝領をさせていた、カイロの修道士たちもやはりまねるべきではない。ペルシャのペスト患者たちとこれらの修道士たちとは、等しく罪を犯しているのである。なぜなら、前者にとっては、子供の苦しみなどまったく問題でなく、後者にとっては、反対に、苦痛に対するはなはだ人間的な恐怖がすべてを圧倒してしまっているのである。両者いずれの場合にも、問題はすりかえられている。みんな、神の声に対して聾いていたのである。しかし、パスルーがあげたいと思う、もっと別な例があった。マルセイユの大ペストの記録作者の言を信ずるならば、メルシ派（訳注 一六〇二年マドリードに創建された修道会。会士は極度に貧しい生活をすることを、おきてとしていた）の修道院の八十一人の修道士のうち、四人だけがこの熱病のあとに生き残った。そしてこの四人のうちで、三人は逃亡してしまった。記録作者たちはそんなふうに語っているだけであり、それ以上をいうことは彼らの職分ではなかった。しかし、これを読んだとき、パヌルー神父のすべての思いは、ただ一人踏みとどまった修道士――七十七個の死体を見ているにもかかわらず、また特に三人の同僚の手本があるにもかかわらず、ただ一人踏みとどまったその修道士――の上に注がれたのであった。そして神父は説教壇の縁を拳でたたきながら、こう叫んだ――

「皆さん、私どもは踏みとどまる者とならねばなりません」

それはなにも用心というもの――一つの社会が災禍の混乱のなかに秩序をもたらしている知的にすぐれた規律――を拒否することではない。ただひざまずいて、すべてを放棄すべきだなどといっている、あの道学者たちに耳をかしてはならぬ。闇のなかを、やや盲滅法に、前進を始め、そして善をなそうと努めることだけをなすべきである。しかし、その他の点に関しては、これま

はずいぶんよく神父のところへ出入りしていて、彼の思想的発展についてはよく知っているが、彼の論文はまだそれ以上にずっと大胆なものになるであろうし、おそらく印刷認可はえられないだろう、と断言した。

「つまりどういうのかね、彼の思想は?」と、老人の司祭は尋ねた。

彼らはちょうど前庭のところまで来ていたので、風がうなりながら周囲に吹きまくり、若いほうはものをいうことができなかった。やっと口がきけるようになると、彼はただこれだけいった——

「司祭が医者の診察を求めるとしたら、そこには矛盾がある、というのです」

パヌルーの言葉を報告したリウーに向って、タルーは、目をつぶされた若い男の顔というものをはじめて知って、戦争中に信仰を失ったある司祭を、自分は知っているといった。

「パヌルーの考えは正しいね」と、タルーはいった。「罪なき者が目をつぶされるとなれば、キリスト教徒は、信仰を失うか、さもなければ目をつぶされることを受入れるかだ。パヌルーは、信仰は失いたくない。とことんまで行くつもりなのだ。つまり、そういうことを彼はいおうとしたわけだ」

タルーのこの観察は、それに続いて起った——そしてその際のパヌルーのふるまいが周囲の人人には不可解に思われた——不幸な事件について、多少事情を明らかにしうるものであろうか。以下、人々の判断に任せたい。

説教から二、三日して、パヌルーはちょうど引っ越しにとりかかった。当時は病疫の進展によ

ともかくそれを必要なもの――理解することが不可能なるがゆえに、そしてただそれを望む以外にはなしえないがゆえに必要なもの――となしうるのであります。これこそ、私が皆さんとともに分かちたいと願った困難な教訓であります。これこそ、人間の目には残酷に見えながら、神の御目には決定的なものであるところの信仰であって、そこにわれわれは近づかねばならぬのであります。この畏怖すべき原型に、われわれは努めて追い及ばねばなりません。この最高所においては、すべては融合し、すべては同等となり、表面不正義と見えるものから真理がほとばしり出るでありましょう。そういう次第で、フランス本国のミディ（訳注　フランス南部一帯を漠然と指す呼称）地方の多くの教会では、ペストに倒れた人々が数世紀以来内陣の石畳の下に眠っていて、司祭たちは彼らの墓の上で語り、そして司祭たちが宣布するところの精神は、この灰のなかから――子供たちもやはりその一部に加わっているこの灰のなかから――ほとばしり出ているのであります」

リウーが外へ出ようとすると、激しい風が半ば開かれた戸口から吹きこんで、信者たちの顔に真っ向から吹きつけた。その風は雨のにおい、ぬれた舗道の香を堂内に運んでき、信者たちは外へ出ないうちから町の様子を察することができた。リウーの前では、ちょうどそのとき出てきた一人の年老いた司祭と若い助祭が、被りものを押えているのに苦労していた。年上のほうは、それくらいのことで、説教に注釈を加えるのをやめはしなかった。彼はパヌルーの雄弁に敬意を表したが、しかし神父が示した考え方の大胆な節々に懸念をいだいていた。彼はこの説教には、力強さよりもむしろ不安が表われていると考えるのであるが、しかもパヌルーの年輩では、司祭たる者は不安をいだく権利はないのである。若い助祭は、風をよけるために頭を下げながら、自分

んより顔が充血しているように見えた。婦人自身の言葉によると、彼女は医者を呼びましょうかとねんごろにいってみたのであるが、その申し出は、激しくしりぞけられたのであって、そんなに激しくいわれなければと、今さら残念な気がするのである。彼女は引下がるより仕方がなかった。少したつと、神父はベルを鳴らして、彼女に来てくれといった。彼はさっきの癇癪めいた発作についてわびをいい、そして、これはペストなどという心配はなく、そんな兆候はなんにも現われていないし、ただ一時的な疲れなのだと明言した。老婦人は威厳のある態度でそれに答えて、自分があいったのは、そんな種類の心配からしたことではなく、神の御手のなかにある自分自身の安全などは、もとより考えに入れていないし、ただ、自分も一部分責任があると思っている神父の健康のことを考えただけだ、といった。しかし、神父はそれ以上なんにも付け加えようとしなかったので、彼女の言を信ずるならば、自分の務めだけは十分に尽したいと願っていた女主人は、重ねてかかりつけの医者を呼ぶことをいいだしてみた。神父はまたしてもそれを拒みながら、それでもいろいろ言いわけを付け加えたが、老婦人には、それがはなはだとりとめもないものに思われたのであった。彼女にただわかったように思われたことは、しかもそれがまさに彼女には不可解に思われることなのであるが、神父がその診察を拒むのは、つまりそれが彼の主義と一致しないからだ、ということであった。彼女はそこで、発熱がこの下宿人の考えを混乱させてしまったものと結論を下し、そして煎じ薬をもっていってやるだけにとどめた。

その事態から生ずるいろいろな務めを、きわめてきちんと果そうと、相変らず心をきめていた彼女は、二時間ごとに規則的に病人をみまっていた。彼女の目に最も目だったのは絶え間のない

って市内にたえず引っ越しの必要が起っていたときであった。そして、タルーがホテルを出てリウーのところへ住みこまねばならなかったと同じように、神父もまた会から当てがわれていた居室を引払って、教会の常連でまだペストのわざわいを免れている、ある老婦人のところへ宿をとらねばならぬことになった。引っ越しの最中に、神父は自分の疲労と不安が増してくるような気がした。そして、そんなことから、彼は宿の女主人の敬意を失う結果になったのである。というのは、彼女が聖女オディールの予言の功徳を熱烈にほめたたえたのに対して、神父はおそらくその疲れのせいであったろうが、ほんのわずかながらいらだたしげな様子を示したのであった。その後どんなに努力して、老婦人からせめて好意的な中立でもえようとしてみても、ついに成功しなかった。彼は悪い印象を与えてしまったのである。そして毎晩、鉤編みのレースの波に満たされた自分の部屋へもどっていく前に、彼は、客間にすわった女主人の背中をじっとながめていなければならず、同時にまた、彼女がそっけなく、振向きもせずにいう「おやすみなさいませ、神父様」という言葉の思い出だけをもって帰るのであった。ちょうどそんなふうなある晩、床につこうとするときになって、彼は頭がずきずきし、幾日も前から体内に潜んでいた熱の荒れ狂う波が、手首と顳顬に押し寄せてくるのを感じたのである。

それに続いて起ったことは、あとで女主人の物語によってはじめて知られたことであった。朝、彼女はいつもの習慣どおり早く起きた。ある時間たってから、神父が部屋から出てくる様子もないのを不思議に思って、彼女はずいぶん躊躇しながら、思い切ってその扉をたたいてみた。見ると神父は一晩眠らずに過して、まだ床についていた。彼は胸苦しさに悩まされていて、ふだ

神父は身動き一つせず横たわっていた。前日の極度の充血に続いて、一種の鉛色の蒼白さが現われ、それが、顔の相好がまだちっともやつれていないだけに一層目だった。神父は、寝台の上に吊るされている、さまざまな色の珠飾りのついた小さなシャンデリアをじっと見つめていた。老婦人がはいっていくと、彼はそっちのほうへ頭を向けた。女主人にいわせると、彼はそのとき、一晩じゅう責めさいなまれて、もう反応を示す力をすっかり失ってしまったという様子であった。彼女は具合はどうかと尋ねた。すると、異様に無関心なその響きが彼女の注意をひいた声で、具合は悪くなったし、医者の必要はないが、ただすべて規則どおりにするために自分を病院へ運んでくれさえすれば済むだろうと、彼はいった。仰天して、老婦人は電話口へ駆けつけた。

リウーは正午に到着した。女主人の物語に対して、彼はただ、パヌルーのいうとおりで、きっともう手遅れだろう、と答えた。神父は一向変らぬ無関心な様子で彼を迎えた。リウーは診察してみたが、咽喉部の閉塞と肺臓の呼吸困難以外には、腺ペストないし肺ペストの主要な兆候が何一つ見出されないのに驚いた。いずれにしても、脈搏はきわめてかすかで、全般的な症状もじつに憂慮すべきものがあり、ほとんどまず望みはなかった。

「病気の主要な兆候がなんにもないんですがね」と、彼はパヌルーにいった。「しかし、実際のところ、疑いはありますし、やっぱり隔離しなきゃなりません」

神父は奇妙な様子で、まるで礼儀上とでもいうように、ほほえんだが、しかしそのまま黙りこんでしまった。リウーは電話をかけに出ていって、また帰ってきた。彼はじっと神父の顔を見つめた。

興奮で、その日一日じゅう神父はその状態で過した。毛布をはねのけては、また自分のほうへ引寄せ、たえず汗ばんだ額に手をやりながら、たびたび身を起して、まるで絞りだすように、かすれてしめっぽく、しめつけられるような咳をしようとする。そんなときの様子は、まるでのどの奥に綿栓がつかえているのをどうしても取去ることができないで、息がつまってしまったとでもいうようであった。そういう発作が終ると、彼はすっかり力尽きた様子をすべての兆候に見せて、ぐったり後ろに倒れてしまうのであった。最後に、彼はまたも半ば身を起し、そしてちょっとの間、それまでのすべての興奮よりももっと強烈な凝然たる様子で、じっと前方を見つめたりした。しかし老婦人は、医者を呼んで病人の気持に逆らうことを、まだ躊躇していた。はた目には、いかに、ものものしく見えようと、単なる熱の発作かもしれなかったのである。

午後になって、それでも、彼女は司祭に話してみようとしたが、答えとして二口三口とりとめのない言葉を聞かされただけであった。彼女はまたいいだしてみた。ところが、そうすると、神父はまた起き上がって、半ば息がつまりそうにしながら、自分は医者に診せるのはいやだと、はっきり答えた。そういわれたとき、女主人は、まあ明日の朝まで待ってみて、もし神父の容体がそれでもよくならないようなら、報知通信社が毎日十回ぐらいはラジオで繰返している番号へ、電話をかけることにしようと決心した。相変らず自分の務めに注意を怠らない彼女は、夜の間にも病人をみまって、様子を見てやろうと思っていた。ところが、晩に新しい煎じ薬をもっていってやってから、ちょっと横になりたくなってしまい、やっと目がさめたときには、翌朝もう夜の明けそめだった。彼女は部屋へ駆けつけた。

乗りだして死んでいる姿が発見されたときにも、その目にはなんの表情も浮んでいなかった。彼のカードにはこう記入された――「疑わしき症例」

この年の万聖節はいつものその日とは違っていた。たしかに、時候はあつらえ向きであった。気候は急に変って、残暑が突然、涼気に席を譲っていたのである。ほかの年々と同じように、冷たい風が今やひっきりなしに吹いていた。大きな雲が地平から地平へ流れて、家々を影でおおい、それが通り過ぎてしまうと、十一月の空の冷やかな金色の光線が、また家々の上に降ってきた。最初のレインコートがもう姿を現わしていた。それがまた、驚くほどの数の、てらてらしたゴム引き布が目についたものである。なるほど、新聞紙上では、二百年前、ミディ地方の大ペストの際に、医者たちは彼ら自身の予防のために油引きの布をまとっていたということが報道されていた。商店はそれを利用して流行遅れの衣料のストックを売りさばき、みんなそういう衣料によって免疫性をえようと願っていたのである。

しかし、こういうすべての季節のしるしも、墓地がすっかり無住のものとなっていることを忘れさせることはできなかった。ほかの年々には、電車は菊の花のけだるい香で充満し、婦人たちの神前使節隊が近親者の葬られている場所に、その墓を花で飾ろうとしておもむいたものであった。それは、人々が故人に対して、長い月日にわたって孤立と忘却のなかに置かれていたことの、償いをしようと試みる日であった。しかしこの年は、誰ももう死者たちのことを考えようと

「僕がついててあげますよ」と、やさしく彼はいった。

相手は急に生気づいた様子で、一種の温かさのようなものがよみがえってきたように見える目を医師のほうへ向けた。それから、難儀そうに一語一語を句切りながら、哀しみの気持でいっているのか、そうでないのか、全然わからないいい方で——

「ありがとう」と、彼はいった。「しかし、修道士には友というものはありません。すべてを神にささげた身ですから」

彼は寝台の枕もとにかけてあった十字架像を取ってくれと頼み、それを手にすると、くるりと向うをむいてじっとそれに見入った。

病院でも、パヌルーはまったく口をきかなかった。その身に施されるあらゆる処置に対して、まるで物体のように、なすままに任せたが、しかしもう十字架像だけは放そうとしなかった。しかしながら、司祭の症状は依然として曖昧であった。疑いは相変らずリウーの心から消えないでいた。ペストのようでもあり、ペストでないようでもあった。それに、しばらく前から、ペストの様子にはおもしろ半分に診断をとまどいさせているようなところがあった。しかしパヌルーの場合には、この不確かさもたいした意味はなかったことを、その後の経過が示すに至ったのであった。

熱は上がった。咳はますますひどくかすれ、その日一日じゅう病人をさいなんだ。とうとう晩になって、神父は呼吸をふさいでいたその綿を、咳とともに吐き出した。それは真っ赤だった。熱の激動の最中にも、パヌルーはその無関心な目つきを保っていたが、翌朝、寝台から半ば身を

るし、なんにも予想はたてられないと考えていた。県庁は、もう長い間、公衆の心になんらかの鎮静をもたらしたいと願いながら、ペストのほうで一向その手がかりを与えてくれなかったわけで、ここで医師たちを集めて、この問題について具申を求めることを考えていたのであるが、そのとき、医師リシャールが、これまたペストのために、しかも病疫のまさしく頂上平坦線上において、奪い去られたのである。

行政当局は、たしかに強い感銘を与える、しかし要するになんの事実も証明するわけではないこの実例の前に、最初楽観説を迎えたと同じ無定見さで、悲観説にもどってしまった。カステルのほうは、血清をともかくできるだけ念入りに製作することにしただけであった。いずれにしても、もう、公共の場所で病院か検疫所に改造されていないものは一つもなく、そしてまだ県庁だけは手をつけられないでいるというのも、つまり会合を開く場所というものを、やはり残しておく必要があるからであった。しかし、総体的にいって、またこの時期においてペストが比較的安定した状態にあったという事実からも、リウーが、あらかじめ計画をたてておいた組織は、決してそれで追っつかなくなるほどには至らなかった。医師や助手たちは、根限りの努力を献げていたが、さらにそれ以上の努力を考える必要には迫られていなかった。彼らはこの超人的な仕事を、いいうるなら、ただ、規則正しく続けていけばよかったのである。すでに現われていた肺臓性感染の型は、今では、あたかも風が人々の胸のなかに火事を燃えださせ燃え盛らせているかのように、市内随所に蔓延していた。吐血しつづけながら、患者ははるかに急速にたおれていった。伝染性は、病疫のこの新たな形態とともに、今やさらに大なるものとなる危険があった。そ

するものはなかった。まさしくそのことは、もう考えすぎるほど考えていたのである。そしてもはや、死者たちのもとへ、あるかないかの愛惜と多分の哀愁をいだいて立ちもどるなどという場合ではなかった。死者たちはもう、年に一日だけ人々がそのかたわらに弁解に来るところの、うち捨てられた人々ではなかった。みんなが忘れたいと思っている闖入者であった。こんな次第で、死者祭の日も、この年はある意味でごまかされてしまった。コタールにいわせれば――タルーは彼がますます皮肉な言葉をろうするようになってきたことに気がついていたのであるが――つまり毎日が死者祭だったのである。

実際また、ペストの嬉々たる炎は、火葬場のなかで相変らずますます軽快に燃えていた。日々の推移という点では、死亡者の数は、実際のところ、別に増加しているわけではなかった。しかし、あたかもペストはその発作の最高頂にゆったりと腰を落着け、そしてその日々の殺戮に、律儀な官庁職員のような正確さと規則正しさとを示しはじめたように思われた。原則的には、そしてまたその方面の専門家筋の意見によれば、これはいい兆候であった。ペストの進行グラフは、不断の上昇経過と、さらにそれに続いた長い横ばい状態とによって、たとえば医師リシャールなどには、まったく心強いものと見えたのである。「良好な、まったく申し分のないグラフだ」と、彼はいっていた。彼は病疫が彼のいわゆる頂上平坦線に到達したものと見なしていた。今後はもう哀退するばかりなのだ。彼はその功績をカステルの新たな血清の力に帰していたが、事実、その血清は最近二、三の予期せぬ成功にぶつかっていた。カステル老人も、その意見にあえて反対はしなかったが、しかし、実際のところ、病疫の歴史にはしばしば予期せぬ再反転が記録されてい

た。

新聞は当然、何ごとがあろうとも楽観主義をという、つねづね教えられている禁令に従っていた。新聞紙上でみると、現在の事態の顕著な特色というべきものは、すなわち市民が示している「平静と沈着との感動すべき実例」であった。しかし、それ自身のなかに閉じこめられた一都市、何ごともそこでは秘密に保たれえない・都市においては、市当局によって示される「実例」などにだまされる者はなかった。そして、ここで問題となっている平静と沈着なるものについて正しい観念をうるためには、当局によって組織された、どこかの予防隔離所か、隔離収容所の一つに、はいってみるだけで十分であった。あいにく筆者は他の方面に狩りだされていて、それらの場所の様子を知らないでしまった。つまりそういうわけで、筆者はここにタルーの実見記を引用することしかできないのである。

タルーは実際その手帳に、ランベールとともに、市立競技場に設けられた収容所を訪れたときの記述を載せている。競技場はほとんど市の人口に位し、一方は電車の通っている街路に、一方は市の建っている丘のふもとまで広がる一帯の空地に面している。ふだんから高いコンクリートの塀で囲まれていたので、脱走を困難にするためには、四つの出入口に哨兵を配置しただけで十分であった。同様にまたその塀は、外部の連中が、予防隔離に服させられている不幸な人々に、好奇心からうるさい思いをさせることを防止していた。そのかわり、この人々は、日がな一日、姿の見えぬ電車の通る音を聞かされ、そして電車とともに通り過ぎるざわめきがひとしお大きくなることによって、事務室の出勤と退出の時刻が来たことを察するのである。彼らはこうして、

のじつ、専門家たちの意見は、この点に関してつねに相対立していたのである。それでもさらに安全を期するために、保健関係の人々は相変らず消毒ガーゼのマスクの下で呼吸しつづけていた。ともかく、一見したところでは、病疫は増大していそうであった。しかし、腺ペストの症例が減少していたので、秤は均衡を保っていたのである。

しかしながら、時とともに増大する食糧補給の困難の結果として、その他にも種々不安の的となる問題がありえた。投機がその間に介入してきて、通常の市場には欠乏している第一級の必需品などがまるで作り話みたいな値で売られていた。貧しい家庭はそこできわめて苦しい事情に陥っていたが、一方富裕な家庭は、ほとんど何ひとつ不自由することはなかった。ペストがその仕事ぶりに示した、実効ある公平さによって、市民の間に平等性が強化されそうなものであったのに、エゴイズムの正常な作用によって、逆に、人々の心には不公平の感情がますます尖鋭化されたのであった。もちろん、完全無欠な死の平等だけは残されていたが、しかしこの平等は誰も望む者はなかった。そんなわけで、飢えに苦しんでいた貧しい人々は、ひとしお深い郷愁をもって、生活の自由であり、パンも高くない、近在の町々や田舎のことを考えていた。自分たちに十分な食糧を給することができない以上は、当然退去することを許してくれるべきであるという――もとよりまるで道理に合わない――そんな感情が彼らにはあった。そのあげく、一つの合言葉が流布するに至り、それがときどき壁に書きつけられていたり、またあるときには知事の通りすがりに叫ばれたりした――「パンか、しからずんば空気を！」。この皮肉な文句は、ある種の示威に口火をつけ、それは直ちに抑圧されはしたものの、その重大性は何びとの目にも明らかであっ

こもうと試み、そしてそれがうまくいくと、「一対零！」といったりしていた。たばこがおしまいになったときには、その吸殻を前に吐きだし、落ちる途中をけとばそうとした。競技場の近くで、遊んでいた子供たちが、通りかかった一行のほうへボールをころがしてくると、ゴンザレスはわざわざ歩み寄りながら、正確にねらいをつけてそれをけ返してやった。

彼らはやっと競技場のなかへはいった。観覧席は人でいっぱいだった。しかし、フィールドは数百の赤いテントでおおわれ、それらのテントの内部には遠くから寝具類や荷物包みなどが見えていた。観覧席は、そのまま残されて、暑熱や雨天の日に収容者たちが身を避けることができるようになっていた。ただ、日没と同時にみんなテントに復帰しなければならなかった。観覧席の下には、新たに設けられたシャワー設備と、昔の選手たちの更衣室を改造した事務室や病室があった。大部分の収容者は観覧席に陣取っていた。別の連中はタッチラインのあたりをぶらぶらしていた。ある人々は自分のテントの入口にうずくまって、あらゆるものの上にぼんやりした視線をさまよわせていた。観覧席では、多くのものはぐったりすわりこんだまま、まるで何かを待っているようだった。

「みんな何をしてるんです、昼の間は？」と、タルーはランベールに尋ねた。

「何もしてませんよ」

ほとんどすべての者が、実際ただ茫然として手をこまねいていた。この広大な人間の集団は不思議なほどひっそりとしていた。

「最初のころはお互いに声が聞きとれないくらいでしたよ、このなかへはいると」と、ランベー

自分たちがそこから追放されている生活が、すぐ五、六メートル向うで相変らず続けられ、そしてコンクリートの塀は、互いに無縁な二つの世界――それぞれ別の遊星上にあったとしてもこれほど無縁ではありえないような二つの世界を隔てていることを知るのであった。

ある日曜日の午後を選んで、タルーとランベールとは競技場に向った。いっしょに例のフットボール選手のゴンザレスがついてきたが、これはランベールがまためぐり会って、競技場の見張りを交替で勤務することをとうとう承諾させたものであった。ランベールは彼を収容所の所長に紹介することになっていた。ゴンザレスはさっき落合ったとき、二人に向って、ペスト以前には、ちょうどこの時刻に自分は試合を始めるためにユニフォームに着替えていたものだといった。競技場が徴発されてしまった今では、そういうことももうありえないし、ゴンザレスはすっかり手持ぶさたの気持で、また実際そういう様子をしていた。それが一つの理由で、彼はこの見張りの仕事を、それも週末の期間だけ勤務するという条件で、引受けたのであった。空は半ば雲におおわれていて、ゴンザレスは鼻先を上げながら、雨模様でもなく暑くもないこういう天気が、いい試合をするにはいちばん具合がいいんだがと、残念そうに説明した。彼は、更衣室における塗布薬の香や、どよめく観覧席や、鹿子色の地面におどる色あざやかなユニフォームや、中休みのときのシトロンや、あるいはからからになったのどを数千のさわやかな針先で刺激するレモネードなど――それらの感じを彼なりに如実に描きだしてみせた。それに、タルーの書きとめているところでは、町はずれの、ひどくいたんだ街路を通っていく道中ずっと、ゴンザレスは石ころに出くわすたびにそいつをけとばすのをやめなかった。彼はそいつをまっすぐ下水の穴にけ

で、彼らのことを忘れてしまっている。出所させるというそのことばかり考えている結果、もう出所させる当人たちのことは考えていないのである。これもまた正常なことである。そして、結局最後のところで気がつくことは、何びとも、最悪の不幸のなかにおいてさえ、真実に何びとかのことを考えることなどはできないということである。なぜなら、真実に誰かのことを考えるとは、すなわち刻々に、何ものにも——家事の心配にも蠅の飛んでいるのにも、食事にも、かゆさにも——心を紛らされることなく、それを考えることだからである。ところが、蠅やかゆさというものはつねに存在する。それゆえに、人生は生きることが困難なのである。そして、この人々はそれをよく知っているのだ」

所長が彼らの来訪を聞いてもどってきて、オトン氏とかいう者が彼らに会いたいといっている旨を伝えた。所長はゴンザレスを自分の事務室に案内し、それから彼らを観覧席の一隅へ引っ張っていくと、ちょっと人から離れてすわっていたオトン氏が、立ち上がって彼らを迎えた。オトン氏は相変らずいつものとおりの服装をし、いつもと同じ堅いカラーをつけていた。ただ、タルーの目についたところでは、顳顬のところの生い茂った毛が以前よりずっとそそけだって、一方の靴紐がほどけていた。判事は疲れたような様子をしていて、それこそ一度も話相手の顔をまともに見ようとしなかった。彼は、彼らにお目にかかれてうれしいといい、リウーさんにいろいろしていただいたことについて、お礼の言葉を伝えてほしいといった。

こっちの二人は沈黙した。

「それでも、まあ」と、しばらくしてから判事はいった。「フィリップはそうひどく苦しみはしな

ルはいった。「ところが、日がたつにつれて、みんな次第にしゃべらなくなってきたんです」

覚え書に記されたところを信ずるならば、タルーには彼らの気持がわかり、当初の彼らの様子も目に浮べられたのであるが、テントのなかに積み重なり、蝿のうなりを聞いたり体をかいたりすることだけを仕事にしていた彼らは、快く聞いてくれる耳にさえ出会えば、自分たちの憤慨や恐怖をわめきたてていたのである。しかし、収容所が超満員になったとき以来、快く聞いてくれる耳はだんだん少なくなってきた。そこで彼らはもう、沈黙し、互いに警戒し合うよりほかには、なすすべがなくなってしまったのである。事実、そこには一種の警戒心のようなものが、灰色の、しかも光り輝いている空から、赤いテント施設の上に降り注いでいた。

たしかに、彼らにはみんな警戒の様子があった。ほかの人々から分離されたのであるからには、それだけの理由がないわけはないはずだし、そこで彼らは、めいめい自分のための理由を捜しつつ、かつ恐れている者たちという顔つきをしていた。タルーのながめた連中はどれもこれも空漠たる目つきをし、みんな、彼らの生活をなしていたものとのはなはだ全面的な分離に悩んでいる様子であった。そして、しょっちゅう死のことを考えてばかりはいられないので、彼らはなんにも考えていなかった。つまり休暇にはいっていたのである。「しかし最も悪いことは」と、タルーは書いている。「彼らが忘れられた人間であるということ、そして彼らみずからそれを知っているということである。彼らを知っている連中も、ほかのことを考えているので彼らのことは忘れてしまっているのであり、これは十分理解しうることである。彼らを愛している人々はどうかといえば、これもまた、彼らをそこから出すための奔走や計画に精根を尽さねばならぬの

「科学的ですね」と、タルーは所長にいった。

「そうです、科学的ですよ」と、相手は彼らの手を握りながら、満足そうにいった。

夕闇は間近かに迫り、そして空は晴れ渡っていた。柔らかくさわやかな光線が収容所を浸していた。夕暮れの静けさのなかで、匙と皿の音があらゆる方向からわき起っていた。蝙蝠が幾つかテントの上を飛びかい、そして突然姿を消してしまった。一台の電車が、塀の向う側で、転轍しながらきしっていった。

「判事も気の毒だな」と、入口を出ながら、タルーはつぶやいた。「なんとかしてやらなきゃなるまい、先生のために。だが、人を裁く人間を助けるなんて、どうすればいいんだい？」

そんなふうに、市中にはその他にも多くの収容所があったが、筆者は慎重を期するために、また直接の情報を欠くままに、それについて、これ以上はいいえないのである。しかし、筆者がいうことは、それらの収容所の存在や、そこから漂ってくる人間のにおいや、夕闇のなかの拡声器のとてつもなく大きな声や、塀の秘密めかしさや、これらの忌みきらわれる場所に対する恐れなどが、市民たちの精神の上に重くのしかかって、すべての者の混乱と落着かなさにさらに輪をかけていたということである。行政当局とのちょっとした事件やいざこざなどは、ふえるばかりであった。

十一月の終りになると、それでも、朝がたが非常に寒くなってきた。洪水のような雨がとうと

かったでしょうな」

彼が自分の息子の名前を口にするのを聞いたのはこれがはじめてであり、タルーは何ものかが変ったことを悟った。太陽は地平線のあたりに低くなり、そして二つの雲の間から、その光は横ざまに観覧席にさしこみながら、彼ら二人の顔を金色に染めていた。

「ええ」と、タルーはいった。「そうです。本当に、苦しんだりはなさらなかったですよ」

彼らが帰っていくと、判事は日の光のさしてくるほうをじっとながめつづけていた。

彼らはゴンザレスにさようならをいいに行ったが、ゴンザレスは見張りの交替表を検討しているところであった。フットボール選手は彼らの手を握りながら笑った。

「とにかく、更衣室にだけはめぐりあえたよ」と、彼はいった。「まあ、それだけでもありゃあな」

ちょっとしてから、所長がタルーとランベールとを送ってくれていると、そのとき巨大なざわめきが観覧席のなかに起った。続いてもっと良かった時代には試合の結果を知らせたり、チームを紹介したりするのに使われていた拡声器が、収容者は夕食が配給されるように各自のテントに帰るべきことを、鼻声まじりに宣した。ゆっくりと、人々は観覧席をはなれ、足を引きずりながらテントのなかへもどっていった。彼らが全部落着いてしまうと、駅で見かけるような、小さな電気仕掛けの車が二台、テントのあいだを通りながら、大きな鍋を運んでいった。人々は腕を伸ばし、二本の杓子が二つの鍋につっこまれ、それから引きだされると二つの鉢のなかに鎮座するのであった。車はまた動きだした。次のテントでまたそれが繰返された。

行ってみると、テラスはからっぽで、椅子が三つ備えつけてあった。一方の側は、見渡すかぎりテラスまたテラスばかりで、最後にそのうしろに暗い岩だらけの塊が横たわっているのは、第一の丘であることがわかった。もう一方の側は、幾つかの町並と見えぬ港とを越えて、視線は遠く、空と海とが定かならぬ脈動のなかに溶け合っている水平線の上に没していた。あそこが断崖だとわかっているその向うのあたりに、光源の見えない一つの光が規則的に明滅していた——瀕戸の燈台が、春以来、ほかの港へ航路を転じる船舶のために、相変らず回転しつづけていたのである。風に吹き払われ、みがかれた空には、清らかな星が輝き、そして燈台のはるかなひらめきが、ときおり、束の間の灰色をそれに混じえていた。微風が香味料と石の香を運んできた。それこそ完全な静けさであった。

「いい気持だな」と、腰を下ろしながら、リウーはいった。「まるで、なんだね、ペストもここまでは上がってこなかったみたいだな」

タルーは彼に背を向けて、海をながめていた。

「うん」と、ちょっとたってからタルーはいった。「いい気持だね」

彼も医師のそばへ来て腰を下ろし、じいっとその顔を見つめた。三度、燈光が空に明滅した。どこかで皿のかち合う音が、深い街路の底から彼らのところまで上ってきた。家のなかで戸がきしった。

「ところで、リウー」と、きわめて自然な調子でタルーはいった。「君はこれまで、僕がどういう人間か知りたいと思ったことはないのかい？　友情はもってくれてるんだね、僕に対して？」

うと舗石を洗い、空を清めて、そのあとにはぎらぎら光る街路の上に雲一つない空が残された。弱々しい太陽が、毎朝、町の上に、きらきらと、しかも冷えきった光を注いだ。夕方近くなると、反対に、空気はまたなま温かくなるのであった。ちょうどそういうときを選んで、タルーは医師リウーに対して少しく自分の正体を明かそうとしたのである。

ある日、十時ごろ、長い、くたくたになるような一日のあとで、タルーはリウーが例の喘息病みの爺さんのところへ晩の往診に出かけるのについていった。空はその古びた一画の家々の上に、ほのかに輝いていた。かすかな風が、暗い辻々を渡って音もなく吹いていた。静かな街頭からやって来たところで、二人は、いきなり爺さんのおしゃべりにとっつかまってしまった。爺さんは二人に教えるのであった――どうもしっくりいってないところがある、うまい汁を吸うのはいつもおんなじ連中だし、そんなことを続けていればいつかは運の尽きってことにもなるし、そこでたぶん――と、爺さんはここでもみ手をした――一騒動あるだろう……。リウーが診てやっている間も、爺さんはいろいろな出来事に注釈を加えるのをやめなかった。

頭上で人の歩く音がしていた。女房の婆さんは、タルーの興味をひかれたような様子に気がつくと、近所の女たちがテラスに出ているのだと説明して聞かせた。同時に聞かされたところでは、その上からはなかなかいいながめで、また、家々のテラスはよく一方の側で続いていることがあるので、この界隈の女房たちは自分の家から出ないで訪ね合うことができる、ということであった。

「そうでさ」と、爺さんはいった。「まあ、上がってみなさい。あすこへ出ると、いい風ですぜ」

「若いころ、僕は、自分は清浄潔白だという考えをいだいて暮していた。つまり、全然、考えなどというものをいだいてなかったわけだ。僕は煩悶趣味はないほうだし、世間への第一歩もまず順調に踏みだした。何もかも調子がよくって、知能の点でも困ることはなかったし、ご婦人連の気受けも、しごくよかったし、たまに不安など感じることがあっても、最初心に浮んできたときとおんなじくらい他愛なく通り過ぎてしまうありさまだった。ある日、僕は反省しはじめた。さて、それからなんだが……

「いっとかなきゃならないが、僕は君みたいに貧乏じゃあなかった。親爺は次席検事をやっていたし、これはまあちょっとした地位だ。もっとも、親爺はそんなふうには見えなかった。生れつき気のいい人間だったんでね。おふくろは素直な控え目な女で、僕はいつだって変りなく愛していたんだが、まあ、そんな話はやめとこう。親爺のほうは、愛情をもって僕のことを考えてくれていたし、僕を理解しようと努めていたとさえ思う。外ではいろいろ艶事もあったらしく、今ではそれは確かなことだと思うんだが、しかもまた、それを憤慨するなどという気持も別にない。親爺はその場合にも、当然期待されていいようなふるまいをしていただけで、誰を踏みつけにするようなこともしてなかった。簡単にいえば、つまり、そう風変りな人間ではなかったわけで、それも死んでしまった今では、生涯聖者のような生き方ではなかったとしても、一方また悪人でもなかったということが、僕にははっきりわかるんだ。親爺は中庸を守っていた——それだけのことだ。そうして、こういうタイプの人間に対しては、分別のある愛情が感じられるものだ。つまり、そのまま続けていかせる愛情だ。

「うん」と、医師は答えた。「友情をもっているよ、君に対しては。だが、これまではお互いに暇がなかったからね」

「そうか、それで安心した。どうだろう、今この時間を友情の時間ということにしてもらえるかい？」

すべての答えのかわりに、リウーは彼にほほえんでみせた。

「それじゃ、まあ、聞いてくれ……」

二つ三つ向うの通りで、一台の自動車がぬれた舗石の上で長々とスリップをした様子だった。その自動車が遠ざかったと思うと、それに続いて、遠くから聞えてくる、入りまじった叫び声が、またも静寂を破った。それからまた、その静寂は、空と星とのあらゆる重量をもって、ふたたび二人の上に下りてきた。タルーは立ち上がってテラスの手摺りの上に腰掛け、相変らず椅子のくぼみにうずくまっているリウーと正面に向い合った。その姿からは、空にくっきりと浮んだたくましい体の輪郭が見えるだけであった。彼は長い間話したが、以下はその話をほぼ原型どおりにしるしてみたものである——

「話を簡単にするためにまずいっておくがね、僕はこの町や今度の疫病に出くわすずっと前から、すでにペストに苦しめられていたんだ。というのは、まあ、つまり、僕も、世間みんなとおんなじようだということなんだがね。しかし世間には、そういうことを知らない連中もあれば、そういう状態のなかで心地よく感じている連中もあるし、また、そういうことを知って、できれば、それから抜け出したいと思っている者もある。僕は、いつも抜け出したいと思ったのだった。

僕が十七になったときだったが、親爺が僕に自分の論告を聞きに来るようにいった。事件は、重罪裁判所で開廷されるある重大な事件で、きっと親爺は、自分がそのときいちばんりっぱに見えるものと思ったのだろう。それからまた、若い人間の想像力に訴えやすいその儀式張ったところが、親爺自身も選んだ道に僕を進ませる刺激になることも、当てにしていたのだと思う。僕は行くことにした。というのは、それは親爺を喜ばせることだったし、それからまた、親爺が僕たちの間で演じているのと違う役割を演ずる姿を見、声を聞いてみたい気がしたからだ。それ以上のことはなんにも考えていなかった。法廷で行われることは、七月十四日の閲兵式や、何かの授賞式とおんなじに、自然な不可欠なことのように、僕にはいつも思われていた。それについてはきわめて抽象的な観念をもっていたし、別にこだわりを感じるようなことはなかった。

「ところが、この日のことについて、僕の心にはたった一つのイメージが残っただけだ。それはその罪人のイメージだった。僕はその男が実際に有罪だったと信じているし、それがどんな罪だったかはたいして問題じゃない。しかし、その小柄な、年は三十ぐらいの、貧弱な赤毛の男は、何もかも認めようとすっかり決心している様子で、自分のしたことと、これから自分に対してされようとしていることとに、すっかり心からおびえている様子で、しばらくすると、僕の目はただもうその男にだけひきつけられてしまった。男はまるであんまり強い光線におじけたった梟という様子だった。ネクタイの結び目もカラーの折り口にきちんと合っていなかった。一方の手、右手の爪ばかりかじっていた……。要するに、くどくいわないでもわかっただろうが、この男は生きていたのだ。

「親爺はそれでも一つだけ特別なところをもっていた——あの大きな《シェクス旅行案内》（訳注 フランスで最も詳細な鉄道旅行案内書）が、親爺の枕頭の書だったのだ。別に、よく旅行に出かけたというわけじゃない。休暇になると、ちょっとした地所をもってるブルターニュに出かけるぐらいのものだった。しかし、親爺はちゃんと正確に教えてくれることができるんだ——パリ＝ベルリン線の出発と到着の時刻とか、リヨンからワルシャワに行くのにはどういう乗換え時間にすればいいかとか、こっちのいうままの首府と首府との間の正確なキロ数とか。君は、ブリアンソン（訳注 フランスのイタリア国境に近い山中）の要害からシャモニ（訳注 フランスのスイス国境に近い旅行上の中心地。モンブランの登山口および冬季スキー場として有名）へ行くのには、どう行ったらいいかいえるかい？　駅長だってこれにはとまどっちまうだろう。親爺はとまどったりしなかったからね。そうして、ほとんど毎晩のようにそいつをやってみながら、その点に関する自分の知識を豊富にしようとしていたが、まあ、どっちかといえば、それを得意に思ってたようだ。こいつは僕にもとてもおもしろくって、よく質問を出してみては、親爺の答えを《シェクス》で調べてみて、それが間違っていないのを確かめてうれしがったものだ。このちょっとした遊びは僕たち二人をお互いにずいぶん深く結びつけた。なにしろ、僕は親爺のために聞き手になってやってたし、それも心からそうしていることが親爺にはうれしかったわけだ。一方、僕のほうは、鉄道のことに関するこんな優越性だって、結構ほかの優越性に匹敵すると思っていた。

「しかし、どうも話に引きずられちまって、これじゃ、この実直な人物をあんまり重要に思わせすぎることになりそうだ。というのが、結局のところ、この人物は僕の決心に対して間接的な影響を及ぼしたにすぎないんだ。せいぜい一つの機会を提供してくれたぐらいのものだ。ちょうど

べきものだ。

「その日以来、僕にはもう《シェクス旅行案内》もいまわしく、うとましい目でしか見られなくなってしまった。その日以来、僕はぞっとするような思いで、法律や死刑宣告や刑の執行に注意を払うようになったが、やがてそうとわかって頭がくらくらするような気がしたのは、親爺はもう何度となくその殺人に立ち会っていたはずで、それはまさに親爺が非常に早く起きる日なのだ、ということだった。実際親爺はそういうときには目ざましをかけていた。僕はそのことをおふくろに話す勇気はなかったが、そうなると今までよりよく観察するようになったし、この夫婦の間にはもうなんにもなく、おふくろはあきらめの生活を送っていることがわかった。その点を酌量して、僕はおふくろを許すことができた、と、当時は自分でそういってたものだ。その後、僕にはよくわかったんだが、おふくろには許されなきゃならんようなことはなんにもなかったのだ、なにしろ生れてからずっと結婚のときまで貧乏していて、貧乏のおかげであきらめということを教えられた女だからね。

「君はおそらく、僕がそこで直ちに家を出たということを期待しているだろうね。そうじゃない。僕はまだ何カ月も、ほとんど一年も踏みとどまっていた。しかし、僕は心が病気になってしまっていた。ある晩、親爺は、早く起きなきゃならないというので目ざましを持ってこさせた。僕はその晩眠らなかった。翌日、親爺が帰ってきたときには、僕はもう家を出ていた。さっそくいっといたほうがいいだろうが、親爺は僕を捜させたし、僕は親爺に会いに行って、もし無理に帰らせようとしたら自殺するからと、冷静に、なんの説明も加えずにいったわけだ。親爺は結局

「しかし僕のほうは、そのとき突然それに気がついたわけだった。それまでは、ただ《容疑者》という便利な概念を通してしか、彼のことを考えていなかったときだからね。そのときも親爺のことを忘れていたとはいえないが、しかし何かに腹をしめつけられるようで、その刑事被告人に注いでいる注意以外の注意は、すっかり奪い去られていた。僕はほとんどなんにも耳に入らなかった。ただ、みんながこの生きている男を殺そうとしていることを感じると、大波のようにすさまじい本能が、僕を一種の頑強な盲目さで、その男のかたわらに押しやった。僕がやっと本当に我に返ったのは、親爺の論告が始まったときだった。

「赤い法服ですっかり変って、好人物でも愛想のいい人間でもなくなった親爺は、大仰な言葉を口にうようよさせていて、そいつがひっきりなしに、まるで蛇のようにその口からとびだしてきた。そうして僕にわかったことは、親爺が社会の名においてこの男の死を要求しているということ、この男の首を切れとさえ要求しているということだった。もっとも、親爺はただこういったわけだった――《この首は落ちるべきであります》。しかし、結局、その違いはたいしたことじゃなかった。しかもそれは実際同じことになるわけだ、なにしろ、親爺はその首を手に入れたのだから。ただ、その場合には仕事をするのは親爺じゃないというだけだ。ところで僕のほうは、その後、特にこの事件だけを終結までずっと傍聴してたんだが、僕はその不幸な男に対して、親爺などには全然感じたこともなかったような、それこそ目のくらむような身近かさを感じた。そのくせ、親爺のほうは慣例にしたがって、いわゆる最期のときというやつにも立ち会ったはずなんだがね。最期のときなんて、ていのいい呼び方だが、あれこそまさに最も卑劣な殺人と名づける

く愛しつづけた連中と行動をともにした。僕はその仲間に長い間とどまっていたし、ヨーロッパの国々で、僕がその闘争に参加しなかった国はないくらいだ。まあ、そんな話はどうでもいい。「もちろん、われわれだって、必要な場合があれば、処刑を宣告していたことは、僕も知っていた。しかし、こういう幾つかの死は、もう誰も殺されることのない世界をもたらすために必要なのだと、僕は聞かされていた。これはある意味ではまあ真実だし、それに結局僕は、この種の真実をあくまで信じ通すことのできない性なのかもしれない。確かなことは、僕が躊躇していたということだ。しかし僕は例の梟のことを考えていたし、そこでそれまでのことも、そのまま続けられたわけだった。そのあげく、とうとうある日、僕は一つの処刑を見たのだ（それはハンガリアでのことだった）。そうして、かつて少年の僕を襲ったと同じ眩暈に襲われて、大人になった僕の目も真っ暗にかすんでしまった。

「君は人間を銃殺するところを見たことはないだろうね？　いや、ないにきまっている。こいつは一般に招待に基づいて行われるし、見物はあらかじめ選んであるのだ。その結果として、君たちの知識は版画や書物の域にとどまるということになる。目隠し、処刑柱、それから遠くに幾人かの兵隊……。ところが、どうして、そんなもんじゃない！　君は知ってるかい——銃殺班は、それどころか、処刑者から一メートル五〇のところに並ぶんだぜ。処刑者が二歩前に出たら、銃口が胸にぶっつかるくらいなんだぜ。そんな近距離から、銃手たちは心臓部めがけて射撃を集中するので、それがみんないっしょになって、しかも大きな弾丸だし、それこそ握り拳がはいるぐらいの穴がそこにできるんだぜ。まったく、君はそんなことを知りゃしない。そういう細かい点

承知した。なにしろ、生れつき、どっちかといえばおとなしいほうだったからね。そうして、自活したいなどと思うことの愚かしさについてお説教をして聞かせ（つまりそんなふうに親爺は僕の行動を解釈していたわけで、僕もその誤解を解こうとはしなかったのだ）、いろいろと注意を与えながら、心底から涙が出そうなのを、じっと抑えつけていた。その後、しかしだいぶ長い間たってから、僕は規則的におふくろに会いに帰るようになって、そのときに親爺とも顔を合わせることがあった。そういうつながりだけで、親爺には十分足りていたのだと思う。僕としては、別に親爺に対して怨恨をいだいていたわけではなく、ただ少しばかり心に悲しみをもっていただけだ。親爺が死ぬと、僕はおふくろを自分のところへ引きとったし、今でも僕のそばにいたはずなんだが、そのおふくろもやがて死んでしまった。

「ここまで発端のことを長々としゃべりつづけたが、それはつまりこいつが、実際、すべてのことの発端になったからだ。これからはもっと手っ取り早く話を進めるとしよう。僕は、楽な暮しからとびだすと、十八で貧乏を知った。自活するためにそれこそいろんな仕事をやった。これもそううまくいかないこともなかった。しかし、僕の関心の的は死刑宣告というやつだった。僕は例の赤毛の梟とはっきりきまりをつけたかったのだ。その結果、僕は世間でよくいう政治運動をやるようになった。ペスト患者になりたくなかった――それだけのことなんだ。僕は、自分の生きている社会は死刑宣告という基礎の上に成り立っていると信じ、これと戦うことによって殺人と闘うことができると信じた。僕はそう信じたし、ほかの連中も僕にそういったし、また結局のところ、それは大部分真実だったのだ。それで僕は、ほかの連中――僕が愛し、しかも変ることな

不可抗力という理由と、必要性ということを容認するとしたら、大物どものそれも否認することができなくなる、といった。すると、彼らはさらに考慮を促して、赤い法服だけに刑の宣告を独占させておくなんて、それこそやつらを正しいと認めるようなものだ、というのだ。しかし、僕はそこで考えた——一度譲歩してしまったら、もう途中で立ち止る理由はないのだ、と。どうやら歴史は僕の考えを裏書きしたようだ。現在では、まるで殺し合いごっこだ。彼らはみんな殺戮の熱に浮かされている。そうして、彼らにはそれ以外にやりようがないのだ。

「僕の問題は、いずれにしても、理屈をこねることじゃなかった。それはあの赤毛の梟だった。あのいやらしい事件——毒をもったいやらしい口が、鎖に縛られてる男に向って、お前は死ぬのだと宣告し、そしてその男が幾夜も幾夜も苦悶の夜を過しながら、はっきり正気のまま殺害されるのを待ちつづけたあげく、実際そのとおりに死ぬようにすべての手順を整えた——あのいやらしい事件だったのだ。僕の問題というのは、つまりあの胸にあいた穴だったのだ。そうして、僕はこう考えた——さしあたり、少なくとも僕に関するかぎりは、僕はこのいまわしい虐殺にそれこそたった一つの——いいかい、たった一つのだよ——根拠でも与えるようなことは絶対に拒否しようと。そうなんだ。僕はこの頑強な盲目的態度を選んだのだ、もっとはっきり見きわめがつくまでのこととしてね。

「それ以来、僕の考えは変らなかった。それからずいぶん長い間、僕は恥ずかしく思っていたものだ。たといきわめて間接的であったにしろ、また善意の意図からにせよ、今度は自分が殺害者の側にまわっていたということが、死ぬほど恥ずかしかった。時がたつにつれて、僕は単純にそ

は誰も話そうとしないことだからだ。人々の安眠というやつは、ペスト患者にとっての生命以上に神聖なものなのだ。善良な人々の眠りを妨げてはならない。そんなことはよっぽど悪趣味でなければできないし、趣味のよさというものは物事を強調しないことにある――みんな誰でもそれを心得ているのだ。しかし僕は、そのとき以来、よく眠れたことがない。悪趣味だろうが、なんだろうが、いやな後味が口に残っていて、僕はいつまでも強調することをやめなかった。つまりそれを考えることをやめなかったのだ。

「そのとき僕は、その長い年月の間――しかも全精神をあげてまさにペストそのものと闘っていると信じていた間にも、少なくとも自分は、ついにペスト患者でなくなったことはなかったのだ、ということを悟った。僕は、自分が何千という人間の死に間接に同意していたということ、不可避的にそういう死を引起すものであった行為や原理を善と認めることによって、その死を挑発さえもしていたということを知った。ほかの連中は、そんなことに煩わされていない様子だったし、そうでないまでも、とにかく自分のほうがらは決してそんなことを話しだそうとしなかった。僕のほうは、のどがつかえているような気持だった。彼らとともにありながら、しかも一人ぼっちだった。僕が自分の疑念を表明したりすることがあると、彼らは僕に向って、いま何が闘われつつあるかを考えてみる必要があるという。そうしてときどきはずいぶん感銘を与えるような理由をもちだして、僕がどうしてものみ下すに至らなかったものを鵜呑みにさせようとした。しかし僕はそれに答えて、あの大物のペスト患者たち、つまり赤い法服を着けている連中も、彼らにもまたその場合のりっぱな理由があるわけだし、もし僕が小物のペスト患者たちのもちだす

りなしに自分で警戒していなければ、ちょっとうっかりした瞬間に、ほかのものの顔に息を吹きかけて、病毒をくっつけちまうようなことになる。自然なものというのは、病菌なのだ。そのほかのもの——健康とか無傷とか、なんなら清浄といってもいいが、そういうものは意志の結果で、しかもその意志は決してゆるめてはならないのだ。りっぱな人間、つまりほとんど誰にも病毒を感染させない人間とは、できるだけ気をゆるめない人間のことだ。しかも、そのためには、それこそよっぽどの意志と緊張をもって、決して気をゆるめないようにしていなければならんのだ。実際、リウー、ずいぶん疲れることだよ、ペスト患者であるということは。しかし、ペスト患者になるまいとすることは、まだもっと疲れることだ。つまりそのためなんだ、誰も彼も疲れた様子をしているのは。なにしろ、こんにちでは誰も彼も多少ペスト患者になっているのだから。しかしまたそのために、ペスト患者でなくなろうと欲する若干の人々は、死以外にはもう何ものも解放してくれないような極度の疲労を味わうのだ。

「さしあたって、僕は、自分がこの世界そのものに対してなんの価値もない人間になってしまったこと、僕が人を殺すことを断念した瞬間から、決定的な追放に処せられた身となったこと、を知っている。歴史を作るのはほかの連中なのだ。僕はまた、自分が、そういうほかの連中を、あからさまに批判できないことも知っている。理性的な殺人者というものには、そうなれる一つの特質があって、それが僕には欠けているのだ。だから、それはなにも優越性じゃない。しかし、今では、僕は本来の自分になることに甘んじているし、謙譲ということも学んだ。ただ、僕がいっているのは、この地上には天災と犠牲者というものがあるということ、そうして、できうるか

う気がついたのだが、ほかの連中よりりっぱな人々でさえ、こんにちでは人を殺したり、あるいは殺させておいたりしないではいられないし、それというのが、そいつは彼らの生きている論理のなかに含まれていることだからで、われわれは人を死なせる恐れなしにはこの世で身ぶり一つもなしえないのだ。まったく、僕は恥ずかしく思いつづけていたし、僕ははっきりそれを知った——われわれはみんなペストの中にいるのだ、と。そこで僕は心の平和を失ってしまった。僕は現在もまだそれを捜し求めながら、すべての人々を理解しよう、誰に対しても不倶戴天の敵にはなるまいと努めているのだ。ただ、僕はこういうことだけを知っている——今後はもうペスト患者にならないように、なすべきことをなさねばならぬのだ。それだけがただ一つ、心の平和を、あるいはそれがえられなければ恥ずかしからぬ死を、期待させてくれるものなのだ。これこそ人人をいたわることができるもの、彼らを救いえないまでも、ともかくできるだけ危害を加えないようにして、時には多少いいことさえしてやれるものなのだ。そうして、そういう理由で、僕は、直接にしろ間接にしろ、いい理由からにしろ悪い理由からにしろ、人を死なせたり、死なせることを正当化したりする、いっさいのものを拒否しようと決心したのだ。

「同じ理由でまた、この疫病からも、僕はなんにもあらためて知るところはないし、あるとすれば、君たちのそばで、そいつと戦わねばならぬということだけだ。僕は確実な知識によって知っているんだが（そうなんだ、リウー、僕は人生についてすべてを知り尽している、それは君の目にも明らかだろう）、誰でもめいめい自分のうちにペストをもっているんだ。なぜかといえば、誰一人、まったくこの世に誰一人、その病毒を免れているものはないからだ。そうして、ひっき

ちょっと沈黙があった後、リウーは少し身を起し、そして心の平和に到達するためにとるべき道について、タルーには何かはっきりした考えがあるか、と尋ねた。

「あるね。共感ということだ」

救急車のベルが二度、遠くのほうで鳴り響いた。さっきははっきりしなかった叫び声が、市の境界のほう、岩だらけの丘のあたりに凝集した。同時に、何か発砲の音のようなものが聞えた。それから、また静寂に返った。リウーは燈台のまたたきを二回数えた。微風は強さを増したように思われ、それといっしょに、海のほうから吹き送られた風が潮の香を運んできた。今ではは っきりと、断崖に打寄せる波のかそかな息づきが聞えていた。

「結局」と、淡々たる調子で、タルーはいった。「僕が心をひかれるのは、どうすれば聖者になれるかという問題だ」

「だって、君は神を信じてないんだろう」

「だからさ。人は神によらずして聖者になりうるか――これが、こんにち僕の知っている唯一の具体的な問題だ」

突然、叫びの聞えていたあたりから激しい閃光がほとばしり、そして風の流れに乗って不明瞭な騒ぎ声が二人のところまで流れてきた。閃光はすぐ暗くなり、そして遠くテラスの続いているはずれのあたりに、ちょっと赤っぽいものが残っているだけだった。風がちょっと途絶えたとき、はっきりと人々の叫び声が聞え、それから射撃の音と群衆の騒ぐ声が聞えた。タルーは立ち上がって、耳をすました。もうなんにも聞えなかった。

ぎり天災に与することを拒否しなければならぬということだ。これは君にはあるいは少々単純な考えのように思われるかもしれないが、はたして単純な考えかどうか、とにかく僕は、これが真実であることを知っている。僕はずいぶんいろんな議論を聞かされたもので、それが危うく僕の頭を狂わせかけたこともあれば、ほかの連中の頭は結構狂わせられて、殺人に同意させられてしまっているくらいだし、おかげで、人間のあらゆる不幸は、彼らが明瞭な言葉を話さないところから来るのだということを、僕は悟った。そこで僕は、間違いのない道をとるように、明瞭に話し、明瞭に行動することにきめた。だから、僕は、天災と犠牲者というものがあるというのだし、それ以上はなんにもいわないのだ。万一、そういいながら、自分自身が天災になるようなことがあったとしても、少なくとも僕は自分でそれに同意してはいない。つまり、罪なき殺害者たらんことを努めているのだ。どうだい、たいした野心でもないだろう。

「もちろん、第三の範疇――つまり、本当の医者という範疇が、当然あっていいだろうが、しかし事実として、そういうのにはそう多くは出くわさないし、まず困難なことというものだろう。まあ、そういうわけで、僕は、災害を限定するように、あらゆる場合に犠牲者の側に立つことにきめたのだ。彼らのなかにいれば、僕はともかく捜し求めることはできるわけだ――どうすれば第三の範疇に、つまり心の平和に到達できるかということをね」

語り終ると、タルーは片足をぶらぶらさせながら、足先でテラスの床をそっとたたいていた。

んの役にたつんだい？」

「よかろう」と、リウーはいった。「さあ、出かけよう」

それから間もなく、自動車は港の柵のそばに止った。月が出ていた。乳色の空はいたるところに淡い影を投射していた。二人の背後には市が段状に連なり、そちらから流れてくる熱っぽくにごった息吹きが、彼らを海岸のほうへ駆りたてた。二人の番兵に通行証を見せると、相手はかなりゆっくりとそれを調べた。二人はそこを通り抜け、樽をいちめんに積みあげた平らな場所を通って、酒と魚のにおいのなかを、突堤のほうへ向った。もうすぐそこへ行き着こうというとき、ヨードと海藻の香が海の近いことを知らせた。次いで、海の音が聞えてきた。

海は突堤の大きな堆積の足もとで静かに音をたてていたが、やがて二人が突堤を登っていくと、目の前に、さながらビロードのような厚みのある、獣のようにしなやかに滑らかな姿を現わした。二人は沖のほうへ向いた岩の上に腰を下ろした。水は膨れ上がっては、またゆるやかに下降していった。この静かな海の息づきが、水面に油のような反射を明滅させていた。彼らの前には夜の闇が果てしなく広がっていた。リウーは、指の下にあばたの岩肌を感じながら、異様な幸福感に満たされていた。タルーのほうを向いてみると、友の静かに重々しい顔つきにも、その同じ幸福感――何ものも、例の殺人さえも忘れていない、幸福感が感じとられた。

二人は服をぬいだ。リウーが先にとびこんだ。最初冷たかった水は、ふたたび浮き上がったときにはなま温かいような気がした。二かき三かきすると、海はこの晩なま温かく、大地から長い幾月かの間蓄積された熱を吸い取っている秋の海のなま温かさであることがわかった。彼は規則

「また、門でもみ合ったんだな」

「もう終ったらしい」と、リウーはいった。

タルーはつぶやくように、それは決して終ったわけではなく、まだまだ犠牲者は出るだろう、なにしろそういう筋道になっているのだから、といった。

「あるいはね」と、リウーは答えた。「しかし、とにかくね、僕は自分で敗北者のほうにずっと連帯感を感じるんだ、聖者なんていうものよりも。僕にはどうもヒロイズムや聖者の徳などというものを望む気持はないと思う。僕が心をひかれるのは、人間であるということだ」

「そうさ、僕たちは同じものを求めているんだ。しかし、僕のほうが野心は小さいね」

リウーはタルーが冗談をいっているのだと思って、その顔をながめた。ところが空から来るおぼろな光のなかで、見るとその顔は悲しげでまじめであった。風がまた起り、リウーはそれを肌になま温かく感じた。タルーは体を揺すぶった――

「ひとつ、どうだ」と、彼はいった。「友情の記念に、いいことをしようか？」

「ああ、なんでも、君の好きなことをやろう」

「海水浴をやるのさ。未来の聖者にしたって、こいつは恥ずかしくない楽しみだ」

リウーはほほえんだ。

「通行証があれば、突堤の上まで行けるわけだ。せんじつめてみれば、あんまり気のきかない話だからね、ペストのなかでばかり暮してるなんて。もちろん、人間は犠牲者たちのために戦わなきゃならんさ。しかし、それ以外の面でなんにも愛さなくなったら、戦ってることがいったいな

いかにも、ふたたびはじめねばならなかったし、ペストは誰のことも、そう長くは忘れていなかった。十二月の一月じゅう、ペストは市民たちの胸のなかに燃え盛り、竈に火を点じ、手をこまねいた亡霊を収容所に満たし、要するに、停止することなく、その根気のいい急調子の足どりで進行していった。当局は寒冷な日々が、この進行を停止させることを期待していたが、しかもペストは季節の初めごろのきびしい気候を、一向ひるむ様子もなく、くぐり抜けていった。またさらに待たねばならなかった。しかし、人間は、あんまり待っていると、もう待たなくなるものであるし、全市中のものはまったく未来というもののない生活をしていたのである。

リウーの場合はどうかといえば、彼に与えられた平和と友情のはかないひとときも、それっきり後を引くことはなかった。またもう一つ病院が開設されたので、リウーはもう患者たちとしか差向いになるときがなくなってしまった。しかしながら、彼が気がついたのは、病疫のこの段階において、ペストがますます肺ペストの形態をとってきたのに対して、患者たちも、ある程度、医者の手助けをしてくれるように思われることであった。当初のころのような虚脱状態や狂乱に陥ってしまうことはなくなり、彼らは自分たちの利益ということについて今までより正しい観念ができた様子で、自分自身のために最良の方法でありうるようなことを、自分たちのほうから要求するようになった。たえず飲みものを要求し、みんな温かくしていたがった。リウーにとって、疲労に変りはなかったが、それでも、そういう場合には、彼も前ほど一人ぼっちの気がしなかった。

十二月の末ごろ、リウーは、まだ例の収容所にいた予審判事のオトン氏から一通の手紙を受取

正しく泳いでいった。水を打つ足のあとには泡立つ白波が残り、水は腕に沿ってすべっては両足にへばりついた。重く響いた水音が、タルーのとびこんだことを知らせた。リウーは仰向けになり、いちめん月と星影ばかりの空にさかさまに相対して、じっと身を動かさずにいた。彼はゆっくりと息を吸った。次いで、次第にますます明瞭に、夜の静寂と寂寥のなかで異様にはっきりした、水を打つ音を聞きとった。タルーが近づいてき、やがてその息づかいまで聞えるようになった。リウーは向き直り、友と同じ線に並び、同じリズムで泳ぎだした。タルーは彼よりも力強く進んでいき、彼は調子を早めねばならなかった。何分かの間、同じ調子で、同じ強さで、ただ二人、世間から遠く離れ、市とペストからついに解放されて、彼らは進んでいった。リウーがまず疲れるのをやめ、そして二人はゆっくりと引返していった。ただ、途中でちょっと氷のように冷たい水流のなかにはいったときだけは、互いになんにもいわず、二人とも、この海の不意打ちに追いたてられて、その動作を早めた。

ふたたび服を着てしまうと、二人は一言も発することなく帰途についた。しかし、二人は同じような気持をいだいていたし、この夜の思い出は二人にとって快い思い出であった。遠くからペストの哨兵の姿を認めたとき、リウーは、タルーもまた彼と同様に、こう心につぶやいていることを知っていた――病疫も今しがたは彼らを忘れていたし、それはいいことだった、そして今やふたたびはじめねばならぬと。

「まあ、とにかく、そうすれば私にも仕事ができるわけです。それに、愚かなことをいうようですが、あの子からも、そう離れちまわないような気がするでしょうし」

リウーはその顔をながめた。このいかつい平板な目に突然優しさが宿るなどということは、ありえないことだった。しかし、その目はかき曇り、いつもの金属のような清澄さを失っていた。

「そりゃもうおっしゃるとおりでしょうね」とリウーはいった。「さっそく手続きをしてみましょう、そういうご希望でしたら」

リウーは実際にその手続きをとったし、ペストに襲われた町の生活は、クリスマスのときまで相も変らぬ日々が続いた。タルーは相変らずその効果的な平静さをいたるところに持ち歩いていた。ランベールはリウーに、例の二人の少年衛兵のおかげで、女房とこっそり文通するための連絡ルートができたことを打明けた。彼はときおり間をおいては手紙を受取っていた。彼はリウーにもそのルートを利用するように勧め、リウーはそれを承諾した。リウーは長い幾月以来、はじめて手紙を書いたが、書くのにおそろしく骨が折れた。ある言葉づかいなど、忘れてしまっているものがあったのである。手紙は発送された。返事はなかなか来なかった。コタールはコタールでますます景気がよく、例のささやかな投機によって財産をふやしていた。ところでグランの場合は、この祝祭の季節がどうも思わしくないものになったのである。

この年のクリスマスは、福音の祭りというよりも、むしろ冥府の祭りであった。空っぽで燈火のない店、ショーウィンドーに飾られた模造のチョコレートあるいは空の箱、暗い顔つきの人々を乗せた電車など、何ひとつ過去のクリスマスを思わせるものはなかった。かつては富める者も

ったが、それには、オトン氏の隔離期間は過ぎたこと、当局が彼の入所の日付を確認していないこと、彼がまだ収容所にとどめられているのは、確実に、間違いによるものであることなどが述べられていた。しばらく前に出所していた夫人が、県庁に抗議を申込みに行ったのであったが、ろくに相手にされず、絶対に間違いなどはないといわれたのであった。リウーはランベールに交渉に行ってもらったが、すると、二、三日してオトン氏が訪ねてきた。事実、間違いがあったわけで、リウーはいささか憤慨した。しかし、オトン氏は、やつれた様子で、力なげに手をあげ、重い口ぶりで一語一語話しながら、誰だって間違うことはあるものだ、といった。リウーは、ふと、どこか前と変ったところがあると思った。

「これからどうされます、判事さん？　きっと書類が待ちかまえてるんでしょうね」と、リウーはいった。

「それがね、そうじゃないんです」と、判事はいった。「私は休暇をとろうと思っています」

「なるほど、休息なさる必要がありますね」

「そうじゃないんです。また収容所に帰りたいと思いましてね」

リウーは驚いた顔をした——

「だって、あそこは出てこられたばかりじゃありませんか！」

「いや、私のいったのはそういう意味じゃないんです。話によると、あの収容所では、事務のほうに志願で働いている人がいるそうですね」

判事はその丸い目をちょっとくりくりさせ、一方の髪の毛をしきりになでつけていた。

くるのを感じたからである。彼もまた、クリスマスの日のある店の前での、この不幸な男の婚約のこと、そして男のほうへ倒れかかりながら、自分はうれしいといったジャーヌのことを、思い出していた。遠い歳月の奥から、この錯乱のまっただなかに、ジャーヌのみずみずしい声がグランの耳によみがえってきたのだ——それはもう確かなことだった。リウーは、泣いている老人が今この瞬間に何を考えているか知っていたし、彼も老人と同様にそのことを考えていたのである——愛のないこの世界はさながら死滅した世界であり、いつかは必ず牢獄や仕事や勇猛心にもうんざりして、一人の人間の面影と、愛情に嬉々としている心とを求めるときが来るのだということを。

しかし、相手はガラスに映ったリウーの姿に気がついた。そして、相変らず泣きつづけながら、こちらを向いてショーウィンドーに背をもたせ、リウーの近づいてくるのをながめた。

「ああ、まったく、先生！　ああ、まったく！」と、彼はつぶやいた。

リウーは口がきけないで、頭を振ってうなずいた。この悲嘆は彼の悲嘆でもあり、このとき彼の心臓をかきむしっていたものは、すべての人間がともにしている苦痛に対したとき、人間の心に生ずる果てしない憤りであった。

「まったくだ、グラン君」と、彼はいった。

「なんとかして、手紙を一通書いてやる暇がほしいですよ、彼女によくわかってもらうように……そうして後悔しないで仕合せに暮してくれるように……」

まるで腕ずくのかたちで、リウーはグランを前へ歩かせた。相手はまだやめず、ほとんど引き

貧しき者も、すべての者がみんな一つになっていたこの祝祭にも、もうわずかに二、三の楽しみ——特権者たちが、薄ぎたない店の別室の奥で金の力で手に入れる、孤独な恥ずべき楽しみしか、存在する余地がなかった。教会は感謝の祈りよりもむしろ愁訴の声に満たされた。陰鬱な凍りつくような市中には、幾人かの子供たちが、まだどんな危険に脅やかされているかも知らず、駆けまわっていた。しかし、誰ひとり彼らに向って、かつての日の神の訪れ——人類の苦悩そのもののごとく年老い、しかも若々しい希望そのもののごとく新鮮に、多くの贈り物をもたらす、神の訪れを告げようなどとするものはなかった。すべての人々の心には、もう、きわめて古くきわめて陰鬱な希望、すなわち人々が甘んじて死におもむくことを妨げる単なる生への執念にほかならぬところの、まさにその希望だけしかいだかれる余地がなかったのである。

その前の晩、グランは約束の時間に姿を見せなかった。リウーは不安になって、朝早く彼の家へ行ってみたが、彼はいなかった。みんなその知らせを受けて警戒していた。十一時ごろ、ランベールが病院へやって来て、リウーに報告したところによると、彼は、変り果てた顔つきで街頭をさまよっているグランの姿を、遠くから見かけた。それから、彼はその姿を見失ってしまったという。リウーとタルーは車で捜しに出かけた。

正午の冷え冷えとする時刻に、リウーは車から出ると、遠くに、そまつな木彫りの玩具のいっぱい並んでいるショーウィンドーにほとんどはりつくようにしている、グランの姿を見た。老吏の顔には、涙がとめどもなく流れていた。そして、その涙がリウーの心を烈しく揺り動かした。なぜなら、彼にはその涙の理由がわかり、そして自分もまたのど元のあたりにそれがこみ上げて

うです」と、彼はいった。そして、燃え盛るその肺の奥から、奇妙なはじけるような音が、何かものをいうたびに、それといっしょにもれて出た。リウーは彼に黙っているように注意し、そしてまたすぐもどってくるからといった。奇妙なほほえみが病人の顔に浮び、それと同時に一種のやさしさがその顔つきに表われた。彼は無理に努めながら、目くばせをしてみせた。「万一、無事に切り抜けられたら、それこそ脱帽ものですよ、先生！」。しかし、そういったと思うと間もなく、虚脱状態に陥ってしまった。

二、三時間たって、リウーとタルーが来てみると、病人は床のなかで半ば起き上がっていて、リウーはその顔に全身を焼き尽しつつある病患の進行を見てとってぎょっとした。しかし、彼はずっと意識がはっきりした様子で、さっそく二人に向って、抽斗にしまっておいた原稿を持ってきてくれと、異様にうつろな声で頼んだ。タルーがその紙束を渡してやると、彼はそれを見ようともせずにしっかり抱きしめ、それからそいつを医師のほうへ差出して、読んでくれるように身ぶりでうながした。それは五十ページばかりの短い原稿であった。リウーはそれを拾い読みしてみて、その紙片のすべてが、同じ一つの文章を際限なく写し直し、書き直し、加筆あるいは削除したものがしるされているにすぎないことを悟った。ひっきりなしに、五月の月や、女騎手や、ブーローニュの森の小道が、さまざまの形でぶつかり合い、排列されていた。この労作はまたいろいろな説明――ときには途方もなく長い説明と、それから異同文とを含んでいた。しかし、最後のページの終りには、丹念な筆跡で、インキの跡もまだ新しく、ただこれだけ書いてあった――「なつかしいジャーヌ、今日はクリスマスだ……」。その上のほうに、念入りに清書されて、

ずられるようにしながら、きれぎれの言葉をつぶやきつづけた。

「あんまり長すぎますよ、こう続いちゃ。つい、どうにでもなれって気になるのは、きまりきったことです。ほんとに、先生、私は平気そうに見えますがね、ただ見たところじゃ。ところが、自分じゃいつだっておそろしく骨が折れてたんです、ただ当り前にしているだけでも。それが、今じゃ、もうそれさえやり切れなくなっちまいました」

彼は話しやめると、手足をぶるぶる震わせながら、もの狂おしい目つきをした。リウーはその手をとった。それは燃えるように熱かった。

「さあ、帰らなきゃ」

ところが、グランは彼の手を抜け出して五、六歩駆けだし、それから立ち止ると、両腕を広げて前後によろめきはじめた。そしてくるりと一回転すると、相変らず流れつづける涙に顔をよごしたまま、冷え切った歩道の上に倒れてしまった。通行人たちは、急に立ち止って遠くからながめながら、もう進み寄ろうともしなかった。しかたなしに、リウーが老人を抱き上げてやらねばならなかった。

今はもう寝台に寝かされて、グランは呼吸困難に陥っていた——肺が冒されていたのである。リウーは考えてみた。グランには家族はない。なんのためにわざわざよそへ移したりする必要があろう。自分だけで、タルーといっしょに、看病してやればいい……。

グランは、肌は緑色になり、目は光を失って、枕のくぼみに身をうずめていた。彼は、タルーが空箱のこわれで暖炉に起した貧弱な火を、じいっと見つめていた。「どうも悪くなってきたよ

ていようといった。リウーはその申し出を受入れた。

一晩じゅう、グランが死のうとしているという考えが、彼の心に付きまとって離れなかった。ところが、翌朝リウーが行ってみると、グランは寝台の上にすわって、タルーと話をしていた。熱はなくなっていた。残っているのは、ただ全般的な憔悴の兆候だけだった。

「ほんとに、先生、しまったことをしました」と、グランはいった。「しかし、またやりますよ。すっかり覚えてますから、まあ見ててください」

「まあ、様子を見てみよう」と、リウーはタルーにいった。

しかし、昼になっても、一向変りがなかった。夕方には、グランはもう助かったものと見なされることができた。リウーには、この蘇生がまるで腑に落ちなかった。

しかしながら、ほぼ同じ時期に、リウーのところに一人の患者が連れてこられ、彼はそれをもう絶望的な症状と診断して、入院するとさっそく隔離させた。その若い娘は完全に錯乱状態に陥っていて、肺ペストのあらゆる兆候を呈していた。ところが、翌朝になると、熱は下がってしまった。リウーはこのときもまた、グランの場合と同様に、それを朝がたの病勢弛緩だと思ったし、これは、経験によって、悪い兆候と見なす習慣がついていた。しかしながら、昼になっても熱は上がらなかった。晩にはわずか二、三分だけ上がったが、翌朝になると、熱はすっかり消えてしまった。若い娘は、弱ってはいたが、床のなかで楽に呼吸していた。リウーはタルーに向って、その娘はあらゆる法則に反して助かった、といった。ところが、その週のうちに、リウーの所管内で、同じような症例が四つも出たのである。

例の文章の最後のかたちのものが載っていた。「読んでください」と、グランはいった。そこで、リウーは読んだ。

「美しく晴れた五月の朝まだき、一人のなよやかな女騎手が、悠揚たる栗毛の牝馬に跨り、《森》の小道の花のなかを駆けめぐっていた……」

「それで間違いありませんね？」と、老人は熱病患者の声でいった。

リウーは彼のほうへ目をあげなかった。

「そうだ、わかってます」と、相手は興奮しながらいった。「《美しく》だ。《美しく》っていうのは、的確な言葉じゃない」

リウーは毛布の上から彼の手をとった。

「いいんです、先生。もう暇がないでしょう……」

彼の胸は苦しげにふくらみ、彼はいきなりこう叫んだ——

「焼き捨ててください！」

リウーは躊躇したが、グランがあんまり猛烈な調子で、しかもひどく苦痛のこもった声でその命令を繰返したので、リウーもその紙束をほとんど消えかかっている火のなかに投じた。室内はたちまち明るくなり、束の間のぬくもりで部屋は温かくなった。リウーが病人のほうへもどってきたときには、病人はこっちに背を向けて、その顔はほとんど壁に触れそうになっていた。タルーはまるでこの場の光景には関係のないもののように、窓から外をながめていた。血清を注射してから、リウーがその友に向って、グランは今晩じゅうもつまいというと、タルーは自分が残っ

5

病疫のこの突然の退潮は思いがけないことではあったが、しかし市民たちは、そうあわてて喜ぼうとはしなかった。今日まで過ぎ去った幾月かは、彼らの解放の願いを増大させながらも、一方また用心深さというものを彼らに教え、病疫の近々における終息などますます当てにしないように習慣づけていたのである。しかしながら、この新たな事実はすべての人々の口に上り、そして人々の心の底には、それと語られぬ大きな希望が波だっていた。その他のすべてのことは、第二義的な面に移ってしまった。ペストの新たな犠牲者たちも、この途方もない事実の前にはものの数でもなかった——統計は下降していたのである。健康の時代が、大っぴらに希望はされなくても、しかも、ひそかに期待されていたという一つの徴(しるし)は、市民たちがもうこのときから、ペストの終息後どんなふうに生活が再編成されるかということについて、無関心めいた口ぶりながらも、進んで話すようになったことである。

みんな考えるところが一致していたのは、過去の生活の便利さは一挙に回復されはしないであろうし、破壊するのは再建するよりも容易であるということであった。人々はただ、問題の食糧補給だけでも少しは改善されうるであろうし、で、そんなふうにして、最も切実な心配ごとから解放されることになるだろう、と見ていた。しかし、事実は、こういう微温的な考察の陰に、一

同じその週の終りに、喘息もちの爺さんは、ひどく興奮しきった気配で、リウーとタルーを迎えた。

「もうしめたもんでさ」と、爺さんはいった。「やつら、また出てきましたぜ」

「誰が？」

「誰って、鼠でさ！」

四月以来、鼠の死体は一匹も発見されていなかった。

「それじゃ、また始まるのかな」と、タルーはリウーにいった。

爺さんはしきりにもみ手をしていた。

「まったく見ものですぜ、やつらの走りまわってる様子は。それこそ楽しくなるようだね」

爺さんは、生きた鼠が二四、道路のほうの戸口から自分の家へはいってくるのを見たのであった。近所の連中から話を聞いたところによると、彼らのところでも畜生どもがまた姿を現わしたという。ある個所の梁のあたりでは、もう何カ月も忘れていたごそごそ動く音が、また聞えだした。リウーは、毎週の初めに行われる、総括的な統計の発表を待った。統計は病疫の衰退を明らかにしていた。

さなかったのに、にわかに確実に効果をあげるように見えだした。あたかも、今度はペストのほうが追いつめられ、その突然の弱りこみようが、これまでそれに対して用いられていた、なまくらな武器に、威力を生ぜしめたかのようであった。ときどきわずかに、病疫は力をふるい起し、そして一種の盲滅法な突進ぶりで、治癒を期待されていた三、四人の患者を奪い去る。彼らはよくよくペストの悪運に見こまれた人々であり、希望のさなかにペストに殺された人々であった。隔離収容所から退去させねばならなかったオトン判事の場合がそれであって、タルーは事実彼について、彼は運が悪かったといったのであるが、しかもそれは判事の死のことを考えていったのか、生のことを考えていったのかわからなかった。

しかし総体において、感染はあらゆる方面で減退し、県の公報も、まず最初は遠慮がちのひそかな希望を芽ばえさせたものであったが、ついには公衆の心に、勝利が確保され、病疫はその陣地を放棄したのだという確信を固めさせるに至った。じつをいえば、これが勝利というものであるかどうか、きめてしまうことは困難であった。人々は単に、病疫が、やって来たと同じようにして去っていくらしいことを、確認するより仕方がなかったのである。病疫に対して用いられる戦略は別に変化していなかったし、昨日は無効果であったかと思えば、今日は一見好首尾を収めるという具合であった。人々はただ、病疫がみずから消耗し尽したか、あるいはおそらくその目標のすべてをやっつけたうえで退却するのだ、という印象を受けただけである。ある意味において、もうその役割が終っていたのである。

それにもかかわらず、市中の様子は少しも変らないといえたであろう。相変らず昼間はひっそ

つの愚かしい希望が同時にはやりたっていたのであり、それがときどきは市民たち自身もそれを意識することがあるほどで、そんなとき、彼らは大急ぎで、しかしどう考えてみても解放は今日明日のことではないと断言するのであった。

そして、事実、ペストは今日明日には終息しなかったが、しかし見たところ、妥当に考えて期待されたよりも、もっと早く衰退していくようであった。一月の上旬の間、寒気が例年にない頑強さで居すわり、町の上空にさながら結晶したかと思われた。しかも、かつてこのときほど空が晴れ渡っていたことはなかった。来る日も来る日も一日じゅう、冷え冷えと晴れ渡った微動もせぬ空の輝きが、絶え間もない光線を市に注ぎかけた。この清められた大気のなかで、ペストは三週間の間に、連続的に下降しつつ、次々に並べる死体もますます少数になりながら消耗していくように思われた。短時日の間に、ペストは幾月もかかって蓄積してきた力のほとんど全部を失ってしまった。グランや、リウーの見たあの若い娘のように、すっかり指名済みの餌食を取逃がしてしまったり、ある地区では二、三日の間病勢が激化したかと思うと、その間、ほかのある地区ではまったく影を潜めてしまったり、月曜日には犠牲を激増させておきながら、水曜日にはそれをほとんど全部助からしてしまったり、そんなふうに息を切らしたり突進したりする様子を見ていると、あたかも精力の消耗と疲労倦怠によって機能を狂わせられ、自分自身に対する支配力と同時に、これまでその強味となっていたところの絶大かつ数学的な有効性も失ってしまったとでもいえそうであった。カステルの血清は、急に、それまではえられないでいた成功を、何度も連続的に経験するようになった。医師たちのとる処置の一つ一つが、以前にはなんの結果ももたら

に、また新たな脱走の企てが記録されるというようなことが起った。これには当局も、また各衛兵所さえも、はなはだしく意表をつかれた。というのは、大部分の脱走が成功したからである。しかし、事実は、これらの時期に脱走した人々は、自然な感情にしたがったのである。ある人々の場合は、ペストによって深刻な懐疑主義をしっかり植えつけられてしまい、どうしてもそれを振捨てることができなくなっていた。希望はもう彼らの心に取りつく余地がなかった。ペストの時代がめぐり終ったときにさえ、彼らは相変らずペストの基準に従って暮していた。彼らはつまり事件に遅れていたのである。またある人々の場合は、これに反して――そしてこういう人々は、それまで自分の愛する人間から引離されて暮してきた者たちのなかに、特にその仲間が見出されたのであるが――この長い幽閉と銷沈の期間のあげくに、わき起った希望の風は一つの熱望と焦燥に火を点じ、それが彼らからあらゆる自制を奪い去ったのであった。自分たちは、最後の目標にこんなに近くなってから、ひょっとすると死ぬかもしれない、最も愛する人間にもふたたび会えず、この長い間の苦しみもついに報いられないかもしれない、と考えると、一種の発作的恐怖のようなものに、彼らは捕えられるのであった。幾月もの間、暗い頑強さをもって、幽囚と追放にもたゆまず、彼らは根気よく待ちつづけてきたものであったのに、ちょっと希望の光が見えはじめただけで、それまでは恐怖や絶望もゆるがすことのできなかったものを破壊するに十分であった。彼らは、ペストの足どりに最後のときまでついていくことができず、それを追い抜こうとして気違いのように突進したのである。

もっとも、同時にまた、楽観思想の自然発生的な兆候も出現した。たとえば、物価の顕著な下

りとしている街頭は、晩になると、同じ群衆――ただオーバーとショールが目だつようになっただけの同じ群衆――に占領される。映画館とカフェは同じようにもうかっていた。しかし、もっと詳細に見ると、人々の顔つきがゆるみ、ときにはほほえんでいることに、気がつくことができるのであった。そしてそういう場合、それが、これまで誰も街頭でほほえんでいる者はなかったということを確認する機会となった。実際、数カ月以来市を取巻いていた不透明な帷に、今や一つの裂け目ができ、そして毎月曜日、みんながラジオの報道によって、その裂け目が拡大しつつあり、ついに息をつくことができるようになろうとしていることを、確認することができたのである。これはまだまったく消極的な安堵であり、あからさまな表われ方はしなかった。しかし、以前には、汽車が出たとか、船が着いたとか、あるいはまた自動車がふたたび運行を許されそうだとかいう話は、幾分信用できない気持を伴わずには聞けなかったものであるが、こういう出来事が一月半ばに報じられたのなら、反対になんの驚きも呼び起さなかったことであろう。これはもちろん些細なことであった。しかし、この軽微なニュアンスは、事実上、市民たちが希望への道においてたいした前進をなし遂げたことを表わしていた。かつまた、最も些細な希望でもその住民にとって可能となった瞬間から、ペストの実際の治世は終ったということができるのである。

それにもかかわらず、これも依然として事実であるが、一月の一カ月間というもの、市民たちはまったく矛盾した動き方を示した。正確にいえば、彼らは興奮と沈滞とが代る代るやって来る状態を経験したのである。そこでつまり、統計が最も有望な結果を示している、まさにその時期

空のもと、灯のともされた街頭に、市民たちはそこで賑やかに笑いさざめくむれをなして、繰出したのであった。

もちろん、数多くの家々では鎧扉が閉ざされたままであったし、幾多の家庭が、他の人々が歓声をもって満たしているこの一宵をひっそりとして過したには違いなかった。しかしながら、これら喪中の人々の多くの者にとっても、さらにほかの身内の者が奪い去られるのを見る恐れが遂に静められた点からいっても、彼ら自身の身の保全という感情がもう危機に瀕していない点からいっても、安堵の念はやはり深いものがあった。しかし、一般の喜びに依然として最も無縁であったに違いない家庭といえば、それは異論のないところ、まさにこの瞬間においてどこかの病院で、ペストと格闘している病人をもち、そして予防隔離所あるいは自宅で、災厄がほかの人々から手を引いたように、自分たちからも本当に手を引いてくれるのを待っている家庭であった。これらの家庭もたしかに希望をいだいていたには違いないが、しかし彼らはそれをたくわえとして別にのけておき、本当にその権利ができるまでは、それに手をつけることを自ら禁じていたのである。そして、懊悩と歓喜とにちょうど等距離のところで、こうして待たされ、ひっそりとその宵を過していることは、一般の喜色のさなかにあって、彼らにはなおさら残酷に思われたのであった。

しかし、こういう例外も、ほかの人々の満足をなんらそこなうものではなかった。もちろん、ペストはまだ終ったわけではなく、やがてその証拠は見せつけられたのであった。それにもかかわらず、すべての人々の頭の中では、すでに、数週間も先まわりして、果てしない鉄路の上に汽

落が記録されたことなどが、それである。純粋に経済上の見地からすれば、この動きは説明がつかなかった。困難な事情は依然としてそのままであり、検疫の手続きは市門で続行されているし、食糧補給も改善されているなどという段ではなかった。したがって、ここに見られたものは、あたかもペストの衰退がいたるところに反響しているかのような、純粋に精神的な現象だったのである。同時にまた楽観思想は、以前に集団をなして生活していて、病疫のために分散を余儀なくされていた人々にも波及した。市内の二つの修道院は復旧されはじめ、共同生活も再開されることとなった。軍人たちの場合も同様で、あいたままになっていた兵営にふたたび集合させられた。彼らはまた通常の駐屯生活を始めたのである。これらのささやかな事実は、たいした兆候であった。

住民はこういうひそかな興奮のうちに一月二十五日まで暮した。その週に至って、統計はじつに低位に下がり、ついに医事委員会に諮ったうえで、県庁は病疫が防止されたものと見なされうることを宣した。もっとも、公報に付け加えられたところによれば、必ずや市民の協賛をえられるであろうところの慎重なる趣旨から、市門はなお一週間閉鎖されたままとし、各種の予防措置は一カ月間続行される。この期間内に、危険が再発しうるような兆候がいささかでも見えたならば、「現状維持」は続行され、各種の措置はさらにさかのぼって強化続行さるべきものとする」というわけであった。しかしながら、この付記を形式的な条項と見なすことは、誰もみな意見の一致したところであり、一月二十五日の晩は、浮き浮きした興奮が市中にみなぎった。一般の喜悦を自分もひとしく分かとうとして、知事は健康時代の照明に復するよう命令を発した。寒く清らかな

しかし、ペストが遠ざかり、最初音もなく出てきた、どことも知れぬ巣穴へまたもどろうとしているように見えたとき、市中で少なくとも誰かだけは、この引揚げ開始によって愕然たる思いに突き落された者があった。そして、タルーの手帳に記されたところを信ずるならば、それはコタールであった。

じつをいえば、この手帳は、統計が下降しはじめたときからかなり奇妙なものになってくる。疲労のせいでもあろうか、その筆跡は容易に判読しがたくなり、またあまりにも頻繁に一つの話題から他の話題へと移りすぎる。おまけに、しかもこれははじめてのことであるが、手帳の記述は客観性を欠き、個人的な考察に席を譲っている。たとえばコタールの場合に関するかなり長文の一節の途中に、例の猫の老人についてのちょっとした記述が出てきたりする。タルーのいうところを信ずるならば、ペストもこの人物に対する彼の評価をいささかも減じることなく、ペストが始まってからも、それ以前に興味をひかれていたと同じく興味をひかれていた人物であり、また、彼タルー自身の好意の増減が原因ではないのであるが、不幸にして今後は興味をひかれることのできなくなった人物であった。というのは、彼は老人の姿をふたたび見ようと努めたのであった。あの一月二十五日の晩から二、三日後に、彼は例の横丁の角に待機していた。猫どもは、落合う時刻に忠実に、ちゃんとそこへ来て、日だまりのなかでぬくもっていた。しかし、いつもの時刻になっても鎧扉は頑強に閉ざされたままだった。その後幾日たっても、タルーは遂にその鎧扉が開かれるのを見なかった。彼はそこから奇妙な結論を引きだして、小柄な老人は腹をたてたか、死んだかしたのであり、もし腹をたてたとすれば、つまり老人は自分が正しいと考えている

車が汽笛を鳴らしながら出発し、光り輝く海の上に、船が白波をけたてていた。翌日には、人々の心ももっと平静になり、疑念もまたわいてきたことであろう。しかし、今この瞬間には、市全体は、その石造の根をおろしていた、暗く動きのない閉ざされた場所を離れて動きだし、生存者を積みこんで、ついに前進しはじめたのであった。その晩、タルーやリウーも、ランベールやほかのものたちも、群衆のなかにまじって歩いていたが、彼らもまた足が地を踏んでいないような気持であった。大通りを離れてよっぽどたってからも、タルーとリウーの耳には、まだこの喜びの声が追いかけてくるのが聞え、しかもそのとき、彼らはちょうど、まったく人影もない路地を、ずっと鎧扉を閉め切った窓に沿って歩いていたのである。そして、まさに疲れていたそのせいで、彼らは、これらの鎧扉の陰でまだ続いているその苦しみを、少し離れた街頭にあふれている喜びから切り離して考えることはできなかった。近づきつつあった解放は、笑いと涙の入り混じった顔をもっていたのである。

ひとしきり、騒ぎが一層激しくにぎやかになったとき、タルーはふと足を止めた。暗い舗道の上を一つの影が軽快に走っていた。それは一匹の猫、春以来おそらくはじめて見かけた猫だった。猫はいっとき道路のまんなかにじっと立ち止り、ためらい、片足をなめ、その足を右の耳の上に手早くこすりつけ、また音もなく走りだし、そして闇の中へ消えてしまった。タルーはほほえんだ。例の小柄な老人もまた満足することであろう。

きが認められる、彼女の善良さとか、最後にタルーの説によれば、彼女は決して考えることなく、しかもすべてを知っており、そんなにひっそりと陰にうずもれていながら、どんな光線にも、たといペストの光線にであろうとも、りっぱに堪えることができる、という事実とか……。もっとも、ここで、タルーの筆跡は妙にたゆたい気味の兆候を示している。それに続く数行は容易に判読しがたく、そしてあたかも、このたゆたいをあらためて証拠だてるかのように、その最後の言葉は、個人的な言葉としてこれが最初のものである――「私の母もそんなふうであった。私は母の同じような慎ましさを愛していたし、母こそ、私がいつもその境地に達したいと思ってきた人間である。八年前のことも、彼女が死んだとは私にはいえない。彼女はただ、ふだんよりも少し余計に自分を目だたせぬようにしただけであり、そして私がふと振返ってみると、彼女はいなくなっていたのである」

ところで、コタールのことにもどらねばならぬ。統計が下降してきてから、コタールはさまざまの口実を設けては、たびたびリウーのところを訪れていた。しかし、じつはそのたびごとに、病疫の経過に対する予測をリウーに尋ねていたのである。「あなたにはお考えになれますか、このまま、いきなり、前ぶれもなしに、ぴんでしまうことがあるなんて？」。彼はその点に関して懐疑的であり、あるいは少なくともそう公言していた。しかし、彼が繰返し質問するところは、確信のそれほど強固でないことを示しているように思われた。一月の半ばごろには、リウーはかなり楽観的な調子で答えたものであった。するとそのたびごとに、それらの答えは、コタールを喜ばすどころか、さまざまの反応を呼び起すのであったが、それは日によっていろいろであるとはい

わけであって、ペストが老人に対して不法な仕打ちをしたことになるが、しかし、もし死んだものとすれば、彼についても、喘息病みの爺さんの場合と同様に、彼は聖者であったのかどうか考えてみる必要がある、と述べている。タルーは彼が聖者だったとは考えていないが、しかしこの老人の実例のうちに、一つの「手引き」となるものがあると見ている。「おそらく」と、手帳は考察している。「人間は聖者の徳の近似的なものにしか行き着けないのであろう。そうだとすれば、謙譲にして慈悲深い堕天使精神をもって満足するほかはあるまい」

相変らず、コタールに関する観察のなかにまじって、手帳にはまた、しばしば分散されたかたちで数多くの考察が見出され、そのあるものは、今では回復期にはいって、まるで何事も起らなかったかのようにふたたび仕事を始めたグランに関するものであり、またあるものは、医師リウーの母親の風貌を描いている。同居の結果、この母親とタルーとの間にかわされるようになった若干の会話とか、この老婦人のさまざまな態度とか、その笑顔とか、ペストに対する観察とかいうものが、丹念に書きとめられている。タルーは特にリウー夫人の真ましさを強調している。どんなことでも単純な語句でいい表わす彼女のもののいい方とか、静かな通りに面しているある一つの窓が特別に好きな様子で、夕方その窓のこちらに、ちょっと上体を固くして手を休めたまま、熱心な目つきで、夕闇が部屋のなかへ押し寄せ、彼女の姿が灰色の光線のなかで一つの黒い影絵になり、その灰色が次第に濃くなって、やがてその動かない横顔を溶かしこんでしまうまで、じっとすわっていることとか、部屋から部屋へ動きまわるその軽快な動き方とか、タルーの前では、ついぞ明確な証拠を見せつけたことはないが、彼女のいうことなすことすべてにその輝

た。そうなると、もう好きなレストーランにも、劇場にも、カフェにも姿を見せなくなる。しかもそれでいて、病疫の始まる以前にしていたような、ほどよい、人日につかぬ生活にはもどれないらしかった。自分のアパートに完全に引きこもって暮しながら、しかも近所のレストーランから食事を運ばせていた。ただ晩にだけ、こっそりと外出しては、何か入用なものを買ったり、店から出てきたと思うと人影のない通りへ駆けこんだりする。そんなときタルーが出くわしたとしても、ただ「ええ」とか「いや」とかいう言葉しか聞きだすことができない。それから、またけろりと一変して、ふたたび社交的になり、ペストについてとうとうと語ったり、みんなの意見を聞きほじくったり、毎晩喜んで群衆の汲のなかに紛れこんだりするのであった。

県知事告示の日には、コタールは、完全にゆくえをくらました。二日後に、タルーは、街頭をさまよっている彼に出くわした。コタールは、町はずれまでいっしょに帰ってくれるように頼んだ。タルーは昼間の仕事で特別疲れた気がしていたので、躊躇した。しかし、相手はしつこく頼んだ。非常に興奮しているらしく、取乱した調子でしきりに身ぶりを混じえながら、早口に大声でしゃべった。彼はタルーに向って、県知事告示がペストを一段落させるものと本当に考えているかどうかと尋ねた。もちろんタルーは、行政上の告示というものがそれだけで天災を終息せしめるにたるとは思っていなかったが、しかし妥当に考えて、病疫は予想外のことが起らないかぎり、やがて終息するものと考えてよかった。

「たしかに、予想外のことが起らないかぎりはね」と、コタールはいった。「しかも、いつだって予想外のことってやつがあるんですよ」

え、ただの不機嫌から始まって意気銷沈にまで達することがあった。その後、リウーは彼に向って、統計に示された良好な兆候にもかかわらず、まだ勝利を叫んだりしないほうがいいと、ついいわざるをえなくなったことがあった。

「別ないい方をすれば」と、コタールは指摘した。「つまり、全然わからないわけですね。いつなんどき、また始まるかもしれないわけですね？」

「そうです。同時にまた、退散への動きが速度を早めるということも、ありうるわけですがね」

世間一同にとって不安の種であるこの不確実さは、明瞭にコタールをほっとさせた様子で、彼はタルーの目の前で、その界隈の商人たちと会話をまじえては、しきりにリウーの意見を宣伝しようとしていた。もっとも、それは造作もなくやれたということも事実である。というのは、最初の勝利の熱狂が過ぎると、多くの人々の心にはまた疑いがよみがえってきて、県知事告示によって惹起された興奮の後にも、なお命脈を保っているわけであった。コタールはこの不安の様子を見ては安心するのであった。昔と同じように、彼はまた気を落していた。「そうですよ」と、彼はタルーにいっていた。「結局、門は開かれることになるでしょう。そうなったら、まあ見ててごらんなさい、やつらはみんな私を見殺しにしますよ」

一月二十五日が来るまでというもの、みんなが彼の性格のとりとめのなさに気がついた。あれほど長い間、界隈の人々や交際相手の心をかちえようと努めたあげくに、完全に幾日かの間、彼は真っ向から彼らに敵対する態度を示した。少なくとも外に表われたところでは、彼はそんなとき、世間から引きこもったと思うと、たちまちにしてまるで未開人の暮し方をはじめるのであっ

は、組織そのものが改変されないかどうか、たとえばすべての部課が昔どおりに運営されるかどうかという問題であった。そういわれると、タルーも、それは全然わからないことを認めざるをえなかった。彼の意見では、そういうすべての部課も、病疫時に混乱してしまっているし、ふたたび発足するには、多少骨が折れるものと予想しなければならぬ。それからまた、数多くの新たな問題が提起されて、少なくとも昔の部課の編成替えぐらいは必要になってくるものと信じていい。

「なるほど」と、コタールはいった。「そういうことはあるでしょうね。実際、世間みんなが何もかもやり直さなきゃならなくなるわけだ」

二人はコタールの家の近くまで来ていた。コタールは元気づいて、しいて楽観的に考えようと努めていた。彼は、市がまた新たに生活を始め、過去をすっかりぬぐい去って、ゼロから出直す姿などを、想像してみたりした。

「まあ、そういうわけです」と、タルーはいった。「結局、具合よく片付くかもしれませんよ、あなたにとっても。ある意味で、一つの新たな生活がはじまろうとしてるんですから」

ちょうど戸口の前まで来ていて、二人は手を握り合った。

「おっしゃるとおりです」と、ますます興奮してきた様子で、コタールはいった。「ゼロから出直すっていうのは、ずいぶん楽しいことでしょうね」

ところが、廊下の暗がりから、二人の男が現われ出た。タルーは、連れのコタールが、あの妙なやつらはいったい何をするつもりなんだろうと、きいたのを耳に入れる暇もないくらいであっ

タルーはそれに対する注意として、もっとも、開門までに二週間の期間を設けることによって、県もある程度予想外のものを予想しているわけだ、といった。

「そうしといて、いいことをしましたよ」と、相変らず興奮した、暗い調子でコタールはいった。「なにしろ、物事の運び具合じゃ、結構空騒ぎをしたことになりかねませんからね」

タルーはそういうこともありうると見なしはしたが、しかしそれでも近日における開門と、平常の生活への復帰を考えておいたほうがいいと思っていた。

「まあ、そういうことにしときましょう」と、コタールはいった。「かりにそうだとして、しかし、どういうことをいうんです、平常の生活に帰るっていうのは？」

「新しいフィルムが来ることですよ、映画館に」と、タルーは笑いながらいった。

しかし、コタールは笑わなかった。彼は、ペストがこの市のなかの何ものも変えることなく、すべてが以前どおりに、つまり何事も起らなかったかのように、また始められるものと、考えうるかどうかを知りたがった。タルーの考えるところでは、ペストはこの市を変えるだろうとも、変えないだろうともいえるわけで、もちろん、市民たちの最も強い願望は、さながらなんにも変らなかったかのごとくふるまうことであり、また、あるだろうし、したがって別の意味ではなんにも変らないであろうが、しかしまたある意味では、たとい十分な意志をもってしても、何もかも忘れてしまうということはできないし、ペストはその痕跡を、少なくとも人々の心のなかには残すであろう。コタールはきっぱり言明して、自分は心のことなどには興味はないし、心のことなどは自分の関心のいちばん最後に位するものであるくらいだ、といった。彼の関心をひくこと

高潮のころと同じくらい疲れ果てるものではあったが、終局的な解放への期待が、身のうちのあらゆる疲れを消散させていた。今では彼も希望をいだき、そしてそのことを楽しんでいた。しょっちゅう意志を緊張させ、しょっちゅう張りつめてばかりはいられないものであるし、戦いのために編みあげた力の束を、遂に感情の流露のなかに解き放つことは、まったく楽しいことである。万一、待っていた電報がこれもまた良好なものであったとしたら、リウーもまたやり直すことができるわけだ。そして彼は、誰も彼もまたやり直したらいいという意見であった。

彼は門番部屋の前を通った。新しい門番は、窓ガラスに顔を押しつけて、彼にほほえみかけた。階段を上がっていくと、疲労と欠乏で青ざめたその顔が、またリウーの目に映った。

そうだ、この抽象が終ってしまったら、またやり直そう。そうして、少し運に恵まれさえすれば……。しかし、ちょうどその瞬間、彼は自分の部屋の戸を開け、すると母親が出迎えて、タルーさんが具合がよくないと知らせた。朝は起きたのだが、出かけることができなくなって、今しがた、また床についたのであった。リウー夫人は不安になっていた。

「たぶん、別にたいしたことじゃないでしょう」と、リウーは母にいった。

タルーは長々と身を伸ばし、その重たげな頭は長枕をくぼませ、がっしりした胸の線が厚く重ねた毛布の下に盛り上がっていた。熱があり、頭が痛むのであった。彼はリウーに向って、どうも兆候がはっきりしないが、やっぱりペストの兆候かもしれない、といった。

「いや、まだなんにも、はっきりした兆候はない」と、診察してみてから、リウーはいった。

しかし、タルーはのどのかわきに責められていた。廊下へ出ると、医師は母親に向って、こい

た。妙なやつらは、晴れ着に着替えた小役人というかっこうであったが、それが実際、コタールに向って、彼がたしかにコタールという者であるかどうかを尋ねると、コタールは一種の鈍い叫びのようなものを発して、くるりと向き直ったと思うと、早くも夜の闇のなかに突入してしまい、相手の男たちもタルーも、それこそ身ぶり一つする暇もなかった。驚きが過ぎ去ってしまうと、タルーは二人の男に、どういう用向きかと尋ねた。二人の男はよそよそしくとりすました態度をとって、ちょっと調査することがあったのだといい、落着き払って、コタールが向った方角へ出て行った。

家へ帰ると、タルーはこの場面のことを記述し、続いて直ちに自分の疲労感（それはその筆跡が十分証明している）を記している。彼はそれに付け加えて、自分はまだなすべきことがたくさんあるが、しかしそれは、心がまえができていなくてもいいという理由にはならないと述べ、はたして自分はまさにその心がまえができているであろうかと、自問している。彼は最後のところでそれに答えて——そしてここでタルーの手帳は終るのであるが——こういっている——人間が意気地なしになるような時刻が、昼夜ともに、必ずあるものだし、自分が恐れるのはそういう時刻だけだ、と。

翌々日、閉門の日までもう幾日もないころ、医師リウーは、自分の待っている電報がもう来ているだろうかと思いながら、正午に家へ帰ってきた。彼の毎日はそのころになってもペストの最

「まあ、晩になってみればわかるだろう」と、リウーはいって、そこでまともにタルーの顔を見つめた。

「隔離はどうするんだい、リウー？」

「別に確かなわけじゃないからね、はたしてペストかどうか」

タルーはしいてほほえんでみせた。

「こんなことははじめて見たね、血清を注射しときながら、同時に隔離を命じないなんて」

リウーはわきを向いた。

「おふくろと僕とで看病するよ。君にはここのほうがいいだろう」

タルーはじっと沈黙し、そしてリウーは液管を片付けながら、彼が話しかけてきたら振向こうとして待っていた。とうとう彼は寝台のほうへ向った。病人は彼のほうを見つめていた。その顔は疲れていたが、しかし灰色の日は静かだった。リウーは彼のほうへほほえみかけた。

「できたら眠るといいね。僕はまたすぐ来るよ」

戸口まで来たとき、タルーの自分を呼ぶ声をきいた。彼はそのほうへ引返した。

しかし、タルーは、自分のいいたいことを、どういおうかと、そのいい方自体に心を奪されている様子であった——

「ねえ、リウー」と、やっと彼は言葉を発した。「何もかもいってくれなきゃだめだよ。僕はそうしてもらいたいんだ」

「うん、約束するよ」

つはペストの始まりかもしれない、といった。

「まさか！」と、母親はいった。「そんなことがあるもんですかね、今になって」

そういって、すぐそのあとで――

「うちに置いてあげようよ、ベルナール」

リウーは考えていた――

「僕にはそうする権利はないんですが」と、彼はいった。「しかし、門もうすぐ開かれるわけです。たぶん、これこそ自分のために僕が真っ先に手に入れる権利でしょうがね、お母さんさえいなければ」

「ベルナール！」と、母親はいった。「ここに置いといておくれ、私たち二人とも。ねえ、大丈夫だよ、私はまた予防注射をしたばかりだもの」

医師は、タルーもやはり予防注射をしていたのだが、しかしおそらく疲労のために、最後の血清注射をぬかしてしまい、二、三の用心を忘れたのに違いない、といった。

リウーはすでに診療室のほうへ行っていた。部屋へ帰ってきたとき、タルーが見ると、彼は大きな血清の液管（アンプル）を持っていた。

「ああ、やっぱりそうなんだね」と、タルーはいった。

「いや、ただ、用心にね」

タルーは返事のかわりに黙って腕を差出し、そして彼自身もほかの患者たちに行なったことのある、果てしもなく長い注射を受けた。

夕食が済むと、リウーと母親とは病人のそばへすわりこんだ。夜の時間は病人にとって戦いのうちに始まり、リウーはペストの精霊とのこの苦しい戦いが夜明けまで続くはずだということを知っていた。タルーの頑丈な肩と広い胸も最良の武器ではなく、むしろリウーがさっき針の下にほとばしらせたあの血、そしてその血のなかの、霊魂よりももっと内奥のもの、いかなる科学も明るみに出しえないものこそ、それなのであった。そして彼は、友の戦うのをただながめているわけなのだ。彼がこれからしようとしていること――膿瘍の化膿を促進したほうがいいとか、強壮剤を注射する必要があるとかいうことは、幾月となく繰返された失敗の経験によって、その実効がどの程度のものであるかを、彼は教えられていた。実際、彼の唯一の仕事は、偶然というものに機会を与えることであったが、その偶然たるや刺激されねば動きださぬという場合があまりにも多い。しかも、その偶然が動きだしてくれる必要があったのである。なぜなら、リウーはこのとき、とまどいさせられるようなペストの姿にぶつかっていたからである。今度もまた、ペストは自分に向けられた戦略の裏をかこうとしきりに努め、予期しない場所に現われるかと思うと、すでに定着したと思われた場所から消えてしまったりするのであった。今度もまた、しきりに意表に出ようとするのである。

タルーは身動きもせず戦っていた。ずっと晩じゅう、ただの一度も、苦痛の襲来に対して反射的なあがきを示さず、ただそのあらんかぎりの重厚さと、あらんかぎりの沈黙とをもって戦っていた。しかしまた、ただの一度も口をきこうとせず、つまり彼一流の告白の仕方で、もう心をそらすことなど全然不可能になったことを告白していた。リウーは戦いの推移をただ友の目つき

相手は、そのがっしりした顔を少しゆがめるようにしてほほえんだ。
「ありがとう。僕は死ぬ気はないし、戦ってみせるよ。しかし、もし勝負に負けたら、りっぱな終りぎわをしたいと思うんだ」
リウーは身をかがめて、その肩をしめつけた。
「だめだよ」と、彼はいった。「聖者になるには、生きてたきゃ。戦ってくれ」
その日の昼間は、きびしかった寒さが少し緩んだが、そのかわり、午後になって、霰まじりの激しい夕立が降りだした。夕暮れには、少し青空が見え、寒気が一層身にしみてきた。リウーは晩になって家へ帰ってきた。オーバーもぬがずに、彼は友の部屋へはいっていった。母が編みものをしていた。タルーは、あのまま身じろぎもしないでいたように見えたが、しかし熱で白くなってしまった唇は、彼が今も続けつつある戦いを物語っていた。
「それで?」と、医者はいった。
タルーはちょっと、寝台の外へ、そのたくましい肩を突きあげた。
「それでさ」と、彼はいった。「勝負は負けかかってるとこさ」
医師は彼の上に身をかがめた。リンパ腺は燃えるような皮膚の下で節くれだち、胸はどこかに隠された鍛冶場のあらゆる響きで鳴り響いているようであった。タルーは不思議にも両様の系列の兆候を示していた。リウーは身を起しながら、血清はまだ完全な効力を発揮するだけの時間がなかったのだ、といった。しかし、のどに渦巻きはじめた熱の波が、タルーが口に出そうとした幾らかの言葉をかすれさせてしまった。

ルの音のしないこの夜が、かつての日々の夜と同じようであることに気がついたのであった。まさにペストから解放された夜であった。そして、病疫は、寒気と燈火と群衆に追われて市内の薄暗い深所から逃げだし、この温かい部屋に身を潜めて、タルーのぐったりと動かない体にこれを最後の攻撃を加えようとしているかのように思われた。災禍の殻竿はもう市の空をかきまわしてはいなかった。そのかわり、この部屋の重くよどんだ空気のなかで静かにうなり声をたてていたのである。さっきからもう何時間もリウーが聞いていたのは、その殻竿の音であった。今はそれがここでもまた鳴りやむことを、ここでもまたペストがみずから敗北を宣することを、待たねばならなかった。

夜明けちょっと前に、リウーは母親のほうへ身をかがめた――

「お母さんは寝てくれたほうがいいな、八時に僕と交替できるように。日薬をさしてください、よ、床にはいる前に」

リウー夫人は立ち上がり、編みものを片付け、そして寝台のほうへ進み寄った。タルーはもう、しばらく前から、目を閉じたままだった。汗が、そのいかつい額の上に、髪をほつれかからせていた。リウー夫人は溜息をつき、病人は目をあけた。やさしい顔が自分のほうへかがみこんでいるのを見ると、流動する熱で波のように動く表情の陰に、ねばり強いほほえみがなおもまた現われた。しかし、その目はすぐ閉じられた。ひとり残ると、リウーは母親が今離れていった肘掛椅子に席をとった。街には物音もなく、静けさは今まったくきわまっていた。明け方の寒気が、部屋のなかに感じられだした。

によってたどっていた――かわるがわる開きあるいは閉ざされる目、眼球に一層強く圧しつけられ、あるいは反対にたるむまぶた、何か一つのものに凝集され、あるいはリウーと母親のほうへ振向けられる視線。リウーがこの視線に出くわすたびごとに、タルーは非常な努力をしながらほほえんでみせた。

ひとしきり、街頭にあわただしい足音が聞えた。足音は遠く聞えてくる轟きに追いたてられているらしく、その轟きは次第に近づいてきて、ついにその漲々たるそよぎが街上を満たした。雨がまた降りだし、やがて霰を混じえて、歩道の上に音をたてた。巨大な帷が窓の外に波うった。部屋の暗がりのなかで、雨のためにちょっと気をとられていたリウーは、ナイト・ランプに照らされたタルーの姿をまた見まもった。母親は編みものをしながら、ときどき頭をあげては、病人の様子を注意深くながめていた。医師は今では、なしうべきことをすべてし尽していた。雨が過ぎ去ると、部屋のなかは静けさが一層深まり、ただ、目に見えぬ戦いの無音のざわめきだけが充満していた。不眠のために神経がいらだって、リウーは静寂の果てに、ずっと病疫の期間中つきまとわれていた、静かな規則正しいうなりが聞えるように思った。彼は母親に合図をして、床につかせようとした。母親は頭を振ってそれを拒むと、その目にはふっと光がさし、それからちょっとわからなくなった編み目を針の先で丹念にあらためた。リウーは立ち上がって病人に水を飲ませ、また席へもどって腰を下ろした。

通行人たちが、雨のやみ間に乗じて、急ぎ足に歩道を歩いていった。その足音は次第にかすかになり、遠ざかっていった。リウーはこのときはじめて、夜ふけの散歩者が充満し、救急車のベ

た。彼は、体の奥のどこかにすでにうごめきはじめた、熱の上昇を待ち受けていた。目をあけたときには、その目つきはどんよりしていた。自分のそばに身をかがめているリウーの姿に気がつくと、やっとその目に光がさした。

「さあ、水を飲んで」と、リウーはいった。

一方は飲み、そしてまたぐったりと頭を落した。

「長いな」と彼はいった。

リウーは彼の腕をつかんだが、しかしタルーは目をそむけて、もう反応を示そうとしなかった。にわかに、熱は、あたかもどこか内部の堤防でも決壊したかのように、目に見えてその額にまで逆流した。タルーの視線がふたたび医師のほうへ向けられたとき、リウーは緊張した顔によって彼を励まそうとした。タルーはまだ笑顔を作ろうと努めたが、それは上下の顎骨を引きしめ、両唇を白っぽい泡で接合させる以上には出られなかった。しかし、硬ばった顔のなかで、目だけはまだあらんかぎりの気力のひらめきに輝いていた。

七時に、リウー夫人が部屋にはいってきた。リウーは書斎にもどって、病院に電話をかけ、自分の代りをしてくれる者を頼んだ。彼はまた、ふだんの診察を繰延べることにきめ、ちょっと診療室の長椅子の上に横になったが、ほとんどすぐに起き上がって、また部屋へもどった。タルーはリウー夫人のほうへ首を向けていた。彼は、自分のそばの椅子にかがまって、膝の上に両手を組み合せている、その小さな影をじっと見つめていた。そしてその見つめ方がじつに強烈だったので、リウー夫人はその唇に指を当ててみせ、立ち上がってナイト・ランプを消した。しかし、カ

リウーはうとうとしてしまったが、夜明けの最初の車にまどろみからさまされた。彼は身震いし、そしてタルーのほうを見ると、ちょうど病勢が静まったところで、病人もまた眠っていることがわかった。馬車の木と鉄の車輪はまだ遠ざかりつつ響いていた。窓ぎわには、光線がまだ暗かった。リウーが寝台のほうへ進み寄ると、タルーは、まだ睡気のなかにいるかのように、表情のない目で彼をながめた。

「眠ったようだね？」と、リウーは尋ねた。

「うん」

「呼吸は楽になったかい？」

「幾らかね。これは何か意味があるのかい？」

リウーは黙っていたが、しばらくして——

「いや、タルー、別に意味はないさ。君だって知ってるね、明け方の病勢弛緩ってやつは」

タルーはうなずいた。

「ありがとう」と彼はいった。「正確に答えてくれ、いつでも」

リウーは寝台の足もとに腰を下ろした。寒磚面の臥像の手足のように長々と硬ばった、病人の両足が身近かに感じられた。タルーはさっきより呼吸が激しくなってきた。

「熱がまた上がってくるんだろうね、リウー？」と、息切れのした声で、彼はいった。

「うん、しかし正午になれば、はっきりきまるわけだ」

タルーは、力を集中するような様子で、目を閉じた。ぐったりした表情が、顔の線に見えて

う一度、手をつかね、胸もちぎれる思いで、武器もなく、頽むべきものもなく、岸にとどまっていなければならなかった。そして最後には、まさに無力を嘆く涙に妨げられて、リウーには、タルーが急に壁ぎわに向き直り、あたかも体内のどこかで一本の肝心な絃が切れたかのように、うつろなうめきのうちに息絶えたのも、見えなかったのである。

続いて訪れた夜は、戦いの夜ではなく、沈黙の夜であった。世界から切り離されたこの部屋の、今は服装を整えられたこの死体の頭上に、リウーは、すでに幾夜とも知れぬ前、ペストを見おろすテラスの上で、市門の襲撃に続いて生じた、あの驚くべき静謐が漂っているのを感じた。すでにあのころにも、彼は、自分が人々を死ぬままに残してきた寝台から立ち昇る、あの沈黙のことを思ったものであった。それはどこでも同じ休止、同じ厳粛な合間、戦いの後に続くつねに同じ鎮静であり、敗北の沈黙であった。しかし、今やこの彼の友を包んでいるところの沈黙に至っては、じつに濃密であり、街頭と、ペストから解放された市内との沈黙にじつに緊密に合致していて、リウーはまさに今度こそ決定的な敗北――戦争を終結させ、そして平和そのものを不治の苦痛たらしめるところの敗北――であることを感じた。リウーには、窮極においてタルーがはたして平和を見出したかどうかはわからなかったが、しかし少なくともこの瞬間、自分自身にとってはもう決して平和はありえないであろうこと、同様にまた、息子をもぎとられた母親や、友の死体をうずめた男にとって休戦などは存在しないことだけは、わかっているような気がした。

外は、澄んで冷え切った空に、凍りついたような星影の、同じ寒々とした夜であった。半ば暗がりの部屋のなかにいると、窓ガラスにのしかかる寒気のけはい、遠く極北の夜の蒼ざめた大き

ーテンの向うには、光線が急速に滲透しはじめ、そして間もなく病人の顔の輪郭が闇のなかから浮び出たとき、彼が相変らず彼女の姿を見つめているのを、リウー夫人は見ることができた。彼女は彼のほうへ身をかがめ、長枕を直してやり、それから身を起しながら、ぬれてもつれた髪の毛の上にちょっとその手を置いた。するとそのとき、彼女の耳に、遠くから響いてくる、かき消されたような声が、ありがとうといい、今こそすべてはよいのだというのが聞えた。彼女がふたたび腰を下ろしたときには、タルーは目を閉じてしまっていて、そのやつれ果てた顔は、唇を固く結んでいるにもかかわらず、ふたたびほほえんでいるように見えた。

正午に、熱は絶頂に達した。一種の内臓性の咳が病人の体をゆすぶり、病人はここではじめて血を吐きはじめた。リンパ腺は腫脹がとまっていた。それは相変らずそのまま雌螺旋のようにかたく関節のくぼみにねじこまれていて、リウーはそれを切開することは不可能だと判断した。熱と咳の合間に、タルーはときおりまだ友だちのほうをながめた。しかし、やがて、その目はますます開くことが少なくなり、そしてそのとき変り果てたその顔に浮ぶ明るい影も、そのたびごとに薄れていった。痙攣的な身震いでこの体をゆすぶっている暴虐雨は、これを閃光で輝かすことがますますまれになり、タルーはその暴風の直下で徐々に岸を離れていった。リウーの眼前にあるのは、もう、微笑の消え去った、以後生気を失った一つの仮面にすぎなかった。自分にとってあれほど近しかったこの人間的な姿が、いまや猪槍の鉾先に貫かれ、人力を越えた苦痛に焼かれ、天上のあらゆる憎しみの風にねじゆがめられて、見る見るペストの水中に没していき、しかも彼はこの難破に対して、どうすることもできないのであった。彼はこの災厄に対して、またも

彼は、今この瞬間、母親が何を考えているかということ、そして彼女が彼を愛していることを、知っていた。しかし彼はまた、一人の人間を愛するということはたいしたことではないこと、あるいは少なくとも、愛というものは決してそれみずからの表現を見出しうるほどに力強いものではないことを、知っていた。その結果、母親と自分とはいつまでも沈黙のなかで愛し合っていくであろう。そして、今度は彼女が――あるいは自分が――死んでいくのだ……生涯、その愛情の告白において互いにこれ以上に進みうることもなく。同じようにして、彼はタルーの傍らで喜してき、そしてタルーは今夜、二人の友情がほんとうに生きられる暇もなかったうちに、死んでしまったのだ。タルーは勝負に負けたのであった――自分でいっていたように。しかし、彼、リウーは、いったい何を勝負にかちえたであろうか？　彼がかちえたところは、ただ、ペストを知ったこと、そしてそれを思い出すということ、友情を知ったこと、そしてそれを思い出すということ、愛情を知り、そしていつの日かそれを思い出すことになるということである。ペストと生とのかけにおいて、およそ人間がかちうることのできたものは、それは知識と記憶であった。おそらくはこれが、勝負に勝つとタルーの呼んでいたところのものなのだ！

またしても、一台の自動車が通り過ぎ、リウー夫人は椅子の上でちょっと体を動かした。リウーは彼女にほほえみかけた。彼女は、自分は疲れていないといい、それからすぐそのあとで――

「お前も山にでも行って休まなければなるまいね、あっちでさ」

「ええ、ほんとですよ、お母さん」

ほんとに、自分はあっちで休んでこよう。別にさしつかえはないはずだ。それはまた、回想の

な息づきが感じられた。寝台のそばには、リウー夫人がいつも見慣れた姿勢で、右側をナイト・ランプの光に照らされて、じっとすわっていた。部屋の中央に、明りからずっと離れて、リウーは肘掛椅子のなかで黙然としていた。妻への思いがふとわいてきたが、そのたびごとに、彼はそれを振捨てた。

さっき、夜になったばかりのころには、通行人たちの靴音が寒い夜のなかではっきりと響いてきていた。

「すっかり、ちゃんとしておいたの？」と、リウー夫人はいったのだった。

「ええ、電話をかけときました」

二人はそこでまた黙々として通夜を続けたのであった。リウー夫人はときどき息子のほうをながめた。そんな視線の一つにふとぶつかると、彼は彼女にほほえんでみせた。聞き慣れた夜の物音が次々に街頭に続いていた。まだ許可は出されていないにもかかわらず、相当の数の乗用車がまた交通しはじめていた。これらの車は舗道を急速力で吸うような音をたてて、消え去ったかと思うと、やがてまた現われた。話し声、呼び声、またもとに返った静寂、一頭の馬の足音、電車が二台カーブできしる音、何やらはっきりしないざわめき、そしてまたしても夜の息づき。

「ベルナール！」

「ええ」

「疲れてやしないの？」

「いいえ」

「ベルナール！」と、リウー夫人はいった。

医師は放心したように彼女の顔をまじまじとながめた。

「電報は？」と、彼女は尋ねた。

「そうなんです」と、医師はうなずいた。「八日前です」

リウー夫人は顔をそむけるように窓のほうを向いた。医師は黙っていた。それから、彼は母親に向って、どうか泣かないでくれるように、自分は覚悟はしていたが、それにしてもやっぱりつらいことだといった。ただ、彼は、そういいながら、その苦痛が不意打ちではなかったことを知っていた。この数カ月というもの、またこの二日間というもの、その同じ苦しみが続いていたのである。

市の門は、一月のある晴れた朝の明けがた、市民に、新聞に、ラジオに、そして県庁の公示に祝されて、ついに開いた。したがって、筆者に残されたところは、この開門のあとに続いた歓喜の刻々の記録者たることである。――もっとも筆者自身は、すべてをあげてそれに参加する自由を有しなかった人々の仲間であったのであるが。

盛大な祝賀行事が昼間にも夜間にも催された。同時に、汽車は駅で煙を吐きはじめ、一方、遠い海からやって来た船のむれは、すでに市の港に船首を臨ませ、こうしてそれぞれのやり方で、この日こそ、引離されたことを悲嘆していたすべての人々にとって、大いなる再会の日であるこ

ための口実ともなるわけだ。しかし、もしこんなことが勝負に勝つということなら、単に自分の知っていることと思い出すこととだけをいだいて、自分の希望することというものをまったく奪われて生きていくということは、どんなにか、つらいことであろう。おそらくそんなふうにタルーは生きてきたのであり、彼は幻影のない生活というものがどんなに不毛なものでありうるかということを、はっきり意識していたのだ。希望なくして心の平和はない。そして、何びとたりとも断罪する権利を人間に認めなかったタルー、しかし何びとも断罪せずにはいられず、犠牲者たちさえもときには死刑執行人たることを知っていたタルーは、分裂と矛盾のなかに生きてきたのであり、希望というものはついに知ることがなかったのである。つまりそのために、彼は聖者の徳を望み、人々への奉仕のなかに心の平和を求めていたのであろうか？　真実のところ、リウーにはなんにもわからなかったし、そんなことは別に問題ではなかった。彼の心に残るであろうところのタルーの唯一の面影は、彼の自動車のハンドルを力いっぱい握りしめて操縦している男の面影であり、あるいは、今はもう身動きもせず横たわっている、このがっしりした体の面影であるだろう。一つの生の温かみと、一つの死の面影――知識とは、つまりこれだったのだ。

おそらくそのせいであったろうが、医師リウーは、朝がた、妻の死の知らせを平静に迎えた。彼は自分の書斎にいた。母親がほとんど走るようにして一通の電報を持ってき、それから彼女は配達夫に心付けをやるために出ていった。彼女がもどってきたとき、息子は電報を開いたまま手に持っていた。彼女は息子の顔をながめたが、しかし彼は窓から、港の上に明けそめた、すばらしい朝景色を、いつまでも見つめていた。

屋のなかで、あるいはランベールのように——彼の愛人は何週間も前から知らせを受けて、必要な手続きを済ましてやって来たのである——ホームの上で待っていた人々も、同じような焦燥と同じような混乱のなかにあった。なぜなら、ペストの幾月かによって抽象となり果てていたその恋、あるいは愛情を、かつてそのささえであった生身の人間とはっきり対決させようと、ランベールなども胸のふるえる思いで、待っていたのである。

彼は、病疫の当初に一気に市から出奔して、愛するその女に会いに飛んでいこうとしていたあの自分に、できればまたもどりたいと思ったことであろう。しかし彼は、それがもう不可能であることを知っていた。彼は変ったのであり、ペストは彼のうちに一つの他念を植えつけてしまって、彼はそれを全力をあげて抹殺しようと努めていたのであるが、しかもそれはあたかも鈍い不安のように彼のうちに存在しつづけたのである。ある意味では、彼はペストがあまりにもだしぬけに終ったような感じがし、平静な心を失っていた。幸福は全速力でやって来、事件は待つ間よりはずっと早く進行した。ランベールは、すべてが一挙に返還され、喜びはゆっくり味わうすべもない火傷のようなものとなることを、悟ったのであった。

もっとも、すべての者が、意識した程度はまちまちにせよ、みんな彼と同じようであったし、すべての者についてこそ語らねばならぬ。彼らがめいめいの個人的生活をふたたび始めたその駅のホームの上でも、彼らはまだ自分たちみんなの連帯性を感じながら、互いに目礼やほほえみをかわし合っていた。しかし、彼らの追放感は、汽車の煙を見るやいなや、入り乱れた騒然たる喜びの驟雨に突如消え去ってしまった。汽車が止ると、多くの場合この同じ駅のホームで始まった

とを鮮明にしていた。

ここで、市民たちのあれほど多くの人々にとりついていた別離の感情というものが、いったいどうなったかということは、容易に想像されるであろう。この日のうちに市へはいってきた汽車も、出ていった汽車に劣らず、乗客を満載していた。みんなが、猶予の二週間の間に、この日のために席を予約していたし、最後の瞬間になって県庁の決定が取消されるのではないかとびくびくしていた。市に近づきつつあった乗客たちのある者は、もっとも、彼らの懸念から完全に解放されていたわけではなかった。というのは、彼らは、一般に、自分に関係の近い者たちの運命は知っていたとしても、ほかの人々や市自体については、いっさい知らなかったし、市の相貌を恐るべきものに思い描いていたのである。しかし、このことは、このすべての期間中ずっと情熱に燃えつづけていなかった人々の場合にのみ当てはまることであった。

情熱に燃えていた人々は、事実、固定観念にとり付かれていたわけである。彼らにとって、ただ一つのことだけが変化していた――彼らが追放されていた幾月かの間、できれば押しやってでも早めさせたいと思っていた、この時間というもの、すでに市が見えてきたときにもまだもっと急がせようと躍起になっていたこの時間というもの――それを彼らは、汽車が停車に先立ってブレーキをかけはじめるやいなや、逆にその歩みをゆるめさせ、そのまま停止させたいと願ったのであった。この幾月かの、彼らの愛にとって失われたすべての生活に対する、おぼろげであると同時に鋭い、身のうちの感情が、漠然と、歓喜の時間は待たされていた時間よりも二倍も速く流れるようになるような、一種のつぐないのようなものを要求させていたのである。そして彼らを部

――今や無名の墓穴のなかに紛れ、あるいは灰の堆積のなかに溶け去った人間とともに、あらゆる喜びを失ってしまった、母親たち、配偶者たち、恋人たちにとっては、相変らずペストが続いていたのである。

しかし、誰がこれらの孤独な姿のことを考えていられたであろうか？　正午には、太陽は、朝から大気の中で抗っていた冷たい風に打勝って、ゆるぎない光線の絶えることのない波を市の上に注いでいた。昼は停止したかのようであった。丘の頂にある堡塁の大砲は、静止したような空に、ひっきりなしに轟いた。市じゅうの者が外へとびだして、苦悩の時期は終りを告げ、しかも忘却の時期はまだ始まらぬ、この息づまる瞬間を祝おうとした。

広場という広場では、人々が踊っていた。たちまちにして、交通は著しく増大し、ずっと多くなった自動車は、人々のあふれ出た路上を、苦労しながら運行していた。市の鐘は、ずっと午後じゅう、高々と鳴り響いた。その音は、青く金色をおびた空を余韻で満たした。教会では、実際、感謝の祈りが唱えられていた。しかし同時にまた、享楽の場所は大入り満員であり、カフェは今後を思い煩うこともなく、最後のアルコール類を供していた。そのカウンターの前には、どれもこれも同じように興奮した人々のむれがひしめき、そのなかには、いい見世物になることも恐れず、しっかり抱き合っている二人連れも大勢あった。みんなわめいたり、笑ったりしていた。めいめいが自分の霊魂の火を細々と燃やしていた、その幾月かの間にたくわえられた生命の蓄積を、彼らは、あたかも余分の生活の日ともいうべきこの日に、消費していたのである。翌日は本来の生活そのものが、いつもの用心深さを伴って、始められることであろう。目下のところ

果てしない別離は、人々の腕が、もう生きた形も忘れていた体の上に狂喜に満ちた貪婪さで抱き合わされた瞬間、そこで一瞬のうちに終りを告げた。ランベールはといえば、自分のほうへ走り寄るその姿を見る暇もなく、早くも相手は自分の胸に抱きついていた。そしてその姿をしっかりとかかえ、見慣れた髪の毛しか見えないその頭を抱きしめながら、涙の流れるに任せていたが、それが現在の幸福から来る涙か、あまりにも長い間抑圧されていた苦痛から来る涙かはわからないままに、ともかくその涙のおかげで、現在自分の肩のくぼみにうずめられているこの顔が、はたして自分のあれほど夢みていた顔か、それとも反対にまるで見も知らぬ女の顔か、それを確かめてみることができないだろうということに、安堵を感じていたのである。いずれのちほど、自分の疑念が当っていたかどうかわかるであろう。さしあたっては、ペストが来ようと去ろうと、人間の心はそれによって変化することはないと、彼の周囲で信じているらしく見える、すべての人人のように、彼もしていたかったのである。

互いにしっかり抱き合って、みんなはそこで家に帰った——ほかのこの世のことはなんにも目にはいらず、表面上はペストに打勝った様子で、あらゆる悲惨も忘れたように、また、やっぱり同じ汽車で来ていながら誰も迎えに来たものがなく、長らく便りのないことがすでに彼らの心に生じさせていた危惧の確証を、家へ帰って受取る心がまえをしている、そういう人々のことも忘れたように。この忘れられた人々、今や相手にするものとては、そのま新しい悲しみ以外にはなくなったこの人々にとっても、また、今この瞬間、亡くなった者の思い出に身を献げている人々にとっても、その事情はまったく異なり、別離の感情は今まさに絶頂に達していた。こういう人々

証していたからである。彼らの姿は、あらゆる明証をものともせず、われわれがかつてあのばかげた世界、人間を殺すことが蝿を殺すことと同じ程度に日常茶飯事であった世界――を経験したということを、悠然と否定していた。あのはっきり規定された野蛮さ、計量された狂乱、現在ならぬすべてのものに対するむごたらしい自由を同時にもたらしたあの監禁状態、そいつに殺されぬすべての者を仰天させたあの死のにおい、を経験したということを、否定していた。最後にまた、われわれがあの茫然たる民衆であったこと、毎日その一部の者は竈の口に積み重ねられて、濃厚な煙となって消散し、一方残りの者たちは、無力と恐怖の鎖にいましめられて、自分たちの番を待っていた、あの民衆であったことを、彼らの姿は否定していた。

これがともかくも、その午後の終りに、町はずれまで行こうとして、鐘の音や、砲声や、音楽や、耳を聾するばかりの叫び声のなかをただ一人歩いていた、医師リウーの目に明らかに映じたところであった。彼の職務は続いており、病人に休日はなかった。市の上に降り注ぐすっきりと晴れやかな日射しのなかで、焼肉やアニス酒の昔どおりのかおりが立ち上っていた。彼の周囲では、笑いどよめく顔のむれが、空に向ってのけぞっていた。男たちと女たちとは、顔をほてらせ、欲情のあらゆるいらだちと衝動とを示しつつ、互いにしがみつき合っていた。たしかに、ペストは恐怖と時を同じくして終ったのであり、そしてこれらのからみ合った腕は、実際、ペストが、その語の深い意味において、追放と別離とであったことを物語っていたのである。

はじめてリウーはこの幾月かの間、すべての通行者の顔に読みとられていた、あの家族同士のような様子に、はっきり一つの名を与えることができた。今や、自分の周囲をながめてみるだけ

は、出身を著しく異にする人々が、肘突き合い、仲間同士になっていた。死に直面しても事実上実現されなかった平等が、解放の歓喜によって、少なくとも数時間は確立されていたのである。

しかし、こういう陳腐なにぎにぎしさがすべてを語るものではなく、午後の終りに、ランベールなどと並んで街をうずめていた人々のうちには、しばしば、平穏な態度の陰に、もっと繊細な幸福を隠していた者もあった。幾組とも知れぬ二人連れや家族連れが、実際、見たところはただ平和な散歩者としか見えなかった。事実は、その大部分のものが、かつて自分たちの苦しんだ場所に心しめやかな遍歴を行なっていたのである。それは新来の人々に、ペストの顕著な、あるいは隠れたしるし、その歴史の遺跡を見せることであった。ある人々の場合には、彼らは案内人の役割、多くのことを見た人間、ペスト時代の人間の役割を演じるだけで満足し、別に恐怖をあおるようなこともせずに危険について語った。こういう楽しみは無害なものであった。しかし、ほかの人々の場合には、それはもっと戦慄に満ちた行程であり、その途中、恋人などが、思い出の甘い不安に引きこまれて、相手の女にこういったりすることもあった――「ここでね、その当時、僕は無性に君を抱きしめたくってね。ところが、君はそばにいないんだもの」。こういう情熱の周遊者たちは、この場合、はっきり見分けられた――彼らは、騒ぎのなかにまじって歩きながら、そのなかで私語と内証話の離れ小島を形作っていたのである。四辻のオーケストラにも増して、彼らこそ真の解放を告げ知らせるものであった。なぜなら、ぴったりと寄り添い合って、言葉を惜しんでいる、これらの恍惚たる二人連れこそは、喧騒のさなかに、幸福のあらゆる誇らしさと不法さをもって、ペストは終ったこと、そして恐怖の支配した時代は過ぎ去ったことを、確

た精神的にも、一つの苦しい休暇、救うすべもない追放、永久に満たされぬ渇きを、ともに苦しんできたのだ。あの死者の累積や、救急車のベルの音や、世に運命と呼び習わされているものの予告や、恐怖の執拗な足踏みや、彼らの心のすさまじい反撥やのなかにあっても、一つの大きなうごめきがつねに止むことなく流れつづけ、これらの驚愕させられた人々に警告して、彼らの真の祖国をふたたび見出さねばならぬと告げていたのだ。彼らすべてにとって、真の祖国はこの窒息させられた町の外壁のかなたにあった。あの丘の上のかぐわしい叢林のなかに、海や自由な国や愛の重みのなかにあった。そしてその祖国に向って、幸福に向って、彼らは帰ろうとしていたのである——その余のものには嫌悪をもって背を向けながら。

この追放とこの合体の欲求とがどんな意味をもちうるかということについては、リウーは一向知らなかった。四方八方から押され、呼びかけられるなかを、相変らず歩きつづけながら、彼は次第にもっと雑踏の少ない街々にさしかかり、そして彼は、これらのことが一つの意味をもっているか、いないかは重要なことではないし、それよりも、人々の希望にいかなる答えが与えられたかということだけを、見きわめるべきだと考えるのであった。

彼は今後は、いかなる答えが与えられたかを知っており、そしてほとんど人影のない町はずれの最初の通りにはいったとき、一層はっきりそのことに気がついた。自身というわずかなものに執着して、ただ自分たちの愛の家に帰ることだけを願っていた人々は、ときどきは報いられている。もちろん、そのなかには、自分の待っていた人間を奪われて、ひとり寂しく、市中を歩きつづけている者もある。まだしも、二重に引離されていなかった者は幸いである。たとえば、ある

で十分であった。悲惨と欠乏をいだきつつ、ペストの終焉にたどり着くと、これらすべての人々は、彼らがすでにずっと前から演じていた役割――最初はその顔が、今ではその服装が、失踪とはるかな祖国とを物語っている亡命者という役割の、扮装を遂に身につけるに至ったのであった。ペストが市の門を閉鎖した瞬間から、彼らはもう別離のなかだけで生き、すべてを忘れさせてくれる人間的な温かみをもぎ取られてしまっていたのである。さまざまの度合いで、市中あらゆるところで、これらの男たち女たちは、すべての者にとって性質は同じではないが、しかもすべての者にとって同じように不可能な、一つの合体にあこがれていたのであった。大部分の者は、そばにいない相手に向って一つの肉体の温かみを、愛情や習慣を、力のかぎり呼び求めていた。またある者たちは、人々の友情の外に置かれていること、手紙とか汽車とか船とかいう、通常の友情の手段によって人々に結びつくことのできる状態にいないことに、しばしば自分でも気がつかずに苦しんでいた。またそれ以外にも、もっと少数の、おそらくタルーのような人々は、自分でもはっきり定義できない、しかしそれこそ唯一の望ましい善と思われる、あるものとの合体を願っていた。そして、他に名づける言葉がないままに、彼らはそれをときには平和と呼んでいたのである。

リウーは相変らず歩きつづけていた。進むにつれて、周囲の群衆は増大し、騒ぎは膨脹して、彼のめざす町はずれはそれだけ後退していくように思われた。次第に、彼はこの叫び狂う大きな集団のなかに溶けこんでいき、その叫び――少なくともその一部は彼自身の叫びであるところのその叫びが、彼には、ますますよく理解されてきた。そうなのだ。すべての者が、肉体的にもま

うものとその貧しくまた恐るべき愛とだけで結構満ち足りている人々をねぎらいにやって来るのは、正当なことだと考えていたのであった。

この記録も終りに近づいた。もう、医師ベルナール・リウーも、自分がその作者であることを告白していいときであろう。しかし、この記録の最後の事作を叙述する前に、彼はせめて自分の差出がましい行為を弁明し、また自分が客観的な証言者の語調をとることに留意したことを理解してもらうようにだけはしておきたいのである。ペストの全期間中、彼はその職務によって、市民の大部分の者に会い、彼らの感情を感じとることのできる状態に置かれた。したがって、彼は自分の見聞したところを報告するには適切な位置にあったわけである。しかし、彼はそれを、望ましい控え目な態度で行おうとした。全般的に、彼は努めて、自分の見えた以上のものは報告しないように、また自分のペスト仲間たちにも結局彼らがいだくには至らなかったような思想は賦与しないように、そして偶然あるいは不幸のおかげで、彼の手にはいることとなった記録だけを引用するように、心掛けたのである。

一種の犯罪のようなことに際して証言を求められたのであるから、彼は善意の証言者にふさわしいような、ある種の控え目さを守った。しかし、同時にまた、公明な心の掟に従って、彼は断乎として犠牲者の側に与し、人々、同じ市民たる人々と一体になって、彼らが共通にもっている唯一の確実なもの、すなわち愛と苦痛と追放とを味わおうとした。したがって、市民たちの苦悶

人々は、病疫以前に、最初から彼らの愛をしっかり築きあげてしまうことができず、相争う恋人同士を最後には互いに密着させるというような困難な和合を、何年となく、盲目的に求めつづけてきたのであった。この人々は、リウー自身と同じように、時間というものを当てにするという軽率なことをしたのであった――彼らは永久に引離されてしまったのである。しかし、またはかの人々、たとえばランベールなどは――ちょうどこの朝、別れ際に、リウーは彼に向って「しっかりやりたまえ、今こそ正しい分別をしなきゃならん時ですよ」と、いったものであったが――もう見失ってしまったと思っていた、不在だった人を、ためらうところなくふたたび見出していた。少なくとも、ここしばらくの間は、彼らは幸福でいられるであろう。彼らは今では知っているのだ――人がつねに欲し、そしてときどき手に入れることができるものがあるとすれば、それはすなわち人間の愛情であることを。

これに反して、人間を越えて、自分にも想像さえつかぬような何ものかに目を向けていた人々すべてに対しては、答えはついに来なかった。タルーは、彼のいっていた、困難な心の平和というものに到達したかのように思われたが、しかし彼はそれを死のなかで、もうそれが彼にとってなんの役にもたたなくなったときに、やっと見出したのであった。反対に、ほかの人々――リウーの目に映ずる、家々の戸口で、薄れかけた日ざしのなかに、力いっぱい抱き合い、夢中になって顔を見つめ合っている人々が、彼らの欲したものを手に入れることができたとしたら、それは彼らがただ一つ自分たちの力でどうにでもなることだけを求めたからであった。そしてリウーは、グランとコタールの住む通りへ曲ったそのときには、せめてときおりは、歓喜が、人間とい

リウーは、たまたま警官隊の通行止めによってはばまれた。まったく予期しないことであった。祝賀の遠いざわめきが、この界隈をひっそりと感じさせ、彼はそこに人影も物音もないように思っていたのであった。彼は名刺を出した。

「どうにもならんのです、先生」と、警官はいった。「気違いがおって、群衆に発砲しとるんでね。だが、まあ、おってください。役にたっていただくかもしれんですから」

ちょうどこのとき、リウーはグランが自分のほうへやって来るのを見た。グランもまたなんにも知らなかった。彼も通行を阻止され、そして聞かされたところによると、発砲は彼のアパートから行われているのであった。遠くから、なるほどそのアパートの正面が、暖かさのない太陽の最後の光線に金色に染められて、見えていた。その周囲には、大きく空虚な空間が画されて、向いの歩道まで広がっていた。道路のまんなかに、帽子が一つと、それからよごれた布のようなものがはっきりと見えた。リウーとグランは、ずっと遠く、通りの向うのはずれに、彼らの前進を阻止している線に平行して、もう一つの警官隊の遮断線と、その背後にあわただしく行き来している、界隈の二、三の住人たちの姿を見ることができた。よく見ると、アパートに向い合っている建物の戸口にはりつくようにして、ピストルをかまえている警官たちの姿も見えた。アパートの鎧扉は、全部閉ざされていた。しかし、三階のところだけ、鎧扉の一つが半ばはずれかかっているように見えた。通りのなかは完全に静まり返っていた。ただ、市の中央から漂ってくる音楽のきれぎれの響きが聞えるばかりであった。

そのうち急に、アパートの向いの建物の一つから、ピストルの音が一発響き、例のはずれかか

の一つとして、彼がともにしなかったものはなく、いかなる状況も、同時に彼自身の状況でなかったものはないのである。

誠実な証言者となるために、彼は特に調書、資料、風聞などを報告せねばならなかった。しかし、個人的に彼がいいたかったこと、彼の期待とか試練とかいうことは、黙っていなければならなかった。かりにそういうものをもちだしたとしても、それはただ市民たちを理解し、あるいは理解させるためであり、彼らがたいていの場合、おぼろげに感じているところのものに、できるだけ明確な形を与えるためであった。じつをいうと、この理性的な努力は、彼には一向骨が折れなかった。ペスト患者たちの何千という声に自分の打明け話を直接混じえたい誘惑を感じたとき、彼は、自分の苦しみの一つとして同時にほかの人々の苦しみでないものはなく、苦悩がじつにしばしば孤独であるような世界においてはそれは一つの特典である、という考えによって引きとめられた。断然、すべての人々のために語るべきであった。

しかし、市民のなかで少なくとも一人だけは、医師リウーもその者のために語りえなかった者がある。その者というのは、事実、タルーがある日リウーにこういった人間である――「あの男の唯一のほんとうの罪は、子供たちや人々を死なせたところのものを、心のなかで是認していたことだ。そのほかの点は、僕にも理解できる。しかし、これだけは、僕も許してやろうと、しいて思わなきゃならないんだ」。この記録が、彼のこと――無知な、すなわち孤独な心をもっていた彼のことをもって終るのは、まさに当をえたことというべきである。

祝賀騒ぎの騒々しい大通りから出て、グランとコタールの住む通りへ曲ろうとしたとき、医師

行った。その瞬間、一発のピストルの音が三階から響き、犬は薄絹のようにひるがえって、激しく四足をもがいたと思うと、長い痙攣に身をふるわせながら、最後に横向けに引っくり返った。それに答えて、向いの戸口から発せられた五、六発の銃声が、例の鎧扉をさらにまた粉砕した。ふたたび静寂がたちこめた。日は少し傾き、陰がコタールの部屋の窓に近づきはじめた。通りの、リウーのうしろのところで、ブレーキの音がかすかにきしった。

「来た、来た」と警官はいった。

警官たちがそれらの車の後部の口から、縄と一つの梯子と、油引きの布で包んだ細長い二つの包みとを持って、出てきた。彼らは、グランのアパートと反対側の家々の一画をめぐっている道にはいっていった。少したつと、それらの家々の戸口に、あるざわめきの気配が見えた、というよりも、察しられた。それから、人々はじっと待った。犬はもう動かず、今ではどす黒くたまった液体のなかに浸っていた。

突然、警官隊の占領していた家々の窓から、軽機関銃の射撃が浴びせかけられた。射撃が行われるにつれて、またもねらわれた鎧扉は文字どおり散り失せ、真っ暗な平面が穴になって残されたが、リウーとグランのところからは、内部になんの姿も見分けられなかった。その射撃がやむと、第二の軽機関銃が、もっと遠い家の、別の方角から鳴り響いた。弾丸はおそらく窓の四角な口にとびこんでいるに違いなく、そのうちの一発はレンガのかけらをはね飛ばした。同じ瞬間に、三人の警官が走りながら道路を横切り、入口の扉のなかへ吸いこまれた。ほとんど同時に、また三人そこへ駆けこみ、そこで軽機関銃の射撃はやんだ。人々はまた待った。はるかに二発の

った鎧扉から破片が飛び散った。それから、あたりはふたたび静まり返った。遠くから見ていると、そして昼間の騒ぎのあとでは、それは多少非現実的なもののようにリウーには見えた。

「コタールの部屋の窓ですよ」と、突然、ひどく興奮して、グランはいった。「しかし、コタールは姿を隠してしまったんですがね、それにしても」

「どうして射撃なんかするんです」と、リウーは警官に尋ねた。

「ああやって釣っとるとこなんですよ。車で必要な道具をもってくるのを待っとるわけです。なにしろ、あの建物の入口からはいろうとする者をめがけて、ぶっ放すんでね。警官が一人やられましたよ」

「どうして、撃ったりしたんです」

「わからんですね。みんな通りでおもしろく騒いどったんです。最初の銃声じゃ、何が何やらわからんでおった。二発目で、わっと叫びだして、一人負傷者が出た。それでみんな逃げてしもうたわけです。気違いですな、いずれ」

もとに返った静寂のなかで、刻々がのろのろと長びくように思われた。突然、通りの向うのはずれから、一匹の犬が進出してくるのが見え、リウーには久方ぶりにはじめて見る犬で、よごれたスパニエル種の犬の、きっと飼主がそれまで隠しておいたものであろうが、それが壁に沿って小走りに走ってきた。入口の近くまで来ると、犬はためらい、尻の上にうずくまり、それから引っくり返って体の蚤をかみはじめた。警官たちのほうから幾つもの口笛がして、犬を呼んだ。犬は首をもち上げ、それから決心したように、ゆっくり道路を横切って、落ちている帽子をかぎに

ヌに手紙を書いてやって、今ではもう満足している、といった。それにまた、例の文章を書き直しはじめているのである――「すっかり削ってしまいましたよ、形容詞は全部」と、彼はいった。

そして、いたずらっぽい笑いを浮べながら、彼は帽子をとって儀式めいた敬礼をした。しかし、リウーはしきりにコタールのことが思われ、コタールの顔に打ちつけられた拳の鈍い音が、喘息病みの爺さんの家へ向う途中、ずっと付きまとって離れなかった。おそらく、罪を犯した人間のことを考えるのは、死んだ人間のことを考えるよりもつらいかもしれない。

リウーが患者の爺さんのところへ着いたときには、夜がもう完全をおおっていた。部屋のなかでも、解放のはるかなざわめきが聞え、爺さんは、いつも変らぬむら気のなさで、豌豆の入れかえをやりつづけていた。

「いいこったよ、ああやって浮かれてるのは」と、爺さんはいった。「世の中ってやつが成り立っていくにゃ、なんだって必要だからね。ところで、例のお連れさんは、先生、どうなりましたね、あの人は？」

爆発の音が彼らのところまで聞えてきたが、しかしそれは平和なものであった――子供たちが爆竹を鳴らしていたのである。

「死んだよ」と、ごろごろいう胸を聴診しながら、リウーはいった。

「へえ！」と、ややとまどった様子で、爺さんはつぶやいた。

「ペストでね」と、リウーは付け加えた。

「まったくね」と、ちょっとたってから、爺さんはいかにもそうだという調子でいった。「いち

銃声がアパートのなかで響いた。やがて、ひとしきりざわめきが高まったと思うと、家のなかから、ワイシャツ姿の小柄な男が、ひっきりなしにわめきたてながら、引きずられるというよりも、かつがれるようにして出てくるのが見えた。まるで寄蹟でも起ったように、閉ざされていた通りの鎧扉は一斉に開かれて、窓には物見高い連中がいっぱいになり、同時にまた無数の人々が家々から出てきて、通行止めの柵のうしろでひしめいていた。そのうちちょっと、道路のまんなかに、やっと足を地におろし、両腕を警官にうしろ手にねじあげられている、その小男の姿が見えた。男はわめいていた。一人の警官がそばへ進み寄ると、拳骨で力いっぱい、落着き払って、一種の丹念さをこめて、二度殴りつけた。

「コタールですよ」と、グランはつぶやいた。「気が違ってしまったんですね」

コタールは倒れていた。見ていると、警官はまた力いっぱい足をあげて、地上に倒れている影をけとばした。それから、入りまじった一団となってもみ合いながら、リウーとその老友のほうへ動いてきた。

「通ってよし！」と、警官はいった。

リウーは一行が前を通り過ぎたとき、眼をそむけた。

グランと医師とは、暮れかけた黄昏のなかを歩きだした。いまの事件がこの界隈の眠っていた麻痺状態をゆすぶったかのように、場末のこの街々も、浮きたつ群衆のさざめきにふたたび満たされていた。アパートの下まで来ると、グランは医師にさよならをいった。彼はこれから仕事にかかるのであった。しかし、上がっていこうとするときになって、彼はリウーに、自分はジャー

「きっとそうくると思ってたよ。そこでまた、演説があるってわけだ」

爺さんは、のどに引っかかったような笑い声をたてた。

「こうしてても、その声が聞えるようだね――《我らの犠牲者は……》なんてね。それから、みんなでぱくつくってわけでさ」

リウーはもう階段を上っていた。広い寒々とした空が家々の上にきらめき、丘に近いあたりには星が火打ち石のように堅い光を放っていた。この夜は、タルーと彼とがペストを忘れようとしてこのテラスの上にやって来たあの夜と、そう違ってはいなかった。しかし、今日はそのときよりも海の音がずっと騒がしく、断崖の下に聞えていた。空気は、秋のなま温かい風が運んできていた塩気をおびたそよぎがすっかり抜けて、微動もなく軽やかだった。市中のざわめきは、その間も、相変らず波のような音となって、テラスの下に打寄せていた。しかし、この夜は解放の夜であり、反抗の夜ではなかった。遠くのほうに、赤暗い輝きが、イリュミネーションで飾られた日抜き通りと広場の町筋を示していた。今や解放された夜の中で、欲望は何にさえぎられることもなく、そしてそのとどろきが、リウーのところまで伝わってきているのであった。

暗い港から、公式の祝賀の最初の花火が上がった。全市は、長いかすかな歓呼をもってそれに答えた。コタールもタルーも、リウーが愛し、そして失った男たち、女たちも、すべて、死んだ者も罪を犯した者も、忘れられていた。爺さんのいったとおりである――人々は相変らず同じようだった。しかし、それが彼らの強味、彼らの罪のなさであり、そしてその点においてこそ、あらゆる苦悩を越えて、リウーは自分が彼らと一つになることを感じるのであった。色さまざまの

ばんいい人たちが行っちまうんだ。それが人生ってもんでさ。だが、あの人は、自分が何を望んでるか、ちゃんと知ってる人だったな」

「どういうわけで、そんなことをいうんです」と、聴診器をしまいながら、リウーはいった。

「どういうわけってことはないがね。あの人は、しゃべっても意味のないことはいわなかったね。とにかく、わしにゃ、あの人が気に入ってたんでさ。だが、まあ、そういうもんだね。ほかの連中はみんないいまさ――《さあ、ペストだ。ペストにかかったぞ》なんてね。もう少しで、勲章でもほしがりかねない始末でさ。だが、いったい何かね、ペストなんて？　つまりそれが人生ってもんで、それだけのことでさ」

「燻蒸療法を規則正しくやることだね」

「いや、心配にゃ及びませんや。わしはまだゆっくり暇があるからね。大丈夫、みんな見送ってやれまさ。ちゃんと、生きるすべを知ってるからね、こっちは」

それに答えるように、遠くで歓呼の叫びが聞えた。リウーは部屋のまんなかで立ち止った。

「迷惑かな、テラスに行ってみちゃ」

「なに、ちっとも。連中をながめようってわけだね、あの上から。たんとながめておいでなさい。だが、どうせあの連中は、いつだって相変らずですぜ」

リウーは階段のほうに足を向けた。

「ねえ、先生、ほんとですかい、ペストの死亡者のために記念碑を建てるっていうのは？」

「新聞でそういってるね。石柱か銅板みたいなものだろう」

解説

アルベール・カミュ（Albert Camus, 1913—60）は今度の大戦中にはじめて現われた新人であったが、わずか数年にして早くも世界的な声価を担う作家となり、その作品は一作ごとに世界の視聴を集めつつあったと言っても過言でない。戦後フランス文学における最大の存在はジャン・ポール・サルトルであるが、今やこの先輩をさえ圧するかに見えるカミュの声望は、いったいどこから来るのであろうか。思うに、サルトルのきわめて幅の広い作家活動がしばしば誤解とスキャンダルを喚び起し、フランス社会の良識に根強い反撥を感じさせるのに反して、カミュの誠実にして清潔な文体と真面目な人柄が広く信頼感をもって迎えられるということも、一つの理由であろう。しかしサルトルが文学者よりもむしろ哲学者であり、文学的にやや異質雑駁なものを感じさせるのに対して、青年時代から十分な文学的修練を積んだカミュの文体が、ジッドを通じて象徴派を継承しつつフランス古典の伝統につながっていることが、フランス文学の主流を代表する作家として、彼に大きな期待をいだかせる有力な理由となっていたものと思われる。事実、その彫琢された明晰な文体は一部に新古典派とさえ称せられるほどであり、その作家的位置は、ジッド、マルロオについで、新たな世代の指導者と目されるまでになっていた。彼の名声が急速に世界的なものとなり、一九五七年、四十四歳という異例の若さでノーベル文学賞を受けるに至っ

光の束が空に上がる数を増すにつれて、ますます強さと長さを増し、テラスの直下まで長々と反響してくる喊声のなかで、そのとき医師リウーは、ここで終りを告げるこの物語を書きつづろうと決心したのであった——黙して語らぬ人々の仲間にはいらぬために、これらペストに襲われた人々に有利な証言を行うために、彼らに対して行われた非道と暴虐の、せめて思い出だけでも残しておくために、そして、天災のさなかで教えられること、すなわち人間のなかには軽蔑すべきものよりも讃美すべきもののほうが多くあるということを、ただそうであるとだけいうために。

しかし、彼はそれにしてもこの記録が決定的な勝利の記録ではありえないことを知っていた。それはただ、恐怖とその飽くなき武器に対して、やり遂げねばならなかったこと、そしておそらく、すべての人々——聖者たりえず、天災を受けいれることを拒みながら、しかも医者となろうと努めるすべての人々が、彼ら個々自身の分裂にもかかわらず、さらにまたやり遂げねばならなくなるであろうこと、についての証言でありえたにすぎないのである。

事実、市中から立ち上る喜悦の叫びに耳を傾けながら、リウーはこの喜悦がつねに脅やかされていることを思い出していた。なぜなら、彼はこの歓喜する群衆の知らないでいることを知っており、そして書物のなかに読まれうることを知っていたからである——ペスト菌は決して死ぬことも消滅することもないものであり、数十年の間、家具や下着類のなかに眠りつつ生存することができ、部屋や穴倉やトランクやハンカチや反古のなかに、しんぼう強く待ちつづけていて、そしておそらくはいつか、人間に不幸と教訓をもたらすために、ペストがふたたびその鼠どもを呼びさまし、どこかの幸福な都市に彼らを死なせに差向ける日が来るであろうということを。

にまで熱狂的な反響を喚び起し、その名声はついに世界的なものとなった。翌年、健康上の理由から『闘争』紙を退き、その後はガリマール書店の『希望叢書』の監修者となって、独自の構想にもとづくその叢書を着々実現していったが、「キリスト教かコンミュニスムか」の切迫した対立に激動するフランスの思想界にあって、実存主義哲学の形而上的世界への飛躍をも、キリスト教の神の救いをも拒否すると同時に、またコンミュニスムの徹底的合理主義とも鋭く対立する彼の「第三の立場」は、若い知識層に大きな信頼と共感を喚び起していたと思われ、時代の悩みをいだいて彼の部屋を訪れる青年たちが引きも切らなかったという。一九五一年に発表された大著『反抗的人間』(L'Homme Révolté)は彼のこの立場をさらに明確に発展させたものであり、この重要な論文をめぐってサルトルとの間に華々しい論争が展開されたことは、人々のよく知るところである。そして一九五九年の末、数年来想を練っていた小説『最初の人』(Le Premier Homme)の執筆にとりかかり、この大作の完成発表の日が待たれたのであったが、その希望は一瞬にして奪い去られた。一九六〇年一月四日、執筆先の別荘からパリへの帰途、不慮の自動車事故のため即死の悲運に遭遇したのである。まだ四十七歳の若さで、惜しんでも余りある急逝であった。

カミュの作品中、小説は前期の『異邦人』と『ペスト』、後期の『転落』(La Chute, 1956)と『追放と王国』(L'Exil et le Royaume, 1957)の各一編だけで、やや寡作の観があるが、戯曲は『誤解』『カリギュラ』『戒厳令』(L'État de Siège, 1948)『正義の人々』(Les Justes, 1949)と四編の作があるほかに、スペインの作家カルデロンの『十字架への信仰』の翻案や、十六世紀末の喜劇作者ラリヴェーの『お化け騒動』の改編、さらにはフォークナーの『尼僧のための鎮魂曲』

たことは偶然ではない。

カミュは一九一三年十一月七日、仏領アルジェリアの地中海岸に近いモンドヴィに生れた。母はスペイン系の婦人、父はアルザス出身の出稼ぎ労働者であったが、生後間もなく父を失い、苦学して、アルジェ大学文学部の哲学科を出た。卒業後はただちに職を求めて、自動車部品販売人、船舶仲買人、市庁吏員、測候所員等、雑多な職業を転々とし、最後にアルジェ市の地方新聞の記者となったが、ここで手腕を認められ、パリの夕刊紙『パリ・ソワール』の記者に迎えられて、一九四〇年パリの新聞界に進出することができた。しかし、この年六月、ドイツ軍のフランス侵入により、ふたたびアルジェリアに帰ることを余儀なくされ、オラン市のある私立学校に教鞭をとりながら、同志と共に「自由フランス」のための闘いを開始することとなった。一方、この期間に、彼の文学的意欲は大いに高められ、二年後、「作家全国委員会」の一員としてレジスタンス運動のためパリに潜入したとき、彼はその最初の小説『異邦人』(L'Étranger)と哲学的エッセイ『シーシュポスの神話』(Le Mythe de Sisyphe)とを書きあげていた。

この二作は、一九四二年末、ただちにパリのガリマール書店から刊行されたが、特に『異邦人』は「独軍占領以来最良の書」としてサルトルはじめ諸家の激賞するところとなり、カミュは戦後の新人中最も注目すべき作家と看做されるに至った。続いて発表された戯曲『誤解』(Le Malentendu, 1944)および『カリギュラ』(Caligura, 1945)はよくその期待に応えて彼の作家的地位を確立し、戦後は新鋭紙『闘争』の主筆に推されて言論界にも活潑な活動を続けたが、一九四七年、大作『ペスト』(La Peste)を発表するにおよんで、フランス国内はもちろん、諸外国

要した地域に読み広められた。しかもこの作品には、通常の成功作に見られるような、想像や感情に強く訴える要素はきわめて少なく、むしろ主として頭脳に訴える作品である。本来ならば一般の読者には取りつきにくいと思われるこの作品が、こんな爆発的な成功を収めた理由はなんであろうか？　それはこの作品の簡潔なリアリズムが、さまざまの角度からきわめて明瞭な象徴性をもっていて、読者の一人一人がその当面の関心を満足させるものをそこに見いだしうるからだと、カミュ研究家アルベール・マケは言う。なるほど、それはたしかに第一の、最大の理由であろう。ペストに襲われ、外部とまったく遮断された一都市のなかで悪疫と戦う市民たちの記録という体裁をとったこの物語において、ペストの害毒はあらゆる種類の人生の悪の象徴として感じとられることができる。死や病や苦痛など、人生の根源的な不条理をそれに置きかえてみることもできれば、人間内部の悪徳や弱さや、あるいは貧苦、戦争、全体主義などの政治悪の象徴をそこに見いだすこともできよう。たしかにこの作品はそういうふうに書かれており、そしてなによりも、終ったばかりの戦争のなまなましい体験が、読者にとってこの象徴をほとんど象徴と感じさせないほどの迫力あるものにし、それがこの作品の大きな成功の理由となったことは疑いがない。しかしそこにはまた、並々ならぬ文学的修練に培われたカミュの文体の魅力も大いに働いていたことを見のがしてはならぬ。この圧縮された清潔な文体は、一見いかにも客観的に、つとめて無感動な描写に終始しているが、その簡潔さのかげには、いたるところ、抑えられた感動の美しさがあたかも恥じらうようにひっそりと息づいている。たとえば老史グランの生涯など、簡潔な筆で、なんの修飾もなく淡々と語られながら、語り手と語られた人の心の美しさが、沁み入る

やドストエフスキーの『悪霊』の脚色などを試みている。すでに学生時代からアマチュア劇団を組織して、みずから舞台に立ち演出にも当っていたという彼として、この戯曲への熱意は別に異とするに当らぬことであるが、しかしその有力な理由は、戦後の緊迫した思想が、舞台上の表現に小説よりもはるかに具象的なままの解決を見いだしえたからであろう。彼の評論には『裏と表』(L'Envers et l'Endroit, 1937)『結婚』(Noces, 1938)『夏』(L'Été, 1954)のような、主としてアルジェリアの風土に託して生の感懐を述べた文学的エッセイ、『シーシュポスの神話』『反抗的人間』のようにその思想的立場を体系的に跡づけた哲学的論文と、『或るドイツ人の友への手紙』(Lettres à un Ami Allemand, 1945)『時事論集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』(Actuelles I, 1950, II, 1953, III, 1958)のように時事に関する具体的な論説を集めたものと、二種ある。第二のものは行動人としてのカミュを知るために、第一のものは彼の思想を最も直接に把握するために、もちろん重要であるが、第一のものは、カミュの文学の生れ出た風土を明らかにして、生の歓喜に溢れるその異教的な特質を理解させる点で、特に重要である。

『ペスト』(La Peste)は『異邦人』に次ぐカミュの小説の第二作であって、一九四七年六月に発表された。そして『異邦人』以来の期待はあったとはいえ、この作品を迎えた爆発的な熱狂は、フランス文壇の近年の驚異であったと言われる。刊行後数日にして《批評家賞》を授与されたときも、「これでこの賞も有名になるだろう」と憎まれ口をきく者があったくらいで、たちまち各国語に翻訳されて、わずか六カ月のあいだに、かつてマルローの『人間の条件』が十五年を

実なもの、すなわち愛と苦痛と追放とを味わおうとした」。犠牲者の側に与した善意の証言者――これは作者たるカミュその人の立場であり、その記述が十分「犠牲者の側に与した」証言となりうるために、みずから事件の渦中にあったリウーが、作者の代弁者として択ばれたのである。事件の一般的な部分と重要な局面は、この立場から物語られる。

タルーの「手帳」はこれと著しく異なる――「構えて瑣末事ばかりとりあげる方針に従ったと思われる、きわめて特殊な記録である。……一般の混乱のなかで、彼は結局、物語のないものについての物語り手たらんことを努めているのである」。これは「不条理人」の手帳ということができよう。しかし、あの無関心な、孤立的なムルソーではなく、つねに理解しようと努め、究極のなにものかを捜し求めている「不条理」の苦行者の手記である。人々がペストと、不条理と、闘う努力に心を奪われて、しばしばペストに対する、不条理に対する、警戒を忘れているとき、この苦行者の手記は、たえずそれを思い出させる、いわば「不条理」の目覚めた良心として、不断の基調低音を奏でているのである。

この二つの流れのほかに、そこに漂う三つの小島のように、三つの完全な伝記がある。リウーが聞かされた、老吏グランの生涯とタルーのそれ、そしてタルーが書きとめた、喘息病みの爺さんの生活。一人は妻の家出によって、一人は死刑執行を見たことによって、一人は老年に達したことによって、いずれも「不条理」に目覚めた「不条理人」の生涯である。これらの伝記は、眼前のペストによって「不条理」に目覚めた人々を、現在を超えて、過去に、歴史に、人類に結びつけ、こうして「不条理」は集団的な、歴史的な問題となる。

ような感動となって読者の胸に伝わる。心と心の触れ合う微妙な感触を、これほど美しく伝える文体をもった作家は、かつてなかったのではないかと思われるほどである。作品の性質もちがうが、これは初期のエッセーや『異邦人』には見られなかった文体の特質であり、ここにも彼の作家としての大きな成長が見られる。この一作によって一挙に世界的な作家となったことも決して不当な結果ではなく、彼のこんにちの信望もこの文体の清潔な美しさに負うところが少なくないと思われるのである。

カミュがこの作品を思いたったのはメルヴィルの『白鯨』に感動した結果だというが、この虚大な架空の事件の記録に十分な迫真性を与えるために、その構成上の苦心は容易ならぬものがあったらしく、ロジェ・キーヨによれば、一九四一年から着手して四六年の末にやっと書きあげたものであり、彼の作品のうちでおそらく最も苦心したものであろうという。それだけに、この周密な大作を十分に読みこなすことはなかなか容易でない。読者はまずこの作品の構造を分解してみる必要があろう。

この物語の記述者は医師リウーであるが、彼の記述と平行して、もう一つ、タルーの「手帳」の観察がある。リウーは最初のうち厳正な歴史家を装おうとするが、事件がしだいに外的なものから内的なものに、また個人的なものから集団的なものに進展してくるにつれて、彼の記述には無言の共感と愛情が漂いはじめ、最後に彼は告白する――「彼は善意の証言者にふさわしいような、ある種の控え目さを守った。しかし、同時にまた、公明な心の掟に従って、彼は断乎として犠牲者の側に与し、人々、同じ市民たる人々と一体になって、彼らが共通にもっている唯一の確

れた喜びのための変化と見られそうであるが、しかしそれ以上に、すべての人々がいわば自分と同じ境遇に陥り、それまでの社会的孤立から救われたということに対する喜びが、彼を支配しているのである。「あの男の唯一の本当の罪は、子供たちや人々を死なせたところのものを、心のなかで是認していたことだ」と、タルーは言う。もし、非常事態のため法の追及を免れたことを喜んでいるだけであったら、彼は少なくともペストそのものを是認することはしなかったであろう。これが、彼をリウーとタルーの赦しえない唯一の人間たらしめた理由であるが、しかしこの「無知な、すなわち孤独な心をもっていた」男の不幸に対して、リウーがある連帯感に似た苦痛を示しているのは、注目すべきことである――「コタールの顔に打ちつけられた拳の鈍い音が、喘息病みの爺さんの家へ向う途中、ずっと付きまとって離れなかった。おそらく、罪を犯した人間のことを考えるのは、死んだ人間のことを考えるよりもつらいかもしれない」――

パヌルー神父の変化は重大である。最初ペストに神の懲罰を見、人々の悔悛を説いていた彼は、救護活動に献身し、少年の死を目撃するにおよんで、それが「慈悲の心なく考えかつ言」われた言葉であったことを反省する。そして、罪なき幼児の死という謎と対決した末に、これは理解しえぬことであるが、しかしそれゆえにこそ、これを受容れねばならぬと、彼は結論する――「まったく憤りたくなるようなことです。しかし、それはつまり、それがわれわれの尺度を超えたことだからです。しかし、おそらくわれわれは、自分たちに理解できないことを愛さねばならないのです」。幼児の死にもかかわらず、否、それゆえにこそ、彼は神を信じねばならぬ。なぜなら、この不条理のなかでは、「すべてを信ずるか、さもなければすべてを否定するか」であり、

『ペスト』の物語は以上三つの次元から構成されている。それは、人生の根本的な不条理に基部を浸し、頭部は「歴史」の雲のなかにつっこみながら、なかんずく現在の幸福に生きようとする、一都市の住民の闘いの記録である。

ここに登場する作中人物についても、大きく二組に分けて考えることができる。ペストとの遭遇によって、著しい変貌を示す人々と、ほとんどあるいはあまり変ることのない人々とである。前者に属するものとしては、司祭パヌルー、判事オトン、新聞記者ランベール、犯罪者コタールなどが数えられる。すなわち、それぞれ、神の正義、社会の正義、人間の正義を代表する三人の人物と、それらの正義、なかんずく社会の正義に反抗する孤立者とであり、この未曾有の体験による彼らの深刻な変化は、正義の問題がいかに深く人生への理解と愛に繋がっているかを示している。変らない人々としては、リウー、タルー、グラン、喘息病みの爺さん、老医カステルなどが挙げられる。カステル老人を除けば、彼らはいずれも「不条理人」であり、しかも喘息病みの爺さん以外は、すべて共同社会の連帯性に目覚めた「不条理人」である。彼らの撓まぬ態度は、「不条理」の絶望に立脚した人間が、共同の理想と希望のためにいかに力強く闘いうるかを語ろうとしている。

オトン判事の場合は、厳格謹直な秩序の信奉者が、愛児の死によって、慎ましい愛の奉仕者に変るものであり、これは容易に理解される。ただ、タルーと同じように、善意の苦行者であった彼が、やはり同じように、ペストの終息直前に病に斃れることは、苦行者というものに対するカミュの考え方の一端を暗示するものかもしれない。コタールの場合は、単純に逮捕の恐怖から免

安のように彼のうちに存在しつづけていたのである」。彼はそれまで、自分はこの町には無縁の人間であり、出てゆく当然の権利があると思っていたのであるが、「現に見たとおりのものを見てしまった今では」、望もうと望むまいと、もうたしかに彼はこの町の人間であった。彼は「今も依然として自分の信じていたとおりに信じているが、しかしもし自分が発っていったら、きっと恥ずかしい気がするだろう。そんな気持があっては、向うに残してきた彼女を愛するのにも邪魔になるに違いない」と、感じる。そして、幸福のほうを択ぶのになにも恥じるところはないと、励ますリウーに、彼は答える――「しかし、自分一人が幸福になるということは、恥ずべきことかもしれないんです」。犠牲を択ぶか、幸福を択ぶか、という問題ではない。人々を見殺しにした幸福は、もはや幸福ではありえないのだ。幸福への熱望を通してこの友愛と連帯感に到達したランベールは、最も人間的な尺度のうちに新たなモラルを体得したものとして、ある意味でこの小説の真の主人公と言いうるであろう。

変貌を示さない四人は、互いに緊密に結ばれている。タルーはリウーの分身であり、そして老吏グランはリウーの、喘息病みの爺さんはタルーの、一つの投影である。グランも爺さんも、まったく無害な仕事のなかに心の平和を見いだしている善意の「不条理人」であることでは同一であるが、爺さんが意識した世捨人であるのに対して、グランはあくまで人間的な世界にとどまっており、その点にリウーは心を惹かれる。なぜなら、彼が第一に望んでいることは、「人間であるということ」だからである。しかしタルーのほうは爺さんに心を惹かれ、こう自問する――「これは聖者であろうか？　然り、もし聖者の徳なるものが習慣の総括であるならば」。タルーに

彼は、すべてを否定することをなしえないからである。「不条理」のゆえに、かえって神を信ぜざるをえないこと――これが、彼とリウーとを分つほとんど唯一の相違であり、この世界を受容れることを拒否するリウーに対して、はじめて「恩寵」というものがわかったと彼が言うのは、このことを指している。彼が、差当っての行動規範として提唱する「能動的」運命論とでもいうべきものは、「ただひざまずいて、すべてを放棄すべきだなどといっている、あの道学者たちに耳をかしてはならぬ。闇のなかを、やや盲滅法に、前進を始め、そして害をなそうと努めることだけをなすべきである」と説くのであるが、これは、リウーが求めているものとほとんど同一である。カミュがこの作品を、彼の書いた最も反キリスト教的な作品と称しているのも、神の存在いかんにかかわらず二人の行動上の結論が一致することが、神の存在の無用さを示す結果になっているためかと思われる。

若い新聞記者ランベールの徐々たる変貌は、この作品で最も興味ある部分である。彼はあくまで個人の幸福の立場に立とうとし、幸福を犠牲にするに足るほどの価値あるものはなにひとつないと信じ、しゃにむにペストの町を脱出して、パリの愛人のもとへ帰ろうとする。しかし、脱出のための憂鬱な工作を繰返しているうちに、彼のうちにしだいにあるなにものかが生れてくる。「彼は、病疫の当初に一気に市から出奔して、愛するその女に会いに飛んでゆこうとしていたあの自分に、できればまた戻りたいと思ったことであろう。しかし彼は、それがもう不可能であることを知っていた。彼は変ったのであり、ペストは彼のうちに一つの他念を植えつけてしまって、彼はそれを全力を挙げて抹殺しようと努めていたのであるが、しかもそれはあたかも鈍い不

めることではなかった――「リウーの眼に映ずる、家々の戸口で、薄れかけた日射しのなかに、力いっぱい抱きあい、夢中になって顔を見つめあっている人々が、彼らの欲したものを手に入れることができたとしたら、それは彼らがただ一つ自分たちの力におよぶことだけを求めたからであった。そしてリウーは、グランとコタールの住む通りへ曲ったそのときには、せめてときおりは、歓喜が、人間というものと、その貧しくまた恐るべき愛とだけで結構満ち足りている人々をねぐらにやって来るのは、正当なことだと考えていたのであった」。苦痛を忘れ、死を忘れ、ただそのときどきの歓喜に幸福を味わっている民衆――リウーの共感はことごとく彼らに向って溢れる。「人々は相変らず、同じようだった。しかし、それが彼らの強味、彼らの罪のなさであり、そしてその点においてこそ、あらゆる苦悩を超えて、リウーは自分が彼らと一つになることを感じるのであった」――これがリウーの「人間」の立場であり、彼の力の源泉である。

『ペスト』はカミュの「不条理の哲学」が初めて十全の具象的表現をもちえたものとして、彼の作家生活に一段階を劃した最も重要な作品である。『異邦人』のムルソーの「自己への誠実」というモラルは、ほとんどまだ個人的な好尚の域を脱せず、行動者の規範としてよりも、むしろ否定的な面が強かった。『ペスト』において初めて連帯感の倫理が確立され、「不条理」との不断の戦いという、彼の思想の肯定的な面が力強く打ち出されたのである。この成長は、おそらく大戦中のレジスタンスにおける血みどろな同志活動がもたらしたものであろうが、一九四五年に発表された『反抗論』には、個人から連帯性へのその昇華がはっきりと語られている――「不条理の

とって「唯一の具体的な問題」は「人は神によらずして聖者になりうるか？」ということであり、彼は爺さんのうちに、聖者たることの可能な一つのイメージを捜そうとするのである。要するにグランと爺さんは、リウーとタルーとのそれぞれの理想の、極度にまで無装飾化されたイメージということができよう。

タルーはリウーと表裏一体をなす分身であり、彼らは、結論においても行動においても一致する――「世界の秩序が死によって律しられている以上は、おそらく神にとって、人々が自分を信じてくれないほうがいいかもしれないんです。そうしてあらん限りの力で死と闘ったほうがいいんです、神が黙している天上の世界に眼を向けたりしないで」。二人の相違ははなはだ微妙なものであるが、最も根本的な点は、タルーがすでにすべてを知りつくしたと信じているのに、リウーはまだすべてを捜し求めているということである。「僕にはなんにもわからないんです、本当に。ところで、あなたは、いったいどこまでわかってるんです？」――「僕には、まだ知らなければならぬことなんて、まずありませんね」。こうしてすべてを知ったと信じ、「心の平和」という目標をはっきりつかんでいるタルーは、そこへ到達するために、いわば神のような策略を用いて人を動かすことも許される。この意味で、彼はリウーの政治的分身ともいうべきものであり、同じ「共感」を目指しながら、リウーの「誠実」のモラルに対して、彼のモラルが「理解」であるのも、その理由による。彼が死の直前に呟く『悪霊』のキリロフの言葉――「すべてはいいのだ！」は、リウーの断じて容認しえぬものである。彼にとって最も重要なことは、あくまでも人々とともに人間の世界にとどまることであり、人間を超えて、人間の力におよばぬなにものかを求

Title : LA PESTE
Author : Albert Camus
Originally copyrighted by Editions Gallimard
Copyrighted in Japan by Shinchosha through the arrangement with Bureau des Copyrights Français in Tokyo

ペスト

定価は帯またはカバーに表示してあります。

新潮文庫 赤 114 C

昭和四十四年十月三十日 発行
昭和四十六年九月三十日 五刷

訳者 宮崎嶺雄

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替 東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊞ 印刷・東洋印刷株式会社 製本・新栄社製本所
© Mineo Miyazaki 1969 Printed in Japan

体験においては、苦痛は個人的なものである。反抗の衝動が起った瞬間から、その苦痛は万人の出来事となる。……それまでただ一人の人間が感じていた悪は、集団のペストとなるのだ」。これは一九五一年に発表された大著『反抗的人間』の出発点をなす思想であり、この思想を具象化した『ペスト』は、その点で、『反抗的人間』に対して、『シーシュポスの神話』に対する『異邦人』と同じ関係に立っている。

ペストの象徴するものが、なによりも戦争の体験によって最も痛切に理解されることは、最初に述べたとおりであるが、しかしここに描かれたものと戦争との重大な相違は、それがまったく殺戮のない戦いだということである。文学者の使命を、なにものにも屈せぬ「自由の証人」たることにありとし、たとい無秩序を容認する結果になろうとも、正義のためにつねに叫びつづけようとする彼にとって、これはまことに理想的な戦いである。しかもここには明らかな敵性人は一人もなく、コタールさえも憐れまれている。そして、誠実の人リウーを中心に、神を信じるパヌルーから理性を信じるタルーにいたるまで、できるだけ広く人々の立場を糾合して、「人間」のための強力な人民戦線を結成しようとしているように見える。コンミュニスムとキリスト教とのあいだに、より人間的な第三の道を求めようとしているカミュの立場を、これほど遺憾なく表現しえている作品はない。

宮崎嶺雄

〰新潮文庫〰

カミュの作品

異邦人
シーシュポスの神話
ペスト
転落・追放と王国

カバー印刷　錦明印刷

新潮文庫最新刊

安部公房著	幽霊はここにいる	諷刺と笑いの長篇戯曲「幽霊はここにいる」ほか、制服『どれい狩り』。幻想のドラマ三編。	160円
山本周五郎著	どれい狩り		
三島由紀夫著	ながい坂（上・下）	人生という〝ながい坂〟を苦しみながら一歩一歩踏みしめてゆく男の孤独で厳しい半生！	180円 各
三浦哲郎著	青の時代	人生に対する残酷な遊戯を偏愛する主人公の衝動を通して、戦後青年の虚無感を追究する。	100円
カポーティ 河野一郎訳	結婚	なにげない日々の中で育くまれ確かめられてゆく愛情をこまやかなユーモアで描く十編。	180円
ボールドウィン 橋本福夫訳	遠い声 遠い部屋	感受性の強い孤独な少年の死を華やかな文体で描いた早熟の天才カポーティの処女長編。	160円
カフカ 原田義人訳	白人へのブルース	黒人青年殺害事件をもとに、深淵を隔てて対立する白人と黒人の現実を鋭く抉る問題戯曲	140円
シェイクスピア 福田恆存訳	審判	全体意志の無気味なメカニズムの中で圧殺される個人の悲劇と運命の不条理を描いた長編	200円
高橋和巳著	夏の夜の夢・あらし	アセンズの美しい森に展開する詩情豊かな幻想喜劇「夏の夜の夢」ほかに「あらし」を収録。	120円
	我が心は石にあらず	自己の希求に忠実であろうとした男の愛と理想——現代知識人の苦悩を重厚に描く長編。	180円

ALBERT CAMUS

¥ 200